期待される銀行
ご奉仕する じゅうろく
十六銀行
創立 明治10年
本店 岐阜市

能樂の友

題字は熱田神宮　篠田宮司筆

発行　能楽の友社
名古屋市千種区吹上本町2－20
（郵便番号 464）
電話 （731） 7964
振替口座 名古屋 36393
購読料　1年 500円
郵送の場合　1年 600円
一部　40円

熱田神宮能楽殿 創立20周年 8月に記念能

熱田神宮能楽殿は、昭和三十年十一月に落成してから、ことしは満二十周年を迎えるので、能楽協会名古屋支部の主催により、今夏八月、熱田神宮能楽殿落成二十周年記念能が催される。

現在、企画されているところでは、期日、八月二十四日（第四日曜日）午前十一時開演、番組は能三番、観世流能「養老」宝生流能「壮若」喜多流能「道成寺」（予定）はじめ狂言、舞囃子二番、仕舞十番が予定されている。

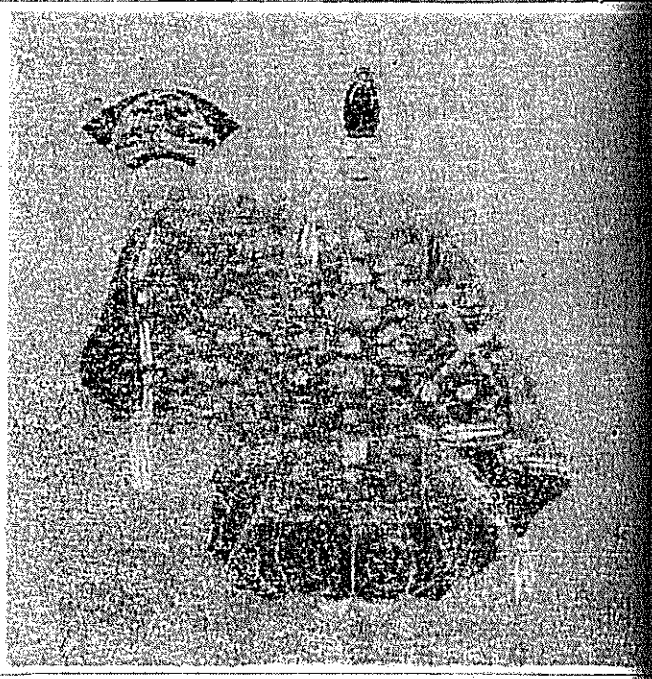
なお、熱田神宮能楽殿運営委員会委員長、熱田神宮権宮司・長谷晴男氏は一月三日能楽協会名古屋支部の謡初式の席上次のようにあいさつをのべられた。

昭和五十年の年頭にあたり、まずもつて能楽の道のご隆昌を心からお祈り申し上げます。

昨年中は、能楽殿のことについては、運営、催能その他色々の面で格別なるご高配を賜り衷心より厚くお礼申し上げます。

おかげをもちまして本年は熱田神宮能楽殿が創立され二十年になり、八月二十四日（日）に皆さまのお力により記念能が催されることになり、まことに神宮能楽殿としておめでたいことと存じます。

能楽殿の二十年のあゆみをふりかえって、今後のあり方について今後ともご協賛、ご支援を賜りますようおねがい致します。



県・市に義捐金贈る
能楽協会名古屋支部

社団法人能楽協会名古屋支部では、十二月一日、昭和四十九年度の掉尾をかざる支部催能として熱田神宮能楽殿で、恒例の「歳末助け合い義捐金募集能」を開催、各流能楽師の奉仕と同好者の温かい協力と支援で盛会であった。

協会名古屋支部では、この収支決算の結果、三十二万五千四百四十円の義捐金を、このほど愛知県民生部に十六万二千七百二十円、名古屋市民生局に十六万二千七百二十円とそれぞれ寄託した。

名古屋支部の歳末助け合い能は今回で六回目、愛知県、名古屋市から感謝状がおくられ、また老人ホームはじめ、福祉施設から多くの礼状が寄せられている。

謹賀新年
社団法人 名古屋能楽会
熱田神宮能楽殿

謹賀新年
熱田神宮 宮司 篠田康雄
権宮司 長谷晴男

謹賀新年

観世元正
東京都渋谷区恵比寿南一ノ二十一ノ十四

名古屋観世会

中日文化センター特別教室
観昭会
昭門会
観世元昭

銕仙会
観世銕之丞
観世寿夫
観世静夫

名古屋観世九皐会
観世喜之
観世武雄
増田一雄
塚本秀雄
有賀滋子
長谷川章
加藤保彦
青木武弘
高木美智子
吉田妙

幽謡会
片山博太郎

井上嘉久
京都市北区紫野下鳥田町六

梅若六郎
景英

大槻清韻会
大槻秀夫
大槻文蔵
大阪市東区上町二番地

幽花会
片山慶次郎
〒603 京都市北区小山下花ノ木町二一
電話 四九二－五三〇二番

大江又三郎
京都市東山区本町廿丁目
電〇七五（五六一）〇六二二番

藤井久雄
徳三
楽人
完治
神戸市葺合区熊内町二－一－二〇
電話（二三一）五一四四番

掬水会
柴田初太郎
柴田収武

研能会
橘香会
梅若万三郎
梅若万紀夫
梅若万佐晴

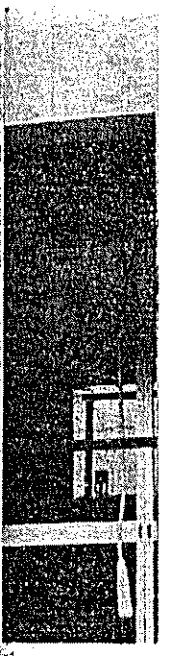
鳳鳴会
武田太加志
名古屋市東区葵町九
吉田義正方

潤水会
林甲子生
名古屋市千種区今池町二ノ四九
電話（〇五二）七三一－四一八三

名古屋橋岡会

山本観衛会
山本勝一
西宮市南郷町五－二三
電〇七九八（六）四七七八番

梅猶会
猶諷会
梅若盛義



（写真㊤毛替地蔵大菩薩の碑
㊦毛替地蔵尊＝いずれも筆者撮影）

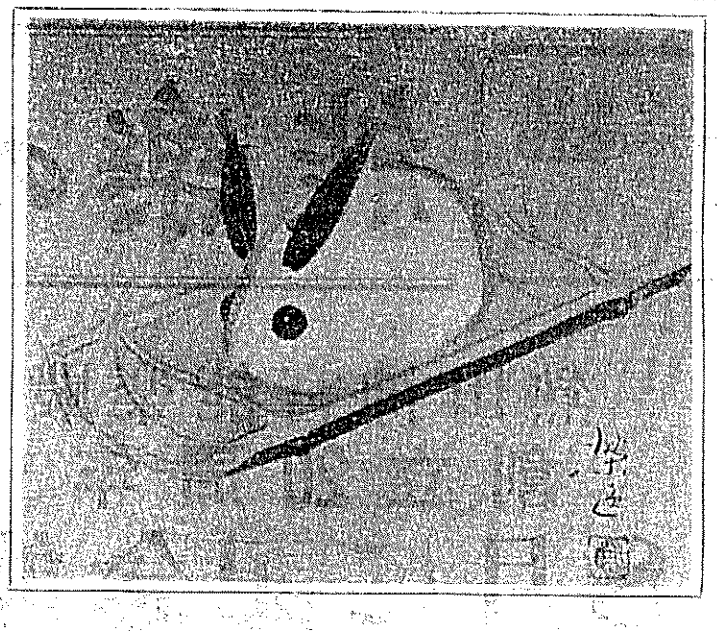
＝CBCクラブ通信寄稿より＝

能紀行

兎

絵と文　二井栄逸

(48)



あんの山から、こんの山へ、飛んできたるは何そうぞ。頭にふつぶつと二つ、細うて長うて後にぴんとはねたを、ちやつとすいした兎じゃよ。—

狂言小舞の兎のように、十二支中一番可愛いい目鼻立ちをして子供達に愛されるのは兎である。

昔、大雪が降った日のこと、ほっぺたや指先を真赤にした近所の子供達が、お盆の上に雪でこしらえた兎をのせて、ピョンピョン兎、と、しゃべりながら見せにきたことを覚えている。笹の葉の耳と赤い萬年青の実を目にした雪兎であった。今年は卯の年なのでどんな兎を描こうかと、色紙を前に墨をすりながら考えていたら、子供達の雪兎を思い出したので描いてみた。

あの山からこの山へ飛んでくるりこえられる年でありますようにと、祈りつゝ今年も一枚一枚描いて、日頃お世話になっている方々にお贈りしたのである。

ジャンプのうまい兎も、イソップ物語りの兎と亀に出てくるような兎になっては物笑いになる。己れを過信してはならぬ。熟慮の上の行動でなければならぬ。

世は乱世じゃ、やれ日本沈没、何でもかんでも国が悪い、まるで自分と国とは別個のような無責任な言い方をする人がある。そんなことでいいのだろうか。吾々と国とは同体であることを忘れてはならない。国を愛するものは、もっと真剣に国と共に考えるのが当然である。又、政府も自信があるのなら、国民をしかりつけてもいゝ筈である。

狂乱の世をのりこえ、のりこえしてきた私達は、今年こそ私達の代表である政府と共に静かにたく欲をもやすべきである。火花を散らす討論。明確な結論。そして慎重な配慮の後に、はげしい跳躍、電光石火のような行動がある。このような卯年にしたいものである。

× × × ×

初謡会に兎に因んだ独吟をと、門下から頼まれたので、竹生島の初岡を謡うことにした、

緑樹影沈んで。魚木に上る気色有り。月海上に浮んでは兎も浪を走るか。面白の浦の気色や。

この謡曲文中にある兎は、月の中に棲むという伝説をとり入れたもので、こゝのくだりは漁翁と海女の舟に同乗した醍醐の帝の廷臣が、長閑な琵琶湖上の風光をめでる一段である。

竹生島は、高砂、老松、難波のような本脇能にくらべれば、やゝ略式であるが、純粋の脇能で初番以外には演ずることは無い。本脇能の前シテの面は小尉が用いられるが、竹生島では三光尉が用いられ、一声も普通の一声で幕を出る。しかし翁附になると、白髭の文句を借りて真の一声になる。本年の中日五流能には、流儀の後藤先生が竹生島を女体の小書で舞われることになっているので期待して頂きたい。

× × ×

イソップ物語の寓話のなかの一つである兎と亀の物語りは、童謡等でひろく謡われているが、考えて見るとなか〳〵よく出来ている。

紀元前六世紀のアイソポスというギリシャ人が作ったもので、動物の行動や性格にことよせて、一般大衆のための処世訓といわれている。広く世界に伝えられ、わが国では文禄年間に九州の天草（あまくさ）で初めて邦訳されたとも伝えられている。こないだ十二支四方山話という本を読んでいたら、菊花道人という説話が目にとまった。

昔、中国の或る所で僧が華厳経を読誦していると、一匹の兎が出て来て耳を立て聞き入っていた。初めは時折であったが、後には毎朝毎晩説経のある度ごとにそばにやってきて、仏前の菊花の水をなめるのを好んでいた。僧は不思議に思いながらも愛撫して「菊花道人」と名付づけた。これは誰かの生れかわりだろうと評判になったという説話であった。

× × ×

× ×

◆演能カレンダー◆

（熱田神宮　能楽殿）

〔昭和50年1月〕

15日（祭）名古屋清韻会能　（来場歓迎）
19日（日）森本重一師範（笛方）披露能　（来場歓迎）
26日（日）喜多流　和島富太郎・観世流　泉嘉夫合同能

〔2月〕　（有料）

2日（日）宝生会定式能　（有料）
9日（日）観世会定式能　（有料）
11日（祝）邦舞会
14日（金）高校鑑賞能
16日（日）梅猟会能　（有料）
22日（土）梅若実師追善会　（有料）
23日（日）青陽会能　（有料）

〔3月〕

2日（日）九皐会春の会
9日（日）橘岡会
15日（土）青少年芸術劇場
16日（日）大蔵狂言会

（演能変更の節はご了解下さい）

演能案内

名古屋清韻会能

昭和五十年一月十五日（祭）十時始

宝　胡　蝶　平河和子　地謡　吉田後藤孝一郎　岩田藤田夫之　宮崎定則夫　玉置後藤一郎　高田浦田　杉村泉　殿島　高橋

能　天　政　玉井弘子　観　鉦一　藤田　昭彦

祝賀新年

大西信久
大西智久
大阪能楽会館

財団法人観正会
上田照也

財団法人鎌倉能舞台
中森晶三
中森貫太
〒248 鎌倉市長谷三—五—十三
電話（〇四六七）㉕五五五七

武田謡楽会
武田小兵衛
武田欣司
武田邦弘

名古屋淡交会
橋岡久共

謡交会　奥善助
東京都世田谷区三軒茶屋二—一〇—二二
電話（〇三）四二二—二六三七番

名古屋修諷会

梅若修一

笙月会　中川清
長浜市地福寺町八ノ二九
電話②〇六三〇番

雄諷会　下田雄三
大阪市東区高麗橋詰町五三

一謡会　河村鉦二
叶石会　河村総一郎
名古屋市昭和区前山町一丁目二三（〒466）
電話（七六一）四八八二

毎日婦人文化センター
謡曲教室
風韻会
殿島修二

嘉謡会　加藤総兵衛
名古屋市千種区青柳町五ノ一五
電話（七四一）四六七五番

邦謡会
梅田邦久
名古屋市昭和区台町二丁目十六ノ五
電話（八四一）四六三二番

猶恵会　熊沢恵美子
名古屋市千種区亀の井一—一九
西一社　一四—五〇三

竹翠会　若松宏守
（〒662）西宮市平松町四—九
電話（〇七九八）二三—〇六〇一

此水会　高野瀬透

水雲会

緑宝会
名古屋市緑区鳴海町池上十六—一

大垣浦声会
稽古場　大垣市竹島町善念寺
住所　京都市左京区下鴨芝本町五八
浦田保利

壺泉会
泉嘉夫
名古屋市昭和区山里町一〇三
電話八三二—三一八五
西宮市甲陽園目神山町一の一七八
電話八〇七九八八㉕二四五八

玉鑾会
洗心会
華心会
京都市左京区永観堂西町二〇
南条秀雄
奥村富久子
電075—771—0767

竹韻会
杉村竹翠
名古屋市千種区藤ケ丘八三
電話七七一—五〇三九番

田村正諷会
田村勇
大阪市東住吉区東鷹合町一—一五七
電話大阪（七〇五）二四〇〇番

徳島正韻会
田村勇
徳島市吉野本町四　三谷内
電話徳島（五二）四七四四番

知水会　服部紗枝

久田観正会　久田秀雄

松謡会　佐藤太俊

金春流

金春欣三
東京都中野区中央四—六—一二—三三
（〒164）電話（三八四）六七七三

名古屋清韻会能

昭和五十年一月十五日（祭）十時始
熱田神宮能楽殿

神歌　長谷川実　千歳　近藤一清
高砂　近藤一清　日比大吉郎　今村嘉勇
クリ・サシ・クセ省く
狂言　佐藤友彦　大野弘之　井上松次郎
餅酒
能
班女　小島トミル　西村欽也　高安勝久　吉田定男　後藤孝一郎　藤田昭彦
間　佐藤秀雄　井上礼之助
藤戸　長谷川実　高安滋郎　飯富雅介　河村総一郎　福井啓次郎　筧三男
間　佐藤卯三郎
主催　名古屋清韻会
後援　中日新聞

森本重一師範披露能

昭和五十年一月十九日（日）午前九時始
熱田神宮能楽殿

能組
舞囃子　吉野天人　岩田禎之　筧鉱一　後藤孝一郎　玉野宮夫　諸橋ヨシエ
玄象　山森幸男　筧鉱一　山本とよ子　池田茂　浅野むつへ
龍田　関谷黛　吉田定男　村木寛茂　鬼頭八郎　神谷順子
海士　別所道雄　筧鉱一　後藤孝一郎　佐藤英雄　佐竹皓
業謡　玉鬘　高本佐喜子　竹内良雄
地謡　生駒美代子　前野郁子　眼部紗枝　泉嘉夫　河村鉦二
難波　吉川宇良子　河村総一郎　柳原冨司忠　池田春枝　高木茂
五段
神楽　吉田和幸　佐竹皓　立花子方　立花之　吉田英一　館紫雄　筧鉱一　福井啓次郎　鬼頭喜太郎　石野光明
番囃子　草子洗小町　戸松利作　河村総一郎　柳原冨司忠　冨士道周明
間　井上松次郎

演能案内

名古屋清韻会能

〔昭和50年1月〕
15日（祭）名古屋清韻会能
19日（日）森本重一師範披露能
26日（日）喜多流

〔2月〕
2日（日）宝生会
9日（日）観世会
11日（祝）邦楽
14日（金）高砂
16日（日）梅若
22日（土）梅若
23日（日）青大

〔3月〕
2日（日）九皐会
9日（日）橋本
15日（土）青大
16日（日）

舞
地謡　田野冨士夫　岩田則雄　後藤孝一郎　田中禎夫　池田禎之　岩田則雄
宝胡蝶　平河和子　吉田定男　後藤孝一郎　高田真六　杉村稔朗　泉島竹翠　高橋修二
宝天鼓　玉井弘子　筧鉱一　福井良久　藤田昭彦
宝巻絹　戸田和　亀山盛一　後藤孝一郎　鬼頭好信　竹下徳子
宝船辨慶　佐藤稔　河村総一郎　柳原冨司忠　鬼頭好信　浅野敏行
唐船　早川つねよ　河村総一郎　大野英代　鬼頭喜太郎　玉野宮夫
バンシキ
遊行柳　橋本淑子　吉田定男　村木寛茂　鬼頭喜太郎　中村定子
放下僧　河村総一郎　後藤孝一郎　松岡美智子　和子　三男
宝右近　葛原正枝　岩田啓次郎　福井啓次郎　祐之　平河　筧
宝雲雀山　吉田智恵子　河村総一郎　福井啓次郎　鬼頭八郎　服部登和子
宝三井寺　小沢喜一　筧鉱一　柳原冨司忠　筧鉱一　後藤迪夫　鬼頭季信
宝須磨源氏　日比野貞子　筧鉱一　福井良治　鬼頭八郎　館繁雄
鶴亀　奥村龍子　亀山盛一　福井啓次郎　池田素子　石井茂
船辨慶　桜本幸子　河村総一郎　福井啓次郎　助川龍夫　上田光太郎
宝花月　今井田弥生　吉田定男　柳原冨司忠　片岡茂
宝杜若　平井ミヨ　河村総一郎　大野英代　鬼頭八郎　服部登和子
宝高砂　足立知子　吉田定男　福井良久　鬼頭喜太郎　尾上睦子
五段
宝雲林院　高田真六　吉田定男　福井啓次郎　平河和子　戸松利作
坪内貞博　米田一平
番囃子　絵馬　木美勝　吉田定男　後藤孝一郎　助川龍夫　森正利
間　野村又三郎　佐藤英雄　別所道雄　冨士周明　山森幸男　水藤元三　久田秀雄　南条秀雄　佐藤太俊
地謡
連管　中之舞　早川つねよ　吉川宇良子　関谷薫　浅野光男　樹田卓士　吉田英一　小野田シゲ子　水野ツタ
（休憩）
能（宝生）　猩々乱　倉本雅　高安滋郎　筧鉱一　福井啓次郎　前川善雄　森本重一
後見　辰巳勝孝　竹腰一　佐藤喜一　小沢稔　高田真六　戸田秀雄　内藤正二　吉田俊彦
地謡　鬼頭嘉男　佐藤寛　森本重一　内藤泰二　吉田俊彦
以上
主催　筧三男
呉竹会
。御来場歓迎（粗品呈上）

謹賀新年

春敬会　真柄米次
犬飼末吉　名古屋市中川区柳瀬町二―四〇
蛍雪会　後藤契雲　名古屋市中区栄三―三三―一〇
清光会　岡田光紘
幸謡会　近藤幸江　岡崎市鴨田本町十一番地ノ三　電話（〇五六四）㉑二五二九
野口禄久　東京都港区西麻布四―一八―二八
名古屋巽会　辰巳孝
佐野正治　金沢市泉野町四丁目十二―十四
近藤乾三　乾之助　東京都豊島区巣鴨五―二三―八
雙雲会　内藤泰二
倉本雅　神戸市東灘区田中町一―13―26　本山アーバンライフ四〇一号

梅若修一
名古屋修謡会
水雲会　水藤元三
緑宝会　名古屋市緑区鳴海町池上十六―一　〒458　加藤勝利　電話（六二一）三四二八番
竹腰勝一
吉田俊彦
金剛流豊星会　豊嶋弥左衛門　豊嶋三千春　京都市東山区知恩院山内林下町四五五　電話（〇七五）五六一―五四〇八
清風社　〒464　名古屋市千種区城山町三丁目二一　金剛流大塚　電話（七五一）五三八九番
金剛流華月会　今井幾三郎　今井清隆　京都・大阪枚方
廣田後援会　廣田陛一　廣田幸稔
菊扇会（名古屋・京都・東京・三重）　廣田泰三　廣田泰能
林鉄郎
本田光洋　東京都中野区上高田二ノ二五ノ二　電話（三八六）二六四一
金春流伊勢八声会　中村富次　伊勢市宮町一―一四―一七
金春流　東京都中野区中央四―六―一二―三三　（〒164）電話（三八四）六七七三
松謡会　佐藤太俊　名古屋市名東区上社二丁目三七―一〇三
久田観正会　久田秀雄
和谷亀二郎　伊勢市中島2―26―12
大阪喜多会　和調会　和島富太郎　〒665　宝塚市宝梅一丁目十二―一　電〇七九七―七一―八六三〇
都ホテルに卯の初夢や朝の汐
喜多流謡曲研精会　貫周　福岡周斎　川崎市多摩区生田二〇三七
二井栄逸　松阪市内五曲町八八　電（〇五九八二）三―〇二一六

和島富太郎（喜多流）
泉嘉夫（観世流）

合同能

一月二十六日（日）午後一時始
熱田神宮能楽殿

能組

仕舞（観世流）
難波　三島憲
清経　殿島修二
二人静　近藤幸江　地謡　高木春枝　山本正人　泉鶴嘉夫　泉嘉彦
放生川　和島富太郎

能
弱法師　西村欽也　笠井鉱一　福井啓次郎　笠三男
間　佐藤友彦
後見　長田曉　宮田陽二　地謡　下飼手白天　中島政川　宇治田政雄　上川昇　二井栄逸　大島政允　香川清嗣　谷大作

狂言
伯母ケ酒　野村又三郎　井上礼之助

仕舞（喜多流）
笠之段　谷大作
笹之段　香川靖嗣　地謡　宇治田政雄　二井栄逸　大島政允　上川昇
玉之段　長田曉

能
杜若　泉嘉夫
恋之舞　高安滋郎　河村総一郎　柳原富司　前川雪　藤田昭彦
後見　大槻文蔵　高木春枝　近藤幸江　地謡　山本正人　橋本克彦　三島実　杉村修一　泉梅若　梅若泰孝　竹翠善　高善

付祝言

主催　名古屋喜多流鑑賞会
壺泉能友会

観能券　A　二、五〇〇円　B　一、五〇〇円
学生　一、〇〇〇円
取扱い所　主催、出演能楽師、熱田神宮能楽殿
名古屋喜多流鑑賞会・電話（671）2912
壺泉能友会・電話（941）2081
（832）3185

第十九期第一回 名古屋宝生会定式能

二月二日（日）午後一時始
熱田神宮能楽殿

素謡
倉本雅
熊野　戸田和　竹内澄子

能
内藤泰二　鬼頭嘉男
芦刈　西村欽也　河村総一郎　山口亮　藤田昭彦
辰巳孝
百万　高安滋郎　筧鉱一　後藤孝一郎　助川竜夫　藤田六郎兵衛

ほか狂言、仕舞

主催　名古屋宝生会
名古屋市東区東門前町三―二二

昭和五十年度初回 観世会定式能

二月九日（日）午前十一時始
熱田神宮能楽殿

能組

能
塚本秀雄　観世喜之
松　西村高安勝久　飯富欽也　雅介　河村総一郎　久田舜一郎　鬼頭八郎　筧三男
間　佐藤秀雄

仕舞
屋島　野村四郎
弱法師　武田太加志
葵上　藤井久雄

観世元正
東北　岡治郎右衛門　筧鉱一　後藤孝一郎　藤田六郎兵衛
間　井上松次郎

狂言
節分　野村又三郎　井上礼之助

観世元昭
野守　高安滋郎　吉田定男　福井啓次郎　観世元信　藤田昭彦
黒頭
間　佐藤友彦

附祝言

主催　名古屋観世会

新春邦謡会

二月十一日（祝）午前十時始
熱田神宮能楽殿

社中
素謡、仕舞数番

能楽
草子洗小町　西村欽也　河村総一郎　後藤孝一郎　筧三男
子方　河合雄一郎　須部甫
男　前野郁子
女　清沢一政
男　今沢美和二
貴女　久田徹
梅田邦久
間　野村又三郎
後見　河村和重　橘保向　地謡　一木加賀　高橋敏茂　瞭一　渋井義寿　藤谷小野政二

主催　邦謡会
梅田邦久

賀正

岡村保道
三重県度会郡玉城町田丸三五五

喜多流　山本才
名古屋市千種区園山町二―二三
名古屋大学官舎

麦の会
長田曉
衣斐正宣

宝生弥一
閑

東京都練馬区小竹町一の五〇
電話（九五五）四七九五
高安滋郎
勝久
〒467 名古屋市瑞穂区玉水町二ノ六四
電話（八三一）〇三六四番

西村欽也
〒467 名古屋市瑞穂区仁所町二ノ四五
電話（八三一）五九一九番

福王茂十郎
大阪市東区平野町一―一五
福王輝幸
西宮市名次町六ノ二二

豊鶴十郎
〒二七一 松戸市下矢切五五
電話（〇四七三）㊷一九八二

福王流
寿福会
久保田千三郎
芦屋市呉川町五ノ一五
電話（〇七九七）二二―三一八四

脇方高安流
谷田宗一朗

高安流白水会
和泉太郎
〒142 東京都品川区二葉二―八―一二
電話（七八六）四〇九二番

京都高安会
岡治郎右衛門
京都府長岡京市開田静野二―一七
電話（〇七五）九三一―二五二三番

森田光春
京都市東山区八坂上町三七六

藤田六郎兵衛
藤田昭彦
龍吟会

杉市太郎
杉市和

寺井政数
〒154 東京都世田谷区世田谷四―三―二五
電話（四二〇）六六七六番

呉竹会
筧三男
名古屋市中村区荒輪井町2―15
電話（四一一）九三〇一番

幸祥光
〒158 東京都世田谷区等々力五―三〇―二
電話（〇三）七〇四―一六九三

幸正影

筧鉱一

小の会　幸宣佳
福岡県小郡市小郡一四〇三

幸圓次郎
〒164 東京都中野区中央四―四七―一一
電話（三八一）九四一三番

幸義太郎
東京都中野区丸山二―二四
都営丸山アパート一号三二〇号
電話（三三七）五六七二番

櫻月会
大倉長十郎
正之助
源次郎
西宮市松園町一―三三
TEL（〇七九八）㊷二二五七

幸友会
福井啓次郎
福井良久
柳原冨司忠

亀井俊一
忠雄
保雄
実

桂会
岐阜市松屋町　後藤方

田鍋洋一
名古屋市瑞穂区弥富町月見ケ岡四三

前川善雄

茂山千作
茂山千五郎

能楽先達の訓え①

「観世華雪芸談」より

華雪（華雪）師は、明治、大正、昭和の三世代にわたり、能楽の振興発展に大きな業績をつくされ昭和三十四年一月、七十六歳で逝去されたが、晩年の華雪師の芸話の数々を沼艸雨氏が筆をとり、「観世華雪芸談」として、昭和三十五年、故華雪師の一周忌に檜書店より発行された。

華雪師は、明治二十年、四才で「雲雀山」の子方として初舞台をふみ、七十年間この道の研さんにつとめ、その間、演能千五百番のシテをつとめられ、昭和二十七年日本芸術院会員、同三十二年重要無形文化財保持者として指定された。

また昭和十四年観世流宗家の後見役となり、十余年の久しきにわたってその重責を果され、先代宗家の観世流大成版著述に際

本紙では、読者の能楽への理解と研さんに資することをねがい、「観世華雪芸談」より引用掲載させて頂くことになりました。

この引用転載にあたって、沼艸雨氏、観世静夫師らのご厚意を賜りました。

なお、この「観世華雪芸談」には観世元正宗家がつぎのように序を寄せています。

「明治、大正、昭和と、波乱に富んだ時代を終始、芸の正道を踏んで誤らず、信念をもって強く生きられた華雪さんの身をもってなされた掛けがえのない遺訓であり、私個人としても、幼にして父を喪いましたので、宗家という重責を果して行くために後見役を華雪さんにお願いして、芸道上は勿論、人間的成長の上にも幾多の感化を受けましたから、よき師であり、よき理解者であった華雪さんの温和な中に厳しさをこめた教訓のかずかずを如実に思い出させられ一入なつかしい芸談集である。」

（編集注・引用抜萃にあたっては、文意に誤りなき範囲で、原文を書きあらためたところがありますのでご了解下さい）

一調

仮番組などに、例えば、能「羽衣」何某　狂言「太刀奪」何某、一調「鐘之段」何某

「シテ方の催しだからシテの人の名前を出しておけば、それでよい」

というつもりなのでしようが、とんでもないことです。

もともと一調は囃子が主で、鼓の方から注文があれば重いものなど長上下で勤めることになっています。また謡い方も、一調だけの手があって、謡い手と囃子方がよく打合わせをしなければなりません。そうですから絶対に謡い手と打ち手の名前を書かねばなりません。

謡吟といって謡い手が一人或は二人を連れて連吟しているのをみうけますが、これは声が出にくいとか、何か特別な場合で、本来は独吟であります。

又一調は鼓と謡の真剣勝負ですから、一対一でなければ機に応じたやり合いは出来ないわけです。私も近いところでは、幸祥光さんと「浮舟」をつとめましたが、大変楽しうございました。

なおこのごろは、能が盛んになりましたお蔭で、時々若いものが一調を謡わせてもらったりしていますが、元来、旧幕時代では、「一調は家元同士に限る」といわれたくらいで、能一曲と同じ格式、時にはそれ以上にも考えられた程のものですから、それによってもこのむつかしさが知れます。

年頭随想

殿島修二

いよいよ昭和の年号が五十の第一歩を印するにあたり感慨ともこもである。

能楽の友も本年四月をもって第百号となるので、何かと記念事業という話も出ているが、熱田神宮能楽殿が建設され本年は二十周年を迎えたので、いろ〳〵な記念の催しが行なわれるはずで既に話がもち上っているので、来年の創刊十周年を記念して行なうことになった。

読者にはまことに申訳ないのであるが、毎号記事内容が乏しくて番組新聞の謗りを免れ得ないけれども、もと〳〵演能案内として番組の紹介を目的に発足したものであるから止むを得ぬとしても、読者はだん〳〵増えていることは事実でこの点ありがたいことと喜んでいる。能楽愛好者と結ぶパイプとして読者の方からも何なりともお気づきのこと、苦言ご希望のこと等々是非ご投稿をお願いしたいものと期待をかけている。なお観能記事、素人能など観たまゝ記をお寄せ下されば大へんありがたいことゝ思う。もちろん無記名でも結構です。

さて本年度も多彩な演能が目白押しに催されるので、愛好家にとっては忙がしいことであり、お楽しみも多い年と言えよう。

一月の先陣は毎年催されている名古屋清韻会が十五日に能「班女」小島トミル氏、「藤戸」長谷川実氏によって演じられ外に舞囃子、素謡、独吟、仕舞等、十九日に呉竹会（寛三勇師）では、森本重一氏の師範披露に能「乱」をシテ倉本雅師によって披かれる外舞囃子二十数番、番囃子二番。

二十六日合同能では「弱法師」和島富太郎師、「杜若」泉嘉夫師狂言「伯母ケ酒」野村又三郎師で催される。二月二日は宝生会定期能初回さらに九日は観世会の定期能初回、十一日は邦謡会（梅田邦久師）で「草紙洗小町」シテを梅田師で演じられ、外に素謡、仕舞等、十六日梅猫会能「清経」熊沢恵美子師、「楊貴妃」梅若盛義師「熊坂」梅若修一師、二十二日梅若実十七回忌追善能「野宮」梅若景英師、二十三日青陽会能「巻組」河村鉦二師「羽衣」生駒美代子「藤戸」塚本秀雄師、以上何れも能楽殿

三月に中日五流能第二十回が豪華番組によって中日劇場に於て催される。当地も段々東西の各流の大家が相次いで来演されることによって能楽界が益々活気を呈して来たことは喜ばしいことと言わねばならない。

能楽の友も本年はより良い内容のものにしてゆくよう努力せねばと張りきっているので、どうか一層のご支援を切にお願い申上げます。（編集同人）

学生能と狂言の会

1月7日能楽殿で盛会

名古屋学生能楽連盟では、一月七日熱田神宮能楽殿で「学生能と狂言の会」を開催した。

金春流能、「田村」（愛知大学）宝生流能「胡蝶」（市立女子短大）観世流能「国栖」（紅葉狩）（岐阜女子短大）狂言「背裏焼」（愛知教育大学）「舟ふな」（南山大学）はじめ舞囃子、仕舞、連吟など十数番。

学生能は今回で十九回を数え、県下各大学十三の謡曲部、研究会が連盟に加入している。

主催　名古屋宝生会
名古屋市東区東門前町三―二二　高橋勇三郎方

ほか狂言、仕舞　後藤孝一郎　藤田六郎兵衛

主催　梅邦田謡邦久会
後見　河村和重　保向
地謡　加藤一木　橋賀　瞭敏　一彦茂　小渋井　谷野義　政二朗寿

脇方　高安流　谷田宗一朗
名古屋市中区栄五―四―一二　電話（〇七九七）二二―三一八四

祝発刊

長生会
鬼頭八郎
鬼頭喜太郎
鬼頭好信

山本敬一郎
大阪府泉南郡阪南町貝掛一〇二ノ九一南海団地西三ノ九
山本孝
大阪府豊能郡東能勢村大字吉川一五ノ一二五ときわ台住宅二五三

鬼頭季信

熱田神宮能楽殿運営委員会
委員長　熱田神宮権宮司　皇学館大学教授　長谷晴男
委員　熱田神宮権禰宜　財務部長　岡地幸雄
同　熱田神宮権禰宜　総務課長　二橋一彦
同　シテ方　観世流　柴田初太郎
同　シテ方　観世流　殿島修二
同　シテ方　宝生流　内藤泰二
同　ワキ方　高安流　高安滋郎
同　笛方　藤田流　藤田六郎兵衛
同　小鼓方　幸清流　福井啓次郎
同　大鼓方　石井流　河村総一郎
同　太鼓方　観世流　鬼頭八郎
同　狂言方　和泉流　井上松次郎
同　月見ケ丘開発株式会社社長　高橋半次郎
同　岡谷不動産株式会社顧問　桐本陸良
同　茶道　松尾流　松尾宗吾

〒158　東京都世田谷区等々力五―三〇―二　電話（〇三）七〇四―一六九三
幸正影

〒141　東京都品川区西五反田八―一〇―一八　電話（〇三）四九二―四八六四番
寛鉱一

吉田定男

助川竜夫
山口義郎
山口亮

狂言　和泉会
和泉保之

三宅藤九郎

名古屋和泉会

狂言共同社

野村万蔵
東京都豊島区南長崎六―五―四

狂言やるまい会
野村又三郎
名古屋市昭和区南山町12―7　電話（八三二）八〇七一番

大蔵会
大蔵狂言会
大蔵彌太郎
基嗣
基義
〒154　東京都世田谷区池尻三―九―二二　電話〇三（四一三）五九六八番

前川善雄
名古屋市瑞穂区弥富町月見ケ岡四三

善竹忠一郎
神戸市東灘区御影町郡家大蔵二二

茂山忠三郎
〒564　吹田市山手町一丁目二十二―十一　電話〇六（三六八）三五二八番

茂山千作
茂山千五郎
京都市上京区中筋通り石薬師上ル

朝日文化センター
囃子教室
笛　寛三男
小鼓　後藤孝一郎

ウシマド写真工房
〒602　京都市上京区北野上七軒　電〇七五（四六二）一三四一番

熱田神宮能楽殿
仙田美千子
電話（六七一）二九一二番

栄能楽舞台
名古屋市中区栄五―四―一二　電話（二六二）一一八三番

喪中につき年始のご挨拶ご遠慮申し上げます
宝生英雄

喪中につき年賀のご挨拶ご遠慮申し上げます
金剛厳
金剛永謹

三世梅若実師十七回忌
追善能

五十年二月二十二日（土）十二時三十分始
熱田神宮能楽殿

能組

素謡
通小町　高橋甫治　山崎英太郎　土田修仙

仕舞
杜若　田中武
通盛　水藤元三
雲林院　加藤総兵衛
班女　杉村竹翠
玉ノ段　柴田収武
融　塚本秀雄

連吟
江口　河村鉦二　増田一雄

能
梅若六郎
宮合掌留　高安滋郎　河村総一郎　福井啓次郎
間　佐藤秀雄
後見　柴田収武　山本勝一
地謡　田中武　柏木昇　土田修仙
狂言
宗論　野村又三郎　井上松次郎　佐藤卯三郎

仕舞
頼政　山本勝一　西村泰男　梅若隆雄　柏木昇　梅若六郎

能
梅若景英
安達原　西村欽也　高安勝久　後藤孝一郎　鬼頭喜太郎　藤田昭彦
黒頭　寛鉦一
間　井上礼之助
後見　梅若節夫　山崎英太郎
地謡　水藤元三　加藤総兵衛　杉村竹翠　塚本秀雄　山本勝一　高橋甫治　土田修仙　松山隆雄

（終了予定　午後五時四十分）

追加

主催　名古屋梅若会
後援　中日新聞

会員券
A券（指定席）三、五〇〇円
B券（自由席）二、五〇〇円

連絡所
田中武（尾張旭市城山町三ツ池6198）
（電話〇五六一五③三三〇四）
近藤鉱治（名古屋市中区流川町3の12）
（電話二四一―三九三七）

梅猶会能

二月十六日（日）午前十一時始
熱田神宮能楽殿

能組

舞囃子
巻絹　菊池重郎　寛鉦一　柳原富司忠　鬼頭喜太郎　寛三男

能
清経　熊沢恵美子　高安勝久　吉田定男　柳原富司忠　寛三男

舞囃子
弱法師　岡田朗詠　河村総一郎　後藤孝一郎　藤田昭彦

能
梅若盛義
楊貴妃　高安滋郎　寛鉦一　福井啓次郎　藤田六郎兵衛

狂言
佐渡狐　野村又三郎　井上礼之助　井上松次郎

能
梅若修一
熊坂　西村欽也　河村総一郎　後藤孝一郎　助川竜夫　藤田昭彦

ほか仕舞数番
（有料）

主催　梅猶会
後援　中日新聞

1月・2月放送予定

◆ NHKラジオ第一放送
（毎週土曜日午後6時5分）

〔1月〕
18日（土）　観世流「七騎落」岡　久雄ほか
25日（土）　観世流「歌　占」上野朝太郎ほか

〔2月〕
1日（土）金春流「大江山」「花月」金春欣三ほか
8日（土）観世流「忠　度」　坂井音次郎ほか
15日（土）宝生流「来殿」「羅生門」三川　泉ほか
22日（土）金剛流「野　守」　豊島弥左衛門ほか

◆ NHK・FM 毎週日曜日　（午前7時15分）

〔1月〕
19日（日）宝生流「夜討曽我」武田　喜永ほか
26日（日）観世流「禅師曽我」大江又三郎ほか

〔2月〕　変曲物シリーズ
2日（日）宝生流「羅生門」三川　泉ほか
9日（日）狂　言「朝日奈」「節分」和泉保之ほか
16日（日）金剛流「野　守」豊島弥左衛門ほか
23日（日）観世流「歌　占」上野朝太郎ほか

各地だより

能楽協会名古屋支部の初謡会

名古屋　能楽協会名古屋支部では、一月三日午前十一時から恒例の謡初式を熱田神宮能楽殿で開催。「四海波」を連吟し、新春を寿いだ。

このあと、藤田六郎兵衛支部長から「能楽協会名古屋支部の行事として、薪能は年々盛大になり、能舞台も立派にでき喜んでおります。

本年も協会の催しは恒例のとおり全部行ないますが、とくに熱田神宮能楽殿が昭和三十年にできてから本年は二十周年になり、その記念の演能を八月二十四日催します。ご支援とご協力をおねがいしたい。」と新年のあいさつがあり高安滋郎副支部長から企画発表、井上松次郎常議員から旧ろう催された義捐能会計報告、愛知県、名古屋市への義金寄託について①面所報のようにそれぞれ報告が行なわれた。

なお、義捐金がおくられたつぎの福祉施設から丁重な礼状がよせられている。（一月三日現在）

豊橋平安寮、愛知県新生寮、愛知学園、県立第二青い鳥学園、岡崎市母子寮、半田市老人ホーム、中央児童相談所、愛知県半田更生園、殺楽町立養護老人ホーム、豊橋ちきり寮、大山ひかり学園、愛知県宮崎老人ホーム（吉良）一宮母子寮、一宮市養護老人ホーム和楽荘、しげはら学園、豊橋ひかり乳児院、老人ホーム西尾寮、西尾市養護老人ホーム喜楽荘、藤花荘、老人ホーム足助寮、国立豊橋療養所、明範荘特別養護老人ホーム、三好学園、豊山母子寮。

〔訂正〕本紙十二月号③面「二世梅若実追善能」番組の連絡所田中武氏の電話番号③三三〇四とあるのは③三三〇四の誤りでした。お詫びして訂正します。

購読料改正についてのおねがい

本紙では昭和四十六年から、一カ年四百円（郵送の場合五百円）にて購読をおねがいして参りましたが昨年来発行諸経費その他の高騰いちじるしく、このためまことに恐縮ですがやむを得ず本年一月号から購読料を次のように改訂させて頂くことになりました。

▽一カ年　五百円
▽郵送の場合　六百円

右のとおりでありますので、何卒事情ご理解を頂きまして一層のご支援のほどお願い致します。

なおすでに前金にてお申込みの分につきましては期間中従来どおりと致します。

能「道成寺」など初代金剛巌追善能

3月23日　金剛能楽堂

初代金剛巌二十五回忌追善能が三月二十三日（日）京都・金剛能楽堂（室町通四条上ル）で金剛宗家、金剛会の主催により催される。

この追善能は、金剛流一門のほか観世、喜多、金春三流を代表して片山博太郎、喜多長世、金春信高三氏が来演、重要無形文化財個人指定保持者、高安流大鼓方安福春雄氏、高安流ワキ方宗家高安滋郎、幸清流小鼓方宗家幸円次郎、大倉流小鼓方宗家大倉長十郎の諸氏らが出演する。

能「安宅」（シテ金剛永謹、立衆広田泰三ほか、ワキ岡治郎右衛門、笛貞光義次、小鼓幸円次郎、大鼓安福春雄）能「道成寺」小書古式（シテ金剛巌、ワキ高安滋郎、ワキツレ谷田宗二朗、森晴蔵、笛森田光春、小鼓大倉長十郎、大鼓安福春雄、太鼓前川善雄、間茂山千五郎、茂山あきら、後見豊嶋弥左衛門ほか、地頭今井幾三郎、鐘後見金剛永謹ほか）

指定席券五千円、自由席券三千円、学生券千五百円。

山本定期能の上半期演能

大阪　山本定期能楽会の本年上半期の演能は次のとおりである。会場は大阪・東区徳井町。山本能楽堂

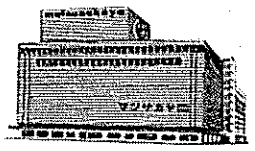
▽二月二日（日）能「知章」（波多野晋）「千手」（山本勝一）「阿漕」（山本順之）
▽三月一日（土）能「放下僧」（河村禎二）「葛城」（山本真義）「春日龍神」（千崎隆一）
▽六月八日（日）能「巴」松浦信一郎「雲雀山」（八木康夫）「大江山」（山本勝一）

あなたに心をこめておおくりする……
冨士道の婚礼道具
家具の冨士道
本社　名古屋市中区栄3丁目35番18号
ショールーム　TEL代表（262）5547
工場　愛知県西加茂郡三好町　TEL（05613）2―1178

観世流・金剛流
宗家本発行元
檜書店
〒101　東京都千代田区神田小川町2―1
〒604　京都市中京区二条通麩屋町東入
電話（291）2488―9
振替東京3552
電話（231）1990
振替京都113

鮮魚
鰹節
魚伊
豊橋市魚町18　電話（52）5256
豊橋也留舞会連絡所　（山本浅太郎方）

楽しいお買いものはマツザカヤ



もち屋 松坂屋

能樂の友

題字は熱田神宮　篠田宮司筆

発行　能楽の友社
名古屋市千種区吹上本町2－20
（郵便番号　464）
電話　（731）7984
振替口座　名古屋　36393

購読料　1年　500円
郵送の場合　1年　600円
一部　40円

青少年のための芸術劇場

能「土蜘」狂言「附子」

3月15日　熱田神宮　能楽殿で

共催　名市教育委員会
能楽協会名古屋支部

名古屋市教育委員会は「青少年のための芸術劇場」として、バレー、児童劇、オペラ、民族劇など中学生、高校生および勤労青少年を対象として芸術観賞の機会を与えるため企画しているが、このたび昭和四十九年度の芸術劇場に能・狂言の部が組み入れられ、この演能がきたる三月十五日（土）午後二時半から熱田神宮能楽殿で催される。

この「青少年のための芸術劇場」能・狂言の公演は、名古屋市教育委員会と能楽協会名古屋支部が共催、中学校、高等学校の教科書に出ている狂言「附子」など親しまれた番組で、今回は、能「土蜘」（宝生流）狂言「附子」（和泉流）の二番。

鑑賞料金は、中学生及び高校生二百円、同伴の父兄も同じ料金で開放される。

番組は次のとおりで「能」について内藤泰二師「狂言」について井上松次郎師が解説にあたる。

番組

解説　内藤　泰二

能　狂言　井上松次郎

狂言　附子（ぶす）
太郎冠者　野村又三郎
次郎冠者　井上礼之助
主人　大野　弘之

能　土蜘（つちぐも）
従者　竹内澄子　勝一
小蝶　内藤泰二　正宜
頼光　衣斐　宜
土蜘　高安勝久
高安滋郎
飯富雅介
河村緑一郎
福井啓次郎
鬼頭喜太郎
藤田昭彦

間　佐藤友彦
後見　戸田弘和
玉井弘子
地謡　佐藤須賀
小沢平子
喜多一明
稲美
鈴木辰己
鬼頭吉田
義久孝
嘉男俊彦

附祝言

喜多流能楽団
カナダ・アメリカで公演

喜多流喜多節世氏を団長とするカナダ・アメリカ親善能楽団は二月十二日から約二週間にわたりカナダ・バンクーバー、トロント、アメリカ・ボストン、ニューヨーク、ロスアンゼルスなど各地で公演旅行を行なう。

一行のメンバーは、団長＝喜多長世、大島久見、笠井改、友枝昭世、内田安信、森茂好、藤田朝太郎、幸義太郎、国川純、小寺佐七の諸氏。

曲目は「羽衣・小書霞留」半能「熊坂」が予定されている。

◆演能カレンダー◆
（熱田神宮　能楽殿）

〔2月〕
11日（祝）邦謡会
14日（金）高校鑑賞能
16日（日）梅猟会能　（有料）
22日（土）二世梅若実師十七回忌追善能　（有料）
23日（日）青陽会能　（有料）

〔3月〕
2日（日）観世喜之師舞台生活七十年九阜会記念春季大会　（来聴歓迎）
9日（日）故橋岡久太郎師十三回忌追善別会能　（有料）
15日（土）青少年のための芸術劇場　（有料）
16日（日）大蔵狂言会
21日（祭）武田謡楽会春季大会　（来聴歓迎）
23日（日）淡交会主催　故橋岡久太郎師十三回忌追善能　（来聴歓迎）

（演能変更の節はご了解下さい）

演能案内

梅猟会定期能楽会
二月十六日（日）午前十一時始
熱田神宮能楽殿

巻絹　菊池重郷　笠井鉱一　柳原冨司忠　鬼頭喜太郎　笠井三男
舞囃子
女郎花　大嶽賢次郎
独吟
能楽
森勝子　熊沢恵美子
経　高安勝久　吉田定男　柳原冨司忠　笠井三男
後見　梅若善高　井戸良造
地謡　石田亀之助　池内光　菊池重郷　大嶽賢次郎　殿島修二　岡田朗詠　杉村竹翠
仕舞
通盛　佐藤太俊
蟬丸　河村鉦二
野宮　殿島修二
葵上　杉村竹翠
舞囃子
弱法師　岡田朗詠　河村総一郎　後藤孝一郎　藤田昭彦
能楽
梅若盛義
楊貴妃　高安滋郎　笠井鉱一　福井啓次郎　藤田六郎兵衛
間　佐藤秀雄
後見　梅若修一　岡田晃一　菊池重郷
地謡　岡田朗詠　井戸和男　前川芳周　河村鉦二　佐藤太俊　井戸良造　梅若善高
狂言
佐渡狐　野村又三郎　井上礼之助　井上松次郎
能楽
梅若修一
熊坂　西村欽也　河村総一郎　後藤孝一郎　藤田昭彦　助川竜夫
替之型　大野弘之
間
後見　殿島修二　岡田朗詠　石田亀太郎　森勝子　熊沢恵美子　前川芳周　井戸和男　梅若盛義　池内光之助
地謡

附祝言

主催　名古屋梅猟会
後援　中日新聞

会員券申込所　能楽殿又は出演楽師宅
特別席（指定）三、〇〇〇円
自由席　二、〇〇〇円　税込

二世梅若実師十七回忌追善能
二月二十二日（土）十二時三十分始
熱田神宮能楽殿

能組
業囃　高橋甫治
仕舞　山崎英太郎　土田修仙
通小町
仕舞
杜若　田中武
通盛　水藤元三
雲林院　加藤総兵衛
班女　杉村竹翠
玉ノ段　柴田収武
融　塚本秀雄
地謡　梅若西村　松山節夫　隆雄男　昇
連吟
江口　河村鉦二　増田一雄
能
梅若六郎
宮合掌留　高安滋郎　河村総一郎　福井啓次郎　藤田六郎兵衛
間　佐藤秀雄
後見　柴田収武　山本勝一
地謡　田中武　柏木昇　土田修仙　高橋甫治　梅若貞英　山崎英太郎
狂言
宗論　野村又三郎　井上松次郎　佐藤卯三郎
仕舞
頼政　山本勝一
地謡　梅若六郎　柏木昇　松山隆雄　西村秦男
能
安達原　梅若貞英　西村欽也　高安勝久　笠井鉱一　鬼頭喜太郎　藤田昭彦
黒頭
間　井上礼之助
後見　梅若節夫　山崎英太郎
地謡　加藤水藤兵衛　杉村竹翠　塚本秀雄　高橋甫治　山本勝一　土田修仙　松山隆雄
（終了予定　午後五時四十分頃）

追加

主催　名古屋梅若会
後援　中日新聞

会員券
A券（指定席）三、五〇〇円
B券（自由席）二、五〇〇円

連絡所
田中武（尾張旭市城山町三ッ池　電話〇五六一五③六一九八）
近藤鉱治（名古屋市中区流川町3の12　電話二四一－三九三七）

本店　熱田区神戸町三四　電話（671）8686
神宮東門店　熱田区新宮坂町一　電話（682）5598（代表）

能紀行 (49)

音取

逸栄井二 文と絵

「清経」キリ　二井栄逸画

劇とは何事かの到来、能とは何者かの到来である。

これは、能に深い洞察を見せたポール・クローデルの秀句である。

又、彼は道成寺の乱拍子を見た印象を次のように日記に書きとどめている。

楽士の発する咆哮にも似た声。足の先が持ちあがる。鼓を一つ打つ。爪先が下りる。静寂。突然全身を折り曲げる。あたかも生き物が飛び上がろうとするかのように。それからそして以下同様に。このようにして舞台を回るのに一時間もかかる。実にみごとに劇的である。

なぜこれが実にみごとに劇的、であるのか、それは、演者の心の中のリズムがはげしく渦巻き、芸術上の戦いが戦われている理で、一見、立ちつくしているように見えても、心の中には緊迫感がたかまりはげしく流れているからである。ポール・クローデルはそれをみきわめているのである。

修羅能の中に、一風変った情味豊かな能がある。それは「清経」であるが、平家の前途に絶望し、戦いの無残さに生きる意欲を失ない、舟が浦に入水自殺した清経を主人公にした能である。

清経は、平重盛の三男であったが、平家都落ちのとき、幼いみかどを奉じて西国におもむき、山鹿の里に籠っていたが、幾程もなく敵に追われて川舟に乗り豊前の国柳に移って、かりそめの皇居を定めたのである。

ところが、敵は長門の国へも向ったときいたので、又、舟にのり安住の地をもとめて海上にのがれるのであった。追風の音をきいて追手かと驚いたり、白鷺の群を見ては源氏の旗かと肝を消したりする。そして清経は柳に移った去る或る日、宇佐八幡宮に参詣した折浮世の宇佐には平氏を守る神は無きに筑紫まで来て何を祈るならむ

この御託宣を思い出して清経は詮無き命をながらえ憂きめを見るよりはこの海に沈まんと決心するのであった。

皎々と照る月をながめ、横笛を吹き、〃昔に帰る由も無く、思うことの果も無く、此世に思い残すことなし、狂人とも何とも人は見よ、我は月に伴われて往かん。南無阿弥陀仏弥陀仏、迎えさせ給えと、唯一声を最後に舟より身をなげてむなしくなる。

この清経の能に音取（ねとり）という小書がある。シテの出に特殊な笛のアシライがあり、それを聴いて帯を出る異式であるが、歎きの妻の夢中に次第に幻影をはっきりさせて行く演出で、これも、ポール・クローデルのことばを借りて言えば実にみごとに劇的、であろう。

清経の形見も届けられた妻は、怨みながら眠りにつく。笛がひとり、ほんとうに静かに、それは水の底からひびいてくるように静かに吹き出す。そして吹きやんだ長い沈黙。また笛の独奏、いつしか幕が上り、シテの姿が橋がかりに浮む、中将の面、梨子打黒たれ、長袴、大口、太刀の出でたち。清経の霊は笛の音にひかれつつ、妻の夢の中に次第にその幻影をはっきりさせてゆく。足をふみしめてじっと佇つ。能管の旋律と動き、しじま、静止のうちにこの世とあの世の距離が次第に縮まってゆく場面である。死のフィルターから生のフィルターにかわってゆくような演出である。

× × × ×

二月になると、又、寒さがユータンしてひえ〳〵となる。昔の人は、寒さが再びかえり、急に衣を重ね着ることから、二月を、如月（きさらぎ）といった。初謡会もすみ、どの稽古場も落ちついた感じになって、ひねもすはり盤の音がさえ渡るこの頃である。

そして、ききさらぎの月は秋の夜空に眺める月と違ってするどくさえ渡っている。燈籠の荒い石肌をくっきりと浮き出させるように明るい、それは人の心を見ぬくようにするどいのである。そんな月を眺めていると、あのじょう〳〵とした音取の笛の音がきこえてくるような気がする。

能楽関係4氏が受賞

49年度芸術祭優秀賞

第二十九回（昭和四十九年度）の文化庁主催芸術祭の授賞式は一月十一日虎ノ門国立教育会館で行なわれ、能楽部門では次の諸氏に優秀賞が授与された。

芸術祭優秀賞

○観世寿夫氏　銕仙会十一月例会での能「野宮」のシテの演技

○野村万作・野村万之丞両氏　豊春会における狂言「文蔵」の演技

○能「三井寺」の間（アイ）における能「三井寺」の演技

日本能楽会会長に喜多実氏就任

社団法人日本能楽会では、昨年室生九郎会長の逝去により後任の人選がすすめられてきたが、昨年十二月二十五日理事会が開かれ、喜多流宗家喜多実氏が会長に就任

目の杖など

目の杖や、老人の杖などいろいろ

老女物の杖は上から持って先を手の上へ出さないことにしています。家元の方では上へ出していますがその代り杖の先を前へ

第十八期 第三回
青陽会能
二月二十三日（日）午前十一時始
熱田神宮能楽殿
能組
素謡　安達原　加藤保彦　長谷川章　青木武弘　地謡　高橋暸一　塚本秀雄　佐藤太俊
仕舞　敦盛　眼部紗枝　花筐　前野郁子　車僧　高橋暸一　地謡　青木武弘　久田秀雄　長谷川章
巻絹　加賀敏彦　河村鉦二　西村欽也　河村総一郎　山口亮　池田茂　藤田六郎兵衛　井上松次郎　地謡　眼部紗枝　加藤保彦　青木武弘　塚本秀雄　久田秀雄　佐藤太俊　後見　高橋暸一　柴田初太郎
遊行柳　柴田初太郎　鉄輪　柴田収武　地謡　加賀敏彦　久田秀雄　高橋暸一
羽衣　生駒美代子　高安勝久　亀山盛一　福井啓次郎　助川竜夫　鬼頭季信　地謡　佐藤太俊　柴田収武　後見　前野郁子　久田秀雄　地謡　眼部紗枝　高橋暸一　長谷川章　河村鉦二
素袍落　狂言　佐藤秀雄　井上礼之助　佐藤卯三郎
藤戸　能　塚本秀雄　高安滋郎　飯富雅介　柳原冨司忠　筧鉦一　筧三男　後見　加藤保彦　佐藤太俊　地謡　生駒美代子　前野郁子　加賀敏彦　久田秀雄　河村鉦二　柴田収武
附祝言　主催　青陽会　後援　中日新聞
次回予告　第十九期　第一回　昭和五十年六月一日（日）
頼政　久田秀雄　熊野　柴田収武
祝言　番外　仕舞　観世喜之
鷺　名古屋市中区栄五丁目四ノ十四（女子大通り）後藤能楽ビル（四階）
主催　現世九郎会

観世喜之師舞台生活七十年記念春季大会
三月二日（日）午前九時三十分開曲
熱田神宮能楽殿
番組
祝賀　番外　連吟　養老　観世喜之
素謡　神歌　加藤春二　千才　村上義夫
舞囃子　吉野天人　水谷清子　筧鉦一　柳原冨司忠　助川竜夫　鬼頭季信
旅　佐藤千代子　吉田定男　後藤孝一郎　鬼頭季信
菊慈童　水野あや子　筧鉦一　柳原冨司忠　助川竜夫　筧三男
素謡　藤戸　塚田常子　水野喬樹　塚本秀雄　曲省ク
能　花月　鈴木胡蝶　高安滋郎　筧鉦一　幸義太郎　筧三男　間　佐藤友彦
舞囃子　芦刈　田中美津子　吉田定男　柳原冨司忠　藤田昭彦
山姥　山村昌子　筧鉦一　後藤孝一郎　鬼頭喜太郎　鬼頭季信
加茂　後藤新蔵　吉田定男　後藤孝一郎　鬼頭喜太郎　藤田昭彦
素謡　安宅　義経　有賀滋子　〃　永島忠侈　山伏　佐々木勝輝　平富信義　勧進帳　伊藤睦子　五木田武計　クリ、サシ、曲省ク
能　清経　高安滋郎　吉田定男　幸義太郎　藤田昭彦　替之型
素謡　雲林院　浅井佳二　村上義夫　素謡　道成寺　芝村栄枝　観世武雄　白滝小玉　康三郎
一調　笠之段　吉田市郎　独吟　鼓之滝　矢橋浩吉　阿古屋松　伊藤次郎左エ門　仕舞　小鍛冶　増田喜男　雨月　塚田常子
舞囃子　盛久　渋谷劇子　河村総一郎　福井啓次郎　筧三男
熊野　天竺琵とも え　河村総一郎　幸義太郎　藤田六郎兵衛
花筐　後藤鈴子　河村総一郎　幸義太郎　藤田六郎兵衛
狂言歌　狩　橋本とも　井上松次郎　井上礼之助
能　葛城　西村欽也　河村総一郎　福井啓次郎　鬼頭八郎　藤田六郎兵衛　大和舞　大野弘之
間

第二十回記念
中日五流能
とき　三月三十日（日）
ところ　名古屋・栄・中日劇場

能楽先人の訓え

観世華雪芸談より

盲目の杖など

盲目の杖や、老人の杖などいろいろありますが、盲目の杖のつき方には心得があります。

それは「心」という字になるようにつくのです。左の足から歩き出しますが、まずその前に邪魔ものがないかと大きくさぐって、次に右の方を小さくチョン、チョンと二度さぐってから右足を出すので心という字になるのですが、はじめの間はなかなかそううまくつけませんこと、手、杖と方々に気をくばらねばなりませんから。めくらのくせに杖が邪魔になるのでは困りますからね、どこまでも自然に見えなければいけません。

「弱法師」の「貴賤の人にゆきあいの……」など、ああいうところまでくれば杖はもう乱れてもよいことになっています。

盲の杖には「弱法師」「蝉丸」「景清」の三つがあります。「景清」はちょっとついて出るだけですがそれでも「心」の気持ちが入っていなければいけません。

老女物の杖は上から持って先を手の上へ出さないことにしています。家元の方では上へ出していますがその代り杖の先を前へ斜めに出しています。それぞれ自分の背の高さとつり合う長さにすることはいずれも変りません。

一般の杖の長さは、普通「養老」や「忠度」などに出る老人のは自分の乳の高さで盲目のものはそれより一寸五分長くします。老女物では少し短かめに作って短かめにつく、と型附にもあります。

同じ杖をつくものでも、普通の老人のものは杖を余りたよりにはいたしません。左足を出し、右足を出す時、一緒に杖を持ち上げて、左右の間につくのが丁度よろしいのです。老女の時は反対で、右を出すまではじっと杖を持ったまま杖にたよっている気持で、足先をつける時に杖をあげて左右の足の間におくことになっていますが、こうすることによって両足とも杖にたよっているように見えます。又普通の老人ものでは杖の下の方を引きつけるようにしますがこれを余り前の方へ出しますと、あんまさんのようになるのでよく注意しなければなりません。

見ていて何となくすっきりしているのは分けてみると皆それぞれ型があるものです。「砧」などの幽霊は杖をたよりにするというものではなく、形の上だけで杖を使うものですから別にこれということもありません。

しかし「盲目」は同じ盲目でも水の上という心持がありまして少し浮かしにしなければなりません。こうして同じ杖をつくのでもいろいろと変っているのです。

無本と見本

お素人の方に

「本をみるな」

ということは無理でしょうが、私どもの無本にはそれ相当の理由があるのです。

能の場合や仕舞の地等から考えますと当然のことでありますが、頭にすっかり入れてしまわないとには気分は出ないものです。

役者は科白を覚えますが、その覚えたものを一旦捨ててしまって、自分の言葉として口に出せと教えられています。例えば吉右衛門が清正の科白を覚えこんでしまいますね、そしてこの科白が、自分が清正の役をつとめるために覚えたものであることを忘れてしまって、自分自身清正になりきって語るということです。

能でも同じことが言えます。私なら私が「熊野」の文を読むのではなく、熊野その人が文を読まねば気分が出ません。ですから本にたよっていてはいつまでたっても華雪が謡っていることになるので、どうしても無本でなければならないということになります。

故橋岡久太郎師追善別会能

3月9日　熱田能楽殿で

観世流シテ方故橋岡久太郎師の十三回忌追善別会能が名古屋橋岡会の主催で、三月九日熱田神宮能楽殿で催される。（番組本紙③面に掲載）

故橋岡久太郎師は、能楽界として九人目の芸術院会員、昭和三十四年度芸術祭優秀賞受賞、昭和三十五年芸術院賞受賞。

能組は、橋岡久馬師の「大原御幸」久太郎氏孫の久春君が「天鼓・小書弄鼓之舞」その弟佐喜男君（六歳）の「合浦」、狂言「悪太郎」（井上松次郎師ほか）舞囃子仕舞など十番、宝生流辰巳孝、内藤泰二師らも出演。

なお東京では二月九日東京観世能楽堂で追善能が催された。

大阪文化祭で久保田千三郎氏受賞

大阪府教育委員会、大阪市教育委員会の共催による昭和四十九年度大阪文化祭の受賞者がこのほど発表され、能楽関係では、十一月十二日、大阪能楽観賞会での「井筒」のワキを演じた福王流ワキ方久保田千三郎氏が受賞された。なおシテは観世静夫師。

2月・3月放送予定

◆NHKラジオ第一放送（毎週土曜日午後6時5分）

〔2月〕
15日（土）宝生流「来殿」「羅生門」三川泉ほか
22日（土）金春流「野守」豊嶋弥左衛門ほか

〔3月〕
1日（土）観世流「鞍馬天狗」観世静夫ほか
8日（土）観世流「小塩」山階信弘ほか
95日（土）宝生流「綾鼓」宝生英雄ほか
22日（土）観世流「安宅」木原康次ほか
29日（土）宝生流「船弁慶」大坪十寿雄ほか

◆NHK・FM毎週日曜日（午前7時15分）

〔2月〕変異物シリーズ
16日（日）金剛流「野守」豊嶋弥左衛門ほか
23日（日）観世流「歌占」上野朝太郎ほか

〔3月〕
2日（日）金剛流「春日龍神」奥野達也ほか
和泉流狂言「鬼瓦」和田喜太郎ほか
9日（日）観世流「一角仙人」藤波重和「嵐山」観世武雄
16日（日）一調・独吟集「鐵通」「景清」観世喜之ほか
23日（日）独吟・狂言集「玉之段」梅若六郎ほか
30日（日）宝生流「道成寺」波吉信和

第十九期　第一回
昭和五十年六月一日（日）

能　頼政　久田秀雄
能　熊野　柴田収武
能　小鍛冶　大槻文蔵

（番組③面につづく）

第二十回記念
中日五流能

とき　三月三十日（日）
ところ　名古屋・栄・中日劇場

第一部（午前十時開演）

能　葛城　橋本とも
西村欽也　河村綜一郎　福井啓次郎　鬼頭八郎　藤田六郎兵衛
間　大和舞　大野弘之

寄多流能　竹生島　長田松井　後藤得三　高安滋郎　高安勝久　西村欽也　渡部晴義　鵜沢寿　金春惣右衛門　藤田大五郎
間　能村英丘
和泉流狂言　鐘の音　野村万蔵　野村又三郎
観世流能　班女　宝生弥一　安福春雄　崔之伝　宜佳　藤田大五郎
間　野口敦弘　森常好　野村又三郎
金春流能　望月　金春惣右衛門　徳嵩光洋　本田信高　金春実　江崎金治郎　佐伯修一　大倉長十郎　森田光春
間　古式
附祝言　茂山千之丞

第二部（午後四時開演）

宝生流能　巻絹　本間英孝　宝生英雄　宝生弥一　渡部晴義　大倉長十郎　金春惣右衛門　藤田六郎兵衛
間　イロエ　茂山あきら
大蔵流狂言　縄綯　茂山千作　茂山千之丞　茂山あきら
一調一管　芭蕉　金剛巌　曽和博朗　杉市太郎
観世流能　草子洗小町　梅若猶弘　梅若茂基　梅若宜雅　梅若善高　梅若修一　梅若盛淺　梅若景英　梅若六郎　松本謹三　安福春雄　鵜沢寿　森田光春
間　替装束　彩色　茂山千作
金剛流能　綾鼓　豊嶋三千春　豊嶋弥左衛門
間　替之型　茂山千之丞
附祝言

◉来場歓迎
先着三百名様に（引換券二枚）粗菓呈上

主催　観世喜之
補導　観世武雄
外門下一同

故橋岡久太郎十三回忌追善別会能

三月九日（日）午前十一時半始
熱田神宮能楽殿

能　合浦　橋岡佐喜男
間　高安勝久　井上礼之助　佐藤秀雄　後藤孝一郎　筧鉱一　鬼頭好信　筧三男
狂言　悪太郎　井上松次郎　佐藤友彦　大野弘之

能　大原御幸　高安滋郎　安福建雄　福井啓次郎　鬼頭季信
舞囃子　岡田朗録　安福建雄　福井良久　鬼頭八郎　藤田六郎兵衛
仕舞　籠　内藤泰二　眼部紗枝　海人　泉泰孝　鵜飼　殿島修二　融

舞囃子　坂井音次郎　筧鉱一　後藤孝一郎　通小町　山口義郎　筧鉱一　柳原冨司忠　鬼頭季信　山姥　藤田六郎兵衛
仕舞　俊成忠度　水藤元三　西行桜　杉村竹翠　巴　柴田収武

前　鈴木一雄　橋岡久春
能　天鼓　西村欽也　吉田定男　久田舜一郎　三島元太郎　藤田昭彦
弄鼓之楽
追加（午後六時五十分終演）

会費（税込）指定席
特Ⅱ三、五〇〇円
甲Ⅱ二、五〇〇円
乙Ⅱ一、五〇〇円
学生Ⅱ　八〇〇円

主催　名古屋橋岡会
後援　中日新聞

お申込所　熱田神宮能楽殿（電話六七一―二九一三番）および出演各楽師宅

一部料金（全部指定席）
特別席　四、〇〇〇円
A席　三、三〇〇円
B席　二、八〇〇円
C席　一、三〇〇円

主催　中日新聞本社

本紙前号既報のように初代金剛巌師二十五回忌追善能が三月二十三日、京都・金剛能楽堂で催される。番組は次のとおりである。

初代 金剛巌二十五回忌追善能

三月二十三日（日）十二時始曲
室町通四条上ル　金剛能楽堂

百萬
舞囃子　豊嶋弥左衛門
仕舞　谷口喜代三　曽和博朗　小寺俊三　杉市太郎
雨月　豊嶋豊
通小町　奥野達也

安宅
立ノ型ノ流儀
子　廣田泰能　松野恭憲　重本昌三　今井清隆　谷口宗義　豊嶋三千春　廣田泰三
金剛永謹
岡治郎右衛門　安福春雄　幸円次郎　貞光義次
能　瀧延年之舞　茂山良暮　茂山忠三郎
仕舞　盛　片山博太郎　能　喜多長世　花　金春信高　藤戸

武悪
狂言　茂山千作　茂山千之丞　茂山正義
仕舞　巴　鵜田道雄　霊林院　廣田陸一　玉之段　今井幾三郎　野守　鵜田治郎

道成寺
能　金剛巌　谷田宗二朗　高安滋郎　大倉長十郎　晴蔵　森田光春
古式　茂山千五郎　茂山あきら
間　後見　豊嶋弥左衛門　豊嶋　廣田泰三　地謡　谷口重本　豊嶋三千春　今井清隆　宇高通成　畠山宗義　掛川季之輔　今井幾三郎　梅田道雄　名取正次郎　村田嘉也
鐘後見　松野恭憲　金剛永謹　豊嶋謹三　豊嶋一寸　豊嶋敬三郎　廣田幸稔　鵜田道一
追加

指定席券　五、〇〇〇円
自由席券　三、〇〇〇円
学生券　一、五〇〇円
取扱——金剛能楽堂・桧書店・出演楽師方

主催　金剛巌　金剛会

史跡随想　毛替り地蔵尊と熊坂

高安滋郎

わたくしの家から一キロほど東の[redacted]天白町島田に、「島田地蔵寺」という寺があり、そこに「毛替り地蔵尊」が安置されている。このお地蔵様は西暦九四二年頃（平安朝後期）、朱雀天皇の天慶年間に恵心の僧都源信和尚の作で、丈六座像、霊験もあらたかとのことで、八月二十四日の地蔵盆には、境内に露店が出て、交通整理に警官が出動するほどの賑いをみせる。

このお地蔵様を、毛替り地蔵と呼ぶのは、昔、承安年間（西暦一一七一年）加賀の生れで有名な大盗賊・熊坂長範が、美濃、尾張をうろつき宿場の伝馬を盗んでは駆にかくし、この地蔵様に「馬の毛を替え給え」と念じると、アラ不思議や、一夜のうちに白馬は黒馬となり、黒馬が白馬と替るので、盗みも露見せずそ知らぬ顔で売ることが出来た、と寺の縁起録にある。

それにちなんで、女性が頭髪の色をかえてもらいたいと念じた。現今では、茶褐色のウェーブのあるのが良いとされているようだが、その頃は髪は烏の濡羽色で、クセのないスラリとした黒髪が最も良いとされていたのでクセ毛の女性や赤毛の女性は、このお地蔵様に念願したものといわれる。

私の老母も、幼いころ祖父に伴なわれて、随分と遠い道を歩いて参詣したという。

さて、熊坂長範は、伯父の馬を盗んで売り、楽々と妻子を養うほど面白いことはないと、ついに常習犯となったが、盗みの初めはこのことであった、と能楽「熊坂」の中入（前・後段のつなぎ）に狂言が行なう間語（あいがたり）に語られているほどだから事実であったようだ。

「熊坂」の能の中では、美濃赤坂の宿場で三条の吉次信高を襲い、奥州へ下る高荷の財宝を奪おうとして、一行の中にいた牛若丸に散々に討ち敗け、ついに亡びた、となっているが、寺の縁起録には——長範が盗んだ馬を売ったことは

熱田のスケッチ（二井宗雄画）

仕舞十番が予定されている。

なお、熱田神宮能楽殿運営委員会委員長、熱田神宮権宮司・長谷晴男氏は一月三日能楽協会名古屋

◆読者通信◆

心の伝承

観世誌　関山和夫氏の一文を読んで

観世誌十月号「伝統芸術と能」の関山和夫氏筆「心と伝承」を拝読致しまして真に感銘を受け、道一筋に生きる方の芸に対する心の大切と尊さを痛切に知り、これからの若い方が能に謡に、精進される基礎とされん事を願ってその要点を引用致します。

梅若六郎先生、吉住小三郎氏の新春清談（ラジオ放送）にも「最近若い人が能をやりたい。謡がやりたい。と言って新しく入門を希望する方が非常に増えて参りましたが、すべて入門前に能をよく研究して、驚くほどの「能」を鑑賞していられ、かなり深い知識をもっていられる。頭で「能」「謡」「仕舞」等を学び覚えようとする。心と身体で覚えようとしない」……

とりあえず能をやってみよう。駄目だったら他の道？という軽薄な考えで入門を希望してくるときは善にも強しの諺の如く、その資金を貧人にほどこし善根をなしその恩義を受けたるもの、また数を知らず、とあり、のち高野山に登り深く剃髪を立て、仏門に入って身を終った、ということになっている。

現在の島田地蔵寺の称号も長範がお地蔵様の近くに庵を作って盗んだ馬を入れ、毛替りを念じていたことで、天正三年に古庵山（こまやさん）地蔵寺と改められた、と寺の記録にあり今も本堂の棟瓦に古庵山の山号が残されている。熊坂ゆかりの寺として、能楽史にある貴重なる存在と思い、ここにご紹介した次第である。

寺縁起録など貴重な資料をご説明いただいた現二十八代住職・神野賢隆師のご協力に厚く感謝申しあげる。

（能楽高安流十三世宗家）

（写真㊤毛替地蔵大菩薩の碑
㊦毛替地蔵尊＝いずれも筆者撮影）

＝CBCクラブ通信欄より＝

現代の若者たちの行為を梅若六郎師は嘆かれている。新らしいと言う事は、古いものが最高のみすみずしさで現代人に迫ることで有ります。能の正しい伝承を健全な技術の上にかけて、しかも品格をもって現代及び未来に生きること。それでこそ能の真価は発揮され魂の入った「能」が上演出来得ます。若い時に心と体で修得。覚えた芸は晩年に成っても決して忘れる事が無い、尊さが有ります。

若い時代に弟子の道を歩んだ小生も予想以上の稽古の厳しさに何度親元に逃げようと思ったか知れない。そのとき「一人前に成る迄決して再び我が家の敷居をまたがせないぞ解ったか。」父の門出の一言が思い出され一人枕を涙でぬらしたことが有りました。

師と弟子との厳しき心の修業には特に終戦後の若い方には想像出来得ない真剣の毎日で有りました。いかなる苦しみにも耐え抜く強い精神力が要求されて其の道一筋に生きる為の修業が課せられました。大勢の方が入門されてもう少しの修業、今一歩のがんばりの努力の欠如が生じて落伍される方が有りました。師は愛する弟子を前にして「本気で勉強せよ」根生。忍耐。をまごころ込めて叩き込まれた昔の書生の頃を想い出して今更の如く師の面影が浮かんで参ります。特に関山和夫先生の談話を拝聴致しまして、感激無筆無学をも顧みず、これから「能」に「仕舞」に「謡」に入門される方に少しでもこの一文が参考に成りましたら真に幸いと思います。

斯の道の深さ、精進のむつかしさを肝に銘じて参りました大正、昭和と五十年昔の想い出と、「成せばなる。何事も。成さぬは人の成さぬなり」をよく理解していただいて一人でも多くの伝統有る能楽の志を立てて、修業中の若い方が大成されて檜舞台を勤めていただきたいと念願してやみません。

（寺山区・佐野直治）

戸田秀雄氏逝去

宝生流職分・戸田秀雄氏（愛知県愛知郡東郷町和合ケ丘二ノ一一ノ五）は二月六日午前十一時五十分、脳出血のため東郷診療所にて逝去された。享年六十五歳

告別式は八日昭和区南山町・南山カトリック教会で執り行われた。喪主は妻和さん。

第十七代宗家　宝生九郎著　全八巻
宝生流囃子仕舞全集
宝生流の囃子・仕舞の稽古・独習に欠かせないテキストです。
謡本文（スミ色）に型どころ（朱色）を記入してあります。曲目五十音順
価格各　4.000円
東京都千代田区神田神保町3—9　電話（263）8771　わんや書店　東京都中央区銀座8—7—5　電話（571）0514

割烹・小料理　城
● 熱田神宮能楽殿喫茶部
● 住吉小路（中区栄3—10）電話 241—0248
● 喫茶・グリル（愛労群地下ビル）電話 731—1128

欧風料理　とんかつ　とん亭
名古屋市千種区大久手町4-11　TEL731-3680

エンゲージリング
山田宝石
貴金属・時計・装飾品
名古屋・本山駅
電 762―2434代表

能樂の友

題字は熱田神宮 篠田宮司筆

発行　能楽の友社
名古屋市千種区吹上本町2―20
（郵便番号 464）
電話（731）7984
振替口座 名古屋 36393
購読料 1年 500円
郵送の場合 1年 600円
一部 40円

◈演能カレンダー◈
（熱田神宮 能楽殿）

〔3月〕
- 15日（土）青少年のための芸術劇場　（有料）
- 16日（日）大蔵狂言会
- 21日（祭）武田謡楽会春季大会　（来聴歓迎）
- 23日（日）名古屋淡交会 主催 故橋岡久太郎師十三回忌追善能　（来聴歓迎）

〔4月〕
- 6日（日）龍吟会　（来聴歓迎）
- 13日（日）観世会定式能　（有料）（番組②面掲載）
- 27日（日）清韻会能　（有料）（番組②面掲載）
- 29日（日）幸友会春の大会　（来聴歓迎）

〔5月〕
- 3日（日）流友大会　（来聴歓迎）
- 5日（祭）巽会春の大会　（来聴歓迎）
- 10日（土）観世九皐会定式能　（有料）
- 11日（日）邦謡会春の大会　（来聴歓迎）
- 18日（日）猶諷会　（来聴歓迎）
- 24日（土）一謡会叶石会　（来聴歓迎）
- 25日（日）山本観衛会　（来聴歓迎）

（演能変更の節はご了解下さい）

4月27日 清韻会能
5月3日 観世流流友大会
春の熱田神宮能楽殿

熱田神宮能楽殿の春の演能は、お中日の三月二十一日、武田謡楽会が武田小兵衛古稀記念春季大会、続いて二十三日（日）名古屋淡交会主催による故橋岡久太郎師十三回忌追善能が催される。

武田謡楽会春季大会は、能「東北」（シテ池田菊雄氏）「猩々」（武田小兵衛師）の二番。素謡「弱法師」「葵上」など。

名古屋淡交会の追善能は、能「忠度」（シテ伊藤長八氏）「隅田川」（シテ瀬戸綾子さん）さらに素謡「鸚鵡小町」「砧」「安宅」の重曲をそろえ社中の研鑚を発表。（番組いずれも①面掲載）

四月は観世会定式能（十三日）梅若万三郎師の「半蔀」藤井久雄師の「鞍馬天狗」素謡「経正」ほか狂言、仕舞。

二十七日は清韻会能「巻絹」（殿島修二師）「頼政」（泉嘉夫師）「船弁慶」（大槻文蔵師）の能三番が上演される。

五月は観世流各社中による「流友大会」（三日）にはじまる。この流友大会は、本年ですでに三回目を迎えることになり、流友交流の催しとして恒例の行事となってきた。

各社中の連合的な催しではあるが、素謡、仕舞など発表の場としての期待も高まり、舞囃子も加えられるプランもある。

十日には、昨年からはじめられた名古屋観世九皐会定式能の本年度初回、能「放下僧」（観世喜之師）「蝉丸」（小島芳雄、吉田妙両師）「葛城」（高木美智子師）の能三番を上演、つづいて邦謡会猶諷会、一謡会、叶石会、山本観衛会など観世流各社中の大会でにぎわう。

東京　水道橋能楽堂再建25周年
宝生会記念能

社団法人宝生会では、東京・水道橋能楽堂が戦後に再建されて二十五周年にあたるので、三月二十一日から三日間、水道橋能楽堂で宝生流在京職分総出演により記念能を催す。

記念能の初日、初番の「高砂・小書翁なし」（シテ野口禄久、ワキ宝生閑）で昭和二十五年以来はじめての演出。宗家宝生英雄師の「安宅・延年之舞・貝附貝立」二日目は「道成寺」（シテ前田晴啓）ほか能三番、三日目は「三笑」（高橋進）「草子洗」（大坪十喜雄）「夜討曽我」（宝生英照、三川泉）「石橋」（渡辺三郎ほか）の四番立。

流儀最長老の近藤乾三、武田光雲両師は独吟、狂言は初日、三日目が大蔵流、二日目が和泉流、なかでも三宅藤九郎師の「見物左衛門」は独狂言で意欲的な上演である。

武田小兵衛師古稀記念 武田謡楽会春季大会
三月二十一日（祝）午前九時半始　熱田神宮能楽殿

- 神歌　武田欣司　武田邦弘
- 狂言 戎大黒　井上松次郎　大塚幸二　佐藤卯三郎　井上礼之助
- 田村　相墨純二　津谷清　柘植達之
- 橋弁慶　子方 川村光雄　トモ 亀井順一　玉井直仁
- 船弁慶　子方 川村淳　林留三
- 舞囃子
  - 清経　鬼沢清治　筧鉱一　柳原冨司忠　藤田昭彦
  - 吉野天人　辻本三郎　筧鉱一　柳原冨司忠　鬼頭喜太郎　藤田昭彦
  - 唐船　亀井順一　筧鉱一　柳原冨司忠　鬼頭喜太郎　藤田昭彦
- 仕舞
  - 田村　小牧大助
  - 鞍馬天狗　原敬
  - 弱法師　小川沢次　屋島　棹本秀樹　吉田達雄
- 番外仕舞
  - 通盛　佐藤太俊
  - 番外独吟 鮎之段　林甲子生　夕顔　河村鉦二
- 養老　上野典子　筧鉱一　柳原冨司忠　鬼頭喜太郎　藤田昭彦
- 熊野　高木義信　筧鉱一　柳原冨司忠　藤田六郎兵衛
- 村雨留　今村香　筧鉱一　柳原冨司忠　鬼頭喜太郎　藤田昭彦
- 融 五段　松風　柳田文子
- 胡蝶　横川政子
- 羽衣キリ　石塚重子
- 能楽
- 東北　池田菊雄　西村欽也　筧鉱一　福井啓次郎　藤田六郎兵衛
- 間　佐藤秀雄
- 笠之段　大塚幸二　蝉丸　佐々木信幸
- 天鼓　細川玖治
- 安宅　大井光明　吉田定男　福井啓次郎　藤田昭彦
- 山姥　小林秀吉　吉田定男　福井啓次郎　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛
- 葵上　上野典子　岡田浩二
- 番外仕舞
  - 弓八幡　橋本碩道　鈴木信男　佐々木信幸
  - 采女キリ　古橋正士　俊成忠度キリ　武田邦弘
  - 船橋　武田欣司　柏崎キリ　梅田邦久
- 猩々　武田小兵衛　西村欽也　吉田定男　福井啓次郎　鬼頭喜太郎　藤田昭彦

御来場歓迎（入場無料）
粗茶進呈

主催　武田謡楽会　武田小兵衛
後援　武田欣司　武田邦弘　中日新聞

日本芸術院会員 故橋岡久太郎師十三回忌追善能
三月二十三日（日）午前十時始　熱田神宮能楽殿

番組
- 番外仕舞 海士　橋岡久共　越川忠士　下田雄三　浅井定義　中村和男
- 狂言 腹不立　佐藤卯三郎　井上礼之助　井上松次郎
- 独吟 吉野天人　野田広司
- 連吟 蝉丸　長渕久美子　加藤八千代　千早光子　早川功一　伊藤謙太郎　松井久子
- 仕舞
  - 芦刈　佐藤淑子
  - 玉鬘　武田ナナ子
  - 東北　西尾伯子
  - 車之段　庄武志花子
- 素謡 砧　丹羽弥彦子　丹羽弥元　谷村一太郎
- 能 忠度　伊藤長八　高安勝久　筧鉱一　後藤孝一郎　筧三男
- 間　佐藤秀雄
- 独吟 西行桜　松浦喜代一
- 舞囃子
  - 熊野　芝義美
  - 養老　笹墨水　筧鉱一　後藤孝一郎　鬼頭喜太郎　筧三男
- 水波之伝　森徳子　橋岡久共
- 特番 鸚鵡小町　同子方 佐藤四郎 大浜孝子 早川良 小川久夫 古井将雄 篠原真次 加藤孝長 同山
- 舞囃子 安宅　西尾三千男　伊藤篤
- 披曲 卒都婆小町　森すずゑ　吉田定男　福井啓次郎　藤田昭彦
- 羽衣　丹羽弥彦子　吉田定男　福井啓次郎　鬼頭八郎　藤田昭彦
- 独吟 松風　文堂恒一郎
- 能 隅田川　瀬戸綾子　子方 梅田敦津子　西村欽也　飯富雅介　吉田定男　福井啓次郎　鬼頭季信

主催　名古屋淡交会
事務所　名古屋市守山区小幡字北山二七五八―一二八（翠松園）丹羽弥元方　電話七九三―八三五五
後援　中日新聞

能紀行

烏手（からすで）

絵と文　二井栄逸

（50）

窓辺の竹をそよがせて春一番が吹き過ぎたのは一昨日であった。沈丁花のつぼみはふくらみ、蕗のとうも、さみどりの頭をもたげ、もう春はすぐそばにきているのでもあろうが、みなみ風の吹いた後には、必ず寒い日がやってくる。冬の名残というやつである。こんな時には、画室の膠もすぐ凍ってしまう。暖房の温度を上げればよいのだけれど、あついのはきらいなたちなので、外気の温度とはほんの三、四度違えるだけにしている。

今、私をとりまく絵具皿は紫の色で一ぱい。昨年の暮あたりから妙に紫に拘泥してしまって、稽古と舞台の無い日は紫の色づくりをしていた始末。私は、ブルーや紫が好きなので、自然作品にもブルーや紫をよく使うようである。特に紫という色はむづかしいが何となく心をひかれ、苦労しながらも使ってしまう。

そんな紫の色づくりに苦労をしていたとないだ、大阪で式能があり、流儀からは和島富太郎師の「経政」の烏手（からすで）が上演され、其の時、つけられた紫の大口が私の求めていたしぶみのきいた紫であったので、舞台から大急ぎで家に帰り、紫の色合わせをやってみた。数度絵絹の上に色々な絵具をかけ合せて見て、あの舞台で見る匂うような紫が出たような気がして、一応紫の色づくりを終わることにした。

さて、式能のことであるが、式能というのは公式能のことで、五流の宗家によって、鈎つき五番立て各曲の間に狂言を一番ずつ入れた能で一日かゝる大がゝりな能しである。徳川幕府時代には最大の行事であったらしい。将軍宣下、官位の昇進、婚儀、世子誕生等の時には江戸城本丸の舞台で、この大がゝりな能が催されたのである。

現在、東京でも式能が毎年行われているし、大阪でも、府の助成公演として毎年行われることになったのは何よりのことである。その大阪式能で上演された「経政」の烏手という小書は喜多流のみにある小書で、常よりは静かな初同一ぱいに出て、笛の奏する烏手の謂をじっくり聴く型がある。

面（おもて）も常の時は、敦盛と同じように十六（じゅうろく）をかけるが、烏手になると中将になり、長絹は白地、大口は紫になる。紫は紺に近い位の紫であったが、舞台上では匂うように濃淡がつき、浅黄に見えるところさえあった。そのむらさきは、白の長絹と中将によく調和して、舞台上にいかにも平家の公達らしい哀愁と華麗さをたゞよわせていた。

それは勿論、稀にみる底深さと迫力を秘めた和島師の円熟した芸域なるが故の感動であろうが、何はともあれ、素晴しい能だったのである。

（絵は和島師の「経政」）

広田後援会能

4月13日　金剛能楽堂

京都

金剛流・広田陞一師、広田泰三師の広田後援会では、四月十三日（日）、金剛能楽堂で第四十四回、昭和五十年度春期後援会能を開催する。

番組は、能「加茂・小書替装束」シテ廣田陞一、ツレ谷口宗義、同広田華稔、ワキ岡治郎右衛門、間茂山真吾ほか。

小書替装束では、後シテが常は狩衣であるが、この小書では狩衣の上に鬼次を着用し、後ツレも天女と違い御祖の神とて長絹を舞衣に替える。

能「隅田川」シテ廣田泰三、子方廣田泰能、ワキ谷田宗二朗、後見金剛巌、地謡今井幾三郎ほか。

狂言「無布施経」茂山千作、佐々木千吉

開演午後一時半。

なお秋の会は十月十二日（日）能「俊寛」（廣田陞一）「阿漕」（廣田泰三）の予定。

龍吟会囃子会

四月六日（日）

熱田神宮能楽殿

観世会定式能

五十年度第二回

四月十三日（日）十二時三十分

熱田神宮能楽殿

能組

楽謡

経正　熊沢恵美子　高木美智子　地謡　吉田　有賀　加藤　滋　良枝　久子　妙

仕舞

敦盛　杉村竹翠

杜若　歳島修二　地謡　青木　佐藤　塚本　長谷川　武　太　秀雄　俊弘　章

半部　梅若万三郎　西村欽也　吉田定男　福井啓次郎　笈三男

間　佐藤友彦

後見　小島一英　梅若万佐晴　地謡　後藤　岡田　加藤　真柄　契光　松　兵衛　米次　林甲子生　藤井徳三　梅若万紀夫　殿島修二　柴田収　藤井武　瀬完治　高野透

仕舞

難波　藤井徳三

三輪　梅若万佐晴

昭君　梅若万紀夫　地謡

狂言

花盗人　佐藤秀雄　佐藤卯三郎

鞍馬天狗　白頭　高安滋郎　笈一鉱　後藤孝一郎　鬼頭八郎　藤田昭彦

間　井上松次郎　大野弘之

後見　杉村竹翠　梅若万紀夫　地謡　犬飼　武田　佐藤　河村　宋吉　邦弘　太　鉦二　後　塚本　藤井　藤田　秀雄　完治　徳三　邦久

花見　花見　後見　高橋　藤井　克行　河合　靖久　雄一郎　清司　片山　牛若　藤井久雄

附祝言

主催　名古屋観世会

清韻会能

四月二十七日（日）午前十一時開演

熱田神宮能楽殿

能

巻絹　水田　殿島　博　修二　高安滋郎　吉田定男　福井啓次郎　助川竜夫　藤田昭彦

神楽留

間　佐藤卯三郎

泉　嘉夫

頼政　西村欽也　笈一鉱　後藤孝一郎　藤田六郎兵衛

間　佐藤友彦

船弁慶　竹澗　大槻　浩之　文蔵　高安滋郎　笈一鉱　後藤孝一郎　鬼頭喜太郎　笈三男

重前後替　高安勝久

間　大野弘之

会員券申込所
能楽殿又は出演楽師宅
A席　二、八〇〇円
B席　二、〇〇〇円
学生席　一、〇〇〇円

主催　大槻清韻会

後援　中日新聞

中部金剛会

本年度予定

○熱田祭能　六月五日（木）　熱田能楽殿

○中部金剛会演能会　六月二十一日（土）　午後一時始　於熱田能楽殿

能　経正　日比野圭昭

能　杜若　吉川周子

能　夜討曽我　豊嶋三千春

○名古屋新能　八月二日（土）　於熱田神宮

舞囃子　鉄輪　菊川憲三

○熱田福宮能楽殿建設二十周年記念会　八月二十四日（日）　於熱田神宮能楽殿

仕舞　笠之段　日比野圭昭

○大衆能　九月七日（日）　於愛知文化講堂

能　枕慈童　豊嶋三千春

○故山田仁三郎師追善能　十月二十六日（日）午後一時　於熱田神宮能楽殿

能　経正　百々康治

能　雪　豊嶋弥左衛門

能　融　金剛巌

○歳末義捐金募集能　十二月七日（日）　於熱田神宮能楽殿

舞囃子　羽衣　水谷泰典

一期間九カ月間、本年十二月中旬卒業予定。

金剛流宗家より免状、京都新聞社より修了証書授与

講師＝金剛流職分廣田陞一師、準職分掛川昭二師ほか

○○円）▽特製習物一番本（準九番習・九番習）八〇〇円（旧定価六五〇円）▽特製習物一番本（重習）八〇〇円（旧定価七〇〇円）▽百番集（特製）八〇〇〇円（旧定価六五〇〇円）▽百番集（並製）七七〇〇円（旧定価六

和泉流、大蔵流狂言

カナダ、アメリカで公演

え

陰陽と言葉のはこび

③

ら下にとまります。

例をあげますと「七騎落」でワキの和田を見つけてのシテが、「和田は内々申し合せたることの候間、只今参りて候、さりながらまづ謀って心を見うずるにて候」などがものです。

それから「石橋」の獅子に限って面の紐が二本あることを御存知の方は少ないと思います。これは舞台であばれるものですから、万一切れた時の用意からで、面の耳に

能楽先人の訓え ③

観世華雪芸談より

陰陽と言葉のはこび

先代梅若実がよく「陰陽は自然にある」と申しておりました。

お囃子の座順はそのためにきまっています。一番先に座る笛は陽で、次の膝をかける小鼓が陰、その次の大鼓が陽、最後に座る太鼓が陽にあたります。その中で、大・小が主で陽である大鼓が、陰の数を表わす二ツを打ち、その反対に陰の小鼓は陽数の三ツを打ちますが、このように必ず陽の中には陰、陰の中に陽をもつのが自然の法則にかなっていることになります。

例えば「隅田川」のキリ、これはずっと陰ですが、陰に謡いますと、めいってしまってあまりにも陰気になるので、少し調子を高めて陽に謡うようにします。この方が謡そのものも大変すっきりといたします。

静かなものがどこまでも静かであるばかりでは面白くないものでこの陰陽の変化があってこそ、はじめて謡と言えましょう。

老女物など静かなものですから、これは勿論陰ですが、かなに運びをつけると、これが陽になって、聞く人に単調さを感じさせないことになるのです。この運びをつけるというのは決して急ぐことではありません。一寸言葉では表わせませんが、長い年月をかけて、自然に感じとることが出来るものです。

はこびは節だけでなく、言葉にもあります。言葉のはこびは節以上に難かしいもので息のつめ方、止め方、ゴマ迄の前は早い目にとか、句切り以下は走る、といったことも唯その通りにきまってしまうと全然趣きがありません。すべてきまりどおりにはゆかない、というよりむしろやらないところが面白いので、謡う曲目によって自ら違うのが普通です。たとえばひとり言をいう調子、これは自分の胸の中で思うことですから下にとまります。

例をあげますと「七騎落」でワキの和田を見つけてのシテが、「和田は内々申し合せたることの候間、只今参りて候、さりながらまづ謀って心を見うずるにて候」などがそれに当ります。又この言葉につづいての「いかに和田殿へ申し候、これまでの御参りめでとう候」は和田にいい聞かすのですから、当然謡子が違ってくる訳で、言葉の扱い方はなかなかむつかしいものでありますが、又それだけに味わい深いものでもあります。

面のこと

「石橋」にかけます獅子や、「小鍛冶」の飛出（とびで）などは大きな目玉があいてはいますが、その割に前が見えにくいものです。それは、赤頭なり、白頭をかぶっていますからその毛が厳いかぶさって前が見えないのです。それも昔の毛はシャンとしていてまだよかったのですが、近頃のはグンナリしていてどうもいけません。

また、これらの面はつけます時に自分の目と高さを合わせると、あごが出ますのでどうしても下がりめにかけますから、目からは何も見えないことになってしまいますでもよくしたもので、このような荒いものの面は鼻が大層大きくて、その鼻の孔から舞台を見ることが出来るのです。尤も、こういったことは実際に経験した方でなければわからないものでしょうが、一寸面白いものです。

それから「石橋」の獅子に限って面の紐が二本あることを御存知の方は少ないと思います。これは舞台であばれるものですから、万一切れた時の用意からで、面の耳に二つ穴があけてあります。しかし作者の関係で一つしかあけていないのもありますがそれでも必ずこの一つに二本の紐を通すことが心得になっております。

又、この耳はどの面にもあるというものではありません。先程の獅子や飛出、それに天狗ものの大べし見（おおべしみ）般若（はんにゃ）等の強いものから老人のもの等はありますが、女物は総て耳なしです。そして「弱法師」や「蝉丸」など盲目のもの、公達ものの十六や、中将等温雅なもの、又老人でも「翁」のような柔和なものには皆ありません。

この耳に小はぜをつけて面紐を通すのですが、優しいものは只紐を通すだけであります。

その紐は「翁」は白、尉は茶、男物は総て黒紐で、女物も黒を使っています。もっとも他流ではシテの女面を紫にしているのもあります。

荒いものは皆黒紐かと思うとそうではなくて、白頭のものには白、赤頭には赤、黒頭の時は黒となっていまして、何でもないことのようですが、このように少しでも気を配らねばならぬことが能の一つの道で、馬鹿らしいなどといってはいけないことで私などへの戒めのためにも、実によく考えたもの、といつも感心しております。

3月・4月放送予定

◈ NHKラジオ第一放送（毎週土曜日午後6時5分）

〔3月〕

22日（土）観世流「安　宅」　木原康次ほか
29日（土）宝生流「船弁慶」　大坪十喜雄ほか

〔4月〕

5日（土）喜多流「櫻　川」　友枝喜久夫ほか
12日（土）宝生流「志　賀」　大坪十喜雄ほか
19日（土）観世流「熊　野」　梅若万三郎ほか
26日（土）観世流「西行桜」　武田太加志ほか

◈ NHK・FM 毎週日曜日（午前7時15分）

〔3月〕

16日（日）一調・独吟集「蟻通」「景清」観世喜之ほか
23日（日）独吟・狂言集「玉之段」　梅若六郎ほか
30日（日）宝生流「道成寺」　波吉信和
　　宝生流「吉野静」　佐野　崩

〔4月〕（花シリーズ）

6日（日）観世流「西行桜」　武田太加志ほか
13日（日）喜多流「櫻　川」　友枝喜久夫ほか
20日（日）宝生流「志　賀」　大坪十喜雄ほか
27日（日）観世流「熊　野」　梅若万三郎ほか

◈ NHK教育テレビ

3月21日（祝）午前9～10時
能「天　鼓」梅若六郎ほか

和泉流、大蔵流狂言

カナダ、アメリカで公演

和泉流・大蔵流狂言がアメリカ、カナダ、南米アルゼンチン、チリ、ブラジルなどで公演される。

この狂言団のメンバーは、和泉流野村万之丞、万作、万之介、又三郎、大蔵流茂山千五郎、正義師ら十一名のメンバーで三月二十九日出発、各地で約四十回公演し、五月十八日ごろ帰国の予定。

なお名古屋から野村又三郎師が参加、三十一日万之介師とともに出発する。

日程と公演地予定は次のとおりである。

三月三十日（アメリカ）シカゴ▽三十一日―四月二日（カナダ）オタワ、オンタリオ　▽四月三日（カナダ）ウオルワビル、ノバスコシア　▽四日（カナダ）ハリファックス、ノバスコシア　▽六日―八日（オハイオ）アンゼス　▽（インディアナ）リッチモンド▽十日―十二日（ウィスコンシン）ホワイトウォーター　▽十三日―十四日（インディアナ）ブルーミントン　▽十五日（コネティカット）ミドルタウン　▽十六日―十七日ニューヨーク・カーネギーホール　▽十八日―十九日ワシントンDC　▽二十日（マサチューセッツ）アムハースト　▽二十一日―二十二日（ニューヨーク）ウエルズカレッジ、ホロラ　▽二十三日（ルイジアナ）ラストン　▽二十四日（ワシントン）シアトル▽二十五日（オレゴン）ポートランド　▽（カルフォルニア）サンタクルズ　▽二十七日（カルフォルニア）ロスアンゼルス　▽二十九日南アメリカ、五月以降公演地未定。

曲目は「棒縛」「くさびら」「瓜盗人」などが上演される予定。

各地だより

なごや会第五回大会

大蔵流狂言会

名古屋　大蔵流狂言会・なごや会の第五回大会は三月十六日午前十一時半から熱田神宮能楽殿で開催。

鼓相撲（古川道郎、増田健、徳和吉一）鈴の音（大西安春、森浩一、岩本平八郎）呼声（保母維久子、村松泰子、村松周子）薩摩守（高尾慶子、井元喜子、丹羽節）腰折（計盛諸子、柾木信栄、奥村清子）姫子昆沙門（田中幸子、松川佳澄、横井孝子）悪坊（渡辺昭大蔵基嗣、久保田喜一）真奪（梅本道子、竹内朝子、岡田勝子）横座（竹井喜久男、高島貞通、古川道郎）抜殻（渡辺茂、山田優）千切木（若林邦昌、善竹圭五郎、笠坊溢行、中馬勇、小国武彦、沢山政康、原亨、田口和正、大蔵基義）ほか狂言小舞など二十数番。

観世喜之師舞台生活七十年

喜謡会祝賀大会

大　阪　観世喜之師舞台生活七十年を祝賀して喜謡会では、四月二十日（日）大阪・大槻能楽堂で祝賀大会を催す。

能「千手」（シテ宝谷千代子、ツレ観世武雄）「羽衣」（シテ山田玉枝）「遅々乱」（シテ木下万寿栄）ほか素謡、舞囃子、仕舞など二十数番。

金剛流謡曲仕舞教室

京　都　京都新聞社主催による金剛流謡曲・仕舞教室は昭和三十一年創立以来二十年を迎え、金剛教室として親しまれ斯道の普及と隆昌に貢しているが、今年度の会員の申込みを受付けている。要項は次のとおり。

主催京都新聞社、開講日四月十四日（月）毎月月曜日三回

昼間部＝謡曲科、仕舞科
夜間部＝仕舞科、謡曲科、小謡科

観世流名曲撰（上）

コロムビアレコード

コロムビアレコードから「謡曲百番・観世流名曲撰（上）」が五月に発売される。

宗家観世元正監修、豪華キャビネット付、別冊解説書（全詞章入り）30センチメートルステレオLP、29枚組定価十万円。

収録曲目は、全三十五番。

日本コロムビア創立六十五周年記念事業として発売されるもので解説執筆は同志社大学文学部、里井陸郎教授があたっている。上巻は五月二十五日発売。

収録曲目は次のとおり。

安達原・小袖曽我・海士・砧・鞍馬天狗・木曽・善知鳥・江口・通小町・源氏供養・桜川・実盛・七騎落・隅田川・蝉丸・田村・土蜘蛛・鉄輪・千手・卒都婆小町・当麻・鶴亀・菊慈童・吉野天人・東北・野宮・羽衣・紅葉狩・俊成忠度・山姥・二人静・松風・三井寺・遊行柳・養老

なお中巻、下巻は、本年来から五十一年度に発売が予定されている。

謡本など価格改正

檜書店

観世流・金剛流宗家本発売元、檜書店では、手間代、人件費等の値上り、諸資材の漸騰、印刷工賃の上昇などにより、三月二十一日から謡本などの定価を改正する。

特製一番本七〇〇円（旧定価六〇〇円）　▽特製習物一番本（準九番習・九番習）八〇〇円（旧定価六五〇円）　▽特製習物一番本（重習）八〇〇円（旧定価七〇〇円）　▽百番集（特製）八〇〇〇円（旧定価六五〇〇円）　▽百番集（並製）七七〇〇円（旧定価六二〇〇円）　▽続百番集（特製）八〇〇〇円（旧定価六五〇〇円）▽続百番集（並製）七七〇〇円（旧定価六二〇〇円）　▽謡曲全集一五〇〇〇円（旧定価一二〇〇〇円

なお袖珍一番本二五〇円、並製一番本三五〇円は据置き。

岡久雄氏逝去

観世流シテ方・岡久雄氏は二月十三日、東京逓信病院で逝去された。行年六十一歳。

告別式は十七日、東京都目黒区三田二―七―一二の自宅で執り行なわれました。喪主長男久廣氏。

牛窓隆司氏逝去

ウシマド写真工房（京都市上京区北野上七軒）牛窓隆司氏は、二月二十八日逝去された。享年七十二歳、告別式は三日西芳寺で行なわれた。

謡曲本専門販売
株式会社　東文堂書店
名古屋市中区栄3―28―26（松坂屋1丁南）
電話（052）241―1059

観能のしおり

隅田川

3月23日　淡交会能（名古屋）
4月13日　広田後援会能（京都）

舞台は関東の武蔵と下総の間に流れる隅田川の辺にある渡し場である。今日は対岸に大念仏供養があるので、僧俗を問わず大勢の人が集り大念仏を唱えてゐる。その中で一段と騒がしい様子は、都からの女物狂が面白く狂ってゐるからである。

船頭（ワキ）はいま出そうとした船を止めて、その狂女を待つ。この狂女は京都北白川に住む吉田何某の妻（シテ）で、一子梅若丸（子方）を人買いに誘惑され狂気となって東国まで尋ねてきた者である。やがて旅人（ワキツレ）や狂女を乗せた渡し舟は、のどかな春の隅田川を漕ぎ出るが、船頭は対岸に着くまでの退屈しのぎに、今日行われる大念仏の因縁話を聞かせる。

それは去年三月十五日しかも今日、人買に誘惑された幼児がこゝにて病にかゝり捨てられ遂に空しくなる。その最後に自分は都北白川吉田の梅若丸と告げる。この辺の人々あはれみ土中に埋め、しるしに柳の木を植えて丁度今日一周忌だと物語る。

船中の人々も思わず貰い泣きをする中で母親は悲嘆にくれ、塚に詣で人々と共に念仏を手向けるとわが子の声が聞え又、亡霊幻の如くに現われ親子互に慕い逢いしもつかの間、夜が明けるにつれわが子の姿、声もなく唯草茫々とした塚の悲しみのみが残る。

悲哀の内容は他に類を見ない。能の物狂いはみな終りが親子対面で祝曲になってゐるのにこの曲だけは違う。これは決して過去の物語にあらず、現代でも私たちは誘拐魔に幼児の生命を奪われ悲嘆のどん底に泣き暮れる親を身近かに見ることが出来る。

幾百年の星霜を超越して、この曲の悲劇性が刻々と迫るのも偶然でなく、又この曲ほど悲情に徹した曲もない。先づその時を命日と設定した作者、観世十郎元雅（世阿弥の長子）の詩人的素質と作劇才能とは、かなり高く評価されてもよい。

巻纐漫なればこそ、うらはらに悲しみは高揚し、船頭相手の都鳥談義も風流であればあるほど、後にわが子の死を知ったとき、その空しさが深くなるという冷静な計算性、そして最後に塚の中から幼児の念仏の声をきかせ、感乱の母にまぼろしの姿を見せるという恐るべき切札……こうした一分のすきもない作劇才能には感嘆の外はない。古人は言う「二度の物狂なり」なるほど一度は子供を人買にさらわれて狂気となる。今一度は子供の死を聞いて狂乱する。悲しみにうちひしがれた母親の逆上の態を能の枠の中で表現するのは容易な事ではない。一通りの修業では勤めがたいが必意は曲の位をいかにとるかである。

巻纐

4月27日　神楽留
ある時の帝が霊夢の告により熊野三社へ全国から巻纐を納めさせた。都からは巻纐を肩に、「旅は心の安かるべきか、殊更これは王土の命、重荷をかくる南の国……」と権力者からの重い負担にいきどおりを感じつゝ、南紀へ到着した男がある。冬梅の匂いに和歌をつくり、音無しの天神へ詣でゝのち、巻纐を納めるが、納期のおくれた罪として彼は捕を受ける。

そこへ音無しの天神ののりうつった「巫女」（かむなぎ――祭祀などに奉仕する人）があらわれ、「彼は我に歌を手向けた者だ」と云って刑をまぬがれさせてやる。やがてその巫女は大塔熊野の霊光をたゝえ神楽を奏していたが、そのうちに多くの神々が彼女にのりうつって、狂乱の態を示しはじめるがやがて神気が去り本性にもどった。

小書神楽留は先づシテの扮装が通常演出（大口水衣）におけるそれよりも優美な長纐を着、梅の小枝を持って出るし、又通常演出におけるこの能の中心部分をなすクリ・サシ・クセが省かれ「神楽」の後半部に位置する「神舞」の部分もカットされます。

このことはとりもなおさず、「神楽」という舞を大きくクローズ・アップさせようという意図にほかならないのであります。

都の男が巻纐を献上する迄はこの能に於いての附与的な節であって、中心はあく迄も神楽からキリへかけてテンポが次第に進み、次第に盛りあがってくる部分であります。それを小書「神楽留」は心にくい程効果的に表現する方法であるといえましょう。

又この能は「和歌の徳」を讃えている点が注目されます。有名な古今集の序に紀貫之は「力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の中をもやはらげ、猛きものゝふの心をもなぐさむるは歌なり」と云っている程に歌を尊んでおります

ところで詩を尊むことは日本に限られたことではありません。詩が人間のみならず、人と神、人と霊の間にさえ通じ合う力を持っているという考えは西欧の古典から現代に至る文学の中に深くいきづいているのであって、その古典から現代に到る壮麗な詩句は今も世界の人々の心の中に大きな意味を与えている筈であります。又謡曲全体が壮麗な詩句であり、能はその詩句の舞台的展開であると考えても過言ではありません。

現代の日本の社会に生きる我々は、詩の持つ力、詩の存在する意味について、それはそのまゝ人生の精神生活に直結するものでありますが、それを深く考えることをはじめなければならないのではないでしょうか。

読者通信欄

舞台に一礼して立去った人

舞台と見所の呼吸がぴったりと合った能ほど演者にとっても観る人にとっても印象にのこるものです。最近では、一番の能が終わってすぐ拍手ということはみられなくなったようですが、やはりシテが上げ幕に入る事までは、鑑賞の立場からもその余韻を味わうべきでしょう。

開演中の見所の出入りは、外国の演劇では絶対に許されない場合が多い。それがまた観客と舞台の渾然一体となったものを生み出す源といえます。鑑賞のマナーということは、結局、その環境において他人に迷惑をかけないということになると思います。

さる一月二十六日の合同能のとき[illegible]したが、年輩の観客の方が席を離れ、静かに扉をひらいて舞台に向かって深く礼をされてきわめて静かに立去られたのです。これはごく当たり前の光景かも知れませんが深々と頭を下げられた姿こそ、能を大切にする心であり、私もかくありたいと心に刻みつけられた次第です。

またこのような気持で能をみる人が多いことは舞台にもきっと反映するのではないかと思います。

（一読者）

演者の希望

観能の読者から前述の投稿を頂きました。金春流櫻間金太郎氏はその著「桜間芸話」の中で「演者の希望」として次のように述べておられます。参考までに掲載させて頂きました。（編集部）

現在の方が、能一番ご覧になるのは相当骨の折れることと存じます。中世以来の伝統を崩さず、固くなって頂きたいと存じます。

能の鑑賞は、舞台だけの鑑賞でなく、能楽堂の雰囲気に入って頂かなければ、徒らに冗長な、ピンと来ないものになってしまいます

最近は見巧者といわれる方ほど一番の能を見ることがなく、面白い型どころ、局部々々を御覧になって頂きたいと存じます。気ぜわしい心持では、能にとけ合うことが出来ません。うち寛いで見て頂きたいと存じます。

能楽堂へお出でになる時は、その日一日能を見る心持になって頂きたいと存じます。多忙な時世ですから、時間的にいって終日御覧になることは難しいでしょうが、能を見る心持だけになって頂きたいと存じます。又一たん、能楽堂へ入った以上は、気持を寛ぎにして、ゆったりと昔に返るつもりになって頂きたいと存じます。気ぜわしい心持では、能にとけ合うことが出来ません。うち寛いで見て頂きたいと存じます。

能の鑑賞は、舞台だけの鑑賞でなく、能楽堂の雰囲気に入って頂かなければ、徒らに冗長な、ピンと来ないものになってしまいます

最近は見巧者といわれる方ほど一番の能を見ることがなく、面白い型どころ、局部々々を御覧に

迅速第一の現代生活とはしっくり参りません。これは実にやむを得ないことと存じます。それで、能を御覧になる方に、演者として勝手なお願いですが、少しばかり希望を申し述べてみたいと思います

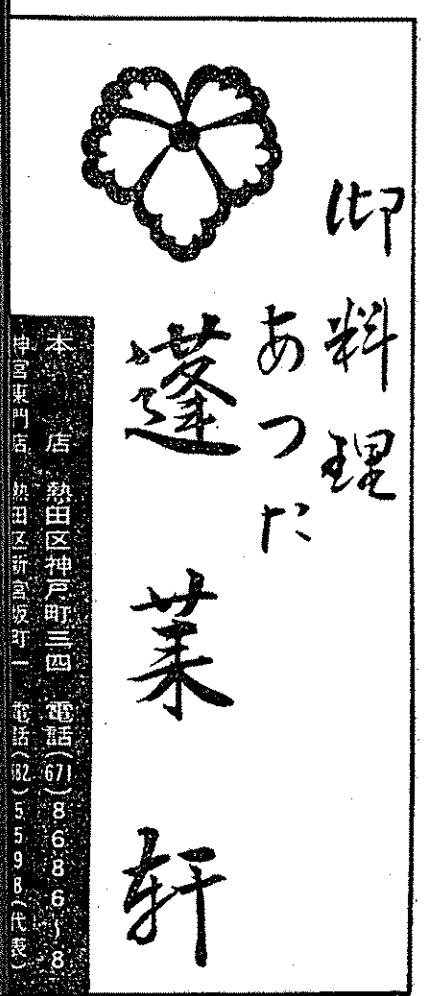
能楽堂へお出でになる時は、その日一日能を見る心持になって頂きたいと存じます。多忙な時世ですから、時間的にいって終日御覧になることは難しいでしょうが、能を見る心持だけになって頂きたいと存じます。又一たん、能楽堂へ入った以上は、気持を寛ぎにして、ゆったりと昔に返るつもりになって頂きたいと存じます。気ぜわしい心持では、能にとけ合うことが出来ません。うち寛いで見て頂きたいと存じます。

能の鑑賞は、舞台だけの鑑賞でなく、能楽堂の雰囲気に入って頂かなければ、徒らに冗長な、ピンと来ないものになってしまいます

最近は見巧者といわれる方ほど一番の能を見ることがなく、面白い型どころ、局部々々を御覧に

苦心しておりますが、むしろ動きのあるところより、静かな動作の少いところに、いい知れぬ苦心を致します。たとえば、じっと立っているとか、じっと坐っているとか、脇との問答とか、ただ右をうけたり左をうけたりするとか、別に見せ場でも何でもないところに却って非常な努力を払っております。

結局一番の能を初めから終りまで見て頂かなければ、能の真価は分らないと存じます。能を御覧になる前には、一応謡本について、筋書だけでも頭に入れて置いて頂いて、能を御覧になる時は、謡本など一切見ず、前に述べました動きのないところにどういう風に演者が苦心しているかの点まで見て頂きたいと思っております。



■生きた設備を誇る日進堂
メガネ調整設備は、正しいメガネ・快適なメガネづくりの根本です。日進堂は視力測定・メガネ調整用の諸設備はもちろんのこと、必要なときには数分でピックアップできる…お客様一人一人の視力記録システムなど常に生きた設備の充実を心がけています。
■ビス一本にも全神経を集中する日進堂
メガネ店の技術をささえるもの――それは、お客さまの信頼におこたえする責任感とまごころです。正しいメガネを安心してご使用いただくために、日進堂は、たとえビス一本にも全神経を傾倒しています。
■徹底した日進堂のアフターサービス
メガネをいつも正しく、最良の状態でご使用いただけるよう努めることもメガネ店のつとめです。日進堂は可能な限りの修理サービス、レンズ・フレームの清掃サービスを無料で行なっております。いつでもお気軽にお立ち寄り下さい。

正しいメガネで しあわせを……
メガネの日進堂
名古屋市西区上堀町57（円頓寺本町）
〒451 TEL (571) 6181－3

観世流・金剛流
宗家本発行元
檜書店
〒101 東京都千代田区神田小川町2－1
〒604 京都市中京区二条通麩屋町東入
電話 (291) 2488－9
振替東京 3552
電話 (231) 1990
振替京都 113

名物 きよめ餅

若い御二人の門出に
ふさわしい結婚式場
名古屋総鎮守 若宮八幡社
各種会合や宴会にも御利用下さい
（駐車場完備）
名古屋市中区栄3丁目35—30　電話（241）0810

能樂の友

題字は熱田神宮　篠田宮司筆

発行　能楽の友社
名古屋市千種区吹上本町2—20
（郵便番号　464）
電話　（731）7984
振替口座　名古屋　36393
購読料　1年　500円
郵送の場合　1年　600円
一部　40円

伊勢神宮奉納能
金春、喜多、観世流で

伊勢神宮の今春の神楽祭奉納能は四月五日金春流、六日喜多流、七日観世流・大槻清韻会が奉納した。

金春流は能「藤戸」（金春晃実）「東北」（金春安明）「紅葉狩」（本田光洋）の能三番を奉納。喜多流では、岡村保道会の主催により素謡「西王母」「巴」の二番はじめ独吟、連吟数番、舞囃子十五番を奉納した。

能『乱』『敦盛』
大槻清韻会の奉納

大槻清韻会では、四月七日（月）伊勢神宮神楽祭にあたり、内宮能楽殿で恒例の奉納行事として、奉納能を催し、名古屋からも参加出演して盛会であった。

奉納能組は次のとおり。午前十時三十分始。

狂能「乱」・双之舞（シテ天野登茂子、勢山記代子、ワキ植田隆之亮、笛絵野郁子、小鼓吉松泰子大鼓緒方満州枝、太鼓鬼頭喜太郎）

能「敦盛」（シテ大槻文蔵、ワキ植田隆之亮、笛林敏子、小鼓吉松泰子、大鼓山本孝）その他囃子十五番、仕舞、連吟十数番。

故　橋岡久太郎師追善
岐阜淡交会能

4月20日　岐阜市民会館

岐阜淡交会では、四月二十日、岐阜市民会館で「日本芸術院会員故橋岡久太郎師十三回忌追善能」を開催する。

主催　岐阜淡交会、後援・岐阜県教育委員会、岐阜市教育委員会、岐阜日日新聞社、岐阜放送、午前九時三十分始。

能「杜若」（シテ池上梢、ワキ西村欽也、笛藤田昭彦、小鼓後藤孝一郎、大鼓吉田定男、太鼓鬼頭八郎）

能「千手」小書鄙曲之舞（シテ鳥沢昭夫、ツレ鳥沢重男、ワキ高安滋郎、笛筧三男、小鼓山口亮、大鼓筧鉱一）

能「隅田川」（シテ三品喜嗣、子方梁田武彦、ワキ高安滋郎、笛筧三男、小鼓福井啓次郎、大鼓筧鉱一）

狂言「歌争」

素謡「神歌」「百万」「敦盛」「遊行柳」「弱法師」

舞囃子「砧」

独吟「融」「班女」「定家」「勧進帳」

連吟「松風」仕舞「葵上」

豊川稲荷で奉納
玉石会が狂言二番

狂言・玉石会（佐藤卯三郎師）では、四月二十一日、豊川稲荷奉納として、狂言「福の神」（岡崎久太郎、林東助、佐藤卯三郎）「附子」（津田庄三郎、中北宇多子、井川澄子）の狂言二番を奉納する。

◆演能カレンダー◆
（熱田神宮　能楽殿）

〔4月〕
- 27日（日）清韻会能（番組①面掲載）（有料）
- 29日（日）幸友会春の会（来聴歓迎）

〔5月〕
- 3日（日）流友大会（番組①面）（来聴歓迎）
- 5日（祭）謡会春の大会（番組②面）（来聴歓迎）
- 10日（土）観世九皐会定式能（番組③面）（有料）
- 11日（日）邦謡会春の会（来聴歓迎）
- 18日（日）名古屋猩謡会（番組③面）（来聴歓迎）
- 24日（土）一謡会叶石会（来聴歓迎）
- 25日（日）山本観衛会（来聴歓迎）

〔6月〕
- 1日（日）青陽会能（有料）
- 5日（木）熱田神宮祭協賛能（来聴歓迎）
- 8日（日）観世会定式能（有料）
- 14日（土）やるまい会（来聴歓迎）
- 15日（日）宝生会式定能（有料）
- 21日（土）中部金剛会（有料）
- 22日（日）狂言会（来聴歓迎）
- 28日（土）和謡会（来聴歓迎）
- 29日（日）鳳鳴会（来聴歓迎）

（演能変更の節はご了解下さい）

演能案内

清韻会能
四月二十七日（日）午前十一時始
熱田神宮能楽殿

能組

素謡
藤戸　杉村竹翠　里井順次郎　岡田光紘　水田博　殿島修二

巻絹
神楽留　高安滋郎　吉田定男　福井啓次郎　助川竜夫　藤田昭彦　佐藤卯三郎

後見　近藤幸江　柴田収武　山本克彦　鶴信隆　斉藤正人　川勝恬寿

仕舞
綱之段　三島憲
笠之段　近藤幸江

舞囃子
熊野　水藤元三　吉田定男　福井啓次郎　藤田昭彦

地謡　山本正人　藤谷政二　泉嘉夫　杉村泰孝　竹翠

頼政
泉嘉夫　西村欽也　筧鉱一　後藤孝一郎　藤田六郎兵衛

間　佐藤友彦

後見　水田博　大槻秀夫　斉藤信隆　山本正人　泉二郎　里井順次郎　柴田収武　小林泰孝　川勝恬寿　岡田光紘

地謡

狂言
咲嘩　井上松次郎　佐藤友彦　井上礼之助

景清　大槻秀夫

竹綱　浩之　大槻文蔵

船弁慶
高安滋郎　高安勝久　筧鉱一　後藤孝一郎　鬼頭喜太郎　重前後替

間　大野弘之

後見　近藤幸江　大槻秀夫　三島亮　水田博　殿島修二　藤谷嘉夫　泉二

地謡

附祝言

（終了　午後四時半の予定）

主催　大槻清韻会
後援　中日新聞

会員券申込所
能楽殿又は出演楽師宅
A席　二、八〇〇円
B席　二、〇〇〇円
学生席　一、〇〇〇円

幸友会春の大会
四月二十九日（日）午前十時始
熱田神宮能楽殿

番組

素謡
中所清宣　伊藤弘一（吉翠会）

仕舞
鞍馬天狗　中所宣夫
芦刈　水野勝弘
羽衣キリ　西村つかね
蝉丸　中村智津子
唐船　奥村幹夫
雑波　中所清宣（吉翠会）

舞囃子など三十数番

観世流 流友会大会（第三回）
五月三日（祭）午前九時半始
熱田神宮能楽殿

忠度
仕舞
竹生島　松野岳三　増谷和夫　熊谷幸夫（嘉謡会）

仕舞
鶴亀　大島定雄
東北クセ　椎野りつ
網之段　作石君子
班女クセ　加藤定
小袖曽我　加藤春江
玉鬘　梶田雪枝（嘉謡会）

班女
加野昭二郎　小川貞三　藤本倭夫（此水会）

連吟
井筒　鈴木高橋　宗明（此水会）

俊寛
成経　八神孝充
康頼　大西鐘八郎
戸松利作　恒川松彦（竹韻会）

独調
山姥　池田忠三　山口亮
鵜之段　東美内子　鬼頭一枝（水雲会）
玉之段　桑原信夫　杉本信次郎

一調
松虫　大塚鈴枝　後藤孝一郎

道成寺
下里総雄　土川宗勝　池田忠三（水雲会）

仕舞
巻絹　福間克彦
田村浮貝
清経キリ　冨士道周明
弱法師　福間昌作
邯鄲　原伊三男（風韻会）

（②面へつづく）

能紀行 ㊺

櫻守り

絵と文　二井栄逸

今日見ずは　悔しからまし花盛り　咲きも残らず散りも初めず

桜の園の花盛り。それはこの古歌が示すように絢爛豪華きわまりないのである。しかし私は、この満開の風情よりも、吹く風にひらひらと散る山桜や、七分咲きの吉野桜が常磐の中に交つて咲いている風情の方が好きだ。それにしても、ある時は愛宕高雄の初桜、又或る時は、比良や横川の遅桜という風に諸園を遍歴出来る人がうらやましく思われてならない。爛漫の春、やはり桜が咲くと、桜の園は一度に明るくなる。でも、桜の下にあきかんや、ビニール等のごみが散りばっていたりすると、うらぶれた春の感じがしていやになる。物質文明が作り出す使い捨て等の塵は土に帰ることすら出来ないのだ。

私は茶碗の中に薄紙をひろげるように咲く桜茶に春日を楽しみながら、ふと、そんなことを思ったりする。そして、ごみのことはともかく、この心よい季節を引きとめることは出来ないものかとも思ったりする。桜の開花と共に庭なかまどがやわらかい芽を吹き出し、春は、時間をちゞめて駆るフィルムのようにすばやく通り過ぎようとする。そしてもう、初夏のけはいさえ私の身辺をつゝみ始めるのであった。

桜を主にしたり、あしらったりする能は数多いが、鞍馬天狗も其の一つ。天狗という超人的な存在は皆一様に童話的であるが、この鞍馬天狗は他の天狗物とは少々違って、牛若丸という英雄の少年時代を教えみちびいた通力と侠気と堂々とした威風を持つ義人的な天狗である。この鞍馬天狗では前半が花見になり長袴をつけた稚児達が牛若丸と共に数人出る。

平治の乱で、父義朝をはじめ一族のほとんどが討死し、牛若丸はひそかに母の常盤に伴われて吉野にのがれたが、ついに、平家に探し出され、都に連れもどされ、七才の時鞍馬寺に入った。そして、この鞍馬寺に明け暮れする内、父の宿望を知り、平家を滅ぼす決意をかためたのである。昼は学問に専念、夜はひたすら武芸にはげみ、毎晩、僧正ケ谷へ通って天狗から兵法を習った。剣法に〝鞍馬八流〟という忍術のようなものがあるそうだが、早足、飛越、人間業とは覚えず、と、いうところまで達した事は、鞍馬天狗よりしと

まれた業であろう。鞍馬天狗は、かくれた達人であったとも、又、中国から渡ってきた者だとも言われるし、又、梁空の人物であるかも知れない。それはどちらでもよい。又、木葉天狗は、鞍馬山に多く住むムサヽビの類であったともいう。

× × × ×

洛北の春。鞍馬山では今、桜が美しい頃であろう。

桜はたしかに日本人の花であり心である。咲き方も下を向いて咲き、謙虚な日本人の心を表わしているようである。謙虚さを忘れた人間はもはや人間の資格を失ったようなものである。こないだ、五百本の桜を持ってネパールに植えてきた日本桜の会会長の話をきいたが、日本には桜の裏方さんがたくさんいられることをきいてびっくりした。桜を守り、美しい花を咲かせる今様桜守りが意外に多いことを知りはのぼのとした気持ちになった。

バス停に次々と一本づゝ桜を植えてゆく人。公団や施設に桜をそっと寄附する人達。ほんの一例であるが、みんな自費で行っているという。花畑や、野草の郡せい地等をあらし回る心ない人達がいることは悲しいことである。かくれた桜守りや花守りはどんな気持ちでこの人達を見るのであろうか。

〔昨年、中日五流能上演の友枝師の鞍馬天狗白頭〕

竹韻会春の会

4月20日　加納楽風庵で

竹韻会（杉村竹翠師）では、四月二十日午前九時半から昭和区・滝川町・加納楽風庵舞台で春の会を開催する。

〔素謡〕小袖曽我（浅野孝二）海士（三谷俊幸）杜若（三宅志づ）松風（間山美恵子）定家（鈴坂信子）花筐（藤沢富美子）安宅（宮部保良）三井寺（八神由季代）景清（恒川志やう）半蔀（大西鐘八郎）俊寛（戸松利作）野宮（大西智津子）藤戸（松田六郎）

〔仕舞〕笠之殿（三谷俊幸）蝉丸（宮部保良）桜川（小島[illegible]）

子方のことと床几のかけ方 ④

今はどの流儀にも子方が沢山おら[illegible]

[illegible]

[illegible]

ってみると、皆が大騒ぎをしています。

「拍崎」が始まるのに子方の私がいないというので大変なことになっていました。大急ぎで装束をつけて出ましたが、いやひどく叱られました。いくら子供だといっても

[illegible]

す。椅子にかけるように深く腰をかければ楽ですが、それでは姿が悪くなるのでごく浅くかけているというだけで、実際は、足が持ち上らないようにふくらはぎで持ちこたえる形で腰をかけますが、修羅物のよう

（①面観世流流友会番組のつづき）

安宅
仕舞
放下僧　鬼頭貴代子
実盛　佐藤アヤ子
杜若　金丸洋子
〃　守部啓子
融　山　渡辺節子
〃　岡本多加
〃　村田とく子
〃　川崎すう
〃　野崎満佐子
〃　長戸花子
〃　村木寿恵子
〃　内田睦子
〃　木造武次　岩田健之輔
（松謡会）（風韻会）（一謡会）（清光会）
葵上
通小町
三輪
（午後五時終了予定）

（ご来聴歓迎）
主催　流友会
後援　名古屋観世会

巽会大会番組

五月五日（祝）午前九時半始
熱田神宮能楽殿

仕舞
嵐山　鈴木義久
葛城　鬼頭嘉男
松虫　竹腰勝一
舞囃子
高砂　立石妙子　吉田定男　三嶋香代子　鬼頭八郎　笠三男
草紙洗　町野喜美子　吉田定男　柳原冨司忠　森本重一
桜川　小嶋勉　吉田定男　柳原冨司忠　森本重一
半蔀　橋本道子　班女　岡田佐和子
玉葛　近藤ふき子　養老　中島永博
猩々　葛原元文
小督　永井喜美　吉田定男　柳原冨司忠　笠三男
胡蝶　古田智恵子　吉田定男　福井良治　鬼頭八郎　藤田昭彦
放下僧　今井田弥生　吉田定男　入江桂子　笠三男
紅葉狩　平河和子　吉田定男　足立稔子　藤田昭彦
連吟
蝉丸　小沢喜一　平子稲葉　堀江昌
七騎落　竹下みき　吉田定男　柳原冨司忠　藤田六郎兵衛
舟弁慶　柳三浦静子　笠鉱一　森本重一
藤　前沢志紀　福井良治　鬼頭八郎　藤田昭彦
融　小柳寿子　笠鉱一　福井啓次郎　鬼頭八郎　藤田六郎兵衛
小督　竹内進　胡蝶　竹内美佳
一調
勧進帳　足立義雄　足立稔子
能
敦盛　高安滋郎　笠鉱一　後藤孝一郎　藤田昭彦
間　大野弘之
後見　倉本雅　足立知子
地　近藤ふき子　岡田佐和明子　今井田弥生子　橋本道子　須賀千代子　竹内澄子　辰巳孝子　玉井弘子　小柳寿子
狂言
清水　井上礼之助　佐藤卯三郎
高野物狂　河野邦男　笠鉱一　後藤孝一郎　藤田六郎兵衛
清経　葛原正枝　河村総一郎　福井啓次郎　藤田昭彦
熊野　日比野貞子　笠鉱一　後藤孝一郎　藤田六郎兵衛
歌占　足立知子　河村総一郎　福井啓次郎　笠三男
夷　盛　小塚益巳
葵上　小沢喜一　花筐　班女　堀江昌
蝉丸　戸田和　善知鳥　足立稔子　岡本千津恵
百萬　高田真六　笠鉱一　福井啓次郎　鬼頭喜太郎　笠三男
女郎花　須賀千代子　河村総一郎　福井啓次郎　藤田昭彦
遊行柳　玉井弘子　河村総一郎　後藤孝一郎　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛
熊坂　佐藤稔　河村総一郎　福井啓次郎　鬼頭喜太郎　森本重一
杜若　西村欽也　河村総一郎　大野禾代　鬼頭喜太郎　笠三男
後見　辰巳孝　内藤泰二
地　亀岡佳子　三浦静子　平河和子　竹下みき子　石立妙子　古田智恵子　戸田和雅　倉本正枝　葛原貞子　日比野
番外仕舞
鵜ノ殿　辰巳孝
附祝言
（入場随意）
主催　名古屋巽会
事務所　愛知郡東郷町和合ケ丘二―一―五　戸田和方　TEL〈〇五六一三〉九―一四八七

名古屋観世九皐会定式能

五月十日（土）午後一時始

名古屋猶諷会番組

五月十八日（日）午前十時三十分始
熱田神宮能楽殿

能楽先人の訓え

「観世華雪芸談」より ④

床几のかけ方

今はどの流儀にも子方が沢山おられるのでようしいが、私の子供の頃は余りおりませんでしたから、他流にまでよく頼まれてまいったものです。

十才位の時にやっと仲間が一人出来ました。もと三井八郎右衛門さんのお屋敷につとめておられて、鼓をうっていられた山崎一道さんの御子息の一保さんで、清廉さんに師事なさっていました。この方は後年大阪で実業家になられましたが、三井さんのお供でよく梅若へも来られたものですから「仲光」のように二人の子方のいるものなどには時々借りられておられました。

或日三井さんが能を観に来られて馬車が表で待っていましたが、駆者が私を見て「坊ちゃん、乗せてあげましょうか」と言うのです。何しろ当時は二頭立ての馬車は珍しいものですから、私は自分の出番が迫っていることも忘れてしまって、嬉しさのあまり乗せてもらい、浅草あたりまでとばしました。これは公公がひどい目にあいました。

子方のことばづかいは、大人の真似をして、ませた感じを出すものです。

「柏崎」が始まるのに子方の私がいないというので大変なことになっていました。大急ぎで装束をつけて出ましたが、いやひどく叱られました。いくら子供だといってもこんな事はめったにありませんが、「柏崎」には謡がないのでつい気がゆるんでいたのか、とんだ失敗をしたものです。

前にも申しましたようにその時分はこの年頃の人が他になかったので、体が小さいのをよいことにして十五・六才の声変りをする頃迄、鵞鳥のような声を出してまで使われたのは、いやでいやで仕様がありませんでした。

子方は可愛い声で無邪気に謡う方が情が移ってよいものです。教える時もそのように、生意気にきこえないようにと注意しております。例えば「七騎落」の「船のうちに」ののを普通ならもたせますが、これなどもたせると生意気に聞こえますからもたせないように教えています。又細い節などを教えて、あまり上手に謡うとかえって小憎らしくなるので考えものです。

とかく子方が出るものは、はたで余程注意してやらねばなりません。「花筐」のようなものなど、高い床几を膝がかけられるように低くしてやらねば可哀そうです。当人は「目を動かしてもいけない」と教えられている位ですから、勿論身体を動かしてはいけないということをよく知っておりますので、その辛抱が出来るように気を配ってやります。折角の能も見所の方が子方に気をとられてしまうようでは、何にもならないからです。

子方に限らず床几にかかる能は沢山あります。楯子にかけるように深く腰をかければ楽ですが、それでは姿が悪くなるのでなく浅くかけているというだけで、実際は、足が持ち上らないようにふくらはぎで持ちこたえる形で腰をかけますが、修羅物のように足を割ってかける時はよろしいが、「大原御幸」「朝長」の前シテなどの女物で、脚をひらげられない場合など苦しいものです。

心得

山登りの時に経験することですが、後をふり返ってみて、ああいい景色だこの辺で一休みしようと思うことがよくあります。しかしもっと高い所へ登るともっとよい景色がひらけます。それを楽しみに山に登るわけですが、芸の道も同じことがいえるのではないでしょうか、芸にはもうこれでよいという所はなく、いつもより高く、より大きい所を望み励むことによって、この道は限りがなく深められるものです。

「一生が稽古と思え」

と父や先輩達から常々言いきかされて来ましたが、万三郎兄も七十才位の頃「この間まで、この意味がまだはっきりわからなかったが、今朝寝床の中ではじめて悟った」

と述懐していたことがあります。

又万三郎兄のいったことで忘れられないことがあります。いつか電車の踏みきりで「目で見るな、心で見よ」と書いてあったので、はじめて能も同じだと悟ったというのです。ほんとうに能はこれだと私もつくづく思っています。

野村又三郎師舞台

五十年記念大会

狂言・和泉流野村又三郎師舞台五十年記念の狂言大会が六月十四日、熱田神宮能楽殿で催される。主催　也留舞会、信謡会、賛助東京信謡会、玉石会。

（番組次号掲載）

五十年度

豊春会　春の能

四月二十九日（祝）午后一時始

京都・金剛能楽堂

隅田川　豊嶋幸洋　豊嶋弥左衛門　岡治郎右衛門　谷口勝三　吉阪修一　光田洋一

後の彩色　六字鼓

国栖　谷田宗二朗　中村喜彦　藤田善一　前川善雄　森田光春

附祝言

居杭　茂山千作　茂山千三郎　茂山真吾

仕舞

玉葛　高岡歳子

箙之段　豊嶋訓三

連吟

竹生島　（女子部師範）

仕舞

笠之段　金剛巌

狂言

右京直哉　重本昌三　植田恭三　豊嶋三千春

昭和五十年度（初回）

名古屋観世九皐会定式能

五月十日（土）午後一時始

熱田神宮能楽殿

蟬丸　小沢喜一　平子稲美　畑江昌

七騎落　竹下みき　吉田定男　柳原富司忠　藤田六郎兵衛

舟弁慶　前三浦静子　笠鉱一　柳原富司忠　森本重一

放下僧　佐々木勝郎　観世喜之　高安滋郎　河村総一郎　福井啓次郎　藤田六郎兵衛

間　井上松次郎

狂言

文山賊　佐藤友彦　大野弘之

蟬丸　吉田妙　小島芳雄　高安滋郎　笠鉱一　柳原富司忠　鬼頭季信

替之型

間　佐藤卯三郎

仕舞

芦刈　加藤保彦

笹之段　塚本秀雄

井筒　長谷川章

鄙鄙　観世武雄

葛城　高木美智子　西村欽也　吉田定男　大和舞　後藤孝一郎　鬼頭八郎　笠三男

間　井上礼之助

附祝言

以上　午後五時終了

名古屋市中区栄五丁目四―十四

主催事務所　後藤能楽ビル五階

観世九皐会

電話（〇五二）二五一―二四四〇番

◎会費　後援会指定席（三回分御一名）七千円

一般　会員席（右　同）五千円

◎御申込みは各出演諸師並びに当会事務所へ御申出下さい。

邦謡会春の会

五月十一日（日）午前九時始

熱田神宮能楽殿

素謡「実盛」「定家」「安宅」三番、舞囃子二十番ほかに仕舞など

（ご来聴歓迎）

名古屋猶謡会番組

五月十八日（日）午前十時三十分始

熱田神宮能楽殿

（入場随意）

主催　名古屋巽会

事務所　愛知郡東郷町和合ケ丘二―一一―五　戸田和方　TEL（〇五六一三）九―一四八七

能組

素謡

野宮　須知立子　井戸良造

弱法師　鈴木八寿　梅若善高

藤戸　加藤ミネ子　梅若修一　井戸和男

仕舞

雲雀山　井上種子

舞囃子

班女　須知立子　河村総一郎　後藤孝一郎　笠三男

羽衣　小倉陽子　河村総一郎　後藤孝一郎　助川竜夫　笠三男

野守　松久知代　河村総一郎　松久素子　助川竜夫　笠三男

素謡

求塚　梅若善高　井上種子　岡田朗詠

舞囃子

遊行柳　神田佳代子　河村総一郎　後藤孝一郎　助川竜夫　藤田六郎兵衛

砧　アト　奥田敏子　河村総一郎　福井啓次郎　藤田六郎兵衛

玄象　鈴木八寿　河村総一郎　後藤孝一郎　助川竜夫　藤田六郎兵衛

五段替型

素謡

松風　祖父江朝忠　浅野種三郎　中村実

能楽

安達原　杉田合子　高安滋郎　高安勝久　笠鉱一　福井啓次郎　鬼頭喜太郎　藤田昭彦

急進之出　黒頭

間　井上松次郎

後見　池内光之助　梅若修一

地謡　岡田晃一　菊池重郷　前川芳周　井戸和男　井戸良造　岡田朗詠　梅若盛義　梅若善高

附祝言

主催　名古屋猶謡会

後援　中日新聞

御来聴歓迎

◎観能のしおり◎

頼政（よりまさ）

4月27日　清韻会能

遠国から出てきた僧が名所宇治の里へくると、一人の老人があらわれ彼に宇治の名所を教える。梅雨の季節の宇治の景観はみな「おぼろ〳〵として是非をわかぬけしき」で、「きゝしにまさる名所かな」と歎ずるばかりであった。やがて老人は平等院の庭内にある「扇の芝」へ案内し、こゝは頼政の末期（まつご）の場所で、自刃した月日は丁度今日であると云いかけて消え失せてしまった。僧は源平の宇治川の戦いについて、宇治の里人にくわしく話をきゝ、頼政の弔いをすると、老武者頼政の霊があらわれ、宇治川の戦いの有様を語り、回向を頼んで扇の芝の草の陰に消え失せていった。

源三位入道頼政が歌人であったことは有名で、この能でも自刃する前に「うもれ木の……」の辞世の句がとりいれられています。彼は七十五才の時、平家の横暴を静こうとして高倉の宮以仁王を立てて軍を起したが、こと志と異なり無念にも宇治の平等院で自害し果てたのである。以仁王は後白河天皇の第二皇子で一一八〇年（治承四年）頼政と謀り平氏討伐の企てを立てたが頼政と共に失敗し、同年やはり戦死をしている。頼政は名をあげることに執着していた人であったらしいが、それなるが故に、敗地にまみれ、自害に至るその末期は無念の一語につきたのではないであろうか。平家の軍勢の勇敢な有様が悲壮に語られる（クセ――キリ）が、それがはなばなしいだけに、自己の悲劇は一層深まるのである。ローソクの火が消える前に一瞬明るくなるように、頼政は辞世の歌を無念の思いをこめてうたいあげ、関の声や川音のひゞく中で命の灯を消したが、このような人間頼政を見事にえがき出した名作がこの能である。

「実盛」「朝長」と共に三修羅と呼ばれ、修羅物の中での重い曲とされている。そこで修羅物の中での「頼政」の特徴を考えてみると、一般の修羅物がキリで地獄における修羅の苦患（くげん）を訴えるのに対し、この能では後場の殆んど全部を用いて現世における敗戦と自己の末路を悶々とえがきつゞけている。その為に一般の修羅物とは異なった頼政独自の面が用いられ、現世の苦悩や執念がより切実にえがき出されていることが、我々にとって、現実感を伴なった共感が得られる。老武者を主人公とした色彩的に地味なこの能が名曲となっている所以であろう。

船弁慶・重前後替（ふなべんけい・おもきぜんごのかえ）

4月27日　清韻会能

平家討伐後、頼朝との仲の悪くなった義経は、静、弁慶などとともに西国へ下ってゆく。このような時機に於ける静の同行は無理であった。別離の宴に静は舞をまい悄然と立ち別れてゆく。やがて一行は舟で西へ下るが、大しけに巻きこまれ、その波の上には源氏によって滅亡された平家の一門が雲霞のごとく浮かみあがる。……。

筋の説明を必要としない程人口に膾炙した能であります。この能は内容的に全く独立した二つの場面が単に時間的なつながりによって結びつけられて一つの能としてまとめられたという、変った構成をもっている。そうして前半部は「現在物」（現実に生きている人達によって劇的進行がおこなわれる能）と称するジャンルに属する性質を持ち、後半部は霊界との関連をもつ「幽霊物」と称する性質を有している。

小書「重前後替」における通常演出との大きな差異は、先づ前半部全体の位が重くなり静の舞がバンシキ序之舞（通常は中之舞）となる。後半部では、シテの登場が非常に効果的な方法にかわり（通常は早笛で常座へ出る）、又「舞働キ」が海上に浮かむ知盛の様子をあらわす型などと共に変化と迫力に富んだものとなり、大きな緩急を持った地謡と囃子は、観客と演者自身さへも大きな興奮の渦中にひきずりこまずにはいないであろう。前後場ともシテの扮装はより重厚なものとなり、ワキ弁慶も通常演出よりも重い位取りが要求される。以上のように前場の優婉哀愁、後場は迫力を表現するために、すべての役に大きな力量を必要とする能である。

能について、動かないもの、退屈なもの、古くさいもの、理解しにくいもの、という先入観を持っている多くの人々がこの能を見たときに、能が世界中の芸術の中でも最も迫力のある精神の沸騰と躍動をも併せ持っていたことに驚嘆させられる。

4月・5月放送予定

◆ NHKラジオ第一放送　（毎週土曜日午後6時5分）

〔4月〕

19日（土）観世流「野　宴」　梅若万三郎ほか
26日（土）観世流「西行桜」　武田太加志ほか

〔5月〕　源氏物語シリーズ

3日（土）喜多流「野　宮」　粟谷新太郎ほか
10日（土）観世流「夕　顔」　浅見重信ほか
17日（土）宝生流「半　蔀」　大坪十喜雄ほか
24日（土）観世流「葵　上」　橋岡久共ほか
31日（土）金春流「玉　鬘」　金春欣三ほか

◆ NHK・FM 毎週日曜日　（午前7時15分）

〔4月〕

20日（日）宝生流「志　賀」　大坪十喜雄ほか
27日（日）観世流「熊　野」　梅若万三郎ほか

〔5月〕　源氏物語シリーズ

4日（日）宝生流「半　蔀」　大坪十喜雄ほか
11日（日）観世流「葵　上」　橋岡久共ほか
18日（日）喜多流「野　宮」　粟谷新太郎ほか
25日（日）観世流「夕　顔」　浅見重信ほか

◆ NHK教育テレビ

4月20日（日）能　金春流「海　人」　桜間道雄ほか
4月29日（祭）能　観世流「熊　野」　観世元正ほか

予定番組について変更になることがありますのでご了解下さい。

◆出版紹介◆

「蒼人遺稿」

演劇、能評など百篇収録

文芸批評家殿島蒼人氏（元名古屋ペンクラブ理事長）は、さる四十五年七月に逝去されたが、このほど同氏の三十余年間にわたる演芸批評をまとめた「蒼人遺稿」が出版された。

故蒼人氏は、地元中日新聞、名古屋タイムズ、毎日新聞に芸能評を執筆、名古屋市芸術委員、金城おどり委員会委員などを歴任。昭和四十三年愛知県教育委員会より文化功労者として表彰をうけた。能楽の友紙にも創刊以来「わが観能」として多くの寄稿をされた。今回の「蒼人遺稿」には「能楽・隅田川」「茂山千作の老熟――朝日狂言会をみて」、「能のよいところ」の三篇（昭和四十二年）が収められている。

発行所　丸屋工房（昭和区丸屋町一―六）　総員三百二十四頁、定価二千五百円。

以下「能楽・隅田川」の観能記を再録し紹介させて頂く。

能楽　『隅田川』

能は好きだから、なるだけ見る機会をほしいと思っている。二月は梅猶会の「隅田川」を見て大そう感動した。

狂女が舞台へ出る前に後見が塚のつくりものをヨイショヨイショと運んできて、小鼓と大鼓の座の前に置く。このために舞台がざわつく。塚が舞台装置として必要なのは、これからまだ三、四十分もさきになってからである。都鳥の問答があって、女が舟に乗って、ワキが梅若丸の果てた長話があって、それをわが子にちがいないと舟から降りて塚をたづねる。ここで塚を出すべきではないか。

しかし、これは私の短見であった。能は緊迫したムードを孕んでぐんぐんと一作の核心に突進している。つくりものをもち出すような間隙は寸分もないことが解った。

狂女が「なう〳〵我をも舟に乗せて賜はり候へ」という。いままでの道行のダミ声の謡の調子が一変して、詞の調子となり、哀れさと心弱さがにじんでくる。ワキの長物語の間、シテが静止している謡のあと常座にはいり足を踏むのに、足を上へでなくうしろへ上げてトンと踏むのが、石蹴りみたいで、すこしかたちがわるいと思った。しかし見ているうちに気にならなくなった。

狂女が舞台へ出る前に後見が塚のつくりものをヨイショヨイショと運んできて、小鼓と大鼓の座の前に置く。このために舞台がざわつく。塚が舞台装置として必要なのは、これからまだ三、四十分もさきになってからである。都鳥の問答があって、女が舟に乗って、ワキが梅若丸の果てた長話があって、それをわが子にちがいないと舟から降りて塚をたづねる。ここで塚を出すべきではないか。

しかし、これは私の短見であった。能は緊迫したムードを孕んでぐんぐんと一作の核心に突進している。つくりものをもち出すような間隙は寸分もないことが解った。

狂女が「なう〳〵我をも舟に乗せて賜はり候へ」という。いままでの道行のダミ声の謡の調子が一変して、詞の調子となり、哀れさと心弱さがにじんでくる。ワキの長物語の間、シテが静止している正確である。都鳥の問答のところ地、上歌のクルヒは、曲、所作ともテンポがあってこれは見どころだと思った。

塚にむかって「この下にこそ」で中腰の膝をトーンと落として眼を押さえたかたちで泣くところは非常につよい印象をうけた。

舞踊だとなんといってもうごきの手数が多いから、こういう強烈なアクセントがきっぱりと出せないのである。

「生死長夜の月の影」の長い地謡のところで、シテは塚に合掌し、ワキは樒木を捧げたまま、静止している。敢閑な哀感が伝わってくる。能の魅力はこういうところにあると私は思う。

私を感動させたのは、シテと地謡との、南無阿弥陀仏の掛け合いのところだった。非常にしずかなテンポの謡であるが、このところの緩慢なる名律は、音楽的にも名曲であると思う。地謡には婦人が一人まじっていて、一オクターブ高い声で和していたのがなんとも効果的であった。

いま念仏の中に、正しく我子の声が聞えていたとシテがいう。「今一声こそ聞かまほしけれ、南無阿弥陀仏」これに応じてキンキンした子方の声で「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」がきこえてきた。

このシーンにおける母親（シテ）の、狂喜と哀切にあふれた謡に、私は涙があふれて止まなかった。能であんなに感情をたかぶらせた表現を、私はまだ知らない。

子方が姿を出すものと思っていたらついに姿を見せずじまいで二時間近い「隅田川」を終了した。つくりものの塚を後見が運び出すとき、塚の下に小さな白い二本の足が、一しょに行儀よく歩いていった……。

（昭和四十二年三月）

ちくさ正文館で謡曲本を販売

本のデパート・ちくさ正文館書店では、このほど観世流宗家本売捌所として能楽愛好者の便を図ることになった。

国鉄千種駅、地下鉄ちくさ駅すぐそばで交通の便もよい。

第十七代宗家　宝生九郎著　全八巻

宝生流囃子仕舞全集

宝生流の囃子・仕舞の稽古・独習に欠かせないテキストです。
謡本文（スミ色）に型どころ（朱色）を記入してあります。曲目五十音順

東京都千代田区神田神保町3―9　電話（263）8771　わんや書店　東京都中央区銀座8―7―5　電話（571）0514

観世流・金剛流
宗家本発行元
檜書店
〒101　東京都千代田区神田小川町2―1　電話（291）2488―9　振替東京3552
〒604　京都市中京区二条通麩屋町東入　電話（231）1990　振替京都113

割烹・小料理　城
● 熱田神宮能楽殿喫茶部
● 住吉小路（中区栄3―10）電話241―0248
● 喫茶・グリル（愛労評地下ビル）電話731―1128

観世流謡曲本を取揃えました
ちくさ正文館書店
名古屋市千種区・ちくさ駅前
電話（741）1137番（代表）

友社
町2―20
9 8 4
6 3 9 3
00円
00円
40円

能
会
大
殿

「忠度」（シテ伊藤長八氏）「隅田川」（シテ瀬戸綾子さん）さらに素謡「鶴鳴小町」「砧」「安宅」の重曲をそろえ社中の研鑽を発表。（番組いずれも①面掲載）

三回目を迎えることになり、流友交流の催しとして恒例の行事となってきた。

各社中の連合的な催しではあるが、素謡、仕舞など発表の場とし

武田小兵衛師古稀記念
武田謡楽会春季大会
三月二十一日（祝）午前九時半始
熱田神宮能楽殿

日本芸術院会員
故橋岡久太郎師十三回忌追善能
三月二十三日（日）午前十時始
熱田神宮能楽殿

現代をみつめる眼
東海テレビ

能樂の友

題字は熱田神宮　篠田宮司筆

発行　能楽の友社
名古屋市千種区吹上本町2－20
（郵便番号　464）
電話　（731）7984
振替口座　名古屋　36393

購読料　1年　500円
郵送の場合　1年　600円
一部　40円

熱田神宮能楽殿設立20周年
記念能　能三番上演

熱田神宮能楽殿は、昭和三十年十一月に設立されてからことしは満二十年を迎え、創立二十周年記念能の企画がすすめられているがこのほど記念能の番組の大要が次のとおり決定。八月二十四日（日）午前十時始で熱田神宮能楽殿で催される。

主催は熱田神宮、中部能楽師会、後援能楽協会名古屋支部。

素謡（金剛流）「神歌」
大塚一二、片野東四郎、地謡豊鳴三千春ほか。

能（観世流）「聲老」水波之伝
シテ梅田邦久、天女小島一英、ツレ武田邦弘、ワキ高安勝久、笛藤田昭彦、小鼓後藤孝一郎、大鼓河村総一郎、太鼓鬼頭喜太郎、地頭塚本秀雄）

能「宝生流」「井筒」
シテ内藤桑二、ワキ西村欽也、間佐藤秀雄、笛藤田六郎兵衛、小鼓福井啓次郎、大鼓吉田定男、地謡武田喜永ほか。

能（喜多流）「船弁慶」船中之語、舟歌、シテ長田驥、子方松山明道、ワキ高安滋郎、間井上松次郎笛筧三男、小鼓柳原冨司忠、大鼓筧鉱一、太鼓助川竜夫、地謡大島久見ほか。

雛子（観世流）「熊坂」柴田収武（宝生流）「枕慈童」衣斐正宣
狂言「二人袴」（野村又三郎、佐藤卯三郎、井上礼之助、大野弘之）
狂言小舞「貝盡し」佐藤友彦
一調（喜多流）「鵜飼」（二井栄逸、鬼頭八郎）**仕舞**（金春流）「加茂」（前田茂穂）ほか。

番組詳細は次号掲載。

日本芸術院賞
喜多　実氏が受賞

日本芸術院（高橋誠一郎院長）は四月七日、昭和四十九年度（第三十一回）の恩賜賞、芸術院賞五人の受賞者を決めた。能楽界からは喜多流宗家、日本能楽会会長の喜多実氏が芸術院賞を受賞した。

芸術院賞は卓越した芸術作品や芸術の進歩にいちじるしい貢献をした人々に贈られるもので、能楽界からはこれまで野口兼資氏（昭和22年）観世華雪（25年）桜間弓川（27年）善竹弥五郎（28年）桜間久太郎（35年）＝以上いずれも物故。

活躍中の人としては近藤乾三（34年）後藤得三（37年）野村万蔵（44年）の三氏で、今回喜多実氏の受賞により四氏となった。

喜多実氏は明治三十三年二月二十三日滋賀県大津市生れ。明治三十八年喜多宗家六平太の養子となり、明治三十九年初舞台。昭和三十二年重要無形文化財保持者（総合指定）に認定され、昭和四十六年喜多流十五世宗家を継承。現在日本能楽会会長。

なお授賞式は、六月上旬天皇陛下をお迎えして、東京・上野の日本芸術院会館で行なわれる。

◆演能カレンダー◆
（熱田神宮　能楽殿）

〔5月〕
11日（日）邦謡会春の会　（来聴歓迎）
18日（日）名古屋猶諷会（番組①面）　（来聴歓迎）
24日（土）一謡会・叶石会大会（番組①面）　（来聴観迎）
25日（日）山本博之師三回忌追善名古屋観衛会大会（番組②面）　（来聴観迎）

〔6月〕
1日（日）青陽会能　（番組②面）　（有料）
5日（木）熱田神宮祭奉納能（番組②面）（来聴歓迎）
8日（日）観世会定式能（番組③面）　（有料）
14日（土）野村又三郎師舞台50年記念やるまい会大会（番組③面）（来聴歓迎）
15日（日）宝生会式定能　（有料）
21日（土）中部金剛会能　（有料）
22日（日）狂言会　（来聴歓迎）
28日（土）和調会　（来聴歓迎）
29日（日）鳳鳴会大会　（来聴歓迎）

〔7月〕
2日（水）幸流全国大会　（来場歓迎）
6日（日）朝日狂言会　（有料）
19日（土）宗家御継承慶祝重文総合指定謝恩謡会別会　（来場歓迎）

〔8月〕
2日（土）名古屋薪能（熱田神宮特設舞台）（有料）
24日（日）熱田神宮能楽殿創立20周年記念能　（有料）

（演能変更の節はご了解下さい）

演能案内

名古屋猶諷会番組
五月十八日（日）午前十時三十分始
熱田神宮能楽殿

素謡　野宮　須知立子　井戸良造
弱法師　鈴木八寿　梅若善高
藤戸　加藤ミネ子　梅若修一　井戸和男
仕舞　雲雀山　井上種子
舞囃子　班女　須知立子　後藤孝一郎　河村総一郎　筧三男
羽衣　小倉陽子　後藤孝一郎　河村総一郎　筧助川　三男　竜夫
野守　松久知代　松久素子　河村総一郎　筧助川　竜夫　三男
素謡　求塚　梅若善高　井上種子
舞囃子　遊行柳　神田佳代子　後藤孝一郎　河村総一郎　助川竜夫　藤田六郎兵衛
砧　アト　奥田敏子　河村総一郎　福井啓次郎　藤田六郎兵衛
玄象　鈴木八寿　後藤孝一郎　河村総一郎　助川竜夫　藤田六郎兵衛
五段替型
素謡　松風　祖父江弼忠　浅野種三郎
能楽　松風　中村実

安達原
杉田合子　高安滋郎　高安勝久　黒頭急進之出間　井上松次郎　後見　池内光之助　梅若修一　地謡　菊池重郎　前川芳周　井戸和男　岡田晃一　岡田朗詠　井戸良造　梅若盛義　善高　鬼頭喜太郎　福井啓次郎　藤田昭彦　筧鉱一

附祝言
主催　名古屋猶諷会
後援　梅若盛義
御来聴歓迎　中日新聞

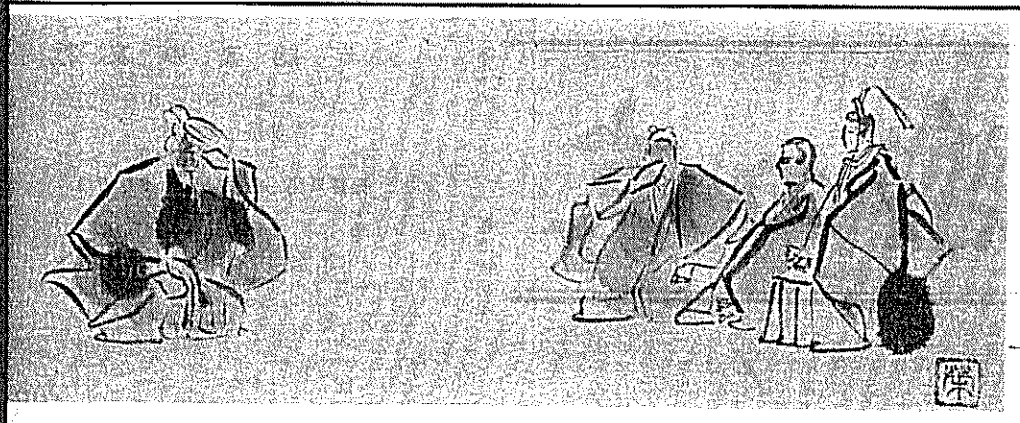
一謡会・叶石会大会
五月二十四日（土）午前九時始
熱田神宮能楽殿

素謡　橋弁慶　水野純臣　松本良三　市村卓彦
班女　木村和加子　奥村敏子　川瀬絹子　中川なみ子
連吟　奏上　新谷護　寺西弘次　植木正能
俊寛　浦田明弘　小椋好和
天鼓　高砂　壬利姫志子　小林琢麻　佐野八重子　田村國中　松代
仕舞　龍野　市村卓彦　玉葛　保坂信　桜川　秋田房子　鞍馬天狗　綱木恵子
囃子　草子洗小町　吉田明　長戸花子　後藤孝一郎　森本重一
百萬　高木のぶ　林千鶴　後藤孝一郎　鬼頭季信
羽衣　岩城康夫　奥村久枝　後藤孝一郎　鬼頭季信
巻絹　跡田喜代子　河村総一郎　後藤孝一郎　鬼頭八郎　森本重一
独吟　隅田川　鵜之段　若杉冨永伍一郎　鈴栄
一調　花筐　内田睦子　河村総一郎
源氏供養　川瀬絹子　永井滋子　福井啓次郎　鬼頭季信
通小町　村木寿恵子　吉田定男　福井啓次郎　筧三男
囃子　松風　橋本増田金子　糸　跡田喜代子　福井啓次郎　筧三男
弱法師　長戸花子　亀山盛一　福井啓次郎　藤田昭彦
猩々　角田冨美　丹羽峰子　柳原冨司忠　鬼頭八郎　藤田昭彦
素謡　砧　佐藤谷川太俊道雄　河村鉦二　三宅川公香　柳原冨司忠　鬼頭季信
田村　吉野天人　内田睦子　柳原冨司忠　助川竜夫　三男
玄象　クツロギ　吉田美津子　後藤孝一郎　筧助川竜夫　三男
囃子　唐船　奥田敏子　福井啓次郎　藤田六郎兵衛　助川竜夫
頼政　山崎晴代　橋本金子　後藤孝一郎　藤田昭彦
善知鳥　別入　山本一　河村総一郎　福井啓次郎　藤田六郎兵衛
融　太田喜昭　川瀬絹子　柳原冨司忠　助川竜夫　藤田昭彦
熊野　遠藤俊雄　佐野徳司　後藤孝一郎　藤田六郎兵衛
独調　屋島　河村大　河村真之介
素謡　善知鳥　堀川竹内修　平田薫
囃子　葛城　小林辰彦　海田トシ子　柳原冨司忠　藤田昭彦
百萬　近藤重次　柳原冨司忠　筧鉱一　鬼頭喜太郎　藤田昭彦
船弁慶　海田トシ子　河村　大　柳原冨司忠　鬼頭好信　藤田昭彦
能　邯鄲　河村真之介　澄川幸子　高安滋郎　西村欽也　佐藤秀雄　福井啓次郎　河村総一郎　筧鉱一　鬼頭喜太郎　三男
間　後見　小島一英　山本勝一　地謡　高橋俊雄　中川雅章　遠藤重次　武田邦弘　梅村鉦二　志田邦久　河村
附祝言
主催　河村一謡会
後援　叶石会
（御来場歓迎）
中日新聞

能紀行 ㊷

雨の吉野

絵と文　二井栄逸



春の雨が降る。菜の花が咲く頃に降る雨を人はなたね梅雨という。山麓に敷きつめた菜の花畑やげんげ畑に降る雨は物憂いまでに静かである。昔の春の汽車の旅は、菜の花とげんげ畑の絨緞の上をする〳〵とすべるような気がして楽しかったが、この頃は、菜の花も少なくなり、げんげ畑は影をひそめてしまった。ところが、こないだ、小雨そぼふる中を一寸した用件もあったので、吉野山へ出かけたら、飛鳥あたりからげんげ畑が雨にぬれて点在していた。そして、旅情をそゝるように白壁の家が、丘の上や山麓に立っていて大和路特有の美しさを見せている。昔、推古天皇から百余年もの間皇居がおかれたこともあって、飛鳥あたりにはなにとなく史都のたゞよいが感ぜられるのである。

大和路は、
白壁多し、白壁に
秋の陽照りて
吾は旅ゆく。

飲み友達であったが、今は亡き友の詠んだ歌であるが、下の句がどうも違うような気がするが思い出せない。今、車窓を走る大和路の風景を見ながら、そんな追憶にふけっていた。

吉野に来て見ると、下千本は葉桜となり、中千本は散り景色。上千本は丁度満開であった。私は満開よりも、七分咲きや、常磐木の中に交ってヒラ〳〵散る桜花を好むが、今、目の前に見るように、全山が満開の桜におうわれているのも壮大で素晴らしいな、と、思った。それは、今日のように、小雨の中にけぶるように見えかくれするせいなのかも知れない。千の利久の築造で今は細川幽斎が再建した竹林院や中千本の部落の間に遠望する如意輪寺、又、蔵王権現をまつる蔵王堂の大伽藍も雨にけぶって、えもいわれぬ風情を見せていた。吉野山を一廻りしてから吉野川河畔を西河あたりまで行って見たが吉野川はどこまで行っても清冽である。

吉野山を舞台とした能に国栖がある。神祕を説く霊験能であるが劇的なところもあり、又、気品の高い神能の一面も見せる絶妙の面白さを持った能である。白鳳文化、律令国家の躍進時代といわれる時代の天皇、天武天皇が吉野で大友の皇子におそわれ、神明の加護によって難をのがれることを作った能である。

天武天皇は、兄の天智天皇の即位とともにその皇太弟となり、天皇を補佐して改新政治の躍進に努力したが、六七一年、天皇がその皇子である大友皇子（おゝとものおうじ）を太政大臣に任じて政治をゆだねたため、皇太弟の大海人皇子（おゝあまのおうじ）（後の天武天皇）の実権をうばうようになってしまった。為に兄弟の仲が不和になり、大海人皇子は大友皇子の衝突をさけ、吉野に身をかくすのである。

後、大海人皇子は大友皇子方を打ちやぶり、飛鳥浄御原（きよみばら）で即位される理である。世に言う、壬申（じんしん）の乱、皇族、貴族等が大海人皇子派と、大友皇子派に分かれ、皇位継承をめぐって争った古代国家においては最大の内乱であった。

内乱の原因は皇位争いであったが、根底には天智天皇の新政策に対する諸豪族の不満が大きく影響しており、その支持が天武側を勝たせたという。

（図は国栖の中入前、と吉野川）

◎春の叙勲◎

四月二十九日発表の春の叙勲で次の方が晴れの受章をされた。

・勲三等瑞宝章　福間昌作氏（元金沢郵政監察局長）＝風雅会会員
・勲五等瑞宝章　津田庄三郎氏（名古屋眼鏡商業協同組合相談役）＝狂言宝石会会員

熱田神宮の舞楽神事

熱田神宮の舞楽神事は五月一日同神宮神楽殿前広場で厳粛、盛大に催された。曲目は次のとおり。

「振鉾」「萬歳楽」「延喜楽」「春楽」「敷手」「散手」「貴徳」長慶子など。

能「安達原」

5月18日　名古屋梅猫会

名古屋梅猫会（梅若盛義師）では、五月十八日（日）熱田神宮能楽殿で春の大会を開催する。

能「安達原」（シテ杉田合子）素謡「求塚」はじめ五番、舞囃子、仕舞など十数番。

（番組①面掲載）

◇　◇　◇

山本博之先生三回忌追善
名古屋観衛会能

五月二十五日（日）午前十時始
熱田神宮　能楽殿

能組

番外連吟　当麻　加藤総兵衛　久田徹二　田中武
キリ　星野泰子　梅若節夫　波多野晋
山中節子　松浦信一郎　八木康夫　千崎隆一

素謡　清経　敦盛　中川芳子　上田みよ　駒形賀津子
仕舞　小鍛冶　山田仲子
松虫

松風　脇田喜美子　吉田定男　柳原富司忠　藤田昭彦
舞囃子　芭蕉　村瀬つね　吉田定男　柳原富司忠　藤田昭彦
山姥　堀端末子　吉田定男　柳原富司忠　藤田昭彦
鶴亀
仕舞　笹之段　猪飼康行　上遠野ひな子　高木町子　青木イツエ
女郎花
融

素謡　披き　恋重荷　加藤歌子　加藤鳳来　三宅重光　杉山鈔光
能　杜若　恋之舞　西村欽也　吉田定男　柳原富司忠　鬼頭喜太郎　藤田昭彦
仕舞　阿野清守　荒木豊治郎　寺岡正治
養老　吉田琴子　後藤孝一郎　鬼頭喜太郎　三男
舞囃子　錦木　川瀬とよ子　後藤孝一郎　鬼頭喜太郎　三男
舞五段
富士太鼓　三宅川公香　柳原富司忠　鉱一　三男

素謡　披き　求塚　芦刈　五藤礼子　江口キリ　福田昌子　井筒　村田京子　鈴木きくえ　葵上　足立奈々子　玉之段　伊藤一枝　藤戸
仕舞

能　実盛　山崎栄治　高安勝久　高安滋郎　飯富雅介　佐藤友彦　鬼頭八郎　後藤孝一郎　藤田六郎兵衛
間

狂言　魚説法　井上松次郎　大野弘之
田村順之
番外仕舞　曽願寺キリ　山本真義
追加
鵜　飼キリ　山本勝一
主催　名古屋観衛会

第十九期第一回
青陽会定期能

六月一日（日）午前十一時始
熱田神宮　能楽殿

熊組　独吟　弓之段　青木武弘
仕舞　高砂　加藤保彦　蟬丸　長谷川章
屋島　生駒美代子　笹之段　服部紗枝

竹生島　高安勝久　飯富雅介　佐藤友彦　西村欽也　亀山盛一　後藤孝一郎　森本重一　助川滝夫
間
後見　生駒美代子　久田徹二　地謡　服部紗枝　長谷川章　加藤保彦　塚本秀雄　佐藤太鉦二　河村太俊

仕舞　雲林院　柴田初太郎

熊野　前野郁子　柴田収武　高安滋郎　高安勝久　吉田定男　柳原富司忠　鬼頭喜太郎　三男
村雨留
後見　加賀敏彦　大槻文蔵　地謡　生駒美代子　眼部紗枝　青木武弘　久田徹二　泉嘉夫

仕舞　茂　久田徹二　天鼓　佐藤太俊　船弁慶　泉嘉夫　野宮　塚本秀雄　鵜之段　河村鉦二
狂言　不見不聞　佐藤卯三郎　井上礼之助　井上松次郎

鐵輪　大槻文蔵　西村欽也　飯富雅介　早鼓　大野弘之　河村総一郎　福井啓次郎　池田茂　鬼頭季信
間
後見　高橋暁一　柴田収武　地謡　前野郁子　加藤保彦　長谷川章　久田嘉夫　塚本秀雄

熱田神宮祭奉納能

六月五日（木）午前十一時始
熱田神宮　能楽殿

能組　百々唐治
（剛）猩々　西村欽也　鬼頭喜太郎　福井啓次郎　鉱一　蒜本重一
後見　片野東四郎　豊嶋駒三郎　地謡　神谷昇司　松矢賢一　小林忠三　菊川憲生　日比野圭昭　豊嶋千春　三宅
能　百万　加藤保彦　大飼米吉　真柄武田　米次郎　高橋弘　林甲子生　藤井完治　上田照也
後見　梅田邦久　橋岡久共　地謡　茂山忠三郎　加賀敏彦　高野瀬武透　小島一英　長谷川章　青木弘　山本勝一　田中秀雄
仕舞　茂　梅若泰英　賀茂　田中久妙

（②面熱田神宮祭奉納能番組のつづき）
仕舞（観）嵐山　加賀敏彦　高野瀬武透　小島一英　長谷川章　青木弘　山本勝一　田中秀雄
車僧　高橋暁一

能楽先人の訓え ⑤

「観世華雪芸談」より

囃子のこと

私共の若い頃は今の能楽師のように囃子の稽古などいたしませんでした。これは何も囃子を軽んずるわけではありませんが囃子の稽古をしますと、自然、小鼓なら小鼓に合わせるように謡ってしまって、つまり囃子謡になって、謡本来のものが崩れるからです。

「わざわざ囃子の稽古をしなくても、普段教えられている通り謡っていれば必ず上手になる」

と常に言いきかされていました。

囃子方の考えと、こちらの解釈との違うこともままありますが、結局は同じ所に落付く場合の方が多いものです。又、

「囃子方にやかましく言われると、シテ方がよくなる」

ということをいわれますが、こことという急所はやはりシテの決断が大切で、囃子方のいうことばかりをきく、というわけにはまいりません。只今は立派な人がおられますから私共も大変勉強になります。

昭和四年大曲（おおまがり・観世能楽堂）で「道成寺」を舞いました時、乱拍子の終りの「寺とは名づけたりや」の所が何度やっても川崎九淵さんの大鼓と呼吸が合いませんでした。私は万三郎兄に習ったとおり「な」の字を引っぱって、「づけ」を走り「名あづけたありや」と謡っているのですが、どうしても「それではうてない」と仰言るのです。それで私もいろいろ研究した結果、「名づけたりや、と並べて謡うと打てる」と家元（故左近）や矢来（先代喜之）に教えられて、その通りに直しました。するとさすがに川崎さんとぴったり合ったのです、以後そのように謡っています。

万三郎兄も先の幸義太郎さん（この人はやかましやで有名なおじいさんでした）に申し合わせの時「もう一度やって見よう、打てない」

といわれて又謡いましたがやはり合いません。しかしこの時は幸さんの方がおさまって下さったのでそのままにやりましたがこれが先程の「名づけたりや」の所でした。ここではいつもこういった問題に悩まされましたが、私も川崎さんのお蔭でいい研究が出来ました。「名づけたりや」のくだりは、小鼓を打っている間に重ねて大鼓を打ち出しますので、並べて謡うとかえって大鼓が打ちにくいように私共は思いますが、ここは他の流儀でもそうしているとのことです。

川崎さんにはこの外いろいろと教えて頂き、又注意も受けましたが、私は自分のふにおちないことは自分の思うようにやっています。「朝長」の懐法（せんぽう）の申合わせでこんなことがありました。この時のお囃子は、大鼓が川崎さん、小鼓が幸祥光さん、太鼓は先代金春惣右衛門さんの林太郎時代でした。後シテの朝長で、私は大曲の心得はもっていましたが、これは若武者なので、静かでいて、しかもきびきびした気持で謡っていました。ところが川崎さんが

「我々の方は調子を落して、太鼓はデンデンと打ち、大鼓も小鼓も調子をあげないようにしている所をあのように謡われるのは気持が違いはしませんか」

とおっしゃいました。こうして注意して下さるのは大変有難いことですが、私には別の考えがありました。即ち、懐法の出は太鼓には非常にむつかしい約束があって楽屋からこれに用いるのを持って出て、デンデンと「懐法」特有の低い水調子にします。これにつれて大鼓、小鼓も後見が替えを用意していて、しめらせて打つのですから、シテの出の前になってわざわざ道具をとりかえる必要もありませんし、調子は若武者ですから位でしめるのがよいと思います。打ち方で自然、しめた感じが出る筈で、しめらせすぎると老人になってしまいます。このことは書物にも書いてありますので、三人の方にもよくよくこのこころをお願いしましたから、本舞台は気持よくつとめることが出来ました。

幸さんは何もおっしゃりませんでしたが道具は取替えておられたようでした。これはお囃子の方のきまりか知れませんが、私の考えは今申しました通りです。

立派な観客のマナー

和泉流・大蔵流狂言団海外公演

…野村又三郎師のアメリカ便り…

和泉流・大蔵流狂言団のアメリカ、カナダ、中南米公演は、三月号既報のように、約五十日間にわたって行なわれるが、同公演に参加している野村又三郎師（本紙編集同人）はアメリカ便りとしてその模様を次のように寄せられました。（四月二十五日シャトル発信）

今回の編成は、和泉・大蔵合同の狂言団として、アメリカ、カナダ、南米の公演です。五十二日間のハードスケジュール。

野村万作団長として、万之丞、万之介、又三郎と狂言の会のメンバーに、茂山千五郎、正義師らの参加で十一名。

三月二十八日出発して、シカゴ、オタワと公演があり（又三郎、万之介はオタワより参加）、シアトル公演で半分を終了します。（四月二十五日現在）

公演に対する反応は、アメリカ人の感想を直接に聞く機会が得られず、はっきりしたことはいえませんが、舞台から感ずることは笑いが非常に多いことです。要所要所で笑いと拍手があり、舞台が盛り上がっていたこと、観客のマナーが実に立派で、日本人として見習うべきと大いに感じました。開演に先立ち着席、演じている間に人の出入りがみられず、実に静粛です。

このあとシャトル、サンフランシスコを経て、メキシコへ入ります。

中南米での公演予定地は次のとおりです。

▽4月28日　メキシコシティ。モンテレイ。グァダラハラ（メキシコ）

▽5月3、4日、ボゴタ（コロンビア）

▽5月6、7日リマ（ペルー）

▽5月9、10、11日ブエノスアイレス（アルゼンチン）

▽5月12、13日サンパウロ（ブラジル）

▽5月14日　ブラジリア（ブラジル）

▽5月15、16日　リオディジャネイロ（ブラジル）

▽5月17、18日　カラカス（ベネゼエラ）

なお一行は五月二十二日帰国の予定。

五十年度第三回 観世会定式能

六月八日（日）十二時三十分始
熱田神宮能楽殿

能組

能　巻絹　坂井音重　観世元正
福王和幸　河村総一郎　大倉長十郎
能　鵜飼　林甲子生　後藤契雲　犬飼末吉
地謡　梅田邦弘　塚本邦久　加藤秀雄　加藤総兵衛　鬼頭喜太郎　藤田昭彦

入場無料

主催　熱田神宮
後援　中部能楽師会

附祝言

主催　能楽協会名古屋支部
後援　熱田神宮

（宝）土蜘　高安滋郎　高安勝久　西村欽也　大野弘之　河村総一郎　柳原富司　鬼頭忠　鬼頭好信　季信
間　竹内澄子　玉井弘子　戸田和子　足立知子　後見　須賀喜一明　小沢辰巳　平子稲美　加藤勝利　内藤泰二　吉田俊彦　地謡　正宜孝

（宮）飛鳥川　長田驍　河村総一郎　福井啓次郎　藤田昭彦　地謡　二井栄逸　川井宏
囃子　佐藤秀雄　井上礼之助
狂言　芥川勝一　小蝶トモ　頼光竹腰　稲川鬼頭嘉男　鈴木寿一　義久

（観）小袖曽我　野村又三郎　吉田定男　後藤孝一郎　笠三男
間　殿島修二　柴田収武　地謡　加藤水田中　加藤敏三　中村和男　元武　保彦　林鉄洋郎　後藤木田　広瀬正光　瑞弘男
後見　中村秀太郎　岡田光俊　佐藤久　真柄塚本　米次秀雄
仕舞

（春）鵜之段　前田茂穂

（観）唐船　加藤良久　吉田熊沢恵美子　有賀滋子　高木美智子　河村増田一雄　小島邦夫　長谷川章英　青木武弘　瀬戸
（観）雲雀山　加藤総兵衛　河村増田一雄　武田梅田邦久　杉村弘翠
（観）蝶丸　連吟　犬飼末吉　後藤契雲
母　五郎　眼部紗枝
十郎　生駒美代子　前野郁子
（観）車僧　嵐山加賀敬彦　高橋瞭一

附祝言

主催　名古屋観世会

（②面熱田神宮祭奉納能番組のつづき）

仕舞
間　茂山忠三郎
後見　梅田邦久　橋岡久共　地謡　神谷真柄　武田犬飼　米次保彦　弘吉　高橋上藤井　田照　林甲子生　也治
賀茂　笹之段　梅若景英　橋岡久共　地謡　水藤梅田久　田中　元三邦秀　久田武
歌占　上田照也
狂言　因幡堂　茂山忠三郎　茂山正義
仕舞
後見　塚本秀雄　橋岡久共　地謡　河村青木　武二弘　長谷川章　中村和男　杉坂井村　竹翠　武田梅若　宗和景英
花筐　高安滋郎　後藤孝一郎　笠鉱一　後藤孝一郎　藤田六郎兵衛

（剛）猩々　百々康治　西村欽也　笠福井啓次郎　鉱一　鬼頭喜太郎　森本重一
後見　片野東四郎　豊嶋訓三　地謡　神谷昇　真柄司　武田日野圭昭　松矢賢一　小林菊川　忠三豊嶋　水谷三千春　荒川清　森典生

附祝言

主催　名古屋観世会

野村又三郎師舞台五十年記念 狂言と素謡の会

六月十四日（土）正一時始
熱田神宮能楽殿

魚説法　寺田昌則　鶴亀　木村華子　徳田文三　佐藤はつ　水野知子
仕舞　猩々　遠藤茂
弱法師　クリクセヌキ　加納浩行
盆山　金森瞳　金森武美　赤塚予枝子
口真似　徳田文三　井上礼之助
伯母ケ酒　菊慈童　仕舞　花盗人　狂ヒ　伊藤正子　山岡冬味
羽衣　殺生石　村井碩子　木村栄一　後藤紀一
クリクセヌキ　宇治ノ晒　赤塚加代子
小舞　吉野葉　赤塚予枝子
大原木　生駒静子
附子　津田庄三郎　中北宇多子　井川澄子
佐渡狐　長谷川宏之　駒田等　滝沢修二
土蜘蛛　頼光　トモ　胡蝶　藤井沙田子　中尾いく　伊藤ルイ子　長戸さかゑ
小鍛冶　林本政夫　クリクセヌキ　村井顧子　桐谷弘充　遠藤茂　石河勢以子
壺茶　仁王　堀江四郎　岡崎久太郎　東助　加納保一　井川澄子　滝沢修二　野村又三郎　中北宇多子　服部孫兵衛　津田庄三郎
御来場歓迎　主催　能楽協会　賛助　東京能楽会　玉信　石也　留会

鳳鳴会大会

六月二十九日（日）午前九時始
熱田神宮能楽殿

神歌　素謡　千才　武田志房
竹生島　武田志房　伊藤　実　古橋正士
雨月　浅井一元　早川茂一郎　吉田義正
弱法師　竹内正　山田茂
藤戸　間下藤平　松井弘　山森幸男
仕舞　鳳　高橋すゑの　松　富士太鼓　財前光枝
素謡　トモエ　小島陸一　小薮義郎
景清　二村正　村上清
定家　財前光枝　高橋すゑの
仕舞　源氏供養　二村正　忠度　竹内正
素謡　桑山　三川昭　求塚　舞囃子　吉川正和
高砂　長谷川京子　後藤孝一郎　鬼頭喜太郎　藤田昭彦　覚鉱一郎　覚鬼頭喜太郎三男
羽衣　武田孝子　後藤孝一郎　覚鉱一郎
自然居士　山崎照美　覚鉱一郎　福井啓次郎　藤田昭彦
山姥　永味善昭　覚鉱一郎　福井啓次郎　鬼頭喜太郎三男
砧　屋島　車之段　小薮義郎　吉田義正　放下僧　浅井一元　独吟　野々山繁　関戸操子　鵜之段　遊行柳
野々山正彦　近藤俊三　後藤幸一郎
卒都婆小町　木村善一　一柳正直　加藤山松
能　子方　河村真之介　ツレ　郷　郭太郎　山本一
善知鳥　高安滋郎　河村総一郎　福井啓次郎　覚三男
間　大野弘之

安宅　八賀和彦　覚鉱一郎　後藤孝一郎　藤田昭彦
花筐　石井鐘子　河村総一郎　福井啓次郎　藤田昭彦
葛城　早川つねよ　河村総一郎　福井啓次郎　鬼頭喜太郎三男　覚
大和舞
玄象　山森幸男　覚鉱一郎　後藤孝一郎　鬼頭喜太郎　藤田昭彦
舟弁慶　石井素子　河村総一郎　後藤孝一郎　覚　鬼頭喜太郎三男
祝言仕舞　々　武田太加志

主催　鳳鳴会
後援　中日新聞

名古屋狂言小劇場
第10回記念公演
5月23、24日　名演小劇場で

ポピューラーでわかりやすい曲目を選び手軽な料金で都心の小ホールで狂言と出合う……こういった形で催されている「名古屋狂言小劇場」は、このたび第十回を記念してとのシリーズの総集として名曲六番を選び、きたる五月二十三日（金）二十四日（土）の二日間、記念公演「狂言名曲集」が東区・錦通り・名演小劇場で催される。

とくに今回は和泉流宗家和泉保之師の来演も予定され、地元狂言師が総出演する。

主催　名古屋大声会、狂言共同社、名演小劇場。

問い合わせは、名古屋大声会（名古屋市北区豆園町二―五三、佐藤方、電話九一一―八七八四番）

入場料前売八百円、当日千円。前売券は市内各プレイガイド、各大学生協、および名演会館、チケットサービスにて発売中。

番組次のとおり。

第一夜　五月二十三日（金）
午後六時三十分開演
「入間川」（いるまがわ）
大名・佐藤友彦、太郎冠者・鷲見政行、入間の何某・佐藤秀雄
「空腕」（そらうで）
太郎冠者・野村又三郎、主人・井上松次郎
「犬山伏」（いぬやまぶし）
山伏・井上礼之助、僧侶・佐藤卯三郎、茶屋・大野弘之、犬・佐藤友彦

第二夜　五月二十四日（土）
午後六時三十分開演
「墨塗」（すみぬり）
大名・大野弘之、太郎冠者・佐藤友彦、女・佐藤秀雄
「棒縛り」（ぼうしばり）
太郎冠者・和泉保之、次郎冠者・井上松次郎、主人・井上礼之助
「悪太郎」（あくたろう）
悪太郎・佐藤卯三郎、伯父・佐藤秀雄、僧侶・井上松次郎

一謡会大会
5月24日、能「邯鄲」

河村一謡会（河村延二師）叶石会（河村総一郎師）では、五月二十四日（土）熱田神宮能楽殿で春の大会を開催する。

能「邯鄲」（シテ澄川幸子さん）
素謡「砧」（シテ谷川道雄氏）一調
独調、囃子、独吟、連吟、仕舞など三十数番（番組①面掲載）

故山本博之師三回忌追善能
5月24日　名古屋観衛会

名古屋観衛会では、故山本博之師三回忌追善の能会を五月二十五日（日）熱田神宮能楽殿で開催する。

能組は②面掲載のとおりで、名誉師範加納保一氏が舞囃子「砧」加藤敬子さんが能「杜若」山崎栄治氏が「実盛」を演ずる。また披きとして素謡「恋重荷」三宅重光氏「求塚」川瀬保氏ほか舞囃子、仕舞など二十数番。来場歓迎

春の邦謡会
5月18日　円庄で

邦謡会（梅田邦久師）は、五月十一日（日）熱田神宮能楽殿で春の邦謡会（第一回）を開催。

五月十八日（日）午前十時から中区、テレビ塔西側、円庄で第二回邦謡会を催す。

素謡「卒都婆小町」（水野美代子、梅田邦久、渋井義寿）「道成寺」（橋本淑子、梅田邦久、橋本礒造、間佐藤秀雄）など、来聴歓迎。

〔住所移転〕
・熊沢恵美子氏（観世流）
新住所（〒四六五）名古屋市名東区猪子石高根十五―六八　日車マンション平和ケ丘四〇四
電話七八二―六九七三番
・真柄米次氏　（観世流）
新住所（〒四五一）名古屋市西区江向町三ノ四八
電話（五三一）二三七七番

〔住居表示変更〕
・杉村竹翠氏（観世流）
（〒四六五）名古屋市名東区藤ケ丘八三
・佐藤太俊氏（観世流）
（〒四六五）名古屋市名東区上社二丁目三七―一〇二

宝生流謡本、囃子本など定価改定
わんや書店　6月1日から

宝生流など謡本発売元、わんや書店（本店東京都千代田区神田神保町三―九）では、六月一日から宝生流諸謡本、囃子本等の定価を改定する。

改定の一部つぎのとおり（カッコ内旧定価）

〔訂正〕　本紙4月号④面、ラジオ欄の予定番組中、ラジオ第一放送五月二十四日（土）、NHK・FM五月十一日（日）に観世流「葵上」橋岡久馬師とあるのは、「橋岡久馬師」の誤りにつき、お詫

能楽の友社
町2―20
1）
9 8 4
3 6 3 9 3
500円
600円
40円

伊勢神宮奉納能
金春、喜多、観世流で

伊勢神宮神楽祭にあたり、内宮能楽殿で恒例の奉納行事として、奉納能を催し、名古屋からも参加出演して盛会であった。

春納能組は次のとおり。午前十時三十分始。

演能案内

清韻会能
四月二十七日（日）午前十一時始

幸友会春の大会
四月二十九日（日）午前十時始
熱田神宮能楽殿

5月・6月放送予定

◈ NHKラジオ第一放送　（毎週土曜日午後6時5分）
〔5月〕
17日（土）宝生流「半部」大坪十喜雄ほか
24日（土）観世流「葵上」橋岡久馬ほか
31日（土）金春流「玉鬘」金春欣三ほか
〔6月〕
7日（土）宝生流「須磨源氏」三川泉ほか
14日（土）狂言二題「内沙汰」野村万之丞「鬼の継子」山本東次郎
21日（土）観世流「浮舟」梅若泰之ほか
28日（土）観世流「景清」浦田保利ほか

◈ NHK・FM 毎週日曜日　（午前7時15分）
〔5月〕
11日（日）観世流「葵上」橋岡久馬ほか
18日（日）喜多流「野宮」栗谷新太郎ほか
25日（日）観世流「夕顔」浅見重信ほか
〔6月〕　源氏物語シリーズ
1日（日）宝生流「須磨源氏」三川泉ほか
8日（日）金春流「玉鬘」金春欣三ほか
15日（日）観世流「浮舟」梅若泰之ほか
22日（日）観世流「源氏供養」観世元正ほか
29日（日）狂言二題「内沙汰」「鬼の継子」

◈ NHK教育テレビ
5月18日（日）　午後9時
「NHK劇場」
金春流　能「海人」桜間道雄ほか
和泉流狂言「居杭」野村万蔵、三宅藤九郎ほか
予定番組について変更になることがありますのでご了解下さい。

豊橋で狂言鑑賞会
山本浅太郎さんの熱意実る

…新聞ダイジェスト…

〝若い人たちにすばらしい狂言を見せてあげたくて〟――毎月もらう恩給も、その日のためにコツコツ貯金、町の魚屋さんのそんな執念が実る…来る六月七日午後一時から豊橋市民文化会館で、市内の小、中、高校生約千人が無料招待される「狂言鑑賞会」について古典芸能への情熱を傾ける豊橋市魚町「魚伊」の山本浅太郎氏の記事が、中日新聞（4月25日朝刊）に掲載された。

豊橋市魚町は吉田藩時代から能狂言の盛んな土地で、安海熊野神社には明治三十五年能舞台がつくられたが昭和十九年の大空襲で焼失。

山本氏は少年時代から狂言を習い、現在野村又三郎師（やるまい会主宰）に師事。市教委へ日参して、会場の提供を約束。六月七日に開催することになったもので、その情熱を山本氏の言葉を通じて紹介されている。

なお当日は野村万之丞、野村万作、野村又三郎師らが出演する。

観世流謡曲本を取揃えました
ちくさ正文館書店
名古屋市千種区・ちくさ駅前
電話（741）1137番（代表）

観世流・金剛流
宗家本発行元
檜書店
〒101　東京都千代田区神田小川町2―1　電話（291）2488―9　振替東京3552
〒604　京都市中京区二条通鉄屋町東入　電話（231）1990　振替京都113

割烹・小料理
北陸の味鱒すし
志乃
北区元柳原町2―8
電話（911）4653番

中華料理
桃源亭
御宴会・御集会・御商談等には是非御座敷を御利用下さい
中区栄三丁目29（松坂屋南）電話 241－2938・6081
支店　名鉄百貨店9階　のれん茶屋

創立25周年
CBC & you
中部日本放送

能樂の友

題字は熱田神宮　篠田宮司筆

発行　能楽の友社
名古屋市千種区吹上本町2－20
（郵便番号　464）
電話　（731）7984
振替口座　名古屋　36393
購読料　1年　500円
郵送の場合　1年　600円
一部　40円

第10回　名古屋　薪能

能「小督」「花月」「紅葉狩」

8月2日　熱田神宮神苑で

「名古屋薪能」はことし第十回を迎え、盛夏の八月二日（土）熱田神宮神楽殿前・特設舞台で催される。

今回は、昨年につづいて能三番曲目は、観世流能「小督」（シテ殿島修二）宝生流能「花月」（シテ竹内澄子）観世流能「紅葉狩」（シテ小島一茨）狂言「太刀奪」（野村又三郎はか）喜多流囃子「加茂」（長田驍）金剛流「鉄輪」（菊川慈三）ほか仕舞など。

午後五時半始。

（番組詳細次号）

重要無形文化財　総合指定

新たに百十六名認定

日本能楽会　会員三百名越える

文化庁では重要無形文化財指定・日本能楽会会員の増員をこのほど決定、さる五月二十八日、百十六名の新会員に認定書が授与された。

日本能楽会は、昭和三十二年能楽が重要無形文化財総合指定をうけたときに設立され、昭和四十年社団法人となり、現会員百八十七名に今回の認定百十六人が加わり三百三人となった。

各役別の人員は、シテ方観世流百二十一人、金春流十一人、宝生流三十一人、金剛流九人、喜多流十九人、ワキ方十九人、囃子方六十八人、狂言方二十五人である。

新会員は次の方々である。（敬称略、カッコ内は現住所）

（シテ方・観世流）宇治正夫（宝塚）丹下真次郎（京都）福田源平（神戸）平野千賀（堺）佐藤元章（東京）工一楠松（東京）波多野敬（大阪）梅若新太郎（東京）井田文二（大阪）小宮利一（福岡）下川勝一（神戸）小田切稽陽（福岡）若松宏守（西宮）田村勇（大阪）亀山雅臣（東京）小山敬夫（八尾）松山長昭（横浜）塩谷武治（大阪）井戸良造（大阪）小早川泰士（東京）井上甚太郎（東京）分林保三（京都）角栄太郎（北九州）佐伯栄造（神戸）久保田雄（尼崎）足立清春（豊中）井本完二（別府）永島誠二（東京）吉田佳弘（京都）松野良輝（京都）石井満一（岡山）羽瀬清（茨木）宮永恒一（大分）小西保二郎（吹田）阿部正行（宝塚）坂口雅介（福岡）大山順造（大阪）竹前嘉房（市川）小林義明（大阪）川田八郎（大阪）松平義男（東京）矢代寿弥（京都）青木祥二郎（京都）郷郭太郎（東京）金子順行（横浜）染谷宗孝（東京）高橋正次（東京）多久島利吉（唐津）二宮禎毅（東京）谷本正鉦（八王子）渋谷晴一（東京）前田行夫（東京）泉成佳（粕江）勝部全一（西宮）岡田朗詠（東京）小島芳雄（東京）古橋正士（長浜）五木田武計（東京）南条秀雄（京都）武田安弘（鎌倉）浜野金峰（東京）八木康夫（堺）田辺竹生（横浜）河村晴夫（京都）泉嘉夫（西宮）木内菁（大阪）白滝康（埼玉）三宅昭男（高槻）小寺一郎（豊中）河村隆司（京都）泉泰孝（東京）吉井順一（西宮）生一泰知（大阪）谷村一太郎（東京）杉浦元三郎（京都）観世武雄（東京）

（シテ方金春流）松井閑花（熊本）高橋汎（東京）

（シテ方・宝生流）山田太佐久（石川）内藤泰二（名古屋）馬緤富四夫（西宮）渡辺容之助（金沢）本間英孝（東京）高橋章（東京）高橋勇（東京）三川淳雄（東京）

（シテ方・喜多流）狩野勇雄（熊本）笠井改（福岡）太田嘉雅（福岡）粟谷辰三（所沢）粟谷幸雄（福岡）

（ワキ方・高安流）大山要二郎（長崎）山崎俊輔（大牟田）

（ワキ方・福王流）指吸雅之助（大阪）

（ワキ方・宝生流）殿田保輔（金沢）宝生閑（東京）

（笛方・一噌流）椙崎平造（福岡）

（笛方・森田流）真光義明（奈良）野口浩和（大阪）光田洋一（京都）

（小鼓方・幸流）住駒明弘（埼玉）

（小鼓方・幸清流）本田三喜雄（熊本）（小鼓方・大倉流）北村治（東京）黒田勝（熊本）

（小鼓方・観世流）敷村鉄雄（東京）

（大鼓方・葛野流）三王礼夫（広島）

（大鼓方・高安流）宮原康寿（熊本）柿原繁蔵（福岡）加藤良助（別府）（太鼓方・金春流）滝本悠雅（熊本）

（狂言方・大蔵流）王丸治三郎（福岡）古川七郎（松山）

（狂言方・和泉流）佐藤卯三郎（名古屋）佐藤秀雄（名古屋）井上礼之助（愛知）

野村又三郎師舞台五十年記念

狂言と素謡の会

六月十四日（土）正一時始
熱田神宮能楽殿

魚説法　鶴亀　寺田昌則　徳田文三
仕舞　猩々　木村華子　佐藤はつ
弱法師　クリ　クセ　ヌキ　遠藤茂　水野知子
盆山　クリ　クセ　ヌキ　加納浩行　加藤昭
口真似　金森瞳　金森武美　赤塚予枝子
伯母ケ酒　菊慈童　徳田文三　井上礼之助
仕舞　花筐　狂ヒ　伊藤正子　山岡冬味
殺生石　村井碩子
羽衣　木村栄一　クリ　クセ　ヌキ　後藤紀一
宇治ノ晒　赤塚加代子
小舞　吉野葉　赤塚予枝子
大原木　生駒静子
附子　津田庄三郎　中北宇多子　井川澄子
佐渡狐　長谷川宏之　駒田等　滝沢修二
土蜘蛛　頼光　藤井沙田子　トモ　中尾いく　胡蝶　伊藤ルイ子　長戸さかえ
小鍛冶　林本政夫　クリ　クセ　ヌキ　石河勢以子　桐谷弘充　遠藤茂
壺茶　村井碩子　野村又三郎　滝沢修二
仁王　堀江四郎　岡崎久太郎　中林東助　北宇多子　服部孫兵衛　井川澄子　加納保一　津田庄三郎

主催　熱田神宮
能楽協会名古屋支部
後援　名古屋市
中部能楽師会

第十九期・第三回

名古屋宝生会定式能

六月十五日（日）午後一時始
熱田神宮能楽殿

素謡　馬緤富四夫　鞍馬天狗　衣斐正宜　鬼頭嘉男
地謡　佐藤並穂　河野邦男　高田真文　榎本稔　馬緤富四夫　衣斐正宜　加藤勝利　鬼頭嘉男
仕舞　田村寿一　稲川　小杜若歌　キリ　鈴木義久　竹腰勝一　地謡　葛原正枝　倉本雅　玉井弘子　足立知子
大原御幸　宝生英雄　本間孝　吉田俊彦　内藤泰二　高安勝久　立石澄雄　高安滋郎　飯富雅介　福井啓次郎　寛鉱一　藤田六郎兵衛
能　井上礼之助
後見　倉本雅　戸田和　地謡　須賀明　平井子　近藤源　仲井重　十次郎　稲川寿一　馬緤富四夫　辰巳孝　衣斐正宜
狂言　空腕　井上松次郎　佐藤友彦
仕舞　殺生石　辰巳孝
羽衣　倉本雅　高安勝久　吉田定男　福井良久　鬼頭寛　好信　三男
盤渉
後見　内藤泰二　吉田俊彦　地謡　石井孝三　小喜一　伊藤巳　堀江義雄　昌　本間英孝　鬼頭嘉男　衣斐正宜

主催　名古屋宝生会
名古屋市東区東門前町三ノ二三
高橋銕三郎方電話九三一－一四二九番
後援　中日新聞

◆演能カレンダー◆

（熱田神宮　能楽殿）

〔6月〕
14日（土）野村又三郎師舞台50年記念　狂言と素謡の会（番組①面）（来聴歓迎）
15日（日）宝生会定式能　（番組①面）（有料）
21日（土）中部金剛会能　（番組②面）（有料）
22日（日）和泉流　狂言会　（来聴歓迎）
28日（土）和調会　（来聴歓迎）
29日（日）鳳鳴会大会　番組②面（来聴歓迎）

〔7月〕
2日（水）幸流全国大会　（来場歓迎）
6日（日）朝日狂言会　（番組③面）（有料）
19日（土）宗家御継承慶祝　重文総合指定謝恩　鼓雲会別会　（来場歓迎）
26日（土）名古屋観世九皐会定式能（番組③面）（有料）

〔8月〕
2日（土）名古屋薪能　（熱田神宮特設舞台）（有料）
24日（日）熱田神宮能楽殿創立20周年記念能　（番組④面）（有料）

〔9月〕
7日（日）大衆能　（愛知文化講堂）
14日（日）観世会定式能　（有料）
15日（祭）鼓雲会
20日（土）名古屋観世九皐会定式能　（有料）
21日（日）宝生会定式能　（有料）
24日（祭）山本観衛会別会　（有料）
28日（日）竹韻会大会

（演能変更の節はご了解下さい）

〔第103号
能楽の友
能楽子
篭太鼓　後藤巳裕喜
小督　長谷川美知子
玉葛　斎藤節子
吉田定男　山口亮
寛鉱一　福井啓次郎
後藤孝一郎
森本重一
藤田六郎兵衛
鬼頭季信
主催　鼓雲会
名古屋市昭和区山里町一三五
内藤方　電話八三二－三四四九番
後援　中日新聞
主催　熱田神宮
能楽協会名古屋支部
後援　名古屋市
中部能楽師会
前売八〇〇円、当日一〇〇〇円、入場券は能楽殿、市内各プレイガイド、出演者各楽師宅
あなたに
富
XXX
本社
ショールーム
工場

能紀行 ㊸

建礼門院

絵と文　二井栄逸

清盛を父に持った平徳子は高倉天皇の中宮となり、その第一皇子は安徳天皇を即位、その翌年、建礼門院の号をたまわった。

その建礼門院を主役にした小原御幸（大原御幸とも）は、晩春から初夏へかけての爽かな情景を織りまぜ、平家終焉の往事を追懐する抒情詩的な気品高い能になっている。夏草のそよぎ、岩間に落ちる水の音、やまほとゝぎすの声等、爽かな外景が、かえって幽寂哀愁の余韻をたゞよわしているのである。

門院は二位殿や、安徳天皇、平家一門の菩提を弔うため尼となり洛北大原の里の寂光院に幽居していたが、後白河法皇は門院の身の上をあわれに思い、かねてから訪ねようと思っていたが、頼朝をはばかって果せず、文治二年初夏の頃、補陀落寺参詣に託して大原へ御幸をすゝめるのであった。

門院は、若くして世を捨てたものの迷いの多いこの世を忘れ得ず恥しいことと思いつゝ過ごす此頃であるのに、法皇と会った噂が世間に立てば立つほど又憂き思いの涙に袖をぬらさねばならず、思いなやんだが、法皇も共に仏道に入った身なればせめてなぐさむ事もあろうと思い、法皇の訪れを喜ぶのである。そして、宮中で見なれた月を山里で見るとはおもいもしなかった、と、この御幸の有難さ嬉しさを歌によむのであった。

思わずも
深山の奥の
住まいして
雲居の月を
よそに見んとは。

やがて法皇は、

「仏菩薩でなければ見られない六道の有様を門院は御覧になったと伝えきいたが、まことに御覧になったのであろうか」

門院は、夏草のそよぎに少し身をかたむけてから静かに答える。

勅諚はさる御事にて候えども
つら〳〵我が身を案じ見るに。
それ身を観ずれば岸のあたりに根を離れたる草。命を論ずれば江のほとりに繋がざる舟。されば天上の楽しみも。身に白露の玉葛。存え果てぬ年月も。終に五衰の衰への。消えもやられぬ命のうちに。六道のちまたに迷いしなり。

一門が西海の波に漂い飢渇に苦しむ餓鬼道。波浪さかまき船中の人々の泣き叫ぶ叫喚地獄、陸上の修羅道、馬の嘶の音が恐ろしくさえる畜生道。このような苦しみはじっくりしたクセの謡で表現される。そして、一門の教経、知盛の壮烈な最後の有様。二位殿と共に海に沈む安徳天皇に続いて門院も入水するが、源氏の武士に助けられ、かい無き命をながらえて、再び龍顔にまみえる不覚さに涙を流すのであった。

一切に衆生が善悪の定めによって死後必ずゆくという六道の有様を、生きながら見聞きした悲劇のヒロインには、今は安らかな境遇でありながら、その苦しみが折りにふれては去来し、胸をしめつけるのである。

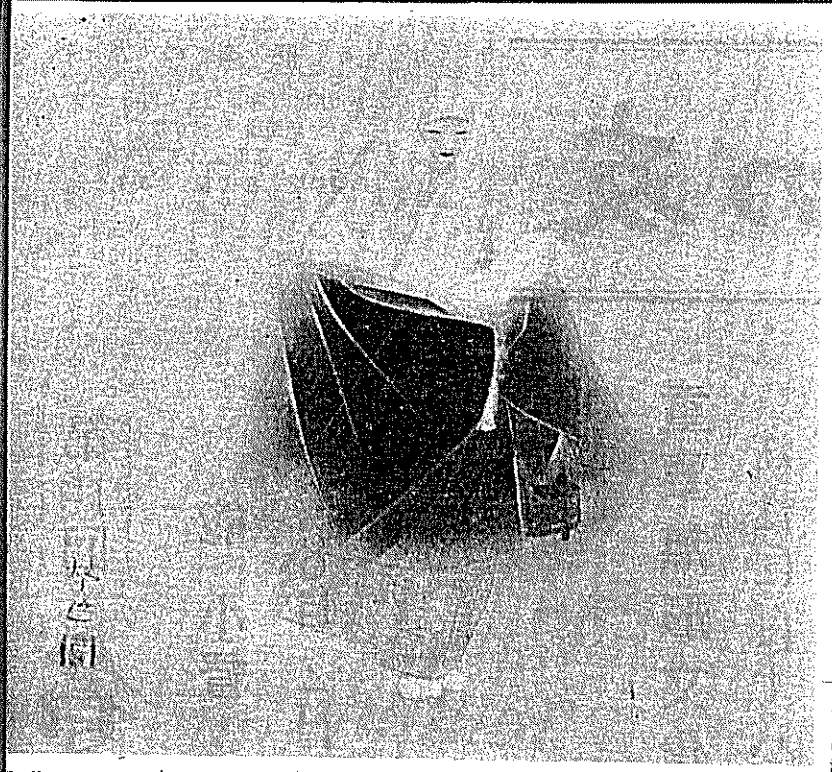
そして、平家全盛時代の華麗な姿、父清盛、兄重盛、宗盛、知盛重衡等のことなどが思い出され、人の世の有為転変の無情さに明け暮れする。高貴の身なるが故の悲しみはいかばかり大きかったであろう。

× × × ×

湯の山の森には今、シライト草が真盛りだという。素焼のつぼに一輪を生けるとまことに良い花である。細い葉と、スラリとのびた茎に純白の小花をつけた姿は、気品があり建礼門院を想像させる。

松の花粉が散り、樹々の若葉を返す程に青嵐がさわぐ。檜の山が全山波打つように見えるのは何となく野生的でいいし、風の吹かない日は山の匂いがしみじみとつたわってきて気持ちがよい。

（絵は建礼門院）



理事長に金春信高氏

能楽協会の役員改選

社団法人能楽協会は、さる五月二十八日、東京銀座能楽堂で総会を開き役員の任期満了に伴う改選が行なわれ理事を選任理事会で互選の結果、新理事長に金春信高氏が選出された。

新理事は次のとおり。

（敬称略）

（観世流）中島成晃、坂井音次郎、藤波重和、関

（金春流）金春信高、桜間道雄

（宝生流）大坪十喜雄、武田喜永

（金剛流）祖田道雄、広田陸一

（喜多流）喜多長世、粟谷新太郎

（脇方・狂言方）豊嶋十郎、宝生閑、大蔵弥太郎、野村万之丞

（囃子方）寺井政数、鵜沢寿、佐伯実、宇野親一、三島元太郎

各支部長（東京）観世喜之（名古屋）藤田六郎兵衛（大阪）大西信久（北陸）佐野正治（京都）井上嘉久（神戸）藤井久雄

後見 ⑥

父や梅若の父からよく言われていたことは「舞台で一番目立たない役が後見なのだ」ということです。

「後見」は、いえ私はかりでなく誰でも一たび後見座に座ったらシテと一緒にお腹で謡っているのです。

そして、若しシテがあやしくなってくるとその気配を感じて、止ったなと思った瞬間あて一と言って面の内側、額と頬に沈を

とか、注意をしなければなりません。

実際面によっては非常によく照る面と、曇る面があります。

ここで面のことですが、他の流儀では「面あて」と言って面の内側、額と頬に沈を

中部金剛会能

六月二十一日（土）午後一時始
熱田神宮能楽殿

能 杜若
吉川周子　高安滋郎　後藤孝一郎　吉田定男　笠頭八郎　宇高通成　広田泰三　日比野圭昭　地謡

後見 鶴之段　水谷泰典　日比野圭昭　地謡
笠之段　小島嬉美子　三鶴香代子　石浜明子　牧野清元子　今井清隆　重本昌三　鈴木タミ　村田たつ子　伊藤雅子　河井隆　木村美智子　熊沢昭代

狂言 竹ノ子　井上礼之助　佐藤卯三郎　井上松次郎
歌占　宇高通成　片野東四郎　小川源太郎　松野恭蔵　百々康治

仕舞 網之段　安藤良子　鈴木タミ　地謡
葵野宮　石浜明子　今井清隆　広田泰三　重本昌三　鈴木タミ　村田たつ子　都丸重勇

独吟 木曽願書　片野東四郎

夜討曽我

能　河村総一郎　福井啓次郎　藤田昭彦
間　佐藤秀雄

後見　豊嶋弥左衛門　広田泰三　今井清隆　地謡
大羽林　小井上　荒川　桐丸　隆勇　隆清　日比野圭昭　徳永寛一　忠義　松野恭憲　司三明　水谷　宇高　豊嶋　泰典　通成　調三憲

和泉流素人狂言会

六月二十二日（日）午後一時始
熱田神宮能楽殿

狂言「仁王」ほか十番
（ご来場歓迎）

和調会夏季大会

六月二十八日（土）正午始
熱田神宮能楽殿

素謡「巴」（シテ長沼てる子）「鵜飼」（土居雅子）「野宮」（シテ辻田たま）ほか囃子八番、仕舞十番
（ご来場歓迎）

第十七回朝日狂言会

七月六日（日）午後二時始
熱田神宮能楽殿

五十年度第二回名古屋観世九皐会定式能

鳳鳴会大会

六月二十九日（日）午前九時始
熱田神宮能楽殿

神歌　素謡　千才　武田志房

竹生島　武田志房　伊藤実　古橋正士
雨月　浅井一元　早川茂一郎　吉田義正
弱法師　竹内正　山田茂
藤戸　間下藤平　松井弘　山森幸男

仕舞　風　高橋すゑの　松富士太鼓　財前光枝

素謡　ツレ　小島陸一　小薮義郎　二村正　村上清
定家　財前光枝　高橋すゑの
源氏供養　忠度　二村正　竹内正

求塚　舞　雛子　桑山昭三　川崎紘平　吉川正和
高砂　長谷川京子　後藤孝一郎　鬼頭喜太郎　藤田昭彦
羽衣　武田孝子　後藤孝一郎　鬼頭喜太郎　三男
自然居士　山崎照美　後藤孝一郎　鬼頭喜太郎　藤田昭彦
山姥　永味善昭　福井啓次郎　鬼頭喜太郎　三男
砧　野々山正彦　近藤俊三　小薮義郎　吉田義正　茂井一元　後藤幸一郎

独吟　屋島之段　車之段　放下僧　鶏之段　遊行柳　野々山繁　関戸揖子

卒都婆小町　木村善一　柳一　加藤正直　山松

能　子方　ツレ　河村真之介　郷郭太郎　山本一

善知鳥　高安滋郎　福井啓次郎　河村総一郎　鬼頭喜太郎　三男
間　大野弘之

後見　松本千冬　武田志房　地謡　中川武田　小島邦弘　一英　欣司　武田雅章　藤波重和　武田太加志　藤波重満　中川清

安宅　八賀和彦
花筐　石井鐘子
葛城　早川つねよ　大和舞
玄象　山森幸男
舟弁慶　石井崇子

後見　後藤孝一郎　鉱一　河村総一郎　福井啓次郎　鬼頭喜太郎　三男
後藤孝一郎　鉱一　福井啓次郎　藤田昭彦
後藤孝一郎　鉱一　河村総一郎　福井啓次郎　鬼頭喜太郎　三男
後藤孝一郎　鬼頭喜太郎　藤田昭彦　鬼頭喜太郎　三男

祝言　仕舞　々　武田太加志　猩

能楽先人の訓え ⑥

観世華雪芸談より

後見

父や梅若の父からよく言われていたことは

「舞台で一番目立つのは眼だから目の玉を動かさずに全体を見よ」

ということでした。

注意しているつもりですが、教えた者が舞っています時など、舞台の折はいいのですが橋がかりにいったりしますと、つい自然に目が動いてしまうものです。こんなことが見所にわかってはいけません。後見の心得は御見物に後見のいることをめだたせないということであります。

一例ですが「鉢木」で「住みうかれる」と淋しく地が謡っている時、切戸から雪もちの松の作物を出しますが、いつの間に出たのかわからないようにしなければなりません。又装束を直したり、持物を渡したり、ひいたりするのも同じことです。

しかしこのようにきまっている動作は、一寸注意さえすれば目立たなく出来るものですが、一番困るのはシテが絶句した時です。それがために後見は大切な役だといわれているのでありまして、私は、いえ私ばかりでなく誰でも一たび後見座に座ったらシテと一緒にお腹で謡っているのです。

そして、若しシテがあやしくなってくるとその気配を感じて、止ったなと思った瞬間、一句先にとばしてつけます。又シテのいる位置等によって疆帯など直す恰好をしてつける場合があります。シテが地の前とか、ワキ座のあたりにいる時は地からつけてもよいのですが、常座にいる折は必ず後見がつけることになっております。

ある時誰でしたか「隅田川」で一の松で一セイを謡っておられた時、私は後見でしたので幕から出ようとしました。その途端「おやおかしいぞ」とよくささますとそれもその筈、サシを何と「桜川」のを謡っておられるではありませんか、驚いて疆帯を直すふりをしてつけたのですが、成程「隅田川」と「桜川」ではカケリ・サシの様子がよく似ているのでつい間違われたものと見えます。

人様のことをとやかく申しておりましても、私にもこんな経験がございます。「柏崎」のシテでいつの間にか「班女」のサシを謡っていたのです。ところが「柏崎」にあるべきはずのハリがないので、変だと気がついて飛ばし「思いの露」と地に渡しましたが、地頭をしていらした藤波順三郎さんが早速直してとって下さったので助かりました。

後見はこのほかでも、舞台に出るまでにもなかなか責任が重いものです。シテが面をつけてから後見に、「うけはよいか」と聞きますが、この「うけ」というのは位置のことで、後見は照っている（上向き）とか曇っている（伏し加減）とか、注意をしなければなりません。

実際面によっては非常によく照る面と、曇る面があります。

ここで面のことですが、他の流儀では「面あて」と言って面の内側、額と頬に枕を棚でつけています。観世流ではこうすると自分の顔と面との間に隙間が出来て二重になるからいけない、面と顔は必ず一つにならねばならない、ということになっています。ですから面によっては鼻も口もおさえつけられてしまうものがありますが、こういう時でも常に文句が見所へハッキリ聞えるように謡い方を研究しなくてはならないのです。この点「面あて」をつけていますと、汗が外に流れなくてよいというよい事もあります。橋岡久太郎さんなどもこれをつけておられます。横から見ますとやはり面が前に出た感じはしますが、確かに謡い易いものです。よいことはとり入れてもいいでしょう。

（つづく）

観世華雪翁追善供養

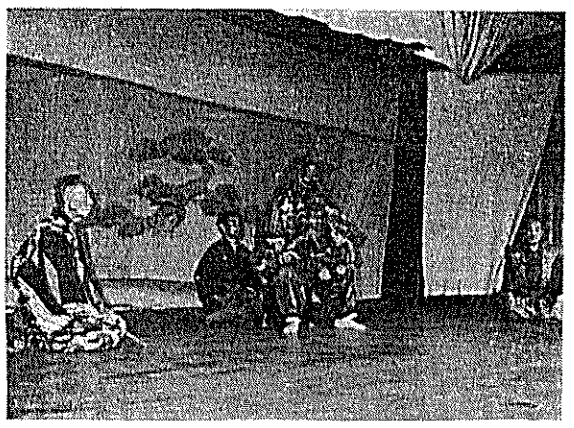
先代観世銕之丞華雪師の第十七回忌追善供養がさる四月八日午後五時半から東京会館で行なわれた。

追悼会は華雪師夫人はまさんの追善もかねて催され、観世宗家はじめ関係者ら百五十余人が参会、故人の遺影に献花した。

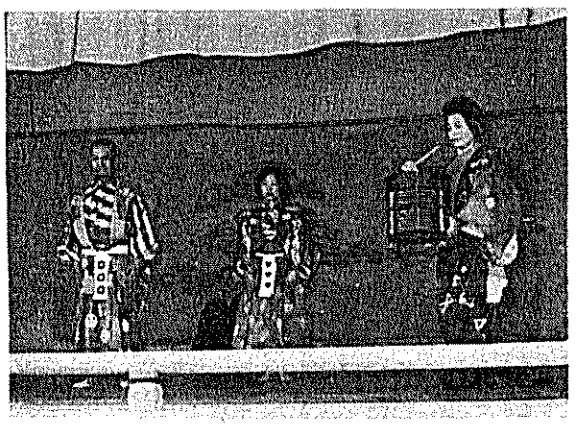
なお追善能は来年一月に行なわれる予定である。

演能の記録

能　安達原　杉田　合子さん
（50・5・18名古屋猫諷会）



狂言　福の神　堀江四郎・岡崎久太郎・林東助さん
（50・4・21　玉石会　豊川稲荷奉納）



狂言　附子　津田庄三郎・中北字多子・井川　澄子さん
（50・4・21玉石会　豊川稲荷奉納）

御料理あつだ
蓬莱軒
本店　熱田区神戸町三四　電話（671）8686・8
神宮東門店　熱田区新宮坂町一　電話（682）5598（代表）

第十七回 朝日狂言会

七月六日（日）午後二時始
熱田神宮能楽殿

靱猿　佐藤卯三郎　佐藤秀雄　佐藤友彦　佐藤融

神舞　藤田六郎兵衛　福井啓次郎　筧鉞一　助川竜夫

瓜盗人　茂山千之丞　茂山千五郎

―休憩―

蝉　和泉保之　井上松次郎　大野弘之

素袍落　茂山千五郎　茂山千之丞　茂山千作

禰宜山伏　井上礼之助　野村又三郎　井上祐一　今枝靖雄

―閉会午後五時頃―

主催　朝日新聞社　狂言共同社

会費　指定席　一五〇〇円　普通席　一〇〇〇円
階上席　八〇〇円
取扱所　朝日新聞名古屋本社企画部　電（238）八一三一
中区橘一丁目七―五　井上方　電（681）一四三〇
各出演楽師宅　各プレイガイド

五十年度第二回 名古屋観世九皐会定式能

七月二十六日（土）午後一時始
熱田神宮能楽殿

能組

素謡　観世喜之　長谷川章　加藤保彦

実盛

羽衣　有賀滋子　西村欽也　河村総一郎　後藤孝一郎　助川竜夫　藤田昭彦

和合之舞

伯母ケ酒　井上松次郎　佐藤友彦

仕舞

玉之段　佐々木勝輝
笠之段　小島芳雄
鐘之段　五木田武計

鵜飼　観世武雄　能

間　佐藤秀雄

附祝言

（午後五時ごろ終了）

主催　観世九皐会
事務所　名古屋市中区栄五―四―一四　栄能楽ビル五階
電話（〇五二）二五一―二四四〇番

（有料）

＝終回　九月二十日（土）午後一時始＝

六月二十八日（土）正午始
熱田神宮能楽殿

素謡「巴」（シテ長沼てる子）「箱飼」（土居雅子）「野宮」（シテ辻田たま）ほか囃子八番、仕舞十番
（ご来場歓迎）

舟弁慶　石井栄子　後藤孝一郎　河村総一郎　後藤孝一郎　藤田昭彦　鬼頭喜太郎　筧三男

祝言　仕舞
猩々　武田太加志

主催　鳳鳴会

新理事は次のとおり。
（敬称略）
（観世流）中島成晃、坂井音次郎、藤波重和、関根祥六、梅若万紀夫
各支部長（東京）観世寿之（名古屋）藤田六郎兵衛（大阪）大西信久（北陸）佐野正治（京都）井上嘉久（神戸）藤井久雄

熱田神宮能楽殿創立二十周年

記念能

八月二十四日（日）午前十時始
熱田神宮能楽殿

素謡

（剛）神歌　大塚一二　片野東四郎　地謡　百々水谷康治泰典　菊豊三千春　日比野三恵三　圭昭

（観）養老　梅田邦久　高安勝久　飯富雅介　立石澄雄　河村総一郎　後藤孝一郎　鬼頭喜太郎　藤田昭彦

ツレ　武田邦弘　天女　小島一英

水波之伝

後見　高橋暸一　柴田収武　地謡　加田中　加藤敏彦　長谷川保彦　佐藤武　塚本久田秀雄　加藤秀雄　総太俊　兵衛

狂言小舞

貝盡し　佐藤友彦　地謡　井上礼之助　井上松次郎　佐藤秀雄

仕舞

小袖曽我　高橋暸一　加賀敏彦　水藤元三　加藤総兵衛　加藤保彦　長谷川章　地謡　後藤　杉村　竹翠　武田　邦弘　犬飼　末吉　契雲

（観）実盛　キリ　雲林院クセ　小督　キリ　紅葉狩　雛子

（観）熊坂　柴田収武　笠寛　山口亮一　地謡　岡田真柄　増田一英　梅田一雄　鬼頭季信　山口　小島　光久　米次　義信

仕舞

葛城　クセ　戸田和　竹内澄子　玉井弘子　地謡　鈴木義永久　衣笠正宣　鬼頭喜男

（宝）草紙洗小町　葵上

（観）杜若　キリ　女アト　小鍛冶　キリ　花月　キリ　波　熊沢恵美子　高木美智子　眼部紗枝　有賀滋子　吉田妙　地謡　青木武弘　河村鉦二　高橋暸一　久田秀雄

連吟

千手　生駒美代子　加藤良久　前野郁子

（観）

（宝）井筒　内藤泰二　西村欽也　吉田定男　福井啓次郎　藤田六郎兵衛　間　佐藤秀雄

後見　吉田俊彦　鬼頭喜男　地謡　河村輝雄　佐々本勝利　加藤寿一　稲川　鈴木義永久　武田喜正宜　竹腰勝一

仕舞

高砂　日比野圭昭　鶏之段　水谷泰典　松風　キリ　吉川周子　歌占　キリ　百々東治　地謡　清水信明　重本昌三　豊嶋千春　小菊三恵三　林川忠三　都築進　後藤正洋　本田光男　広瀬瑞明　伊藤顕弘

（剛）

（春）加茂　杜若クセ　前田茂徳　林鉄郎

挨拶

熱田神宮能楽殿運営委員長
熱田神宮権宮司　長谷晴男
能楽協会名古屋支部
支部長　藤田六郎兵衛

狂言

二人袴　野村又三郎　佐藤卯三郎　井上礼之助　大野弘之

仕舞

（観）老松　柴田初太郎　地謡　加賀敏彦　塚本秀雄　柴田武　青木弘

一調

（喜）鵜飼　二井栄逸　鬼頭八郎

雛子

（宝）枕慈童　衣笠正宣　地謡　河村総一郎　福井良久　稲川寿一　竹腰勝一　池田森本重一　内藤茂　武田喜二　吉田泰彦　高木　俊

仕舞

笠之段　半蔀クセ　塚本秀雄　杉村竹翠　佐藤太俊　笹之段　弱法師　隅田川　鉦之段　地謡　中村潮和男　高野一英　小島透　水藤元三　助川竜夫　三男　冥鉦一　柳原富司忠　高安滋郎　飯富雅介

（観）

（喜）船弁慶　長田　松山明道　船中之語　船中之歌　間　後見　和島富太郎　加藤豊　地謡　井上松次郎　川井宏二　富田陽才　山本　大島大政　二井栄逸　島　允見

附祝言

A席二、〇〇〇円
B席一、五〇〇円

主催　熱田神宮
能楽協会名古屋支部
後援　中部能楽師会

鳳鳴会大会

6月29日　熱田神宮能楽殿で

鳳鳴会（武田太加志師）は六月二十九日（日）熱田神宮能楽殿で能「善知鳥」（シテ山本一氏）はじめ素謡「神歌」「卒都婆小町」「砧」「求塚」など十番ほか舞囃子、独吟、仕舞など十数番で大会を開催する。（番組②面掲載）

朝日文化センター夏期素謡会

朝日文化センターの喜多流謡曲教室（二井栄逸師指導）では、六月十五日、名古屋市中区錦二・短歌会館で夏期素謡会を開催する。

〔住所表示変更〕
・水藤元三氏（観世流）
新住所＝名古屋市天白区久方一一一五一一〇一
（〒四六八）電話（801）6350番

〔寄贈〕
「清葉」第八号、発行＝神戸市兵庫区宮前町15、清葉会（元山清会長）

内容は神戸能楽殿での演能の案内、「謡曲歳時記抄」「地拍子の面白さ」入門シリーズはじめ能楽評壇などを掲載、五百円～千円を前納すれば発行ごとに郵送される

〔お詫び〕本紙五月号①面「演能カレンダー」のうち、七月の演能に七月二十六日（土）名古屋観世九皐会定式能が脱落していましたお詫びして追加訂正します。

暑中御伺広告ご案内

本紙では、恒例の暑中御伺広告を七月号、八月号に掲載させて頂きますのでご案内申し上げます。

申込先　能楽の友社
名古屋市千種区吹上本町二の二〇（郵便番号四六四）
振替名古屋　三六三九三番

6月・7月放送予定

◆ NHKラジオ第一放送　（毎週土曜日午後6時5分）

〔6月〕
14日（土）狂言二題「内沙汰」野村万之丞「鬼の継子」山本東次郎
21日（土）観世流「浮舟」梅若泰之ほか
28日（土）観世流「景清」浦田保利ほか

〔7月〕
5日（土）宝生流「唐船」近藤礼ほか
12日（土）喜多流「七騎落」喜多節世ほか
19日（土）観世流「木賊」観世銕之丞ほか
26日（土）観世流「鶴太鼓」上田照也ほか

◆ NHK・FM 毎週日曜日　（午前7時15分）

〔6月〕源氏物語シリーズ
15日（日）観世流「浮舟」梅若泰之ほか
22日（日）観世流「源氏供養」観世元正ほか
29日（日）狂言二題「内沙汰」「鬼の継子」

〔7月〕父子シリーズ
6日（日）喜多流「七騎落」喜多節世ほか
13日（日）観世流「木賊」観世銕之丞ほか
20日（日）宝生流「唐船」近藤礼ほか
27日（日）観世流「景清」浦田保利ほか

予定番組について変更になることがありますのでご了解下さい。

世界をみつめる明るいナガネ
LOOK BETTER
伝統と技術　創業1750年
メガネの玉水屋
なごや・栄交差点北角（玉水ビル）
TEL(961)-1826(代)

株式会社トーア
名古屋市昭和区高辻町11番35号
電話 871－0291（代表）〒466

第十七代宗家　宝生九郎著　全八巻
宝生流囃子仕舞全集
宝生流の囃子・仕舞の稽古・独習に欠かせないテキストです。
謡本文（スミ色）に型どころ（朱色）を記入してあります。曲目五十音順
東京都千代田区神田神保町3－9　電話（263）6771
わんや書店
東京都中央区銀座8－7－5　電話（571）0513

割烹・小料理　城
● 熱田神宮能楽殿喫茶部
● 住吉小路（中区栄3－10）電話 241－0248
● 喫茶・グリル（愛労評地下ビル）電話 731－1128

かさとさすなら　かすが山
扇かふなら　十松屋
へゴうたら例を　買ふなら
われも　十松やで　かいうよ
永禄元三年　十松屋初井
を　(221)三三〇。

-回10日発行）
D 友 社
本町2－20
(4)
7 9 8 4
3 6 3 9 3
500円
600円
40円
熱田神宮能楽殿設立20周年
記念能　能 三番上寅
演能案内
名古屋猶諷会番組
五月十八日（日）午前十時三十分始
天鼓
百萬

期待される銀行
ご奉仕する じゅうろく
十六銀行
創立 明治10年
本店 岐阜市

能樂の友

題字は熱田神宮　篠田宮司筆

発行　能楽の友社
名古屋市千種区吹上本町2—20
（郵便番号 464）
電話 (731) 7984
振替口座 名古屋 36393
購読料　1年 500円
郵送の場合　1年 600円
一部　40円

能3番を上演

第10回 名古屋薪能

ことし第十回を迎える名古屋薪能は既報のように、きたる八月二日（土）熱田神宮神楽殿前・特設舞台で催される。

市民の納涼能楽鑑賞として名古屋薪能がはじまったのは昭和四十一年、第一回、第二回は中区・若宮八幡社境内で、第三回以降は、熱田神宮で行なわれ、年とともに名古屋市の恒例行事として、その

鼓雲会別会

19日、宝生宗家の「石橋」

宝生流　鼓雲会では、このたび同会・内藤泰二師が日本能楽会（重要無形文化財総合指定）会員に選出されたのを機に、社中の方が中心となり、内藤泰二師の重文総合指定謝恩の意を表し、中部地区の流友とともに宝生宗家継承慶祝能として宗家父子による「石橋・連獅子」を披露鼓雲会別会として七月十九日熱田神宮能楽殿で催される。

同別会には、宗家宝生英雄師はじめ、大坪十喜雄、野村蘭作、辰巳孝の諸師らが来演、また狂言「三人長者」は重文指定をうけられた和泉流佐藤卯三郎、佐藤秀雄井上礼之助の諸師で演ぜられる。

入場無料（番組④面掲載）

入場者は千五百人を超え満員に埋しまれてきている。

主催は、熱田神宮、能楽協会名古屋支部、後援・名古屋市、中部能楽師会。

火入れ式は午後七時ごろ、熱田神宮長谷晴男権宮司により古式ゆかしく厳かに行なわれる。

能は観世流「小督」宝生流「花月」観世流「紅葉狩」の三番、能楽協会名古屋支部、中部能楽師会メンバーの総出演で午後五時三十分開演（雨天の場合は順延）

前売八百円、当日券は千円。

（番組詳細は④面掲載）

〃〃〃〃〃 各地で薪能

五月十一日、十二日の両日、奈良興福寺薪能は「清経」（観世・上田照也師）「班女」（金剛・金剛巌）「放下僧」（宝生・辰巳孝）「船弁慶」（金春・金春信高）の四番が催された。

各地の薪能としては、六月一日二日の両日、京都薪能が平安神宮で挙行。

さらに今月は、宗家九日に宝治薪能、二十六日堺薪能、二十八日福岡薪能、八月には、神戸薪能（一、二日）神戸長田神社、姫路薪能（二日）姫路城、東京薪能（八、九日）赤坂山王日枝神社、石和薪能（一九日）山梨県石和町遠妙寺で行なわれる。

◎各地だより

幸流全国囃子大会

幸流会の全国囃子大会がさる七月二日、熱田神宮能楽殿で催された。

当日は、宗家幸祥光師はじめ、幸宣佳、幸正彰、曽和博朗、竹村英雄、住駒陽介の諸師ら全国から来名、囃子、一調、独吟、連調など七十数番できわめて盛会であった。

京都で若手能

「道成寺」など能二番

若手能は創始十周年第二十回公演記念として七月六日、京都観世会館で夏の特別公演を開催。

能「俊寛」（鷲尾周三）「道成寺」（梅田邦久、ワキ谷田宗二朗）で盛会であった。

◆演能カレンダー◆

（熱田神宮 能楽殿）

〔7月〕
19日（土）宗家御継承慶祝 鼓雲会別会　（番組④面）
重文総合指定謝恩　（来場歓迎）
26日（土）名古屋観世九皐会定式能　（有料）

〔8月〕
2日（土）名古屋薪能　（熱田神宮特設舞台）（番組④面）（有料）
24日（日）熱田神宮能楽殿創立20周年記念能　（有料）

〔9月〕
7日（日）大衆能　（愛知文化講堂）
14日（日）観世会定式能　（有料）
15日（祭）鼓雲会 秋の大会
20日（土）名古屋観世九皐会定式能　（有料）
21日（日）宝生会定式能　（有料）
24日（祭）山本観衛会別会　（有料）
28日（日）竹琪会大会

（演能変更の節はご了解下さい）

暑中御伺い申し上げます
社団法人 熱田神宮能楽会
名古屋能楽殿
熱田神宮 宮司 篠田康雄
権宮司 長谷晴男

花子（はなこ）
一調一管 葛城
紫谷菊生
藤田六郎兵衛
観世元信
野村万之丞
野村又三郎
野村万作
入場券
A 三、500円（指定席）
B 二、500円（自由席）
C 一、500円（階上席）
各プレイガイド・能楽殿
昭和区南山町十二の七野村方
舞台五十年記念会事務所
電話八三二—八〇七一番
佐藤秀雄
来場歓迎
主催 竹杉村韻会
賛助 大槻竹翠会 秀夫
（終了予定七時頃）
◎会員券
指定席A券 五、000円
自由席券 三、000円
お申込先
名古屋淡交会（名古屋市守山区北山二七五八の一二八
丹阿弥元方、電話七九三—八三五五）・熱田神宮能楽殿・各出演楽師
後援 中日新聞社
指定席B券 四、000円

観世元正
東京都渋谷区恵比寿南一ノ二十一ノ十四
名古屋観世会
梅若六郎
梅若景英
井上嘉久
京都市北区紫野下鳥田町六
幽謡会
片山博太郎
名古屋観世九皐会
観世喜之
観世武雄
増田一雄
塚本秀雄
有賀滋子
長谷川章
加藤保彦
青木武弘
高木美智子
吉田妙
藤井久雄
徳三
楽人
完治
社団法人 観正会
上田照也
神戸市葺合区熊内町二—一—二〇
電話（三二一）五一四四番
研能会
橘香会
梅若万三郎
梅若万紀夫
梅若万佐晴
大西信久
大西智久
大阪能楽会館
大槻清韻会
大槻秀夫
大槻文蔵
大阪市東区上町二番地
鳳鳴会
武田太加志
名古屋市東区葵町九
吉田義正方
山本観衛会
山本勝一
西宮市南郷町五—二三
電〇七九八 ㊗四七七八番
名古屋橋岡会
名古屋市昭和区丸屋町五ノ三五
山田紀子方
掬水会
柴田初太郎
柴田収武
財団法人 鎌倉能舞台
中森晶三
中森貫太
〒248 鎌倉市長谷三—五—十三
電話（〇四六七）㊗五五五七
大垣浦声会
稽古場 大垣市竹島町善念寺
住所 京都市左京区下鴨芝本町五八
浦田保利
潤水会
林甲子生
名古屋市千種区今池町二ノ四九
電話（〇五二）七三一—四一八三
笙月会
中川清
長浜市地福寺町八ノ二九
電話 ㊗〇六三〇番
雄諷会
下田雄三
大阪市東区高麗橋詰町五三
下田雄諷会
後援 中日新聞社
指定席B券 四、000円

能紀行 ㊹

面

絵と文　二井栄逸

能の紀元元年、それは、応安七年、西暦でいうと一三七四年。観阿弥父子が猿楽能を義満の前で初めて舞った時である。

創造と実力をたくわえた観阿弥が自分の芸を都びとの前で披瀝しみとめられるか、否かを賭けたこの催しに、青年将軍、足利義満は始めて見る能の芸格に打たれ、進んで保護育成することを心にきめた。能の夜明けであったのである。

その後、能は、世阿弥と義満の共同作業の形で、新しい演劇という分野を日本文化の中に樹立していった。古事記、万葉、源氏物語と文学の世界が完成した日本文化の中で、未完成の分野として残っていた演劇の地層の上に、能は中世に生れて一挙に世界的水準に達したのである。

応安七年というと、ルネサンスを代表する詩人のペトラルカの没した年でもあった。

能は、能面をかけることによって演者の個性が否定されてしまうようであるが、それは没個性ではなく、実は、真の個性が発揮されることになる。これは素晴らしいことなのである。

観阿弥、世阿弥は能の中に自由な境地を開いた演出家であり、演劇人であった。ざゆう〳〵と様式化され、しめつけられた中に、演者の個性は反対に自由にのびのびとしたひろがりを持ってあまかけるのである。

能というものは、面と、すぐれた演者が一つになった時、不思議な力を出し見るものにインプレションをあたえる。能面は美術品として博物館のガラスの中にねむらせるのでなく、多くのすぐれた演者によって、舞台に息づかせるべきものであろう。それは名手にかけられることが能面の唯一の生きる道だからである。

名手と面とが心理的に戦い、面が息づく時、始めて能面の真価が発揮される。シテは鏡の間で、面を拝する時、すでに変身する。面は、シテの魂を吸い込み生々とよみがえる。シテは全身を面の位（くらい）にぶっつけて曲中の人物になりきり、魂の披瀝を始めるのである。

× × ×

さみだれの庭に、ほざきのなゝかまどがふさ〳〵とした白い花を咲かせている。

つゆの晴間にキラリと太陽が輝くと、白い花はかるやかにゆれて紺碧の空をわたる綿雲のように見えがくれする。日光きすげが次々と咲き、くちなしは、高貴な香りを夜の部屋にまでたゞよわせてくれるし夜半にしのび歩きのような雨音を聴くと心が安らかになる。

つゆが明けると各地で薪能が催され、夏の夜にはかゝせない行事の一つとして定着した。

自然よかえれ、と、一人一人が祈るせいか、そこはかとなく自然が近ずいてきたような気もする。

自分で自然を追いやっておきながら自然よかえれ、と、いうことは人間どもの気儘な願いであろうが、コンピューターが次第に成長してくると、コンピューターにこき使われるようにならないとも限らないし、霊魂が不滅であるとすれば、宇宙人も同じこと、天空を飛翔しきたって地球人にのりうつり、核爆弾のボタンを押さないとも限りない。そんなことになれば自然もへったくれもないし、人間が造ったものに人間がほろぼされる時代がくるかも知れない。

こないだ、愛媛喜多会能のお手伝いを頼まれて松山に行った時のこと。大阪の弁天埠頭から関西汽船で松山港に向った夜、船旅の所在無さに甲板に出て見ると、波頭が鮮かなコバルト色にずっと輝きわたるのである。美しい夜光虫だな、と、思ったが良く考えて見ると、プランクトンの異常発生で赤潮につながる海の汚染であることに気付いて息をのんだ。工場から放出される悪液、家庭用水等でプランクトンが異常発生するらしい。

美しかるべき瀬戸のうち海が汚染の海と化してゆく現実はどう考えてもさびしい事である。しかし自然よかれ、と、みんなが心がければ、又、大きい力となるであろう。（絵は小面）

7月・8月放送予定

◆ NHKラジオ第一放送　（毎週土曜日午後6時5分）

〔7月〕
19日（土）観世流「木賊」観世銕之丞ほか
26日（土）観世流「龍太鼓」上田照也ほか

〔8月〕
2日（土）和泉流狂言「名取川」野村万之丞ほか
9日（土）宝生流「芦刈」武田喜永ほか
16日（土）観世流「清経」関根祥六ほか
23日（土）金剛流「花筐」金剛巌ほか

◆ NHK・FM 毎週日曜日　（午前7時15分）

〔7月〕　父子シリーズ
20日（日）宝生流「唐船」近藤乙礼ほか
27日（日）観世流「景清」浦田保利ほか

〔8月〕　夫婦愛シリーズ
3日（日）金春流「通盛」桜間金太郎ほか
10日（日）観世流「清経」関根祥六ほか
17日（日）宝生流「芦刈」武田喜永ほか
24日（日）観世流「龍太鼓」上田照也ほか

大塚一二氏逝去

中部金剛会　会長

金剛流・大塚一二氏（名古屋市千種区城山町三）は七月二日午前一時十分、心不全のため逝去され

告別式は三日午後一時から自宅で厳かに執り行なわれました。

故大塚師は、当地金剛流の重鎮であり、清風社を主宰、中部金剛会会長として能楽界の発展に力を尽くされ、その功績は大きいものがありました。

謡曲 ⑦

謡のお稽古もよほど進みますと、「初瀬六代」とか「定家」等、字面一なせない難曲です。だからこそ、その謡い手の腕前を信用してまかせている訳です。

こうして全く自由に謡ってよいものですから、当然連吟などは出来ません。独吟でするきまりになっておりますが、さりとて器用より、好きなものをたたき上げた方がよい、つまり好きということは何より大切なことでしょう。

われ人も真如の玉は一つなり

暑中お見舞申し上げます

名古屋修諷会　梅若修一

井戸良造　井戸和男　大阪市阿倍野区文の里4—24—17

一謡会　河村鉦二　叶石会　河村総一郎　名古屋市昭和区前山町一丁目二三（〒466）電話（七六一）四八八二

毎日婦人文化センター　謡曲教室　風韻会　殿島修二

玉鑑会　洗心会　華心会　京都市左京区永観堂西町二〇　南条秀雄　奥村富久子　電075—771—0767

田村正諷会　田村勇　大阪市東住吉区東粉合町一—一五七　電話大阪（七〇五）二四〇〇番

徳島正韻会　田村勇　徳島市佐古町字佐古四三谷内

暑中お見舞申し上げます

竹翠会　若松宏守　（〒662）西宮市平松町四—九　電話（〇七九八）二三—〇六〇一

邦謡会　梅田邦久　名古屋市昭和区石町二丁目十六ノ五　電話（八四一）四六三二番

竹韻会　杉村竹翠　名古屋市名東区藤ケ丘八三　電話七七一—五〇三九番

猶恵会　熊沢恵美子　名古屋市名東区猪高町猪子石高根一五—六八日車マンション四〇四

春敬会　真柄米次

重陽会　菊池重郷　大山市大山字相生五九—一六　電話（〇五六八）㊵四五〇一番

宝生英雄

近藤乾三　乾之助　東京都豊島区巣鴨五—二三—八

名古屋巽会　辰巳孝

倉本雅　神戸市東灘区田中町一—13—26

福王流　豊嶋十郎　〒二七一　松戸市下矢切五五　電話（〇四七三）㊷一九八二

緑宝会　名古屋市緑区鳴海町池上十六—一　〒458　加藤勝利　電話（六二一）三四二八番

金剛流　金剛巌　金剛永謹

中部金剛会

金剛流豊星会　豊嶋弥左衛門　豊嶋三千春　京都市東山区知恩院山内林下町四五五　電話（〇七五）五六一—五四〇八

金剛流華月会　今井幾三郎　今井清隆

廣田後援会　廣田陛一　幸稔

菊扇会（名古屋・京都・東京・三重）　廣田泰三　廣田泰能

三宅藤九郎

能楽先人の訓え

「観世華雪芸談」より

⑦ 蘭曲

謡のお稽古もよほど進みますと、「初瀬六代」とか「定家一字題」など「蘭曲」ということになりますがこれは大体軍習いが半ば位上った頃に始めるようになっています。

上、中、下とあってやはり一番むつかしいのです。

よくうつかり「私は蘭曲をうたおう」と言う人がありますが、「蘭曲をうたおう」ということは、「私は立派な謡い手ですよ」という看板をかかげるようなもので心ある人のゆめ口にする言葉ではありません。充分に謡いこんだ人が謡ってこそ、蘭曲ですから、自分でそれを謡うなどとは言えないわけです。

成程、囃子には合うように節づけられてはいますが、それにこだわらなくてもよいもので、節もむっくり謡ったり、又縮めてもよろしいことになっています。ですから楽なようでいて却ってむつかしいものです

何十年と稽古を積んだ人でないと謡いとなせない難曲です。だからこそ、その謡い手の腕前を信用してまかせている訳です。

こうして全く自由に謡ってよいものですから、当然連吟などは出来ません。独吟でするきまりになっておりますが、さりとて自分の気儘な乱曲、みだれた曲、では困ります。

――尤も免状には蘭の字がむつかしいので乱曲と書いてはいますが――。

いましめの歌

先代梅若実が教えてくれた歌がいくつかあります。

足拍子はずさず合わずのりのらず
　旬合（くあい）をふみて
　　あたらぬぞよさ

これは余りかたにはめて、きちんきちんとあたるといけないということなのです。

序でに拍子のことを申しますと、荒っぽい、天狗の物などは比較的楽で、やわらかい女物の拍子はむつかしいもので、その音にしましても、まあ足の裏を平に踏んではよくないので、かがとで踏むのがよろしいが足が上ってはいけないのです、ではどうすればよいかと申しますと、前をうごかさず、ピタンとつくようにしてかがとで踏むのですが、これも足でふんではいけないので腹で踏まねばほんとうのものになりません。

このほか次のようなのも聞きました。

世の中の好きと器用をくらぶれば
　好きこそものの上手なりけり

器用より、好きなものをたたき上げた方がよい、つまり好きということは何より大切なことでしょう。

われ人も真如の玉は一つなり
　つかふ手品の下手と上手と

我が芸のいささか人にすぐるとも
　よきと思えばあしきたねなり

この二つは別に申上げなくてもおわかりと思います。

稽古についてのいろいろ

仕舞で、女物と男物とでは歩き方が違います。

扇はうら、おもてがどうなっても差し支えないが、当人の注意があまりないようなときは気をつけるようにいってやります。

例えば、修羅扇で表が勝修羅、裏が負修羅になっている場合、舞っているものが「屋島」のように勝修羅なれば、当然松に日の出の方がお客の方に向くようにしなければならぬ等です。

「安宅」の弁慶など、真赤になって勧進帳を読むのもいけないし又あんまり悠々としているのもいけません。ゆったりと読むのがよろしいが、そこがむつかしいのです。

昔は謡の名人がいて、一方に囃子の小鼓なら小鼓の名人が一人、その二人が離れた所、音、声が全く聞えない所にいて、同じように謡い、うつ、それが必ずピタリと合うそういうものだったのです。（つづく）

演能の記録

能「実盛」　山崎栄治氏
（50.5.25　名古屋観衛会）

能「杜若」　加藤歌子さん
（50・5・25　名古屋観衛会）

暑中お見舞申し上げます

和谷亀二郎
伊勢市中島2―26―12

清水寺に詣でて
音羽山さらでも涼し滝の音
喜多流謡曲研精会
貴周　福岡周斉
川崎市多摩区生田二〇三七

二井栄逸
松阪市内五曲町八八
電（〇五九八二）三―〇二一六

岡村保道
三重県度会郡玉城町田丸三五五

喜多流　山本才
名古屋市千種区園山町二―二二
電話（782）二一九一番

高安滋郎
勝久
〒467　名古屋市瑞穂区玉水町二ノ六四
電話（八三一）〇三六四番

西村欽也
〒467　名古屋市瑞穂区仁所町二ノ四五
電話（八三一）五九一九番

高安流白水会
和泉太郎
〒142　東京都品川区二葉二―八―一二
電話（七八六）四〇九二番

中部金剛会　会長
徳島正韻会
田村勇
徳島市吉野本町四三谷内

大阪市東住吉区東鷹合町一―一五七
電話　大阪（七〇五）二四〇〇番

故大塚師は、当地金剛流の重鎮であり、清風社を主宰、中部金剛会会長として能楽界の発展に力を尽くされ、その功績は大きいものがありました。
謹んでご冥福をお祈り致します

金剛流・大塚一二氏（名古屋市千種区城山町三）は七月二日午前一時十分、心不全のため逝去されました。享年七十二歳。

豊嶋十郎
〒二七一　松戸市下矢切五五
電話（〇四七三）㊷一九八二

福王流　寿福会　久保田千三郎
芦屋市呉川町五ノ一五
電話（〇七九七）二二―三一八四

森田一光春
京都市東山区八坂上町三七六

藤田六郎兵衛
藤田昭彦
龍吟会

杉市太郎
杉市和

寺井政数
〒154　東京都世田谷区世田谷四―三―二五
電話（四二一〇）六六七六番

幸祥光
〒158　東京都世田谷区等々力五―三〇―二
電話（〇三）七〇四―一六九三

幸正影
〒141　東京都品川区西五反田八―一〇―一八
電話（〇三）四九二―四八六四番

幸圓次郎
〒164　東京都中野区中央四―四七―一一
電話（三八一）九四一三番

幸義太郎
東京都中野区丸山二―二四
都営丸山アパート一号三二〇号
電話（三三七）五六七二番

小の会
幸宣佳
〒838-01　福岡県小郡市小郡一四〇三
電話（〇九四二七）②二八〇七

辰巳孝

倉本雅
神戸市東灘区田中町一―13―26

菊扇会（名古屋・東京・三重）
廣田泰三
廣田泰能

名古屋和泉会
狂言共同社

三宅藤九郎

大蔵狂言会
大蔵彌太郎
大蔵基嗣
大蔵基義
〒154　東京都世田谷区池尻三―九―二二
電話〇三（四一二）五九六八番

茂山千作
茂山千五郎
京都市上京区中筋通り石薬師上ル

狂言やるまい会
野村又三郎
名古屋市昭和区南山町12―7
電話（八三二）八〇七一番

朝日文化センター
囃子教室
笛　筧三男
小鼓　後藤孝一郎

ウシマド写真工房
〒602　京都市上京区北野上七軒
電〇七五（四六二）一三四一番

暑中見舞広告について
暑中見舞ご芳名広告のお申し込みを頂いておりますが、紙面の都合にて七月号、八月号にわけて掲載させて頂きますのでご理解賜りますようお願い致します。（編集部）

演能案内

宗家御継承慶祝
重文綜合指定謝恩
鼓雲会別会
七月十九日（土）午前九時始
熱田神宮能楽殿

能組

連吟　高砂　杉田保彦　村瀬裕一
　　山下巌　野々山正毅
小袖曽我　向井助　平岩清司
紅葉狩　朝日文化センター
井筒　中日文化センター

仕舞
鶴亀　岡本忠晃
羽衣　滝経政
網ノ段　北川道子　葛城雲雀山
鞍馬天狗　佐田喜代子　杜若
熊野　市江竜彦　歌占
猩々　中桐史行

連吟　鶴ノ段　辻一枝　岩尾千代子
　　谷沢武夫
唐船　越智新造　竹内孝成　谷儀治郎

能
鈴木義久
石川秀之
水野久仁雄
須賀明
平子稲美
片桐真
堀江昌
竹腰勝一

七騎落
間　西村欽也　河村総一郎　山口亮　筧三男
　　井上松次郎　三村晴雄　内藤真六　高田秦二
後見　野村清作　舟津正一郎　辰巳利光　衣斐正宣
本間孝　門原文男　河野邦男
地　清水晴雄

狂言
大野弘之
佐藤友彦

連吟　いろは　辻藤いつ子　近藤佳郎　藤井唯史

加茂　伊藤文雄　柴山健也　田中醇　川崎陽一郎

俊寛　舞囃子

竜太鼓　後藤巳裕喜　吉田定男　山口亮　森本重一
小督　長谷川美知子　福井啓次郎　藤田六郎兵衛
玉葛　斎藤節子　後藤孝一郎　鬼頭季信

熊野

連吟　砧　後見　北川道子　佐々木千江子

能
鬼頭嘉男
吉田俊彦
高安滋郎
高安勝久
吉田定男
柳原冨司忠
藤田昭彦

後見　辰巳孝　衣斐正宣
地　大竹京一　関口晴吾　後藤明　広島克栄　須賀明　大坪十喜雄　佐藤英孝　本間芳彦

独調　野々山頭睦　鬼頭好信

西王母

仕舞
笹ノ段　坪井香容子　忠度
胡蝶　成田麗子　女郎花　藤田静代
鵜ノ段　佐藤稔　玉葛　小池美代　吉田智恵子

舞囃子
岩船　上野信子　吉田定男　後藤孝一郎　森本重一
庫ノ形

草紙洗　木全正江　筧三男　福井啓次郎　鉱一
三井寺　野村千代子　吉田定男　柳原冨司忠　鬼頭好信　鬼頭季信

仕舞
笠ノ段　須賀千代子　花笠　村瀬郁子

能
稲川寿一
小沢喜一
風間勇二

清景
西村欽也　筧鉱一　後藤孝一郎　藤田六郎兵衛
後見　小林久之　佐々木雄　宝生英雄　宝生英照
地　河村晴作　平子稲美　本間英孝　野村蘭作　辰巳正宣　衣斐孝

仕舞
融　西村法三
砧　中山喜作　高野物狂　佐藤芳彦

番外仕舞
松風　倉本雅　八島　本間英孝
通小町　辰巳孝　野宮　野村蘭作
花筐　大坪十喜雄
狂言　佐藤卯三郎　佐藤秀雄　井上礼之助

三人長者
能

石橋

連獅子　高安滋郎　河村総一郎　福井啓次郎　鬼頭喜太郎　藤田昭彦

後見　野村蘭作　本間英孝　衣斐正宣　広島克栄　渡辺他賀男　佐野由於

地　加藤勝利　稲川寿一　竹腰勝一　鬼頭嘉男　大坪十喜雄　吉田俊彦　辰巳義久　木村孝

主催　鼓雲会
名古屋市昭和区山里町一三五
内藤方　電話八三二—三四四九番

後援　中日新聞

第10回　名古屋薪能

八月二日（土）午後五時三十分始
熱田神宮神楽殿前

（喜）囃子　加茂　長田駿　筧鉱一　福井良久　助川龍夫　藤田六郎兵衛
能組　地謡

（観）仕舞　三輪　有賀滋子　地謡　山本富二　田中宮二　駒田靖男　美代子　吉田栄逸　加藤良妙　眼部郁子　前野紗枝　田本久　塚本恵市　生駒洋　光鉄郎　林正男　後藤

（春）仕舞　鞍馬天狗　前田茂穂　地謡

能（観）小督　高安勝久　筧福井啓次郎　鉱一　森本重一
恐之舞　佐藤友彦
間　杉村邦久　竹翠　地謡　青木武　中村和弘　高野瀬秀　長谷川総兵衛　加藤総一郎　柴久田章　佐藤田　鬼頭季　八木信　鈴木義久　衣斐巳　辰巳孝　内藤泰二　吉田俊彦　日比谷野東　水野三千治　片野東四郎　豊島百々　森典昭　正宣

（剛）囃子　鉄輪　菊川憲三　河村総一郎　柳原冨司忠　地謡

火入式　熱田神宮権宮司　長谷晴男
御挨拶　名古屋市長　本山政雄
竹内澄子

（宝）能　花月　西村欽也　河村総一郎　山口亮　筧三男
間　佐藤秀雄　平子稲美

後見　戸田和　玉井弘子　地謡　加藤寿一　勝利　竹腰勝一　鬼頭嘉男　稲川　内藤泰二　辰巳孝　吉田俊彦　正義宣

（和泉流）狂言　太刀奪　野村又三郎　井上松次郎　井上礼之助

能（観）紅葉狩　高安滋郎　高安勝久　飯富雅介　佐藤友彦　大野弘之
間　後藤孝一郎　吉田定男　池田昭彦　藤田茂
後見　河村総一郎　柴田収武　地謡　後藤飼　田中　岡田　犬塚真　梅田栖本　武増田　光本茲　保吉　契雲彦　秀次　邦雄　久弘　一雄

附祝言
（終了午後九時予定）

主催　熱田神宮
能楽協会名古屋支部
名古屋市

後援　中部能楽師会

前売八〇〇円、当日一、〇〇〇円　入場券は能楽殿、市内各

野村又三郎師舞台五十年記念
狂言と素謡の会
六月十四日（土）正一時始
熱田神宮能楽殿

第十九期・第二回
名古屋宝生会定式能
六月十五日（日）午後一時始
熱田神宮能楽殿

魚説去　寺田昌則　遠田文三

あなたに心をこめておおくりする……
冨士道の婚礼道具
家具の冨士道
本社　名古屋市中区栄3丁目35番18号
ショールーム　TEL代表（262）5547
工場　愛知県西加茂郡三好町　TEL（05613）2—1178

観世流・金剛流
宗家本発行元
檜書店
〒101　東京都千代田区神田小川町2—1　電話（291）2488—9　振替東京3-3552
〒604　京都市中京区二条通麩屋町東入　電話（231）1990　振替京都113

分譲マンション
メゾン則武　（2DK．3DK）
中村区則武本通
中央マンション　（1DK．2DK）
中区錦三丁目
中央地所株式会社　名古屋市中区錦3-13-5　TEL 962-2071

願いは　あたたかい　心のつながり
対話がはずむ
東海銀行

能樂の友

題字は熱田神宮　篠田宮司筆

発行　能楽の友社
名古屋市千種区吹上本町2―20
（郵便番号　464）
電話　（731）7984
振替口座　名古屋　36393
購読料　1年　500円
郵送の場合　1年　600円
一部　40円

熱田神宮能楽殿 創立20周年 記念特集

中部能楽界の歴史刻む
8月24日　記念能を開催

中部能楽界の殿堂として、熱田神宮能楽殿が誕生して二十年、ことしは「昭和」の世代半世紀という記念すべき年であり、天皇陛下ご即位五十年を奉祝するとともに熱田神宮能楽殿創立二十年を祝して、八月二十四日記念能が催されることになった。

十数年にわたる戦争、しかも戦災、終戦という経験したことのない苦難のなかで、能楽界が演能の拠点をつくり出してから二十年、中部能楽界の歴史を刻みこんできた熱田神宮能楽殿は、芸能文化の振興と興隆のうえに大きな足跡をとどめ、この二十年を節として大きく伸びようとしている。

本紙ではここに熱田神宮能楽殿創立二十周年を祝し、各界のことばを頂き特集号と致しました。ご祝辞をお寄せ頂いた方々にここにあらためてお礼申し上げます。

御挨拶
熱田神宮宮司　篠田康雄

本年は熱田神宮能楽殿創立二十周年を迎え、時恰も、天皇陛下御即位五十年という、史上初めて見る良き年を言寿き奉る奉祝行事の一つとして、記念能が盛大に催行されますことは、御同慶の至りであります。

顧みれば、過般の戦災により、市内の能楽堂を失い、演能の上に不便をきたしていた頃、名古屋能楽会をはじめ、関係各位、別けても、当神宮総代岡谷惣助氏、能楽師田鍋惣太郎氏、西村弘敬氏等より、当神宮境内に能楽殿を建設されるようにとの強い要望があり、また当方としても、戦後の御造営は、単に社殿の復興にとどまらず時代に即応し、土地柄にふさわしい諸種の文化施設をも完備してゆく方針でありましたので、造営事業の一環として、昭和二十九年一月に着工、翌三十年十一月、熱田神宮本殿遷座祭がいとも荘厳に斎行されたのと期を同じくして、各地の能楽堂の粋を集めた熱田神宮能楽殿が竣功、十一月十七・十八日の両日には、竣功祝賀能に併せ遷座祭奉祝能が開催されたのであります。

爾来、各流家元の深いご理解と当神宮能楽殿運営委員会の並々ならぬご努力とにより、建造物の増築、改築、施設の拡充も実施せられ、利用者の数も年々増加しつゝ今日の盛況を見るに至りましたことは、まことに慶ばしく、各位のご熱意とご協力に対し、深甚なる謝意を表しますと共に、創立二十周年を契機として、長い歴史と伝統に輝く能楽の振興に力をいたされ、更に飛躍して、芸どころ中京の名にふさわしい、古典芸能の一時代を創りだされますよう祈念いたします。

各界のご支援を感謝
能楽協会名古屋支部
支部長　藤田六郎兵衛

熱田神宮能楽殿創立二十周年を迎え、天皇陛下ご即位五十年の佳き年とともに奉祝記念能が催されるに当たり、創設以来今日にいたるまで、各界から寄せられました温かいご愛情とご支援にあらためて満腔の感謝を申し上げます。

当名古屋は旧幕時代は尾州家として江戸についで一番能楽師がいたとこうでありますが、明治維新後十年の空白により、四散のやむなきに至り、その復興に先人たちは大きな努力を重ね、古春舞台、大野舞台、愛知博物館能舞台の時代を経て、明治四十一年呉服町舞台ができ昭和五年まで演能がつづけられ、昭和六年布池能楽堂が竣功、隆昌をたどってきましたが二十年戦災で全焼、戦後は学校の講堂、名宝劇場、商工館、中日会館、御園座、松坂屋ホールなど転々として仮舞台の演能がつづけられました。そして昭和三十年社団法人名古屋能楽会を中心として、能楽愛好者の方々のご厚情、熱田神宮名古屋市など各界の格別のご力添えで今日の熱田神宮能楽殿が出来上がったのであります。まことに感慨無量のものがありますが、私ども名古屋の能楽界は、戦争により焼野原の中で終戦となってからわずか三カ月後に復興能を催したくましい芸道への気魄をもっております。こうした伝統をいかし、さらに今後大きく発展させていきたいと存じております。簡単ながら謝辞を申し述べごあいさつと致します。

奉祝　天皇陛下御即位五十年
熱田神宮能楽殿創立二十周年
記念能

八月二十四日（日）午前十時始
熱田神宮能楽殿

素謡

（剛）神歌
ツレ　武田邦弘
天女　小島一英
片野東四郎　水谷泰典　地謡　菊川豊　千々岩康治　三宅千春　日野晴三郎

（観）養老
梅田邦久
水波之伝
高安立石澄雄　飯富勝久　河村総一郎　後見　高橋瞭一　河村鉦二　地謡　加田貞敏　加藤保彦　長谷川章　佐藤武　塚久彦　加藤秀雄　藤本太俊　総兵衛

狂言小舞

貝盡し
佐藤友彦
井上礼之助　井上松次郎　佐藤秀雄　地謡　後藤杉村　武田竹翠　犬飼邦弘　末吉契雲

仕舞

小袖曽我　高橋瞭一　加賀敏彦　水藤元三　加藤総兵衛　加藤保彦　長谷川章

（観）実盛
雪林院クセ　盛キリ　小督キリ　紅葉狩　地謡　鈴木　武田　鬼頭　嘉男　正喜　宣永　久

（観）玄象
久田秀雄　筧山鉱一　地謡　岡田真柄　光弘米次　鬼頭季好　小島一英　梅田邦雄　増田信

（宝）草紙洗
葛城クセ　菊上　地謡　戸田和　竹内澄子　玉井弘子　鈴木　武田　鬼頭　嘉男　正喜　宣永　久

仕舞

難波　熊沢恵美子　月花キリ　高木美智子　眼部紗枝　地謡　青木　河村　久田　高橋　瞭一　秀雄　鉦一　武弘

（観）班女
若キリ　有賀滋子　吉田妙　地謡　高木　河村　久田　高橋　瞭一　秀雄　鉦一　武弘

（観）千手
小鍛冶キリ　連吟　生駒美代子　加藤良久　前野郁子

（宝）井筒
内藤泰二　西村欽也　福井吉田啓定　次郎男　佐藤秀雄　藤田六郎兵衛

間

後見　吉田鬼頭　俊彦　嘉男　地謡　加藤佐々木　稲川勝雄　寿一　河村　木　雄　利　地謡　竹内　衣笠　鈴木　腰巻　武田　正喜　義　一宣　永久

仕舞

高砂　日比野圭昭
松風キリ　吉川周子
歌占キリ　百々康治　地謡　小林　重本　豊田　菊川　清水　三千春　鳩　憲三　信明　忠三　昌三　正明　洋男　進

（春）加茂
杜若クセ　前田茂穂　林鉄郎　地謡　伊藤広瀬本田　後藤都築　藤瀬　瑞明　光弘　正明

8月・9月放送予定

◉ NHKラジオ第一放送　（毎週土曜日午後6時5分）

〔8月〕
16日（土）　観世流「清経」関根祥六ほか
23日（土）　金剛流「花筐」金剛巌ほか
30日（土）　観世流「融」観世静夫ほか

〔9月〕
6日（土）　宝生流「井筒」宝生英雄ほか
13日（土）　観世流「采女」観世喜之ほか
20日（土）　金春流「通盛」桜間金太郎ほか
27日（土）　観世流「仲光」大西信久ほか

◉ NHK・FM　毎週日曜日　（午前7時15分）

〔8月〕　夫婦愛シリーズ
17日（日）宝生流「芦刈」武田喜永ほか
24日（日）観世流「鵜太鼓」上田照也ほか
31日（日）狂言「箕被」和田喜太郎ほか
「鎌腹」善竹圭二郎ほか

〔9月〕　王朝の人々
7日（日）観世流「融」観世静夫ほか
14日（日）宝生流「井筒」宝生英雄ほか
21日（日）観世流「采女」観世喜之ほか
28日（日）金剛流「花筐」金剛巌ほか

NHK教育TV　8月17日（日）黒川能について

附祝言

A席二、〇〇〇円
B席一、五〇〇円

主催　熱田神宮
能楽協会名古屋支部
後援　中部能楽師会

挨拶
熱田神宮能楽殿運営委員長　長谷晴男
能楽協会名古屋支部　支部長　藤田六郎兵衛

狂言
二人袴
野村又三郎　佐藤卯三郎　井上礼之助　大野弘之

仕舞

（観）老松
柴田初太郎　地謡　青木　梅田　塚本　加賀　武田　邦弘　秀雄　敏彦

一調

（喜）鵜飼
二井栄逸　鬼頭八郎

（宝）枕慈童
衣笠正宣　福井　河村　総一郎　良久　地謡　稲川寿一　竹腰勝一　森本　池田　重一　茂　吉田　武田　内藤　俊彦　喜永　泰二

仕舞

笠之段
半蔀クセ　塚本秀雄　杉村竹翠

（観）
笹之殿　佐藤太俊
弱法師　殿島修二
鮎之段　河村鉦二　地謡　水藤　小島　高野　中村　瀬　和　元一　三英　透男

（喜）
船弁慶
長田競　松山明道　高安滋郎　飯富雅介　筧鉱一　柳原富司　忠　助川　竜夫　三男

間

真之船中之歌語伝　井上松次郎　後見　和島富太郎　加藤豊　地謡　富川　山田　井本　陽才二　宏　大島　大島　二井　政久　栄允見　逸

◉駐車場完備

奉祝 天皇陛下御即位五十年
熱田神宮能楽殿創立二十周年に寄せて

熱田神宮能楽殿
運営委員会委員長
長谷晴男

畏くも天皇陛下御即位五十年という、洵にお芽出度い年に、能楽の殿堂である熱田神宮能楽殿が、創立二十周年を迎えたことは、ご聞慶の至りであり、神明の御加護に、感謝の誠を捧げ、併せて各流の家元をはじめ能楽師諸賢、並びに能楽愛好者各位の深いご理解と暖かいご支援に対しても、衷心より謝意を表する次第である。

さて今般「能楽の友」の特集号刊行に因み、本紙を通じて、当神宮能楽殿二十年の歩みの概要を記るし、思い出の栞としたい。

（一）創立の由来

名古屋市東区市池町所在の、社団法人名古屋能楽会所有「名古屋能楽堂」は、中京唯一の能楽の殿堂として、繁栄の一途を辿って来たが、過般の大戦に空襲を受け昭和二十年三月十八日に全焼した。

戦後これが復興については、諸施設を完備した、立派な能楽堂を再建する計画を立てたが、敷地の獲得と資金造成の面で、困難な壁に直面した。そこで先ず、名古屋能楽会及び関係者、別けても当神宮総代岡谷惣助氏、能楽師西村弘敬氏、田鍋惣太郎氏等は、熱田神宮に交渉、同神宮境内に能楽殿を建設することを願い出た。

戦後に於ける熱田神宮の御造営は、無論、戦災を受けられた本宮以下諸社殿の復興を急務としたが一面これのみにとゞまらず、時代に即応した、色々な文化施設をも完備してゆく方針であったので、一応右の要請を受入れ、境内の一部を提供することゝなった。

次に新しく能楽殿を建設するには、資金の面で容易ならぬ情勢であったので、当初は、那古野神社（名古屋市内に鎮座）境内の能楽堂を移築する計画の下に、昭和二十六年頃より募金運動を開始したがその後、事情によって移築不能となったために、一頓挫をきたした。

かくて約一ケ年の間、種々検討の末、熱田神宮より総工費三、四〇〇万円を、造営資金より拠出し、竣功の暁には、建物を熱田神宮へ寄附することで、漸く話がまとまった。よって、昭和二十九年一月八日の吉日を卜し、熱田神宮能楽殿地鎮祭を斎行した。

なお、残りの一、七〇〇万円についての募財の情況は、その後に於ても一頓挫の兆候はあったが、県、市をはじめ、財界並びに能楽愛好者の絶大なるご支援を得て、昭和三十年十一月、時恰も熱田神宮本殿遷座祭が斎行された年の十一月十六日、建築の粋を集めた熱田神宮能楽殿が落成、同日に竣功祭を執行、続いて十七・十八日の両日に亘り、祝賀記念能を催行した。

（註）
◎建築様式　施工者の創案にかゝる最新型、暖房設備完備
◎建物坪数　一階一九五坪〇六、二階三三坪五五、楽屋三五坪八九、地下室一六坪一五、合計二八〇坪六五
◎座席数　一階四一八席、二階八〇席、補助椅子二四〇席、合計七三八席
◎総工費　三、四〇〇万円
◎施工者　株式会社竹中工務店
◎鏡板の揮毫　画伯江崎孝坪氏
◎企　監修　画伯前田青邨氏

（二）運営の概要

当神宮能楽殿に於ける催能について、運営の円滑を計り、名古屋市の文化の向上に寄与することを目的とした「熱田神宮能楽殿運営委員会」を組織し、現今に及んでいる。その会則には、本会の事務所を熱田神宮宮庁に置き、1、能楽殿使用申込の調整、2、能楽殿使用料の決定、3、能楽殿使用申込に対する予約金制度の制定、4予算の編成及び決算の整理等を事業とし、委員の員数は二十名以内で、熱田神宮推薦者、社団法人名古屋能楽会推薦者、能楽協会名古屋支部推薦者を以て組織し、委員長は熱田神宮権宮司に委嘱する。

本会の経費は、能楽殿の使用料及び寄附金を以てこれに当てるなどこの二十年間を、二期に分けて顧れば、前期に於ては、創立早々の時でもあるので、利用者の便宜を考慮に入れつゝ収益を計る方針で、主として能楽殿の使用料について、種々検討を加え、運営の基礎を固めたのであり、後期に於ては、利用者の増加と時代の趨勢に伴い、建物の増築・修理、諸施設の拡充に専念したと云えよう。

（註）
創立当時の委員
委員長　篠田康雄
委員　植村真太郎
〃　歌村彦四郎
〃　岡谷正男
〃　柴田初太郎
〃　鈴木鈴秋
〃　田鍋惣太郎
〃　西村弘敬
〃　藤田六郎兵衛
〃　松尾宗吾
〃（神宮）原田恒雄
〃（〃）松尾恭重

現在の委員
委員長　長谷晴男
委員　井上松次郎
〃　河村総一郎
〃　鬼頭八郎
〃　桐木陸良
〃　柴田初太郎
〃　高橋半次郎
〃　高安滋郎
〃　殿島修二
〃　内藤泰二
〃　福井啓次郎
〃　藤田六郎兵衛
〃　松尾宗吾
〃（神宮）岡地幸雄
〃（〃）二橋一彦

（委員は五十音順、但し神宮職員を除く。敬称を略す。）

昭和三十九年五月、委員長権宮司篠田康雄氏、宮司就任に伴い、本会々則第六条により、権宮司長谷晴男が委員長に就任した。

（三）建物の増築と施設の拡充

当初の楽屋は十二畳三室で、シテ・ワキ・囃子・狂言方が適宜使用していたが手狭になったので、鏡間の東側に総二階を増築、一階十畳二階をワキ・囃子・狂言方の楽屋、二階を食堂とすることゝした。昭和三十五年十月二日に地鎮祭、昭和三十六年三月三日に竣功祭を斎行した。総工費五〇〇万円、施工者　株式会社竹中工務店。

次に各家元が来場の際には、家元専用の控室が必要であるという要望により、鏡間の南側に控室一坪を増築することゝし、昭和四十年四月十六日地鎮祭、昭和四十年八月三十日に竣功祭を斎行した。この工事に併せて、二階見所の長椅子を撤し、固定椅子七十六脚に改装した。総工費四八九万円、施工者　株式会社竹中工務店。

建物の修理、施設の拡充等については、屋根の修理、空調施設の取付、消防法による防災施設の取付等で、総工費一、七〇〇万円を要した。これの分担は、神宮側が八五〇万円、能楽協会名古屋支部が八五〇万円ということで、名古屋支部よりは、創立以来、巨額な寄附金を仰いだことを明記しておく。

（四）特殊な演能

1、熱田祭奉納能
毎年六月五日熱田神宮例祭に際し、奉納行事の一つとして催行、昭和三十二年度より十八回、（昭和三十五年度を除く）。

2、新能
毎年八月に催行、昭和四十一・四十二年度は、市内の若宮八幡社の境内で行ったが、昭和四十三年度より当神宮境内で行うことゝなった。十回。

なお、昭和四十九年七月に、能楽協会名古屋支部より、敷舞台を寄附、舞台を一新した。

3、乱能
昭和三十三年度より昭和四十六年度まで催行、十二回。（昭和三十四・四十五年度を除く）。

4、義捐能
昭和三十四年九月の伊勢湾台風義捐金募集の目的で催行したのがはじめで、昭和四十四年度より毎年催行、七回。これによって得た収入は、愛知県と名古屋市へ義捐金として寄附、その都度、知事、市長の感謝状を受けた。

5、祝賀記念能
昭和三十年十一月十七・十八日に、熱田神宮本殿遷座・熱田神宮能楽殿竣功祝賀記念能を催行した。

昭和四十年十一月三日に、熱田神宮能楽殿創立十周年記念能を催行した。

昭和五十年八月二十四日に、奉祝　天皇陛下御即位五十年・熱田神宮能楽殿創立二十周年記念能を催行することゝなった。

大要上述の通りであるが、我々はこの佳き年を契機として、能楽殿の繁栄と斯道の興隆に、全力を尽す所存であるので、今後共一層のご支援を賜わるよう、切に念願して筆を擱くことゝする。

熱田神宮能楽殿
創立二十周年　祝辞

祝　熱田神宮能楽殿創立二十周年
春日大社
宮司　花山院親忠

暑中お見舞申し上げます

鎮仙会
観世鎮之丞
観世寿夫
観世静夫

中日文化センター特別教室
観昭会
昭門会
観世元昭

幽花会
片山慶次郎
〒603 京都市北区小山下花ノ木町二一
電話 四九二一 五三〇二番

大江又三郎
京都市東山区本町廿丁目
電〇七五（五六一）〇六二二番

名古屋淡交会
橋岡久共

誠交会　奥善助
東京都世田谷区三軒茶屋二一一〇一二二
電話（〇三）四二二一二六三七番

武田謡楽会
武田小兵衛
武田欣司
武田邦弘

金春流
伊勢八声会
中村富次
伊勢市宮町一一一四一一七

嘉謡会　加藤総兵衛
名古屋市千種区青柳町五ノ一五
電話（七四一）四六七五番

此水会　高野瀬透

水雲会
水藤元三

壺泉会
泉嘉夫
名古屋市昭和区山里町一〇三
電話 八三二一 三一八五
西宮市甲陽園目神山町一の一七八
電話 八〇七九八八〇 ㊗ 二四五八

久田観正会　久田秀雄

松謡会　佐藤太俊
名古屋市名東区上社二丁目三七一〇二
電話（七七二）四七四六

犬飼末吉
名古屋市中川区柳瀬町二一四〇

蛍雪会　後藤契雲
名古屋市中区栄三一三三一一〇

清光会
岡田光紘

知水会　服部紗枝

幸謡会　近藤幸江
岡崎市鴨田本町十一番地ノ三
電話（〇五六四）㉑二五二九

野口禄久

高安同志会
飯富良人
〒860 熊本市黒髪一丁目六の二九

佐野正治
金沢市泉野町四丁目十二一十四

鼓雲会
内藤泰二

竹腰勝一

吉田俊彦

金春欣三
東京都中野区中央四一六一一二一三三
（〒164）電話（三八四）六七七三

本田光洋
東京都中野区上高田二ノ二五ノ二
電話（三八六）二六四一

林鉄郎

中部金春会
前田茂穂

会長米本平一
名古屋市中区老松町一ノ二八
電話（二四一）三一四一番

麦の会
長田暁
衣斐正宜

春鼓会　真柄米次
名古屋市西区江向町三ノ四八
電話 五三一一 二三七七番

長生会

熱田神宮能楽殿 創立二十周年 祝辞

熱田神宮能楽殿の二十周年をお祝いして

観世流二十五世　観世元正

名古屋・熱田神宮の神域に能楽殿が建設されましてから早や二十年を経、同記念能の開催をはじめ能楽の友紙ではその特集号が発行されますとのこと、衷心よりお慶び申し上げます。

熱田神宮は、申し上げるまでもないとは思いますが、三種の神器の一つである草薙の神剣を御霊代とされる天照大神・素盞嗚尊を御祭神とし私共多くが無上の崇敬と信仰とをよせて来たお宮で、その東参道南寄りの神域に、鉄筋コンクリート二階建ての近代的な能楽殿が竣工致しましたのは、昭和三十年十一月のことゝ記憶が甦って参りますが、いらい戦後の荒廃から漸く立ち直った中京の能楽界に新しい息吹きと勇気とを与え、多くの能楽ファンに親しまれつつ今日に至ったのであります。

本年その二十周年を迎え、来る八月二十四日には、記念の能が能されることになっておりますが、これを一区切りとして、向後三十年、四十年と末長く皆様方に親しまれる能楽殿として、益々の発展あらんことを念願して止みません。

併せて、斯界の報道に日夜意を尽くして居られる御紙の心からの御発展をお祈り致す次第です。

以上簡単ではございますが、熱田神宮能楽殿の一端にふれ、二十周年をお祝いする言葉に代えさせていただきます。

熱田神宮 能楽殿の〝成人式〟を祝う

宝生流十八代宗家　宝生英雄

昭和五十年というまことに意義ある年に、中部能楽界の殿堂ともいうべき熱田神宮能楽殿が創立二十周年を迎えられ、熱田神宮、能楽協会名古屋支部の主催により記念能が催されますことを心からお祝い申し上げます。

とくに熱田神宮能楽殿は、その創立から今日に至るまで、能楽各流の方々が相い協調され、その運営ようしきを得て、能楽の発展に大きな貢献をなされてこられましたことは、特記すべきことでありまた能楽要好者の方々の熱心なご支援によって、今日にみる名古屋の能楽の発展がつちかわれたと存じます。

創立二十年いうなれば「成人式」を迎えられた熱田神宮能楽殿を土台に、御地の能楽界がいよいよご発展されることを衷心から祈念いたしましてご祝辞にかえさせて頂きます。

創立二十周年を祝う

金剛流宗家　金剛巌

布池町の舞台を戦災で失ってから、劇場や百貨店の仮設舞台で演能をつないでいた中京能楽界が、熱田神宮神苑の緑樹の影の好地を得て、白亜の能楽の殿堂を再建されてから、早や二十年の月日が経ったことは、今昔の感に堪えません。都市の急速な復興と相まって万難を排して近代設備のととのった立派な能楽殿を建設され、また今日まで、補完と維持に万全を期されたのは、関係者の御努力もさることながら、芸どころ名古屋の能楽ファンの心意気を示すものであり、正に敬服の外ありません。

二十周年を迎えた熱田神宮能楽殿が、今後も永く演能の場として栄え、程よいサビがついて行くことを祈ります。

熱田神宮 能楽殿 創立二十周年を祝して

高安流ワキ方宗家　高安滋郎

本年は熱田神宮能楽殿が設立されてより、早や二十周年を迎え、能楽殿での演能が益々隆盛になりつつある事は、誠にお目出度いことと存じます。

回顧すれば、昭和二十年三月に戦災により東区布池町にありました名古屋能楽堂が焼失した時は、われわれ能楽師は永年自分達の道場として親しんで来た能楽堂であっただけに、全く茫然としてしまいました。その後いろいろと建設に関して議論がなされ、一時は他の邦楽と一緒に芸能会館を建設したらと云う説も出されて、その為に幾度も会合が開かれましたが、結局能楽はやはり特殊性から云っても専門の道場としての能楽堂を建設されるのが一番適切だとの意見により当時の名古屋市助役田渕氏のお口添えもあり、やはり会場には将来駐車場の出来る位の場所が是非必要との説があり、熱田神宮の境内に建設が決定され、戦後十年を経過した昭和三十年現在地に神宮能楽殿として建設を見る事が出来、現在のようにいよいよ隆盛を極めるに至ったことは何んとも喜ばしいことで御座居ます。

建設に当り、種々ご尽力を賜った先人、故人の方々に改めて深く感謝を申し上げ、斯道への精進を尽くしたいと存じております。熱田神宮能楽殿創立二十周年にあたり蕪辞ながらご挨拶と致します。

祝　創立二十周年

ワキ方福王流宗家

祝　熱田神宮能楽殿創立二十周年

春日大社　宮司　花山院親忠

日光東照宮　宮司　額賀大興

湊川神社　宮司　吉田智朗

大要上述の通りであるが、我々はこの佳き年を契機として、能楽殿の繁栄と斯道の興隆に、全力を尽す所存であるので、今後共一層のご支援を賜わるよう、切に念願して筆を擱くことゝする。

（熱田神宮宮司・皇学館大学教授）

〔第104号

昭和三十六年三月三日に竣功祭を斎行した。総工費五〇〇万円、施工者　株式会社竹中工務店。

次に各家元が来場の際には、家元専用の控室が必要であるという要望により、鏡間の南側に控室一室七・五坪、廊下二坪、合計九・五

大要上述の通りであるが、我々はこの佳き年を契機として、能楽殿の繁栄と斯道の興隆に、全力を尽す所存であるので、今後共一層のご支援を賜わるよう、切に念願して筆を擱くことゝする。

（熱田神宮宮司・皇学館大学教授）

武田小兵衛
武田欣司
武田邦弘

金春流　伊勢八声会　中村富次　伊勢市宮町一―一四―一七

喜多実　東京都練馬区中村南一ノ二九ノ一一

大阪喜多会
和調会
和島富太郎　〒665　宝塚市宝梅一丁目十二―一　電〇七九七―七一―八六三〇

宝生閑　宝生弥一　東京都練馬区小竹町一の五〇　電話〇三（九五五）四七九五番

福王茂十郎　福王輝幸　大阪市東区平野町一―一五　西宮市名次町六ノ一二

脇方高安流　谷田宗二朗　〒603　京都市北区衣笠街道町31―7　電話（四六三）四八七五番

京都高安会　岡治郎右衛門　京都府長岡京市開田静野二―一七　電話（〇七五）九三一―二五二三番

住駒陽介　明弘　幸英

鬼頭季信

前川善雄　京都市右京区御室芝橋町一ノ六

岡崎市鴨田本町十一番地ノ三　電話（〇五六四）㉑二五二九

野口禄久　東京都練馬区西[illegible]

高安同志会　飯富良人　〒860　熊本市黒髪一丁目六の二九

山崎悛輔　〒836　大牟田市馬場町五七

呉竹会　筧三男　名古屋市中村区荒輪井町2―15　電話（四一一）九三〇一番

櫻月会　大倉長十郎　正之助　源次郎　吹田市江の木町一六ノ一ノ七〇二　電話（〇六）三八六―五六五六番

幸友会　福井啓次郎　福井良久　柳原冨司忠

桂会　岐阜市松屋町　後藤方　亀井俊一　忠雄　保雄　実

麦の会　長田暁　衣斐正宜

春鼓会　真柄米次　名古屋市西区江向町三ノ四八　電話　五三一―二三七七番

長生会　鬼頭八郎　鬼頭喜太郎　鬼頭好信　愛知県中島郡平和町城西　電話（〇五六三）⑥一九六〇番

山本敬一郎　大阪府泉南郡阪南町貝掛一〇二ノ九一南海団地西三ノ九

山本孝　大阪府豊能郡東能勢村大字吉川一五ノ一二五ときわ台住宅二五三

筧鉱一　吉田定男

助川竜夫　山口義郎　山口亮

狂言　和泉会　和泉保之

野村万蔵　東京都豊島区南長崎六―五―四

善竹忠一郎　神戸市東灘区御影町郡家大蔵二二

茂山忠三郎　〒564　吹田市山手町一丁目二十二―十一　電話〇六（六六〇）三五二八番

熱田神宮能楽殿 創立二十周年を祝う

幸清流小鼓方十四世 幸圓次郎

今日二十年を記念される催しを前に物故された福井五郎、田鍋惣太郎両氏の功績も長く能楽堂の歴史の一頁を飾るものと考えます。

幸い只今は福井一門、後藤、柳原、山口と後進の活躍も望まれまして、幸清流の名古屋能楽界への助力も期待する次第です。

東の間に過ぎた二十年の歳月の短かさの感慨も深く尚今後の十年の在り方に興つきぬ思いが致します。

一言ながらお祝いの言葉にかえます。

熱田神宮能楽殿創立二十周年お目出度うございます。心から祝福申上げます。

思い起こしますと終戦後の混乱期に発案され創立に至る迄の皆様の御苦労は誠に筆紙に尽し難いものであったと思います。

祝 熱田神宮能楽殿創立二十周年
「二人袴」 佐藤卯三郎 画

熱田神宮能楽殿創立二十周年 特集号おめでとう

沼 艸雨

名古屋は、能の中枢地帯として各流、最高名手の来演に賑わって

代から、度々お邪魔したものでしたが、戦災後は、優秀ではあったが仮設舞台で拝見していましただけに、昭和三十年十一月、熱田神宮に、本格の舞台、扇形の見所というモダンな、しかも高雅な能楽殿が竣功したことは、昭和能楽史の一つの記録でありました。四流家元出演の舞台披きの盛観がまざ

今や二十周年を迎え、数々の名演能を紹介した誇りに輝いた今日を迎えたことは、名古屋の文化の実証としてご同慶にたえません。

そうした文化の土壌によって生れた「能楽の友」がその特集号を発行せられることは、二重の喜こびといわねばなりません。

私は前にもいゝましたが、今研究する人にとって、一番有り難いことは、数限りない、情報の記録と伝達であります。「能楽の友」がその方面に果している功績に改めて感謝すると共に、ますます発展せられんことをお祈りいたしま

汎能楽界の舞台

森田光春

実力

吉

熱田神宮能楽殿が出来てから、もう二十年になるとは

師の「道成寺」で小鼓を披かれたのも初期のころだった。

椅子席の見所へ靴のままはいれるのだし、舞台を正面と脇正から接する見所の具合も、能に親しみ

（東京都杉並区能楽協会代表幹事）

伝統の地のよき舞台

高安流大鼓 安福春雄

熱田神宮能楽殿は先年亡くなられた小鼓方田鍋惣太郎氏の大変なお骨折りと土地の有力な後援者の御尽力のおかげで、今日の立派な舞台が竣工したと聞いている。その舞台披きも記憶に新しいが、月日の経つのは早いもので、今年、二十周年記念能が催されるのは慶祝に堪えない。

この舞台は、見所が円形に作られているため、観客にとっても見やすく、また囃子方にとっては演奏しやすいのが特色の一つだが、二十年の歳月を経て、いつそう落ち着きと重みを加え、ますます磨きがかかったのは、うれしいことである。

昔から中京は能のさかんな土地で、今でも土着の職分には、江戸時代、尾州候お抱えの家柄の人が多い。戦前、本格的な舞台がなかった当時は、東京・大阪へ観能に出かける人が多かったが、熱田神宮能楽殿が竣工して以来は、むしろ東京・大阪から能楽師、囃子方を集めて、大きな催しが開かれるようになり、ますます能はさかんになった。観世、宝生、喜多、金春金剛の各流が地元にそろっていることも、他の地方都市には見られない大きな特色で、さすがに、古い伝統に培われた文化の土地である。

能楽殿二十周年を祝い、今後もいつそうの能の隆盛、発展を祈る次第である。

超流儀の拠点

渡会恵介

このごろ中部――すなわち名古屋を拠点とする演能活動は目をみはるものがある。観世・宝生・金剛に加えて喜多流も、それぞれに舞台を競ってきたが、そのいずれもが熱田神宮能楽殿に拠っている。

いゝかえれば、この能楽殿が中部能楽界の振興に大きな役割を果してきたことになる。このように巨大の足跡を残してきた能楽堂は他に例がないのではあるまいか。なるほど東京にも大阪にも、そして京都にも多く能楽堂があってそれぞれの流儀の拠点とはなっているが、流儀を越えて能楽界全体のホームグランドとなっているのは名古屋の、熱田しかないようにも思える。

その能楽殿が創立二十年を迎えたことは、だから大へん深い意義をもち心からお祝いしたい。

これからも熱田神宮能楽殿の興亡は、能楽界の浮沈を示すバロメーターともなるであろう。そして今後とも各流の競演によって能楽殿がフルに活用され、ひいては、それが能楽界の発展の基となり、文字どおり能楽の殿堂として夥々たる成果を記録されていくことを期待したいし、また能楽にかかわる一人として微力をつくしたいと思う。

（東京都杉並区能楽協会代表幹事）

お祝いのことば

観世流太鼓宗家 十六世 観世元信

熱田神宮能楽殿創立二十周年本当におめでとう御座います。私は戦後斯界にお世話に成り始めましたので、戦前の事は存じませんが名古屋では戦後松坂屋ホールの仮設舞台に数回お邪魔した事が有ります。その関係者、有志の熱心な御努力により、芸どころ名古屋にしては少々遅さに失した感はありましたが、熱田神宮の御理解を得て、全能楽師期待と待望の能舞台が立派に出来上り、中部能楽発展に大きな役割を果した功績は誠に大なるものがあります。殊に私の流儀では、名古屋在住の鬼頭八郎はじめ、職分、師範、流友を問わず多くの人達が終始お世話に成って居り、落着いた神宮境内の雰囲気の中で、見所、楽屋共ゆったりとして拝見しやすく、又演じ易い御舞台で御座います。

それにつけても頻繁に名古屋に御邪魔している私共は、当時舞台建設の為に骨身を削って尽力して下さった方々に、心から感謝して居る次第で御座います。

二十周年をお祝いすると共に、今後もこの御舞台から、どん〳〵良いお催が生れます事を期待してやみません。

20周年を祝う

石井流大鼓 谷口喜代三

熱田神宮能楽殿創立二十周年より二十年もの昔、当時御地の御園座にて、舞台創立資金集めのため、田鍋惣太郎氏の御尽力により、盛大な催しをなされました事です。小生は、喜多実師の羽衣に御相手をさせて頂きましたことはつい最近のように思えてなりません。それがいつしか二十年も経過してますとは、全く夢のようです。其の後御地能楽界は年々益々盛んになって参り、此の度立派な記念能が催されます事は誠に嬉しい限りでございます。

当流（石井流大鼓）は、御地能楽界と昔から深い関係にありますので、心からのお悦びを申し上げます。

当流の流祖は樋口石見守と申し遠く豊太閤の側近大名にて、御地には流儀家元四代目、石井仁兵衛良二の次男、石井孫三郎良甫が、正徳元年に参りましてからの関係初代でございます。明治維新の頃全国的に能楽界が衰微し、能役者も殆ど能界を去って他の仕事に移りました。御地の「石井流」も自然そのまゝ行方不明になりました。その後能界がぼつぼつ復興して参りました頃、御地に残って居りました「石井分家」の弟子、「吉田方条」氏（現在の「吉田定男」君の曾祖父）並に方条氏の弟子「西尾孫太郎」氏が跡をつゞけ、現在「吉田定男」及び「河村総一郎」の両君が京都の小生宅迄はるばる修業に参り、元気に只今、御地能楽界に協力して居ります次第でございます。

小生も若い頃は田鍋惣太郎氏の御依頼にて昔の「布池」の御舞台の頃より度々御地へ伺いました。いろいろと思い出は限りありません。小生最近は身体の調子も悪くなり、主治医からも遠方の出勤を禁じられてます始末で、又吉田、河村の両君が元気にやってくれてますのを良い事として、無責任にも御無沙汰勝ちになってしまって相すみませぬことを深く御詫び申し上げます。

今後出来ますれば身体の調子の良い時には又伺い度存念でございます。其節にはよろしく御願い申し上げます。

御地能楽界の愈々御隆盛をかげながら祈念しますと共に、祝辞、

斯界の発展に期待

大倉流大鼓方 大倉七左ェ門

貴地熱田神宮能楽殿創立以来満二十周年を迎えられしことひとえに関係者御一同の運用よろしきを得たることとして誠に御目出度御祝申上げます。

今後共益々斯界発展に一層の御努力のほど能楽協会名古屋支部の各師に期待する次第で御座います。

先人の偉業に感謝

狂言共同社 井上松次郎

昭和三十年十一月十七、十八の両日、観世、宝生、金剛、金春の各御宗家の御来演を得て、盛大に能楽殿落成祝賀式能が催され、本年で丁度二十年に当りますので、八月二十四日記念の能が開催されますことは誠に慶祝の至りで御座います。

能楽殿の建設にあたっては熱田神宮はじめ地元各界の多大のご力添えが実ったものでございますが能楽界としては、いまを去る二十六年前、戦争により灰燼に帰した名古屋の復興が漸く緒につきはじめた昭和二十四年十一月十一日城山・大塚宅にて、協会名古屋支部の発会式が開かれ、席上戦災により焼失致しました布池町の能楽堂に代わる新しい能楽堂をどこかに是非建設しようと井上新三郎氏をはじめ田鍋惣太郎氏、西村弘敬氏福井五郎氏等の格別の御尽力にて能楽堂建設期成会が結成され募金に着手致しました。

能楽殿鏡の間に西村弘敬氏の筆になる芳名録がかゝげられておりますが御尽力の御方は殆ど故人となられ感無量のものがあります。

能楽堂建設が海のものとも山のものとも判らないときに能楽界の先人たちは東奔西走、ひたすら建設の息吹きに情熱を傾けられたことをあらためて思うとともに、またこうした混とんとした時期に御協力下さった各位に深甚なる謝意を表するものであります。

二十周年を迎えるに当りいさゝか建設期成会の事にふれ感謝の意を表するものであります。

想い出

殿島修二

熱田神宮の神域に新らしく能楽の殿堂が建設せられて早くも二十周年を迎えたについて今度盛大に記念能が催されることになった。

この二十年を顧みて涙々思い出される事は多く感慨無量である。

私がこれ迄に能楽殿で舞わせてもらった能は三、四十番を数えるに至りましたが、其の中で一番印象に残っている能は何と云っても「道成寺」で、それは能楽殿が出来て間もない絵の香新らしい時の事であったことが、第一の想い出と云えること、殊には恩師大槻十三先生のご存命中で、当日は故先生の能「安宅」（これが先生最後の安宅であった）と私の「道成寺」と二番建てで、秀夫先生の後見、観世流シテ方能楽の友編集同人として十三先生のお地謡という私にとっては又と得られない豪華番組で、見所は超満員の大盛況であったことは終生忘れることの出来ない懐しい想い出として今茲に再び甦って来るのである。

「能楽の友」が創刊されて来年は十周年を迎えます。同紙の創刊に当っては故田鍋惣一郎師が発起者として並々ならぬ尽力をされ、来るべき十周年記念能を、あれこれと考えて企画されていた事もついこの間のことのように思われるが今は故人となられ、能楽殿の創設にも何かと努力をされたのに早生せられ、嘸かし泉下において心残りとされていることゝ思うと悔まれてならない。

能楽の友創刊十周年記念能と併せて惣一郎師の追善能を是非実現させたいと高安師ら同人の皆が会合の折にはいつも話題になっているので、意義ある記念能を立派に催したいものと念願しているのである。

（観世流シテ方能楽の友編集同人）

名古屋と和泉流

和泉流宗家 和泉保之

汎能楽界の舞台

森田光春

熱田の聖地に能楽堂が出来て早や廿年と承りまことにお目出とうございます。近代建築による能楽堂としては現存では最も古いものと思いますが、その間唯に土地の方々のみならず、東西の名人名手の来援を希われて幾多の名場面が展開されていったという能楽堂は全国でも大変稀なものと確信致します。

それはひとえに鯱城の皆様方の温き御支援と寛大な御厚情によるものと存しますが、またこの舞台が一流一派に偏せず、汎能楽界の舞台として歩んできた実績の賜と思います。

しかも御地の観客の皆様方は、たとえある流派の愛好者でも他流の能をどしどし観賞されて一段と高い境地から能を評されることは昔から「名古屋は芸の恐いところ」といわれる所以であります。中日五流能が毎年あれだけの盛況をみていることからも自明のものであります。

囃子方の立場として、この能楽堂建設の功労者の一人でありました故田鍋惣太郎氏がよく東西の囃子方の交流を企てられ、囃子方が揃わなくてはよき能が出来ないという戦前から一貫した思慮が今日の御地の隆昌を招き、ひいてはこの能楽堂のいしずえとなったことを思い、改めて師の偉大な足跡をしのぶ次第であります。また師のこの要望にこたえ、御地の若い囃子の方々が立派に育たれたことは誠に御同慶の至りと存じます。小生も時折招かれて出勤させて頂く度にこの感を深めている一人であります。

終りに当舞台の楽屋は全国でも稀な位便利に出来ていて、しかも楽屋内の雰囲気が厳しい中にも大変温い空気が漲っていることを強張して御祝辞の一端と致します。

（笛方森田流）

祝詞とともに

西田三好

熱田神宮能楽殿建って二十年。名古屋によらず全国の能界が最も困難な時代に遭遇したのはそれ以前、戦災で能舞台を焼いてしまった期間であったと思います。

名古屋の能楽堂変遷をたどってみると、吾々が、自由に能を見られるようになったのは呉服町能楽堂の時代とみてよいでしょう。それが布池町に移転し、桝席が椅子席にかわり、能界も段々と時代に適応して盛んになりましたが、戦争がはげしくなって、この由緒ある布池舞台も戦災をうけて丸焼けになったのは終戦の年の春であったと思います。

以来、舞うに舞台もなく、商工会議所、学校、松坂屋ホールなどに不充分ながら仮設能舞台を設け演能が行われていました。しかし一般には舞バヤシ会などが数多く行なわれ、焼け残った寺や神社の廣間が極度に利用され、能のない空白を埋めていたのであります。これが当時名古屋の特長でありました。

一方新能楽堂の再建に能界一丸となって努力を続けまして、私も当時は能楽堂建設委員の末席をけがし、大いに協力いたしました。

幸い名古屋財閥の伊藤次郎左衛門、岡谷正男氏らの尽力によって熱田神宮境内に建立することによって成立したことはようこびに堪えませんでした。

以来二十年を過ぎたこの頃、全国各地には立派な能楽堂が次々に竣功し、各々長所を誇っています。二十年を過ぎて熱田能楽殿も改造しなければならない点が数多くあると考えられます。私は御祝詞を申しあげるとともに今後は運営当事者の開眼をさらに望みます。

名古屋の実力

北岸佑吉

熱田神宮能楽殿が出来てから、もう二十年になるとはまことに近来、時のたつのが速い感じである。

名古屋というところは、学窓を出て最初に赴任し、昭和はじめの数年間を送ったただけに、私には、どこよりも思い出も多く、なつかしい都会である。

桑名町だったか、古い能楽堂へも一、二度能を見に行ったことがある。古いことは故西村弘敬さんが本紙に書かれていたから、正しい記録はここでは許して頂くが、やがて布池町に出来た能楽堂とそは、新しい近代的な能楽堂として東京にも大阪にもない瀟洒な建物だった。

ここの能能は保能会といったと覚えるが、一流に偏せず、各流の能がまじって演じられたのは有難かった。よく洋画家の鬼頭鍋三郎さんといっしょに行ったものだ。確か田鍋惣一郎さんが先代金剛巌師の「道成寺」で小鼓を披かれたのも初期のこうだった。

椅子席の見所へ靴のままはいれるのだし、舞台を正面と脇正から接する見所の具合も、能に親しみを持たせるような感じだった。

その布池町舞台の面影が今の熱田にも伝わっているように思う。私が大阪へ移ってから、大阪にも椅子席の見所の大概能楽堂が出来たが、大阪には既に朝日会館に特設能舞台があって、近代的な能楽見物がなされていたのだが、環境が大寺院の境内であるというなごやかさが、今の熱田にもあるのはいうまでもない。

神戸の湊川神社境内に出来た神戸能楽殿も、その点で同じように和やかさを持つ。やっぱり、能という芸術が、奈良の春日、興福寺などの雰囲気の中で育ったものだからであろうと思う。

戦後、松坂屋内の劇場や御園座で行われた能も知っているが、戦前、鶴舞公園の市公会堂で催された能も、よい印象を残している。

朝日新聞名古屋本社が出来て、その講堂に以前東朝講堂のために作った組立能舞台が名古屋へ移されて使ったことがある。それは見られなかったが、その組立舞台が残っているはずだから、愛知文化講堂で朝日能をやろうという話も出ていたとこう、文化講堂で独自に立派な組立舞台が作られることになり、その舞台披きと翌年と二回、朝日五流能を私も関与して実現した。中日五流能は、そのあとをついで行われたのだと覚えている。

そうした大楽能が他の都市よりも活発なとこうが、やはり芸どこう名古屋の本領なのであろうが、それも、能の本拠としての熱田能楽殿があればこそ、すべてが地についた実力が名古屋古能楽界に温存されているのであろう。

（文化庁文化財保護専門委員・大阪芸大教授・朝日新聞社客員）

熱田礼賛

村田広二

熱田神宮能楽殿ができて満二十年を迎えました。まことにおめでとうございます。

昭和二十年の三月布池能楽堂が焼失し、熱田神宮内に能楽殿の立派な容姿を見ることができるまで終戦後の名古屋は、演能の場所を求めて文字通り転々としました。それは五指をはるかに越すでしょう。いちはやく二十年十一月に復興能（片山博通・先代茂山千作ほか京都・名古屋勢、名宝劇場）が能されてから、能楽に寄せられる好意は大きいものでしたが、並々ならぬ心身の苦労がありました。

それに併行して、練りに練られてきた新能楽堂建設の希望が三十年の秋ついに実ることになりました。美しい願いが達成したのです明るい世界の到来でした。当時は二九年名古屋にテレビ塔完成、三〇年電化時代はじまる、三一年メルボルン・オリンピック、三二年名古屋城再建開始・五千円札発行・神武景気などの話題（東海銀行・調）をあげることができます。

その頃、能では金剛巌（初代）野口兼資氏は既に故人となっておられましたが、喜多六平太・梅若実（二代、愛文講堂・御園座）・桜間弓川・橋岡久太郎氏の至芸は狂言の善竹弥五郎・山本東次郎氏の妙技とともに味得することができました。

今後出来ますれば身体の調子の良い時には又伺い度存念でございます。其節にはよろしく御願い申し上げます。

御地能楽界の愈々御隆盛をかげながら祈念しますと共に、祝辞、思い出等を書かせて頂きました。

名古屋と和泉流

和泉流宗家　和泉保之

熱田神宮能楽殿が建つについては、故田鍋惣太郎さんの多大な力があったことは、皆さん御承知のとおりです。それまでは松坂屋ホールで行なっていた能・狂言の催しが、この能楽殿のできたことではじめて本格的なものになったわけです。

当時、田鍋さんの片腕として能楽殿建設に協力したのは、狂言共同社の代表であった故井上新三郎氏でした。そして、能楽殿が建ってすぐに、朝日狂言会が、朝日新聞社と狂言共同社の共催で、発足したのです。

その朝日狂言会の二回目でしたかに和泉流の若き宗家を見る会という企画が立てられて、私が「花子」を演じさせて頂きました。それがきっかけとなって私が名古屋へ稽古しにくることにもなり、やがて名古屋和泉会も生まれたのでした。

狂言共同社は、その後、新三郎氏から弟の歌村彦四郎氏、さらに現在の井上松次郎氏へと引き継がれています。私と共同社との縁もたいへん深いものになって参りました。今まで、とかく名古屋と東京とが疎遠になりがちだったのがこのように深い縁ができましたのも、能楽殿が機縁となっておりますので、私としても、この二十年の歴史をふりかえりますと、一入感慨の深いものがあります。この舞台で「花子」もやり「金岡」もやり、その他ずいぶん珍しい曲も上演することができました。

中京における唯一の能楽の殿堂として、一人でも多く、同好の方々が足を運んで下さること、そしてこの能楽殿を根拠にますます中京の能楽が発展することを望んでやみません。

祝　熱田神宮能楽殿　創立二十周年

魚伊

鮮魚　鰹節

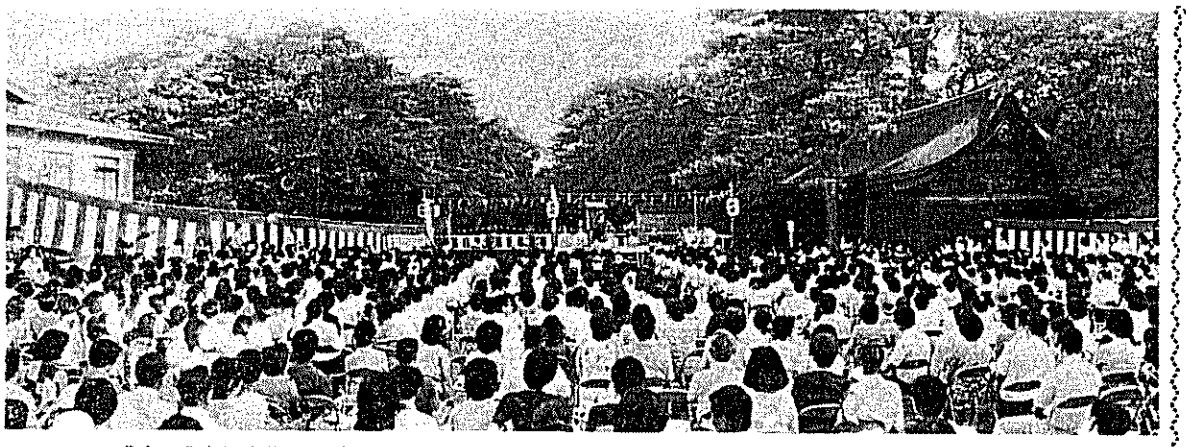
豊橋市魚町18　電話（52）5256

豊橋也留舞会連絡所　（山本浅太郎方）

御料理　あつた　蓬莱軒

本店　熱田区神戸町三四　電話（671）8686～8

神宮東門店　熱田区新宮坂町一　電話（682）5598（代表）



盛会のうちにくりひろげられた
第10回名古屋薪能

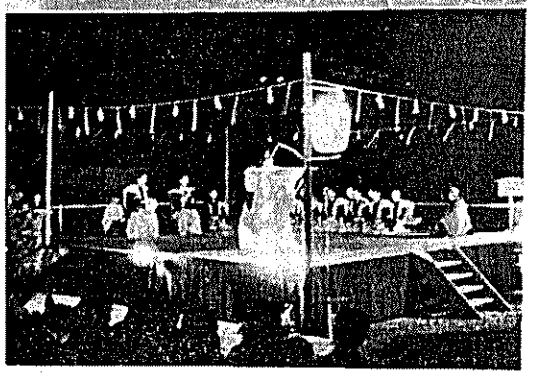
第10回 名古屋薪能
熱田神宮で盛大に開催

名古屋薪能は、八月二日午後五時三十分から快晴に恵まれて熱田神宮境内、神楽殿前特設舞台で盛大に催された。

薪能はことしで十回目を迎え夏の風物詩としてすっかり市民におなじみとなり、緑につつまれた熱田神宮の参道には、薪能の提灯がめぐらされ開演前にすでに千五百人を越える来会者でいっぱい。

演能は、喜多流舞囃子「加茂」にはじまり、仕舞観世流「三輪」、金春流「鞍馬天狗」の二番につづき観世流能「小督」の格調ある舞台が展開。金剛流舞囃子「鉄輪」ののち本山名古屋市長代理・清水市民局長が「定着してきた名古屋薪能が年々盛大になることを喜ぶとともに市民文化のためいっそうの発展を祈る」と祝辞をのべた。

火入れ式は午後七時熱田神宮長谷晴男権宮司が正面から舞台にあがり、能楽協会名古屋支部藤田六郎兵衛、高安滋郎、内藤泰二、井上松次郎、鬼頭八郎の諸氏が舞台において たいまつの手渡しにより点火式が厳かに行なわれた。正面、ワキ正面のかがり火があかあかと映えるなかに宝生流・能「花月」狂言「太刀奪」観世流能「紅葉狩」の舞台がくりひろげられ、午後九時盛会のうちに終了した。



㊤薪能の儀式・火入れ式のスナップ
㊦かがり火の映えるなかでの演能「花月」

◆演能カレンダー◆
（熱田神宮　能楽殿）

〔8月〕
24日（日）熱田神宮能楽殿創立20周年記念能　（有料）
28日（木）名古屋宝生会主催仕舞・素謡鑑賞会（有料）

〔9月〕
7日（日）大　衆　能（愛知文化講堂）番組⑪面掲載
14日（日）観世会定式能　番組⑥面掲載（有料）
15日（祭）霊　雲　会　秋の大会
20日（土）名古屋観世九皐会定式能　番組⑦面掲載（有料）
21日（日）宝生会定式能　番組⑦面掲載（有料）
24日（祭）山本観衛会別会　番組⑦面掲載（有料）
28日（日）竹韻会大会　番組⑧面掲載

〔10月〕
4日（土）日本芸術院会員　（有料）
故橋岡久太郎十三回忌追善能（番組⑧面掲載）
5日（日）九皐会秋の会　（来聴歓迎）
10日（祭）幽　花　会　（来聴歓迎）
12日（日）猶恵会秋の会　（来聴歓迎）
18日（土）野村又三郎舞台50年記念公演　（有料）
（番組⑧面掲載）
19日（日）青陽会定式能　（有料）
25日（土）一謡会叶石会秋の会
26日（日）中部金剛会能　（有料）

（演能変更の節はご了解下さい）

8月28日宝生流仕舞素謡鑑賞会

名古屋宝生会では、きたる八月二十八日（木）午後五時から熱田神宮能楽殿で「仕舞・素謡鑑賞会」を開催する。

この催しは、ことしはじめての企画で仕舞約三十番、素謡「俊寛」はシテ宗家宝生英雄、ツレ馬繰富士夫、衣斐正宜、ワキ辰巳孝、仕舞は「実盛」宝生英雄、「弱法師」辰巳孝、「松虫」馬繰富四夫、「半蔀」内藤泰二はじめ本間英孝、宝生英照、田崎隆三、倉本雅、衣斐正宜、玉井弘子、戸田和、広島克栄、武田孝史、竹内澄子の諸師が総出演。

会費二千円、学生千円。

第六十回 大衆能

九月七日（日）午後一時始
愛知文化講堂

能組
能 枕慈童 豊鶴三千春 高安勝久 吉田定男 福井良久 助川竜夫 藤田昭彦
後見 豊鶴重本 弥左衛門昌三 片野東四郎 地謡 小林忠三 菊川慈三 日比野圭昭 清水比野信明 百々康治 豊鶴訓三 水谷泰典
仕舞 放下僧 熊沢恵美子 地謡 生駒美代子 高木智子 有賀滋子 加藤良久 服部紗子 前野郁枝
囃子 松風 長田驍 河村総一郎 後藤孝一郎 地謡 藤田直躍 冨田陽二 加藤栄逸 藤田六郎兵衛
後見 留見
仕舞 難波 武田邦弘 敦盛 久田徹二 地謡 高橋暸一 高野頼邦 梅田邦久 加藤総兵衛 河村鉦二
阿漕 塚本秀雄
能 三山 高安滋郎 河村総一郎 福井啓次郎 鬼頭季信
後見 竹内澄子 戸田和 地謡 加藤勝利 竹腰勝一 稲川寿一 小沢喜一 鈴木義久 辰見孝二 内藤秀雄 鬼頭嘉男 吉田定男 柳原富司 鬼頭喜太郎 筧三男
間 佐藤友彦 吉田俊彦 玄斐正宜
囃子 天鼓 梅田邦久 盤渉 地謡 田中保武 加藤彦 加賀敏彦 久田徹二 塚本修二 嚴島秀雄
狂言 茸 井上松次郎 中村和男 吉田妙 水藤元三 杉村竹翠 佐野村又三郎 藤友彦 大野今枝 歌村弘之 鴻良治 佐藤助 今枝靖雄 井上礼之助
仕舞 熊坂 本田光洋 地謡 後藤林鉄郎 伊藤俊明 駕見正行 今枝郁雄 前田都茂穂 正進 佐藤
能 土蜘蛛 高安勝久 西村欽也 飯冨雅介 大野弘之 河村総一郎 山口亮 鬼頭森本 八郎重一 青木武弘 契雲岡田光紘 武田邦弘 梅田米次久 大飼長谷川 末吉章 地謡 佐藤太俊 後藤契夫 泉嘉 久田秀雄 後見

五十年度第四回 観世会定式能

九月十四日（日）十二時三十分始
熱田神宮能楽殿

能組
能 安達原 塚本秀雄 加藤総兵衛 加藤保彦 地謡 犬飼太吉 佐藤俊 久田秀雄 後藤契雲
囃子 俊寛 高安滋郎 吉田定男 後藤孝一郎 藤田昭彦
後見 小島一英 片山博太郎 地謡 中村和夫 後藤契雲 岡田高野瀬 真柄米光紘次 山本真義 久田勝透 秀雄
間 井上礼之助
仕舞 放下僧 山本真義 籠太鼓 小歌 片山慶次郎 地謡 水藤元三 小島一英 梅田邦久 殿島修二
邯鄲 山本勝一
狂言 子盗人 井上松次郎 佐藤友彦 大野弘之
能 海士 西村欽也 河村総一郎 福井啓次郎 助川竜夫 筧三男
于方 片山清司 片山博太郎
懐中之舞
後見 佐藤真義 山本 地謡 田中武 青木武弘 犬飼杉村 河村梅田 鉦末吉二 塚本片山慶次郎 秀雄 竹翠 邦久
附祝言

主催 名古屋観世会

雖雲会秋の大会

九月十五日（祭）十時始
熱田神宮能楽殿

能 熊坂 佐藤稔 大野弘之 小沢喜一 平子稲美
間
能 蝉丸 佐藤加三郎
間
狂言 竹生鴫参 佐藤友彦 佐藤秀雄 内藤泰二
能 融

五十年度第三回（終回）名古屋観世九皐会定式能

九月二十日（土）午後一時始

主催 能楽協会名古屋支部
後援 愛知県・名古屋市
朝日新聞社

前売券 一、〇〇〇円　当日券 一、二〇〇円（全館自由席）

故山本博之三回忌追善能

九月二十四日（祭）午前十一時始
熱田神宮能楽殿

能紀行 ㊺

鮎汲み

絵と文　二井栄逸

殺生の罪をおかした為、地獄に落ち、その苦しみにあえぐ姿をあつかった烏頭や、阿漕等と異なり同じ殺生でも、地獄の恐ろしさを描かずに小べし見をかけたエンマを出現させ、生前、僧を吾が家に招き、一夜摂した功力によって仏所におくることや、法華経の威力を礼賛する鵜飼のような能もある。

湿る焚松振り立てゝ、藤の衣の玉襷、鵜篭をひらき取出し烏す果おろし荒鵜ども、此の川波に、ぱっと放せば

やはり、鵜飼は、夜露に湿る焚松を振り立てゝ、果下してまだ馴れない鵜を川面に放ち、鮎をとる写実的な型に終始する鵜の段を一曲中の眼目としたい。

この鵜飼の能は、山梨県東八代郡の石和町を流れる石和川が舞台になっていて、こゝには、鵜飼山遠妙寺という古刹があり、私は、まだ行ったことが無いが、鵜飼漁夫の説話で昔から有名であったらしい。

又、一説には、鵜飼の翁は平大納言時忠であったともいう。平の時忠は平安末期の武将で、清盛側近の政略家として活躍したが、壇の浦での平氏滅亡の時、源義経にとらえられた。後、頼朝の命で能登に流されたのであるが、遠妙寺の寺記には時忠といわずに、只、平氏漂泊の贋相一人此寺に屏居し漁を業とす。と、あるのを見ても何となくほんとうのように思えてくる。

又、寺記には、文永十一年の夏日蓮上人が、弟子の日朗、日向の二人を伴ってこの地に来り、とある辻堂で休んでいると、翁が現われて、鵜を使って見せたり、又、殺生禁断を犯した罪でフシヅケにされたこと等懺悔話をする。上人は哀れに思って、法華経を一石に一字づゝ書きつけて、川施餓鬼を営み成仏得脱せしめたという。能では、ワキの名を明さず旅僧としているが、常のワキよりは品位をもつのが定法であろう。

× × ×

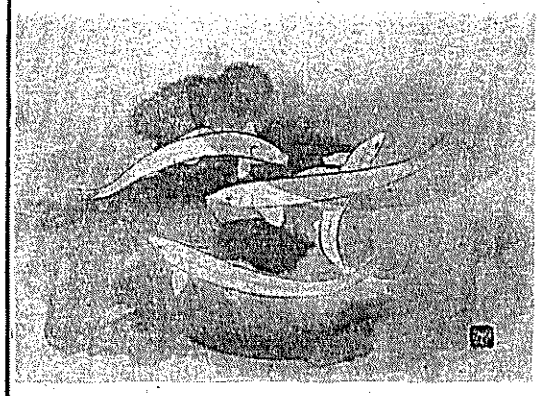
日本橋のもめん問屋を預っていた父が、本家の屋敷のそばに居を移す為、東京を引きあげたのは、私がまだ小学校の一年坊主の頃であった。二カ月は東京づとめ、一カ月は郷里で休暇という丁度、江戸時代の参勤交代のような制度がきめられていたので父もそれにならった理である。始めて見る駒よせをめぐらせた長塀の続く本家のたゝづまいが、子供の目にはひどく珍らしく見えたし、その屋敷の中を流れる溝川が昨夜の雨で増水したのかキラキラと輝く若葉の下を音を立てゝ流れていたのも東京住いの者にとっては珍らしく、何といゝ所へ越してきたものだな、と、思ったりした。

溝川のそばに古手拭いで作ったらしいたもが置いてあったので、細い石橋の上から流れる水につっ込んで大きくふくれ上るのを楽しみながら、暫くしてたもを上げて見ると、底の縦い目のところにピチ〳〵と小魚がはねているのを見て目を輝かしたことを覚えている。今思うとその小魚は増水で大川の水があふれ溝川に迷い込んだ砂どじようと、子鮎であったように思う。それから四、五年経った或る夏、大川の浅瀬で魚抄いをやっていた時、薄青い影が浅い砂底をすっと走ったので無意識にたもをぶつけるようにして抄うと何と大きな鮎が網に入っているではないか。この時は夢かと思う位嬉しかった。小さいばけつの中に弓なりになってセカ〳〵と息をしている鮎の姿が今もありありと目に浮かむ。水も豊かできれいであったその大川はすっかり水量がへり、鮎の姿も見えなくなってしまった。

四月中旬頃、川上へさかのぼる小鮎をすくい上げて捕ることを鮎汲みというそうだが、現在行われている稚鮎採取も、河川の水質汚染、ダム建設などのため鮎が潮河出来ないので、その鮎を採取して上流に放流したり、移殖したりするのであろうがこの稚鮎採取の事を鮎汲みというのか私は知らないが、稚鮎採取の始まったのは明治末期のことだから、鮎汲み、というのは昔からあった漁法で川上にのぼる小鮎の手助けをしたのかも知れない。とにかく現在では小鮎の上る頃は禁猟時期だから、それにことよせて、捕獲しようものなら、殺生禁断の甲斐の石和川で鵜を使った漁翁のようにばつを受けることになる。

春に生れ、夏に生長し、秋に衰え、冬に死ぬ、というはかない命しか持たないこの香り高い魚は貴重な魚のような気もするし、古え神宮皇后が肥前松浦郡の玉島川に糸を垂れて征韓の占いをしたという故事もあって、何となく、霊魚のようにも思えてくる。

（スケツチは鵜之段と鮎）



暑中御伺申し上げます

熱田神宮能楽殿
仙田美千子
電話（六七一）二九一二番

栄能楽舞台
名古屋市中区栄五―四―一二
電話（二六二）一一八三番

暑中見舞広告について

暑中見舞ご芳名広告（②面、③面掲載）は紙面の都合にて七月号、八月号にわけて掲載させて頂きましたのでご理解賜りますようお願い致します。（編集部）

五十年度第三回（終回）
名古屋観世九皐会定式能
九月二十日（土）午後一時始
熱田神宮能楽殿能組

能組

素謡
千手　長谷川章　青木武弘　五木田武計
能
ツレ　加藤保彦　塚本秀雄
曲之型　高安滋郎　柳原冨司忠　鬼頭季信
狂言
栗焼　佐藤卯三郎　佐藤秀雄
仕舞
小鍛冶　クセ　吉田妙
篭太鼓　有賀滋子
竜田　キリ　高木美智子
能
後シテ　観世武雄
前シテ　観世喜之　西村欽也　吉田定男　福井啓次郎　鬼頭喜太郎　筧三男
清経
天鼓
舞楽之舞
間　野村又三郎
附祝言　以上（午後五時頃終了）

主催　観世九皐会
事務所　名古屋市中区栄五―四―一四　栄能楽ビル五階　電話（〈五二〉）二五一―二四四〇番

（有料）

◎御申込みは各出演諸師並びに当会事務所へ御申出下さい

第十九期・第三回
名古屋宝生会定式能
九月二十一日（日）午後一時始
熱田神宮能楽殿

能　花筐　野々山頭陸　衣斐正宜　野村蘭作　西村欽也　河村総一郎　福井啓次郎　藤田六郎兵衛
狂言　禁野　野口禄久　井上礼之助　井上松次郎
能　天鼓　高安滋郎　吉田定男　柳原冨司忠　藤田昭彦

故山本博之三回忌追善能
九月二十四日（祭）午前十一時始
熱田神宮能楽殿

素能　鵜飼　加藤総兵衛　河村鉦二　田中武
仕舞
田村　クセ　塚本秀雄
班女　アト　殿島修二
松虫　キリ　杉村竹翠
融　久田秀雄
舞囃子
忠度　山本真義　河村総一郎　福井啓次郎　筧三男
能楽
梅若景英　梅若六郎
二人静　西村欽也　吉田定男　後藤孝一郎　筧三男
間　大野虫之
後見　波多野晋　観世武雄　地謡　加藤総兵衛　河村鉦二　千崎隆一　杉村竹翠　久田秀雄　山本真義　山本勝一　山本順之
狂言
悪武　野村又三郎　井上松次郎　井上礼之助
仕舞
江口　キリ　梅若盛義
天鼓　橋岡久共
藤戸　観世武雄
間　山本順之　山本勝一
当麻　高安勝久　飯富滋郎　雅介　河村総一郎　福井啓次郎　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛
後見　松浦信一郎　橋岡久共　地謡　柏木昇　田中武　塚本秀雄　梅若景英　梅若六郎　盛義　久田敏二　波多野晋
（四時半）

主催　山本追善別会
後援　中日新聞

A券　三、〇〇〇円　階下自由席
B券　一、五〇〇円　階上自由席
申込所　熱田神宮能楽殿　〒四五六　名古屋市熱田区新宮坂町一　TEL（〇五二）六七一―二九一二
加藤総兵衛　〒四六八　名古屋市千種区青柳町五―一六　TEL（〇五二）七四一―四六七五
川久保彰礼　〒四五八　名古屋市緑区鳴海町有松裏四〇―九　TEL（〇五二）六二一―四二三八
各出演楽師宅

能楽先人の訓え

「観世華雪芸談」より

⑧

高砂から

いつか蔵前の父（先代実）が能のあとで食事をしながら話をしてくれたことがあります。

御維新早々のことで、上の姉が万三郎兄をおぶって何か買物に行きました。明治二年頃でしたから姉は十才位でしたろうか帰って来て買物の袋を何気なく見ると謡本をほどいて袋に貼ってあるのです。その頃は町中で謡を謡っていると叱られる、というので、お大名のお庭の離れで稽古をしていたような時代でしたから、今その謡本がこんなに粗末にされているのを目の前にして姉は情けなくなって泣き出したそうです。

父がふとこれを見ますと「高砂」の一枚目でしたので、「御維新でこんなことになってしまったが、今から又新しく一から出直そうとしている折も折、「高砂」のしかも一枚目、「今を始めの旅衣」が内へ入って来たのは大変めでたいことだ。何も嘆くことはない、舞台もあるし家元もいる。それに子供もいるのだからこれからだ」

と言ったそうです。「高砂」は古い組合わせでも「内の一の一」、今の謡本でも「第一巻の一」ですからこれほど縁起のいいことはありません。ところが因縁といいますか、この話と同じようなことが私にもあるのです。

今度の戦争で何もかもすっかり焼かれてしまいましたが、お弟子の村井柳子さんという方がいういろの品を届けて下さった中に、土で出来た「高砂」の人形がございました。御維新で望みを失いかけていた蔵前の父と丁度同じように、私もこれから新規まき直して

「高砂からはじめよう」

と勇気づけられたものです。今でもそのお人形は大切にしまっております。

○……○……○

「高砂」のはじめは真の一セイで五段が本式であります。初段の合せ頭から、初段、コシの段、二段、三段、幕をあげてツレとシテが向き合うのが五段です。今は略して短かくしますが、やはりこんな曲は正式に願いたいと思います。偉い方が囃子に出ておられると幕にかかって待っている間でも楽しいですね。

大体「高砂」そのものが

「風の昇る如し」

とか

「水の流れる如し」

とかいわれているように清々しいものですから、舞わせてもらう本人にとっては大変嬉しいものです。

ですから老人だからといっても老人らしくはなく清々しく淀みなくスラリと舞っています。同じ脇能でも「老松」「白楽天」などはドッシリと、脇との掛合いも落ちついていますが、「高砂」はあくまでスラリと謡い舞うのが特長です。

前の方は型は殆んどありませんが、クセの後、落葉をかきよせるところは「久」の字になるようにします。これは見所から見て立てると「久」となるようにするのですが、稽古の時には「久」の字になるようにとは教えず、唯自分は落葉をかき寄せているのだという気持で、三回それを繰り返えすが三度共同じ事にならないようにと教えます。

サラエの柄は先が余り長く肩から出てはいけませんし、肘が落ちては弱くなり、反対に張りすぎると武張るのでなかなかむつかしい所です。

中入の「追い風に」は冊の帆をあげたような気持で両手の指を揃えて拡げるのですが、そうしますと、如何にも帆に風がはらんでいるようにみえます。普通のものでは手をあげる時、必ず袖の端を指で持ちますが、手を拡げたままというのはひとり「高砂」に限ることであって、実によく考えたものだと思います。

（つづく）

野村又三郎舞台五十年記念公演

十月十八日（土）午後一時始
熱田神宮能楽殿

番組

素囃子　高砂
末広かり
鳴子
花子

一調一管　葛城

囃子
笛　三男　後藤孝一郎　河村総一郎　鬼頭喜太郎
小鼓　井上松次郎　和泉保之　佐藤卯三郎
大鼓　野村万之丞　野村万之介　万蔵
太鼓　菊生　藤田六郎兵衛　観世元信
地謡　野村万之丞　野村又三郎　野村万作

呼び声　船中之語　那須之語

小舞　住吉　海道下り　御田

弓矢太郎

入場券
A　三、五〇〇円（指定席）
B　二、五〇〇円（自由席）
C　一、五〇〇円（階上席）

各プレイガイド・能楽殿
昭和区南山町十二の七野村方
舞台五十年記念会事務所
電話八三二一八〇七一番

竹韻会大会

九月二十八日（日）午前九時始
熱田神宮能楽殿

能組

仕舞　高砂　安藤信之
連吟　小鍛冶　川北佳保　大井文雄
素謡　女郎花　加藤照子　高美登志子
盛久　三谷俊幸　安藤信之　梅村平義
天鼓　梅村平義　飯田悦子
雲林院　飯田悦子　三宅志づ
隅田川　高美登志子　鷺坂婦美子　大西智津子
実盛　鷺坂信子　恒川松彦　奥村泰広
井筒　大西智津子　八神山平代　三宅志づ
定家　戸松利作　奥村泰広
葵上　鷺坂信子　恒川志やう　小島トミル
遊行柳　本多逸郎　戸松睦夫　宮部保良
弱法師　大西鐘八郎　稲垣道雄
山姥　杉本達之　八神孝充　戸松睦夫　八神由平代
囃子
実盛　桑原信夫　福井啓次郎　笛　三男
雲林院　奥田伝　福井啓次郎　笛　助川竜夫　福井啓次郎　笛　助川竜夫　三男
巻絹　大塚鈴枝　福井啓次郎　笛　助川竜夫　三男
仕舞　紅葉狩　宮部保良
玉之段　小島トミル
独吟　竜田　清水克朗
起請文　松本頭一
（五時半頃）

能
蝉　杉村蓉子
逸　稲垣道雄
丸　高安滋郎　福井啓次郎　笛　三男
間　野村又三郎
後見　泉泰孝　大槻文蔵　地謡　梅村平義　宮部保良　杉村泰広　奥村泰広　戸松睦夫　水藤喜元三夫
番外仕舞
笹之段　大槻文蔵
砧　大槻秀夫
猩々　杉村竹翠　笛　助川竜夫　恒川志やう　戸松利作
（終了予定七時頃）

来場歓迎　主催　竹韻会　杉村竹翠　賛助　大槻秀夫

日本芸術院会員故橋岡久太郎十三回追善能

十月四日（土）十二時三〇分始
熱田神宮能楽殿

能組

連吟　安達原ロンギ　河村鉦二　真柄米次
仕舞　敦盛クセ　殿島修二
野宮　久田秀雄　地謡　中村和男　下田雄三　谷本正鉦
阿漕　佐藤太俊
舞囃子
茂山　中村和男　吉田定男　後藤孝一郎　鬼頭八郎　藤田昭彦
笹之段　仕舞　梅田邦久　殿島修二　佐藤太俊　河村秀雄　久田鉦二
鵜之段　柴田初太郎　地謡
橋岡久共
戸間　西村欽也　高安勝久　飯富雅介　佐藤卯三郎　笛　鉦一　福井啓次郎　藤田六郎兵衛
後見　梅田邦久　奥善助　地謡　中村和男　真柄米次　渋谷晴一　松田憲二　谷村一太郎　下田雄三　藤井徳三
通小町　仕舞　大槻秀夫　殿島修二
遊行柳　武田太加志　地謡　藤井徳三　野村四郎　渋谷晴一
野守　山本勝一
観世元正

藤定宗論

高安滋郎　安福春雄　北村治　寺井啓之
間　佐藤秀雄　谷本正鉦　田村太加志　野村四郎　高橋太俊　佐藤憲二　松田晴一　渋谷晴一　奥谷善助　村一太郎　藤井徳三　橋岡久共
後見　武田憲二　地謡
狂言　野村又三郎　井上松次郎　井上礼之助
仕舞　笠之段　谷村一太郎　高橋弘
玉之段　野村四郎　地謡　梅田邦久
鄙　藤井徳三　渋谷晴一　谷本正鉦

融

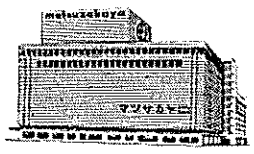
十三段之舞
間　佐藤友彦　河村総一郎　鬼頭喜太郎　笛　三男
後見　松田憲二　柴田初太郎　地謡　中村和男　真柄米次　高橋弘　久田秀雄　谷本正鉦　渋谷晴一
後藤孝一郎

主催　名古屋淡交会
補佐　恵北淡交会　〃　奥誠交会
〃　下田雄諷会　後援　中日新聞社

◎会員券　指定席A券五、〇〇〇円　自由席券　三、〇〇〇円　指定席B券四、〇〇〇円
お申込先　名古屋淡交会（名古屋市守山区北山二七五八の一二八　丹阿弥元方、電話七九三一八三五五）・熱田神宮能楽殿・各出演楽師

の友社
本町2—20
64）
7964
36393
500円
600円
40円
演
能
入場者も千五百人を越え市民に親しまれてきている。
主催は、熱田神宮、能楽協会名古屋支部、後援・名古屋市、中部能楽師会。
火入れ式は午後七時ごろ、熱田
さらに今月は、十九日に宇治薪能、二十六日堺薪能、二十八日福岡薪能、八月には、神戸薪能（一、二日）神戸長田神社、姫路薪能（二日）姫路城、東京薪能（八、九日）赤坂山王日枝神社、石和薪能（一
暑中お見舞申し上げます
社団法人　観正会
上田照也
名古屋　橋岡会
名古屋市昭和区丸屋町五ノ三五　山田紀子方

楽しいお買いものはマツザカヤ



名古屋 松坂屋

能樂の友

題字は熱田神宮　森田宮司筆

発行　能楽の友社
名古屋市千種区吹上本町2―20
（郵便番号　464）
電話　（731）7984
振替口座　名古屋　36393

購読料　1年　500円
郵送の場合　1年　600円
一部　50円

熱田神宮 能楽殿創立20周年 盛大に記念能開催

中部能楽界の殿堂として熱田神宮能楽殿の創立二十年を記念し、昭和五十年の意義ある年を奉祝して、八月二十四日午前十時から熱田神宮能楽殿で盛大に記念能が催された。

金剛流素謡「神歌」にはじまり観世流能「養老」水波之伝、狂言小舞「貝尽し」観世、宝生流の仕舞、囃子「玄象」宝生流能「井筒」金剛、金春流の仕舞についで熱田神宮能楽殿運営委員会委員長・熱田神宮権宮司・長谷晴男氏のあいさつ、能楽協会名古屋支部・藤田六郎兵衛支部長から「戦後仮設舞台で不自由な演能がつづけられたが、先人の並々ならぬ熱意、熱田神宮のご理解、皆様方のご協力で東西に先がけてこのような立派な舞台ができたことに感謝申し上げる。今後さらに、三十年記念、五十年記念と催しができるようこのうえともご支援をお願い申し上げる次第です」と感謝のことばが述べられ、海部俊樹内閣官房副長官の祝電が披露された。

演能は狂言「二人袴」一調、さらに宝生流囃子「枕慈童」観世流仕舞ののち喜多流能「舟弁慶」（小書真之伝、船中之語、船歌）の熱演で午後六時すぎまでたく終了しました。

熱田神宮能楽殿20周年であいさつする（右から）能楽殿運営委員会委員長・長谷晴男氏、能楽協会名古屋支部・藤田六郎兵衛支部長と高安滋郎、井上松次郎、鬼頭八郎内藤泰二各役員

御挨拶

熱田神宮能楽殿
運営委員会委員長
熱田神宮権宮司　長谷晴男

熱田神宮並びに熱田神宮能楽殿運営委員会を代表致しまして、一言御挨拶を申し上げます。

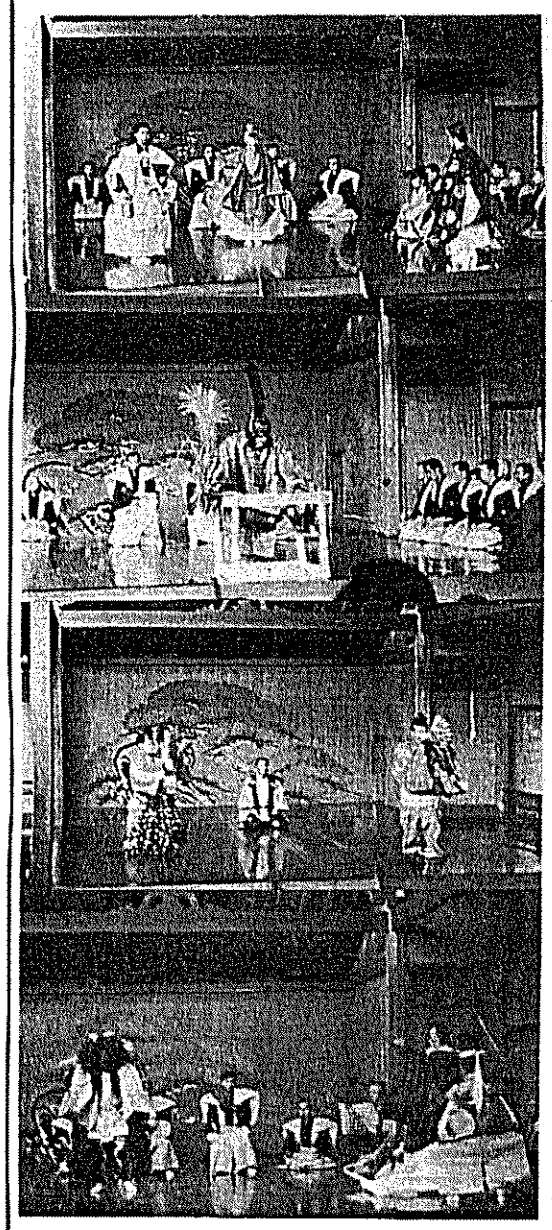
本年は畏くも天皇陛下御即位五十年という、史上初めてみる洵にお芽出度い年であり、この意義深い良き年に、時恰も熱田神宮能楽殿は創立二十周年を迎え、本日ここに天皇陛下御即位五十年奉祝行事の一環として、熱田神宮能楽殿創立二十周年記念能が、多数の皆様方のご観覧の下で、このように盛大に催行し得ましたことは、慶賀の至りに存じます。

創立以来の熱田大神様の御神恩に感謝の誠を捧げますと共に、各流の宗家をはじめ、夫々ご一門の楽師の方々、更には能楽を愛好されるご来場の皆様の深いご理解と暖かいご支援に対し、衷心より厚く御礼申し上げる次第であります。

顧みますればこの能楽殿は、昭和三十年十一月熱田神宮本殿遷座祭がいとも荘厳に斎行され、千木の御光が燦然と輝いた同じ月の十六日に竣功、爾来、能楽殿の運営は、能楽殿運営委員会が中心となって、諸般の事業を推進して参りましたが、地元の能楽協会名古屋支部の方々の、並々ならぬご協力により、熱田まつり奉納能、薪能、乱能、義捐能、大衆能、また記念能としては、昭和四十年十一月三日の熱田神宮能楽殿創立十周年記念能に次いで本日の記念能と、実に多彩な、活発な活動を続けて来られましたことは、敬服の外はありません。

我々はこの年を契機として、能楽殿の繁栄と、斯道の興隆に全力を尽す覚悟でありますので、今後共一層のご指導ご鞭撻を賜わりますようお願い申し上げます。

なお、本日の記念能を催行するに当りまして、ご後援頂きました中部能楽師会の方々、特集号を刊行されました「能楽の友社」の各位、また紙上を通じてご寄稿下さいました皆様に対し、厚くお礼を申し上げまして本日の挨拶と致します。（要旨）



㊨から観世流能「養老」宝生流能「井筒」
狂言「二人袴」喜多流能「舟弁慶」

第十九期・第三回 名古屋宝生会定式能

九月二十一日（日）午後一時始
熱田神宮能楽殿

望月
素謡　内藤泰二　鬼頭子　嘉男　母　稲川寿一　吉田俊彦
地謡　須賀明　小沢喜一　平子稲川　堀江美一　内藤泰二　吉田俊彦

女郎花
仕舞　竹内澄子　盛クセ　玉井博祐
敦盛
仕舞　戸田和　地謡　鈴木義久　馬場辰巳　富田孝　四夫　竹腰勝一
駒ノ段
仕舞　倉本雅
阿漕
能　野々山顕睦　衣斐正宜　野村蘭作

花筐
後見　内藤泰二　吉田俊彦　地謡　佐藤義雄　伊藤稔　仲井重次　近藤源十　馬場辰巳　鬼頭嘉男　鈴木義久
狂言　井上礼之助　井上松次郎

禁野
狂言　井上礼之助　井上松次郎
舟弁慶
能　野口緑久
調　辰巳孝　鬼頭八郎

天鼓
間　高安滋郎　大野弘之　吉田定男　柳原富司　忠藤田昭彦

後見　倉本雅　玉井博祐　地謡　中島啓一　並文男　高田真六　加藤勝利　野村衣斐　竹腰蘭作　富田正宜

附祝言
主催　名古屋宝生会
名古屋市東区東門前町三ノ二二
高橋鈞三郎方電話931―四二九番
後援　中日新聞

故 山本博之三回忌追善能

九月二十四日（祭）午前十一時始
熱田神宮能楽殿

鶴飼
素能　加藤総兵衛　河村鉦二　田中武
班田
仕舞　村クセ　塚本秀雄
女松
仕舞　アト　殿島修二
虫
仕舞　キリ　杉村竹翠
融
舞囃子　久田秀雄
忠度
能楽　山本真義　河村総一郎　福井啓次郎　筧三男

二人静
間　西村欽也　大野弘之　吉田定男　後藤孝一郎　筧三男
後見　波多野晋　観世武雄　地謡　加藤総兵衛　鉦二　河村　埼　隆一　杉村竹翠　久田秀雄　山本真義　山本勝一　山本順之
武悪
狂言　野村又三郎　井上松次郎　井上礼之助
江口
仕舞　クセ　梅若盛義
天鼓
仕舞　橋岡久共
藤戸
観世武雄

当麻
間　山本順之　山本勝一　高安勝久　高安滋郎　飯富雅介　河村総一郎　福井啓次郎　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛
後見　松浦信一郎　橋岡久共　地謡　佐藤友彦　柏木昇　田中武　塚本秀雄　久田徹二　波多野晋　梅若景英　梅若六郎　梅若盛義
（四時半）

主催　山本追善別会
後援　中日新聞

A券　三、〇〇〇円　階下自由席
B券　一、五〇〇円　階上自由席
申込所　熱田神宮能楽殿　〒四五六　名古屋市熱田区新宮坂町一　TEL（〇五二）六七一―二九一二
加藤総兵衛　〒四六八　名古屋市千種区青柳町五―一六　TEL（〇五二）七四一―四六七五
川久保彰礼　〒四五八　名古屋市緑区鳴海町有松裏四〇―九　TEL（〇五二）六二一―四二三八
各出演楽師宅

本店　熱田区神戸町三四　電話（671）8686～8
神宮東門店　熱田区新宮坂町一　電話（682）5598（代表）

能紀行 ㊻

黄菊白菊

絵と文　二井栄逸

我がこころ
いぶせき時は
さ庭べの
黄菊白菊
我をなぐさむ　―

正岡子規が詠んだように、何といっても菊は黄菊白菊がよい。陰暦九月になると菊が咲きかおり、重陽の節句を迎える優雅な月となる。菊の五色を生け、菊酒を飲み菊の著せ綿で身を清め、長寿を保つ、と、いうような悠長なことはしていられない現在ではあるが、やはり残して置きたい行事の一つである。

菊は野菊から大輪のものまで種類は非常に多いが、私は大輪の菊はあまり好きでない。やはり中輪の黄菊白菊やよくひきしまった小菊の類が好きである。又、青雅の錦生けによく使う野菊も好きである。私は九月になると、好んで枕慈童や遅々を描く。この不老の仙童を描いていると、何かしら自分も不老不死の境涯にあやかるような気がするからである。枕慈童や菊慈童の能画を所望する人も、さっと長寿を願ってのことであろう。

昔、中国の穆王（ぼくおう）に仕えていた慈童が、ふとしたことから王の枕の上を越えたため、群臣達はその過失を罪とし、南陽郡の郷県に流してしまった。

そこは、帝城より三百里もへだった虎狼の出没する昼なお暗い深山だったのである。王は常日頃から可愛がっていた慈童をあわれに思い、ひそかに枕にそえて四句の偈文をあたえたのである。偈（げ）は仏の徳、または教え等を賛美する韻文体の経文の事で、多くは四句から成っている。

慈童は、この偈文を忘れないために菊の葉に書いたところ、菊の下露が谷川に流れ、その水を飲んだ多くの人達は、みな不老不死の寿を保ったという。後の世に魏の文帝が、郷県山の麓より薬の水がわき出でたことを聞き、勅使を送った時、七百歳の慈童は皇帝に寿を献じたという。

四番目能、枕慈童（注・観世流では菊慈童）はこの神仙談を骨子にして作った能で、シテが不老の仙童であるため、二の同あたりから、寿福長久の瑞祥に満ち満ち、為にしばしば脇能としても上演することがある。複雑な内容をもたず、超俗的な仙味が菊の香とともに気品高く盛り上ってゆく能である。

× × ×

この中国の故事によって菊にまつわる行事や習わし等もなか〳〵多い。

菊のつゆ、というのは、菊の花においた露のことでこれを飲めば長寿を保つといわれ、又、きせ綿は九月九日に、前夜菊の花にかぶせておいた綿をとり、その露の香のついた綿で身を拭うと長寿を保つといわれているし、菊花の下を流れる水を飲むと長生きするという菊の下水等、どれをとっても、菊と長寿は結びついているのである。

× × ×

そう〳〵と秋風にそよぐすゝきも、すっかり穂に出て秋をうたっている。青くつめたい朝戸出に、露をふくんだあざやかな純白の菊を見つけると、署名でもして置きたい位の気持ちになる。

ひとつうれいを……静々と細殿をわたり観菊のうたげに向う上臈の面ざしにも似て、白菊は、しっとりとした中にもりんとした身仕舞を見せる。

露ながら
折りてかざむ
菊の花
老いせぬ秋の
久しかるべき――古今集

世はおしなべて怒涛のように物質文明へと狂奔する。そんな中にあって、もっと人間は静けさを大事にしなければいけないのではないか。つぶての音が今し絶えたる……そのようなしゞまの中にしばし白菊の語らいをきくのも静けさを味う一つではなかろうか。

（スケッチは枕慈童）

◆演能カレンダー◆

（熱田神宮　能楽殿）

〔9月〕

20日（土）名古屋観世九皐会定式能（有料）
21日（日）宝生会定式能　番組①面掲載（有料）
24日（祭）山本観衛会別会　番組①面掲載（有料）
28日（日）竹韻会大会　番組②面掲載

〔10月〕

（有料）
4日（土）故橋岡久太郎十三回忌追善能（番組②面掲載）
5日（日）名古屋観世九皐会秋の会番組②面掲載（来聴歓迎）
10日（祭）幽花会秋季大会（来聴歓迎）
12日（日）猶恵会秋の会（番組③面掲載）（来聴歓迎）
18日（土）野村又三郎舞台50年記念公演（有料）
19日（日）青陽会定式能（有料）
25日（土）一瑞会叶石会秋の会
26日（日）中部金剛会主催・山田仁三郎師追善能（第2部有料）

〔11月〕

2日（日）風韻会能楽大会（来場歓迎）
3日（祭）幸友会秋の会（来場歓迎）
8日（土）修風会大会（来場歓迎）
9日（日）観世会定式能（有料）
15日（土）梅若盛義後援会能（有料）
16日（日）邦謡会秋の会（来場歓迎）
22日（土）麦の会（有料）
23日（祭）和泉狂言会（有料）
24日（休）壺泉会秋の会
29日（土）鬼頭五朗師追善能（有料）

（演能変更の節はご了解下さい）

竹韻会大会

九月二十八日（日）午前九時始
熱田神宮能楽殿

能組

仕舞　高砂　安藤信之
連吟　小鍛冶　川北佳保　大井文雄
素謡　女郎花　加藤照子　高美登志子　三宅志づ
盛久　三谷俊幸　安藤信之　梅村平義
天鼓　梅村平義　飯田悦子　三宅志づ
雲林院　飯田悦子　高美登志子　鷺坂婦美子　大西智津子
隅田川　鷺坂信子　恒川松彦　奥村泰広
実盛　鷺坂信子　八神山季代　三宅志づ
井筒　大西智津子　奥村泰広
定家　戸松利作　小島トミル
葵上　鷺坂信子　恒川志やう　戸松睦夫　宮部保良
遊行柳　本多逸郎　稲垣道雄
弱法師　大西鉱八郎　戸松睦夫
山姥　杉本達之　八神孝充　八神山季代
囃子　実盛　桑原信夫　福井啓次郎　笠鉱一　笠三男
雲林院　奥田伝　福井啓次郎　笠鉱一　助川竜夫　笠三男
巻絹　大塚鈴枝　福井啓次郎　笠鉱一　助川竜夫　笠三男
仕舞　紅葉狩　宮部保良
玉之段　小島トミル
独吟　竜田　清水克朗
起請文　松本顕一（五時半頃）

蝉丸

蝉　杉村容子
逆　稲垣道雄
高安滋郎　笠鉱一　福井啓次郎　笠三男
間　野村又三郎
後見　泉泰孝　大槻文蔵　地謡　梅村平義　宮部保良　松本顕一　奥村泰広　竹翠　戸松睦夫　泰広　泉嘉夫　水藤元三
番外仕舞
笹之段　大槻文蔵
砧　大槻秀夫
々　杉村竹翠　笠鉱一　助川竜夫　恒川志やう　戸松利作
（終了予定七時頃）

来場歓迎　主催　竹韻会　杉村竹翠
賛助　大槻秀夫

名古屋観世九皐会秋季大会

十月五日（日）午前十時開曲
熱田神宮能楽殿

開口　番外連吟　養老　伊藤治郎左衛門　観世武雄
囃子

故橋岡久太郎十三回追善能

日本芸術院会員
十月四日（土）十二時三〇分始
熱田神宮能楽殿

能組

連吟　安達原ロンギ　河村鉦二　真柄米次
仕舞　敦盛クセ　殿島修二
野宮　久田秀雄　地謡　中村和男　下田雄三　谷本正鉦
阿漕　佐藤太俊
舞囃子
茂賀　中村和男　後藤孝一郎　吉田定男　鬼頭藤田昭八郎　昭彦
仕舞
笹之段　梅田邦久
絹之段　柴田初太郎　地謡　殿島修二　佐藤太俊　河久田村秀雄　鉦二
橋岡久共
藤戸　西村高安勝久　飯富鉦也雅介　福井啓次郎　笠鉱一　藤田六郎兵衛　佐藤卯三郎
間
後見　梅田邦久　奥善助　地謡　中村和男　真柄米次　渋谷晴一　松田憲二　谷村一太郎　藤井徳三　下田雄三
仕舞　大槻秀夫　武田太加志　地謡　殿島修二　藤井四郎　野村晴一　渋谷
通小町
遊行柳
野守
観世元正

定家

高安滋郎　安福春雄　北村治　寺井啓之
間　佐藤秀雄
後見　谷本正鉦　武田太加志　野村四郎　地謡　高橋弘　佐藤太俊　松田憲二　渋谷晴一　奥谷村善助　橋岡一太郎　藤井徳三　久共
狂言　野村又三郎　井上松次郎　井上礼之助
仕舞
笠之段　谷村一太郎
玉之段　野村四郎　地謡　高橋弘　梅田邦久　藤井徳三　渋谷晴一
邯鄲能

宗論

融

十三段之舞
間　佐藤友彦
後見　松田憲二　柴田初太郎　地謡　中村和男　高橋真柄　久田秀雄　米次　谷本正鉦　弘　渋谷晴一
西村欽也　河村総一郎　後藤孝一郎　鬼頭喜太郎　笠三男

主催　名古屋淡交会
補佐　恵北淡交会　〃奥誠交会
〃　下田雄諷会　後援　中日新聞社
◎会員券　指定席A券五、〇〇〇円　自由席券三、〇〇〇円　指定席B券四、〇〇〇円
お申込先　名古屋淡交会（名古屋市守山区北山二七五八の一二八　丹阿弥元方、電話七九三―八三五五）・熱田神宮能楽殿

猶恵会十周年記念会

十月十二日（日）午前十時始
熱田神宮能楽殿

素謡　亀　熊沢恵美子
鶴　紫山多津子
羽衣　日比野文子　野村拗治

能楽先人の訓え

「観世華雪芸談」より ⑨

高砂から　その②

「高砂」と松とは切っても切れないものですのに、能の高砂に松が出ないのを不思議に思われる方もありましょう。現在は殆んど見られないようですが「八段ノ舞」という小書がつくと出ることになっています。この作物は、廻りが青竹の格子に相生の松、この松は根が一本から二股になったもので、大きさも形も丁度よいというのがなかなかなくて、また松も切ってしまうのが可哀そうなので、つい出なくなっているようです。クセの中の「中にもこの松は万木にすぐれて」の地をシッカリ謡わせ、松をサス形がありますが、中入には舞台が住吉にかわるので引いてしまいます。

後シテは、面が三日月（みかづき）、狩衣をエモンに着て半切をはきます。普通の折の邯鄲男（かんたんおとこ）より強く、勢いがよく、神舞も一層早くなって拍子の所へ来てしずまり、又早くなります。度々早くなったり遅くなったりしますから、囃子方も心してくれないと舞いにくいものです。

ところで「八段」とは何処から来ているかと申しますと、五段の舞を八段に舞うということで、五段の間では早く舞ったりしずかに舞ったりしますが、あとの一段だけは早くなったまま、六・七段同じく早く、八段のところだけはしずまらないように舞います。この「八段ノ舞」は作物から特にこんな約束があるのですが、別に「八段ノ舞」の小書がなくてもシテの好みでこの型で舞ってもよいのです。

又、この曲のキリは、文句がたっぷりありませんから、さっさと舞うようにしないと、「頭に挿せば」のところが間に合いません。といって乱暴では困りますがキリで両袖を巻くのはうまくゆきにくいものです。左の方は巻き易いのですが、右は扇を持っているのでうまくゆかずに、手が向うに行ってしまったりするものですが、両手を引きつけて自分の顔と両手で山という字になるようにしますと工合がよろしいです。

このほか「祝言之式」という小書があります。これは半能で、キリに限るものですが、若しこの日最初に「翁」がなかったら「さて万歳の小忌衣」で、翁で袖をかつぐ型がありますのをここへ使いまして舞も急々ノ舞、これ以上早いものはないという舞になります。これは非常にさわやかなもので昭和三十二年四月大阪で鎮之丞が還暦の記念能を舞って、とても気持がよかったといっていましたが実によいものです。

それから観世流ではいたしておりませんが「翁なし」というのがあります。もともと本式の大きな能では「翁・高砂」は切っても切れないものですが、昔から何かの都合で「翁」がなくて「高砂」から始めねばならない時はこの「翁なし」を勤めることになっています。これはシテは変りなく脇が大変なのです。大臣の姿で総て翁と同じようにする重いものになります。西では、戦後高安滋郎さん（高安流家元）が勤められたと聞いています。

仕舞の弱法師

「弱法師」の仕舞を目を開いたまま舞われる方があるというお話を聞いたことがありますが、私共では、やはり盲目のつもりで、半眼にして舞っています。

これについて、亡父（紅雪）に言われたことを思い出しました。

「弱法師」とか「蝉丸」のように、盲目のものの面は、目の部分全体を切ってありますからこれをつけますと、瞳孔だけに穴を開けた他の面よりかえってよく見えるものですが、上瞼がかぶさっていますので、前からご覧になりますと本当の盲目のように見えます。それでも

「面の下で目を開けていてはいけない」と言っていました。能の面の下でさえそうなのですから、まして仕舞であけたりはいたしません。

故 山本博之師追善会

名古屋、大阪、東京、福岡で

故山本博之師三回忌追善能は、九月二十四日、熱田神宮能楽殿で能「二人静」（シテ梅若大郎）「当麻」（シテ山本勝一）が上演（番組①面掲載）されるが、十月には大阪、東京、十一月には福岡の各地で催される。

十月五日　（大阪能楽会館）能「経正」替之型（松浦信一郎）「井筒」物着（八木康夫）「求塚」（山本真義）「玄象」（山本勝一）

十月十八日（東京観世能楽堂）能「敦盛」二段之舞（観世元正）「砧」（山本順之）「鵜飼」空之働（観世寿夫）

十一月三十日（福岡住吉能楽殿）能「鵜飼」（山本順之）「清経」恋之音取（山本真義）「通小町」雨夜之伝（観世元正）「道成寺」（森本司郎）

名古屋　鍵雲会例大会

9月15日　能三番上演

宝生流・鍵雲会（内藤泰二師）は、九月十五日（敬老の日）秋の大会を熱田神宮能楽殿で開催。能「熊坂」（シテ佐藤稔氏）「蝉丸」（小沢喜一、平子稲美氏）「融」（内藤泰二師）の三番ほか素謡、舞囃子、仕舞、独謡、連吟など三十数番。

1210日　猶恵会十周年記念会

猶恵会（熊沢恵美子師）では創立十周年を記念して、十月十二日（日）熱田神宮能楽殿で記念大会を開催する。素謡十番、舞囃子、仕舞、連吟など三十数番。

京都　広田後援会秋の能

10月12日　金剛能楽堂

広田後援会第四十五回秋期公演が十月十二日（日）金剛能楽堂で催される。

能「俊寛」（シテ広田陛一）能「阿漕」（シテ広田泰三）狂言「鈍太郎」（茂山千五郎ほか）

10月5日　豊春会秋の能

金剛流豊春会秋の能は十月五日（日）金剛能楽堂で催される。

能「三井寺」（シテ豊嶋三千春）「天鼓」盤渉（シテ豊嶋弥左衛門）狂言「萩大名」（茂山千作ほか）

◎住所変更

・長田　驥氏（喜多流）

新住所＝伊勢市河崎二丁目二四番地二〇号（〒516）・電話（〇五九六三）⑥七〇五六番

おくやみ

林甲子生氏逝去

観世流師範・林甲子生氏（名古屋市千種区今池町二―四九）は八月五日逝去。告別式は七日、中区栄三・勝鬘寺で執り行なわれました。享年五十歳。

謹んでご冥福をお祈りします。

名古屋観世九皐会秋季大会

十月五日（日）午前十時開曲

熱田神宮能楽殿

開口　番外　連吟　伊藤治郎左衛門　観世　武雄

養老　舞囃子　佐藤千代子

経正　舞囃子　吉田　定男　後藤孝一郎　鬼頭　季信

松風　イロエがかり　田中美津子　河村総一郎　柳原冨司忠　笠　三男

藤戸　水野あや子　河村総一郎　福井啓次郎　鬼頭　季信

天鼓　鈴木　胡蝶　吉田　定男　後藤孝一郎　藤田　昭彦

融　五段　渋谷　朝子　吉田　定男　柳原冨司忠　助川　竜夫　笠　三男

当麻　素謡　小玉三郎　塚田　當子　観世　武雄　菊地　忠次

野宮　舞囃子　野垣　慶子　吉田　定男　後藤孝一郎　笠　三男

砧　芝村　栄枝　河村総一郎　幸　義太郎　藤田六郎兵衛

玄象　前　番囃子　天竺佳ともえ　河村総一郎　幸　義太郎　助川　竜夫　藤田　昭彦

蝉丸　吉田　市郎　矢橋　浩吉　水野　喬樹　吉田　定男　福井啓次郎　藤田六郎兵衛

地謡　弘田　裕一　青木　武弘　加藤　保彦　長谷川　章　小林　喜久　増田　三郎　小玉　三郎　観世　喜之　武雄　秀雄

舞囃子　善知鳥　橋本　とも　河村総一郎　福井啓次郎　藤田　昭彦

砧　伊藤　睦子　河村総一郎　幸　義太郎　藤田六郎兵衛

後　船弁慶　後藤　新蔵　吉田　定男　柳原冨司忠　助川　竜夫　鬼頭　季信

仕舞　鐘之段　杜若切　後藤　鈴子　奈倉　早苗　島　追船　森川みどり

狂言　杭か人か　大野　弘之　井上礼之助

能楽　山村　昌子

半蔀　高安　滋郎　河村総一郎　幸　義太郎　笠　三男

間　佐藤　友彦　弘田　裕一　加藤　保彦　長谷川　章　菊地　忠次　木田　武計　武雄

後見　小玉　三郎　観世　喜之　地謡　青木　武弘　永島　忠彦

番外　祝言　仕舞　菊慈童　観世　喜之

以上（終了予定午後五時頃）

名古屋市東区武平町二ノ一五（増田方）

主催事務所　名古屋観世九皐会

補導　観世喜之　観世武雄

外門下職分一同

後援　松坂屋・中日新聞

猶恵会十周年記念会

十月十二日（日）午前十時始

熱田神宮能楽殿

素謡　鶴亀　紫山多津子　熊沢恵美子

羽衣　日比野文子　野村　勘治

吉野天人　栗本まち子　熊沢恵美子

田村　原田　克巳　村上　近

紅葉狩　山本　隆　西谷　勲　笠原　望

仕舞　玉髪　高梨千代子　花月橋口　信子

放下僧　山本　康子　笠之段　熊谷　リ江

融　杉江　生子　梅若　善高

宮　佐藤　和子　梅若　修一

連吟　菊慈童　豊橋中日文化センター

仕舞　松風　山田　よね　千手　杉浦　一枝

羽衣　小川　美愛　富士太鼓　鈴木久美子

弱法師　天鼓　鈴木　ふく　羽原　沢美　岡田　朗詠

通小町　高橋　道子　沢田　春子　須賀　実

井筒　吉田さよ子　犬飼　善子

仕舞　鶴亀　石川　倉子　班女　辻築　珠紀

羽衣　古池かず子　葵上　野村喜寿子

屋島　市川　雅子　清経　山本　博子

杜若　磯村　文江

桜川　須賀　聚子　笹之段　中山　栄子

富士太鼓　大島　貞子　邯鄲　佐藤　敏子

熊坂　中村　富子

舞囃子　船弁慶　神田佳代子　後藤孝一郎　笠　三男

胡蝶　伊藤　恵美　後藤孝一郎　鬼頭喜太郎　笠　三男

玄象　鈴木　八寿　後藤孝一郎　鬼頭喜大郎　藤田六郎兵衛

菊慈童　五段　杉田　合子　河村総一郎　福井啓次郎　助川　竜夫　藤田　昭彦

山姥　盤渉　奥田　敏子　河村総一郎　福井啓次郎　助川　竜夫　藤田六郎兵衛

雲雀山　日下すみ子　河村総一郎　福井啓次郎　笠　三男

融　金野　克子　笠　鉱一郎　後藤孝一郎　助川　竜夫　藤田　昭彦

唐船　鈴木喜久子　笠　鉱一郎　福井啓次郎　鬼頭喜太郎　笠　三男

番外　仕舞　難波　田村　梅若　盛義　河村総一郎　後藤孝一郎　助川　竜夫　笠　三男

主催　猶恵会　熊沢恵美子

補助　梅若盛義

中日新聞

補佐　恵北淡交会

〃　下田雄諷会

〃　奥誠交会

後援　中日新聞社

◎会員券　指定席A券五、〇〇〇円　自由席券　三、〇〇〇円

指定席B券四、〇〇〇円

お申込先　名古屋淡交会（名古屋市守山区北山二七五八の一二八丹阿弥元方、電話七九三―八三五五）・熱田神宮能楽殿・各出演楽師

D 友 社
本町2—20
(4)
7 9 8 4
36393
500円
600円
40円

能楽殿
周年
特　集

中部能楽界の歴史刻む

8月24日　記念能を開催

奉祝　天皇陛下御即位五十年
熱田神宮能楽殿創立二十周年
記念能
八月二十四日(日)午前十時始
熱田神宮能楽殿

仁和寺：観世井戸：賀茂神社
謡曲名所めぐり
11月23日(祭)挙行　会員募集

毎年多数のご参加を賜り好評をいただいております謡曲名所めぐりバス旅行は今秋十一月二十三日（祭日・勤労感謝の日）に催します。

今回は、紅葉につつまれる仁和寺、観世流にちなむ観世井戸、上賀茂神社をはじめ紫野などゆかりの旧跡、名所を訪ねます。同好の方々おさそい合わせのうえご参加下さい。

◆日時　十一月二十三日（祭日・勤労感謝の日）
◆集合　名古屋テレビ塔北側、午前8時
◆出発　午前8時10分、帰着午後7時ごろの予定（雨天でも実施します。）
◆コース　テレビ塔—名神高速道路—御室・仁和寺（経正）—北野・北野天満宮（右近）（千鶴姫）—西陣の観世井戸、観世稲荷拝観賀茂神社（賀茂）（葵上）—名古屋
◆定員　四十五人。
◆会費　一名六千円（バス代、拝観料、昼食一切ふくみます。）
◆現金帯留、または振替にて左記へお申し込み下さい。
名古屋市千種区吹上本町2の20（〒464）
能楽の友社

喜多流　謡曲名所めぐり
11月24日(休)挙行。会員募集

このたび喜多流に親しまれている方のご要望により、十一月二十四日（休）喜多流第一回名所めぐりバスツアーを企画しました。

コースは名古屋テレビ塔—亀山—名阪国道—宇治平等院—（頼政・浮舟）山科・随心院（通小町）—鞍丸神社（姉丸）—三井寺（三井寺）—国道一号線—亀山—名古屋。

バス旅行には喜多流二井栄逸先生が同行され、名所解説とともに車中で謡曲を謡っていきます。

集合は名古屋テレビ塔午前8時、出発午前8時10分、三重県関係の方は、亀山駅前9時30分、名古屋からの一行に合流していただきます。定員＝四十五名。お申込みは振替口座　名古屋36393
◆その他　お申し込み順に会員券をお送り致します。
※（年配の方には優先席とすることがありますのでご理解下さい）
百番集または一番本をご持参下さい。謡本はコース案内のカツコ内の曲名です。
主催　能楽の友社

9月・10月放送予定

◆ NHKラジオ第一放送　（毎週土曜日午後6時5分）
〔9月〕
20日（土）　金春流「通　盛」桜間金太郎ほか
27日（土）　観世流「仲　光」大西信久ほか
〔10月〕
4日（土）　観世流「源氏供養」観世元正ほか
11日（土）　狂言2題「鏡　男」和田善太郎
「鎌　腹」善竹圭五郎ほか
18日（土）　宝生流「志　賀」高橋　進ほか
25日（土）　観世流「善知鳥」片山博太郎ほか
◆ NHK・FM 毎週日曜日　（午前7時15分）
〔9月〕　劇的な作品シリーズ
21日（日）観世流「采　女」観世喜之ほか
28日（日）金剛流「花　筐」金剛　巌ほか
〔10月〕　夫婦愛シリーズ
5日（日）　観世流「正　尊」坂井音次郎ほか
12日（日）　観世流「望　月」観世元昭ほか
19日（日）　喜多流「安　宅」喜多長世ほか
26日（日）　観世流「仲　光」大西信久ほか
・番組変更の節はご了解下さい・

◆演能インタビュー
野村又三郎舞台50年記念公演

和泉流狂言方・野村又三郎師は狂言やるまい会公演を毎年開催、六回にわたる海外公演などで活躍されているが、きたる十月十八日熱田神宮能楽殿で舞台五十年記念公演を開催、大蔵流、和泉流両宗家の来演など、流儀をこえた競演として能、狂言愛好者の関心も高いものがある。本紙では「演能インタビュー」として、記念能にちなみ、同師に語って頂いた。

【野村又三郎師略歴】大正十年三月三十一日生れ。十一世又三郎三男、本名信廣、大正十四年初舞台あかがり、披き昭和十年三番叟昭和十二年奈須之与市語、昭和十三年釣狐、昭和十四年花子、昭和十七年現役入隊、同年十月大東亜戦出征キスカ島上陸、二十年シベリヤ抑留、二十四年復員、二十五年又三郎襲名、四十二年日本能楽会会員（無形文化財指定）昭和三十二年パリ国際演劇祭参加はじめ六回にわたり欧州、米国、中南米、インドなど海外公演。

——きたる十月十八日「野村又三郎舞台五十年」を記念して狂言大蔵流、和泉流の宗家はじめ東西の名手をそろえた公演ということで期待されていますが、あえて舞台五十年記念とうたわれたことについて……。

野村　野村の家に生まれ五歳のとき初舞台で五十年ということになりますが、実際には五十年といっても戦時による空白もあるわけですけれども、北海のキスカから抑留生活を経て無事に帰ることができ、二十五年に又三郎をついで丁度二十五年になるということ、また自分自身の再出発の気持も含み、これを節として新たに初心にかえって進みたいということを表明する意味をこめて、企画したわけです。

それで大蔵、和泉流両宗家をはじめ現在狂言界の長老である野村万蔵、茂山千作、三宅藤九郎の三人の方々はじめ先輩の方々にお話し申し上げたところ、快く出て頂けることになり、このような立派な、豪華な番組で催すことができるわけで、私としてはこれ以上嬉しいことはありません。

丁度、昭和の年号も五十年で、おめでたいことが重なったわけで喜んでおります。

——奇しくも又三郎襲名二十五年ということですね。狂言として野村家は何代になりますか。

野村　私で十二代目です。初代は慶長三年、大体が呉服商として丹後宮津の出なのです。それが京の御所に出入りしていた。そして慶長のとき野村又三郎重信が狂言の家として初代を立てたわけです。

——芸歴についておうかがいしますと……。

野村　初舞台は大阪堂ケ島の能楽殿で「あかがり」を満五才で出演しました。十五才のとき三番叟十八才のとき「釣狐」。十九才で「花子」を上演しました。若いときにこれらの出をやるということは特に習いたてることはないのですが、若いうちに〝狐〟など体力のいるものをということと、そのとき父（野村又三郎信英）が七十近いという高齢でしたし、それに当時は兵役があったので、いつ兵隊にいくか判らないというご時世ということもありました。

なかでも、父が高齢のため、伝えるものを早く伝えるということもありましたでしょうね。実際には「花子」なんかは無理でしたでしょうが……。

——「花子」などは、普通は何歳ぐらいで披かれるものでしょうか。

野村　経験といってはおかしいのですが、或る程度異性というものを感じるようになってからでないと表現できないのじゃないでしょうか。「三番叟」や「狐」は若い体力のあるときでよいのですが…。もちろん「花子」でも、世阿弥のいう二十の花、三十の花ということもありますが、二十歳前ということはありませんね。ただ経験をつむということで、お能でも「道成寺」を若年のうちに演ずるということもありますけれど…。

——二十才代はまさに〝戦争〟のなかでしたね。

野村　昭和十七年四月、二十一歳で歩兵として近衛入隊、戦地へいくことは思っていなかったのでしたが…。丁度そのころ東京・牛込の払方町に住んでいて、同じ町内に、幸洋光さん（幸流宗家）が住んでおられ、当時悟郎さんといわれ、組長として代表して私の出征のときにお言葉を頂きました。兵隊にいくまで父の涙というものを一度もみたことはなかったのですが、入隊するときはじめて涙をみたのです。そのとき父は七十八歳でした。戦地にいくとは考えていなかったかも知れませんが……近衛兵として十七年十月の編成替えで北海道へ転属し、それからキスカ島へ行き、アッツ玉砕のあと潜水艦で撤収して、千島の幌莚島で終戦を迎えました。

家は戦災で装束はすべて灰にし書き物だけはお弟子さんにいわれて疎開しておいたので、復員後これが役に立ったのです。父の死は戦地で知らされました。

兵隊のとき父から百番集を送ってもらい、夜、歩哨に立っているときなど三十分、四十分謡をうたっていたものです。収容所に入るとき、字の書いたものは全部没収され、百番集もとられました。

——復員されてからまさに二十五年。

野村　抑留から復員してきたのですが、私としては歯を食いしばって狂言をやる以外にない。忘れているのですが、とにもかくにも父が仕込んでおいてくれたのと、諸先輩のおかげで勉強させて頂いたわけです。

兵隊生活としては初年兵でいって、あとから新兵は続いてこないしたがって万年初年兵の状態で…忍耐という点では否応なしに鍛えられました。無事帰ってきたことに対する感謝の念も今回の五十年記念公演にあるわけです。また、こういった私の再出発ということと同時に、狂言の本当の地力というか、狂言そのものに観客の魅力をもたせることができるような狂言の番組と役者を組んで狂言の最高というものをみて頂きたい、という気持をこめて企画したのです。

——番組の特長という点では

野村　三長老が小舞を舞われるということも大変珍しいことですし、別会なみですので、「末廣かり」はおめでたいものとして「鳴子」は秋のものとしてあまり出ていない。しかも、謡いを主体としたものです。「花子」は、父から直接うけたものだし、万之丞、万作の二人の方がお相手をしてもらえるということで演ずるものです「呼声」は、和泉流になくて、大蔵流だけにある曲、トメは大勢物で賑わしく納めようということで「弓矢太郎」が組まれています。

全体としていえることは流儀を越えて「狂言」の良さを本当に見て頂きたいという気持です。

——「狂言」を人々の心の中にということで今回の公演のご盛会とご精進を期待したいと思いますありがとうございました。

（文責・加野昭二郎）

謡生きた設備を誇る日進堂
メガネ調整設備は、正しいメガネ・快適なメガネづくりの根本です。日進堂は視力測定・メガネ調整用の諸設備はもちろんのこと、必要なときには数分でピックアップできる…お客様一人一人の視力記録システムなど常に生きた設備の充実を心がけています。
謡ビス一本にも全神経を集中する日進堂
メガネ店の技術をささえるもの——それは、お客さまの信頼におこたえする責任感とまごころです。正しいメガネを安心してご使用いただくために、日進堂は、たとえビス一本にも全神経を傾倒しています。
謡徹底した日進堂のアフターサービス
メガネをいつも正しく、最良の状態でご使用いただけるよう努めることもメガネ店のつとめです。日進堂は可能な限りの修理サービス、レンズ・フレームの清掃サービスを無料で行なっております。いつでもお気軽にお立ち寄り下さい。
定休日　毎週木曜日

正しいメガネで しあわせを……
NIKKO メガネの日進堂
◉駐車場完備　名古屋市西区上堀町57（円頓寺本町）
〒451　TEL (571) 6181—3

第十七代宗家　宝生九郎著　全八巻
宝生流囃子仕舞全集
宝生流の囃子・仕舞の稽古・独習に欠かせないテキストです。
謡本文（スミ色）に型どころ（朱色）を記入してあります。曲目五十音順
東京都千代田区神田神保町3—9　電話（263）8771　わんや書店　東京都中央区銀座8—7—5　電話（571）0514

割烹・小料理　城
● 熱田神宮能楽殿喫茶部
● 住吉小路（中区栄3—10）電話 241—0248
● 喫茶・グリル（愛労評地下ビル）電話 731—1128

挨拶
熱田神宮能楽殿運営委員長
熱田神宮権宮司　長谷晴男
能楽協会名古屋支部
支部長　藤田六郎兵衛
狂言

若い御二人の門出に
ふさわしい結婚式場
名古屋総鎮守 若宮八幡社
各種会合や宴会にも御利用下さい
（駐車場完備）
名古屋市中区栄3丁目35—30　電話（241）0810

能樂の友

題字は熱田神宮　篠田宮司筆

発行　能楽の友社
名古屋市千種区吹上本町2—20
（郵便番号 464）
電話（731）7984
振替口座　名古屋 36393
購読料　1年 500円
郵送の場合　1年 600円
一部　50円

◆演能カレンダー◆
（熱田神宮 能楽殿）

〔10月〕
10日（祭）幽花会秋季大会（来聴歓迎）
12日（日）猶恵会秋の会（来聴歓迎）
18日（土）野村又三郎舞台50年記念公演（有料）
19日（日）青陽会定式能（番組①面掲載）（有料）
25日（土）一謡会叶石会秋の会（番組③面掲載）（来場歓迎）
26日（日）中部金剛会主催・山田仁三郎師追善能（番組②面掲載）（第2部有料）

〔11月〕
2日（日）風韻会能楽大会（番組③面掲載）（来場歓迎）
3日（祭）幸友会秋の会（来場歓迎）
8日（土）修諷会大会（番組④面掲載）（来場観迎）
9日（日）観世会定式能（番組④面掲載）（有料）
15日（土）梅若盛義後援会能（有料）
16日（日）邦謡会秋の会（来場歓迎）
22日（土）麦の会（有料）
23日（祭）和泉狂言会（有料）
24日（休）壺泉会秋の会
29日（土）鬼頭五朗師追善能（有料）

〔12月〕
7日（日）歳末助け合い義捐能（有料）
15日（月）高校生鑑賞能（高校生のみ）
21日（日）青少年芸術劇場（一般非公開）
（演能変更の節はご了解下さい）

秋をかざる演能
各社中大会相いつぐ
10月・11月の熱田神宮能楽殿

市民芸術祭、名古屋まつりなど秋の芸能シーズンをむかえ、中部能楽界は熱田神宮能楽殿を中心に定式能、各流社中大会など多彩な演能が催される。

十月の演能は、さる一日、中日文化センターの秋の文化祭を皮切りに、四日は日本芸術院会員・故橋岡久太郎師十三回忌追善能が名古屋淡交会主催で能「藤戸」「定家」「融」を上演、観世宗家らが来演、五日は観世九皐会秋季大会十日は片山博通十三回忌追善・名古屋謡花会（片山慶次郎師）の第二回大会が半能「巴」（シテ片山慶次郎）ほか素謡、舞囃子、仕舞など二十数番が上演された。

十二日には、観世流・熊沢恵美子師主宰の猶恵会が十周年を記念して素謡、舞囃子、仕舞、連吟四十数番の記念会を開催。

十八日は「狂言和泉流・野村又三郎師舞台五十周年記念大会」が三宅藤九郎、茂山千作、野村万蔵の狂言界の長老はじめ、大蔵流、和泉流のスタッフをそろえての公演、野村又三郎師は「花子」を演ずる。

十九日は青陽会定式能で能「花月」（シテ服部紗枝）「蝉丸」（シテ佐藤太俊、ツレ泉嘉夫）「須磨源氏」（シテ山本真義）の能三番。蝉丸は、九月二十八日竹韻会、十月五日九皐会でも演ぜられ、続いての曲目。

さらに二十五日は、河村一謡会（河村鉦二師）叶石会（大蔵河村総一郎師）の秋の大会、能「葵上」番囃子「鉢木」ほか素謡、囃子、一調、独吟、仕舞、連吟三十数番。

十月の棹尾としては、中部金剛会が新たな意欲をもって、元中部金剛会会長・山田仁三郎師追善能として第一部社中会（無料）第二部（有料）能「経正」「雪」「融」の三番立てで上演。金剛厳宗家の「融」、金剛流のみにある「雪」を豊嶋弥左衛門師が来演、〃舞金剛〃の秘技が期待されよう。

十一月は、二日風韻会能（殿島修二師主宰）で、「清経」「二人静」「船弁慶」の能三番立て。同会の会員今村嘉勇氏が準師範として「神歌」を勤めるほか、舞囃子素謡、一調、仕舞、独吟など十数番の上演。（番組③面参照）三日は幸友会（福井啓次郎師）秋季大会で舞囃子など二十八番。

八日は第十二回修諷会大会（梅若修一師主宰）で沢田春子さんが能「楊貴妃」を初演する。（番組④面参照）九日は、観世会本年度最終の定式能、観世寿夫師の「野宮」大西信久師の「国栖」の能二番が上演される。（番組④面参照）十五日は、故梅若猶義師のあと梅猶会をになう梅若盛義後援会の第一回能、盛義師が「通小町」「船弁慶」の能二番を上演。さらに十六日、邦謡会（梅田邦久師）秋の大会、二十二日、宝生流衣斐正宜、喜多流長田鑑両師の「麦の会」公演、二十三日和泉狂言会、二十四日壺泉会（泉嘉夫師）秋の会、二十九日鬼頭五朗師追善会など、数多くの催能が熱田の森をかざっている。

第十九期 第二回 青陽会定式能
十月十九日（日）午前十一時始
熱田神宮能楽殿

能　組
素謡　小督　長谷川章　加藤保彦　青木武弘　加賀敏彦　地謡　高橋暸一　久田秀雄　塚本太俊
仕舞　松虫　富士太鼓　近藤幸江
春日竜神　前野郁子　地謡　生駒美代子　高橋暸一　青木秀雄　久田徹二　武弘
眼部紗枝

能　花月
間　立石澄雄　河村総一郎　柳原冨司忠　筧三男
井上祐一
後見　生駒美代子　久田徹二　地謡　前野郁子　近藤幸江　高橋暸一　塚本秀雄　河村鉦二
仕舞　井筒　上河村鉦二　塚本秀雄　地謡　加賀敏彦　久田秀雄　高橋暸一
葵　生石徹二

能　蝉丸
泉嘉夫　佐藤太俊
間　西村欽也　吉田定男　山口亮　鬼頭季信　佐藤卯三郎
後見　前野郁子　地謡　青木武弘　久田徹二　山本真義　加藤保彦　河村鉦二　長谷川章　塚本秀雄
一調　小塩　久田秀雄　助川竜夫

狂言　地蔵舞
仕舞　遊行柳　佐藤秀雄　井上礼之助　長谷川章　塚本秀雄　柴田初太郎　地謡　加藤保彦
山本真義

能　須磨源氏
間　西村欽也　吉田定男　飯富雅介　後藤孝一郎　森本重一　池田茂
後見　高橋暸一　生駒美代子　久田徹二　久田秀雄　地謡　近藤幸江　加賀敏彦　泉嘉夫　佐藤太俊
附祝言

主催　青陽会

一謡会・叶石会大会
十月二十五日（土）午前九時始
熱田神宮能楽殿

花筐　小椋蒲田明弘
連吟　竹生島　植木新谷正能護
素謡　通小町　寺西弘次　村橋冨士雄　遠藤俊雄　三友百合子　伊藤公子
小袖曽我　河内衣子
羽衣　圃中松代　山本弘子
富士太鼓　今村吾市　浅野弘　山田茂

第十九期 第二回 青陽会定式能

能　鵜飼
黒柳啓子　古川知江　川瀬紐子
紅葉狩　木村和加　奥村敏子　中川なみ子　村木寿恵子
仕舞　井筒　宮崎とみ子
巻絹　小林久子
船　綱木恵子
囃子　千手　伊藤康子
吉野天人　小島はつゑ
放下僧　遠藤俊雄
山姥　長戸花子
葛城　河野幸子　中村精

番囃子　鉢木
連吟　鐘之段　大石努　福井啓次郎　長戸花子　福井啓次郎　鬼頭八郎　福井啓次郎　森本重一　松風若杉鈴栄
一調　駒之段　増田糸
蝉丸　南条秀雄
囃子　清経　川瀬紐子　内田睦子　鬼頭季信
玄象　角田富美　丹羽峯子　鬼頭好信
羽衣　山崎晴代　永井滋子　鬼頭八郎
砧　増田糸　橋本金子　福井啓次郎　藤田六郎兵衛
素謡　求塚　長戸花子　内田睦子　河村鉦二

囃子　三輪
跡田喜代子　河村総一郎　柳原冨司忠　藤田六郎兵衛　助川竜夫
須磨源氏　近藤重次　澄川幸子　福井啓次郎　助川竜夫　筧三男
五段
阿漕　村木寿恵子　吉田定男　後藤孝一郎　藤田六郎兵衛　助川竜夫
邯鄲　吉田美津子　奥村久枝　柳原冨司忠　助川竜夫　藤田昭彦
花筐　大返　山本一　後藤孝一郎　筧三男
俊寛　石田糸代　柳原冨司忠　筧三男
竹生島　小林辰彦　吉田定男　柳原冨司忠　鬼頭好信　森本重一
桜川　岩城東夫　柳原冨司忠　筧鉱一　藤田昭彦
養老　太田喜彦　河村大　柳原冨司忠　鬼頭喜太郎　藤田昭彦
五段

独謡　経政
澄川幸子　海田トシ子　河村真之介

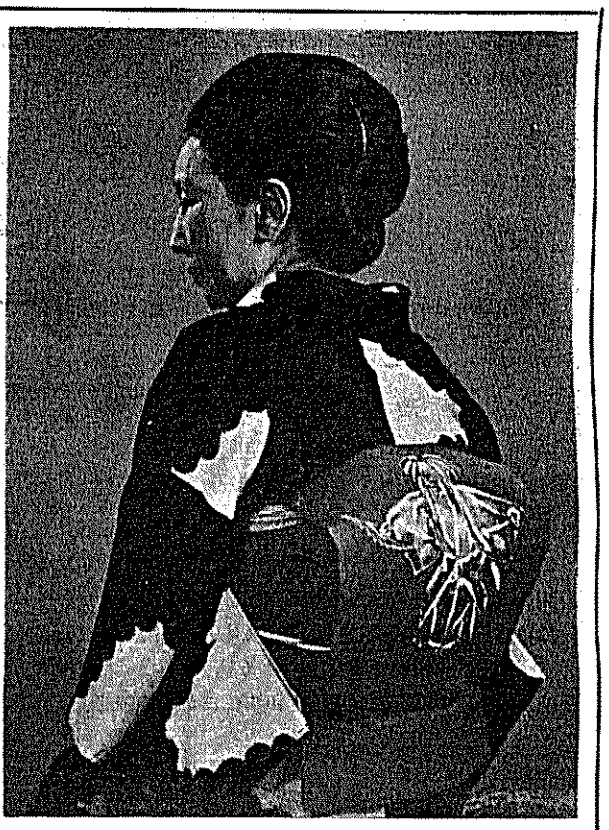
能　葵上
梓之出　高安滋郎　高安勝久　河村総一郎　後藤孝一郎　鬼頭喜太郎　藤田昭彦
間　野村又三郎
後見　河村鉦二　南条秀雄　地謡　小林辰彦　遠藤俊雄　高橋暸一　古川雅章　久田徹二　武田正士　小島英一　中川邦弘
附祝言

主催　叶河村石一謡会会

能紀行 ㊼

能帯（猩々）

絵と文　二井栄逸



唐織重折り、赤頭、緋大口をつけて舞いながら幕を出る猩々は、海浜の幻想と詩情を表現することを第一とします。ところは、降るような月光にしら〳〵とけぶる浮

陽の江のほとりです。
酌めどもつきず
のめども変らぬ
秋の夜のさかずき

と、舞いつゞける猩々の能舞は、人間のあらゆる憂悩を排除するものとして、私は、好んで能画の画題に選びます。

かね〳〵私は謡の弟子達からそれもどういう訳か男の弟子から……能画を帯にと所望されていましたので、十月の松坂屋の個展を契機として、能帯を画いてみました。帯を着けて下さいましたのは、この度の東京個展の後援会長で、私の命の恩人、中山恒明教授の夫人でございます。

能画そのものが、私自身の身の不自由から、謡は謡えても舞えない芸術の不燃焼を、画面にうつし出したものでありますが、分に過ぎたモデルさんに、私の能帯も光栄に感動致しております。

二井栄逸氏　能画個展
10月23日から銀座・松坂屋で

本紙「能紀行」を執筆して頂いている能画家二井栄逸氏（喜多流シテ方）の能画個展がきたる十月二十三日から二十八日まで、東京・銀座・松坂屋新館ギンザ・ファイブ四階画廊で開催される。展覧会には同画伯の新作三十余点が出品される。

会と催し

梅若盛義後援会能
11月15日能楽殿で

梅若盛義後援会の第一回催能がきたる十一月十五日（日）熱田神宮能楽殿で開催される。

番組は、能「通小町」小書雨夜之伝（シテ梅若盛義、ツレ梅若修一）「船弁慶」小書重キ前後之替（シテ梅若盛義）会員券指定席三千円（正面）二千円（ワキ正面）自由席千円。学生席七百円。

玉石会10周年大会
11月30日栄・能楽ビルで

狂言・和泉流佐藤卯三郎師主宰の玉石会は、きたる十一月三十日同会創立十周年を記念して狂言会を名古屋市中区・栄能楽ビルで開催する。

「光と水のフーガ」
泉嘉夫氏の意欲的演出

モネの睡蓮の壁画をモチーフとして、能とバレエとモダンダンスが一体となって描く幻想詩「光と水のフーガ」が、九月十九日、二十日の二日間、名古屋・名演小劇場で催された。この作品の構成演出は、木村太郎氏と泉嘉夫氏。能の多面性を追求する泉嘉夫氏は、これまですでに新作能「光と影」などによって演出してきたが、今回は能、バレエ、ダンスの要素によって一つの〻合成〻作品を生み出そうという意欲的な試みである。

山本定期能
11・12月の演能

山本定期能楽会主催の演能は、十一月一日（土）能「俊寛」（シテ山本順之）「葵上」（シテ波多野晋）素謡「女郎花」（シテ和辻一行）

十二月七日（土）能「藤戸」（シテ山本勝一）「玉鬘」（シテ山本真義）「車僧」（シテ八木康夫）素謡「井筒」（シテ波多野敬）

会場大阪市東区徳井町・山本能楽堂。一回券一、五〇〇円

高安六郎先生追善の会

大阪

能をはじめ歌舞伎、文楽、舞踊、邦楽とあらゆる芸能文化の指導者として大きな足跡を遺した関西芸能界の最長老故高安六郎氏逝いて十七年にちなみ関西能楽、舞踊界の発起による高安六郎先生を偲ぶ会によって、さる八月十七日、大阪・三越劇場で高安六郎先生、きみへ夫人追善の会が催された。

能楽関係では上野朝太郎、大倉長十郎、大槻秀夫、大西信久、片山博太郎、善竹忠一郎、福王茂十郎、三島太郎、森田光春、山本勝一、山本敬一郎の諸氏が発起人となり、世話人を代表して沼艸雨氏があいさつ。独吟、仕舞、小舞、謡、舞囃子など能楽関係、清元、長唄地唄の芸能で盛会であった。

松風について ⑩

「好きな曲は」とよく聞かれますが、私共すべて何ももったいぶるわけではありませんが、常に一緒に謡っている人でなければ、とても安心して謡うわけには行きません。この「松風」のツレは「高砂」や「花筐」のように、ただシテについて謡っておればよいの

「さてはこの松は――」

と含蓄のある謡を謡って下さると鏡の間にいても身の引締まる思いがいたします。囃子にしてもやはり大曲なのですから、よく心得ていて下さる方でないといけません

なお、この能画個展を記念して能帯をカラーで別刷りした「能紀行」を作成しました。一部読者のお手許には折込みでお届け致しましたが、ご希望の方は部数に限りがありますが能楽の友社宛はがきでお申し越し下さい。お送り致します。

10月・11月放送予定

◈ NHKラジオ第一放送（毎週土曜日午後6時5分）

〔10月〕
18日（土）　宝生流「志賀」高橋進ほか
25日（土）　観世流「善知鳥」片山博太郎ほか

〔11月〕
1日（土）　宝生流「井筒」宝生英雄ほか
8日（土）　観世流「木賊」観世銕之丞ほか
15日（土）　宝生流「芦刈」武田喜永ほか
22日（土）　観世流「和布刈」大槻秀夫ほか

◈ NHK・FM 毎週日曜日（午前7時15分）

〔10月〕夫婦愛シリーズ
19日（日）　喜多流「安宅」喜多長世ほか
26日（日）　観世流「仲光」大西信久ほか

〔11月〕執心ものシリーズ
2日（日）　観世流「恋重荷」藤波紫雪ほか
9日（日）　喜多流「求塚」後藤得三ほか
16日（日）　同上
23日（日）　観世流「善知鳥」片山博太郎ほか

・番組変更の節はご了解下さい・

山田仁三郎師追善能《第一部》

十月二十六日〈日〉午前十時始
熱田神宮能楽殿

連吟　紅葉狩　山田清子　加藤佐多子　水野玉子　森本節子　多よしゑ
〃　奥田浅野　大河内久恵　山田美和子　加藤ゆきゑ　浅野圭子　川村さだ子　宮崎鈴子　伊藤やさよ　成田とし子　鈴木ちよ子
独吟　鉢木　笹之段　宮口光芳　水谷さく　山田きぬ　浅野圭子　花筐　加藤ぬい　善知鳥
仕舞　熊野
連吟　田村　加藤たづ子　高田はる　後藤さの　中内ますえ　小関慶子　若尾和　佐藤安　田村とみ
〃　安宅　石浜明子　吉田福井啓次郎　後藤孝一郎　筧鉱一　柳原冨司忠　筧鉱一　藤田昭彦
舞囃子　花月　石田紀子　筧鉱一　柳原冨司忠　藤田昭彦
〃　舟弁慶　前大津米子　後藤孝一郎　筧鉱一　藤田昭彦
〃　東北　百々貴美子　吉田柳原冨司定男　筧三男
舞囃子　清経　北村房代　河村福井総一郎啓次郎　藤田昭彦
〃　龍田　河井隆子　後藤孝一郎　筧鉱一　池田藤田茂昭　筧三男
連吟　誓願寺　伊藤杉三郎　加藤博　高橋市三　清田一男　松原利重　徳永宛一　林茂　後藤弘　山田治助
仕舞　半部　松風　坪井つる子　佐藤りく　長谷川美智子　後藤紳介
邯鄲　通小町
舞囃子　敦盛　梶田かすみ　河村総一郎　柳原冨司忠　藤田昭彦
〃　松山　安藤良子　河村総一郎　後藤孝一郎　藤田昭彦
〃　遊行柳　村田たつ子　吉田定男　後藤孝一郎　池田藤田茂　藤田昭彦

山田仁三郎師追善能《第二部》

十月二十六日〈日〉午後一時半始曲
熱田神宮能楽殿

経正　百々東治　高安勝久　吉田定男　柳原冨司忠　鬼頭季信
後見　金剛巌　豊嶋三千春　地謡　水谷泰典　吉川周子　荒川東清　坪井田文　清水瀬信久　今井清隆　広田泰三　金剛巌　菊川良一　片野東四郎　金剛永謹　広田泰三
連吟　井筒　宮口光芳　林徳永　松原利重　筧鉱一　茂
仕舞　山姥　鐘之段　豊嶋三千春　金剛永謹
雨月　片野東四郎
船橋　広田泰三

雪　豊嶋弥左衛門　西村欽也　福井啓次郎　筧鉱一　筧三男
後見　今井幾三郎　日比野圭昭　広田泰三　地謡　竹市羽　松矢隆司　石黒賢一　神谷昇司　捷祐　菊川恭三　豊嶋三千春　松野恭憲　小林忠三　今井清隆　金剛永謹　水谷泰典

融　一調　鳥追舟　金剛巌　高安滋郎　間　後見　河村総一郎　大野藤孝一郎　弘之　鬼頭八郎　藤田六郎兵衛　広田泰三　豊嶋弥左衛門　今井清隆　地謡　小林忠三　井上義明　日比野圭昭　菊川恵三　百々東治　水谷泰典　金剛永謹　今井幾三郎　豊嶋三千春　松野恭憲

狂言　無布施経　井上松次郎　井上礼之助　今井幾三郎　福井啓次郎

主催　中部金剛会
後援　中日新聞社

風韻会能

十一月二日〈日〉九時半始
熱田神宮能楽殿

能　清経　高安滋郎　吉田定男　三嶋香代子　森本重一
鬼頭貴代子　守部啓子　替之型

能楽先人の訓え

「観世華雪芸談」より ⑩

松風について

「好きな曲は」とよく聞かれますが、私共すべての曲を苦しんで覚えたものは、皆それぞれの思い出がありまして、しかも教えてくれた人が梅若の父（先代実）であり、うちの父（銕之承紅雪）であり、謡兄（先代万三郎、先代六郎）でありますので、いうにいわれないものがありまして、嫌いというような勿体ないことはいえたものでありません。

その内でも特に好きなものといえばやはり「松風」なのでしょう。

一・六の稽古で常に謡兄の相手をさしてもらって、お二人の息というものはこちらがうっとりする程よくのみこんでいますから自然私も好きになっています。

曲がよろしいから、よく

「松風を」

と頼まれますが、いつも

「おツレは」

とおたづねする事にしています。これは何ももったいぶるわけではありませんが、常に一緒に謡っている人でなければ、とても安心して謡うわけには行きません。この「松風」のツレは「高砂」や「花筐」のように、ただシテについて謡っておればよいのと違って、シテを助け引き立てるので相当つっこんで謡わねばなりません。息つぎもツレはシテが謡っている間に、息を切っておいて、シテが切った時にはつないでおくよう、始終心がけていないといけません。

シテが切った瞬間、ツレも同じように切ることが多いし、又そうするのが礼儀のように思う人もあるようですが、それは大変な思い違いで、句読点以外は切れないように心を配ることがツレの心得なのです。

これはツレが大切なばかりでなく、ワキも、間狂言もなかなか心得がいりまして、なんとなく道然と橋がかりを歩む姿、物淋しい秋の夕暮に、永い影をひきながら浜辺を歩む姿は、三番目物の典型のようなものです。

これにつづいて間狂言の所の者が何気なく出て狂言座に座るのですが、近頃よく若い人のそれをみますが、昔はこれは必ず古老が勤めたもので、役としてはワキに呼び出されて

「所の者とお尋ねは――」

と松風村風の松のことを教えるだけの役ですが、これがいかにも古老であるという所にワキの問いかけが生きてくるのです。

間狂言がこんな風ですからワキも若い人では具合が悪いので、それ相応の人が出ることになっていますが、松に向って

「さてはこの松は――」

と含蓄のある謡を謡って下さると鏡の間にいても身の引締まる思いがいたします。

囃子にしてもやはり大曲なのですから、よく心得ていて下さる方でないといけませんが、まあ私共が舞わしてもらう時は皆さんがよくつき合って下さるので自然と楽しく舞わしてもらえる、ということになります。

お囃子といいますと

真の一セイは「高砂」のような脇能に限りますが、三番目ものながら「松風」だけはこの真の一セイで始まります。手も大体同じですが、やはり位が違いますので、越の手などは「松風」と脇能では違ってきます。

舞台に入って最初の型は地謡の「よせてはかへる片男波」のところで、これに渡すシテの謡「女車」の謡い方は難しいもので特に心して謡わねばなりません。

「よせてはかへす片男波」のところは、「よせては」で、ざぶんと波が打ち寄せる気持でいくらか近ずき、

「かえす」即ち引いてゆく時には、三歩足をスラスラと出しますが、いかにもそれらしいよい型だと思います。この時ツレはじっとしています。

「芦辺の田鶴こそ」の「芦辺」はある本には「田圃」の意味だと書いてありますが、ここは浜辺であり、私共つとめます時は、浜辺に群れている田鶴が波打際から飛び立つのではなく、橋がかりの方から、バタバタこちらへ飛んでくるという解釈をしています。

（つづく）

演能の記録

能「蝉丸」　稲垣道雄氏
（50. 9. 28　竹韻会大会）

鬼頭五朗師追善能

11月29日　観世、宝生両宗家が来演

橋岡社中の名古屋淡交会の重鎮として、また名古屋観世会の伸展に尽力された鬼頭五朗氏は昭和四十二年七月逝去されたが、同氏の追善能が十一月二十九日（土）熱田神宮能楽殿で催される。

主催は鬼頭八郎、鬼頭季信、後援観世元信、調友会

能組は観世宗家の舞囃子「砧」宝生宗家による一調「鵜捨」の所演はじめ、観世流・観世喜之、武田太加志、大槻秀夫、橋岡久共、観世寿夫、宝生流大坪十喜雄、辰己孝、本間英孝の諸師が来演、

能は宝生流「石橋」をシテ内藤泰二師が演ずる。

この追善能には、特に内閣官房副長官海部俊樹氏が「中京能楽界の健全なる躍進を切望される催主鬼頭八郎氏の熱意と悲願が溢れた能組であり、中京能楽師の発憤向上を企画するビジョンに富む密度の高い番組」とあいさつを寄せている。

（番組次号掲載）

10月23日から銀座・松坂屋で

本紙「能紀行」を執筆して頂いている能画家二井栄逸氏（喜多流シテ方）の能画個展がきたる十月二十三日から二十八日まで、東京・銀座・松坂屋新館ギンザ・ファイブ四階画廊で開催される。展覧会には同画伯の新作三十余点が出品される。

能帯をカラーで別刷りした「能紀行」を作成しました。一部読者のお手許には折込みでお届け致しましたが、ご希望の方は部数に限りがありますが能楽の友社宛はがきでお申し越し下さい。お送り致します。

風韻会能

十一月二日〈日〉九時半始
熱田神宮能楽殿

ごあいさつ

今般会員の今村嘉勇氏が準師範の資格を得ましたので、その披露の意味に於て「神歌」を勤めます。なお明春一月十五日の清韻会大会に、能「猩々」を披くことになっています。何卒今後共私同様宜敷くご後援賜りますよう茲にご披露を兼ねお願い申し上げます。

風韻会　殿島修二

能組

素謡

神歌　今村嘉勇　千才　久田徹二　地謡　岡田光茲　杉村竹翠　殿島修二　水野元三

嵐山　栗田純子　岩田扶巳　伊藤瑠璃子　地謡　加藤精子　小川比佐子　阿部とし子　毛利菊枝子　戸田陸子　小島初子　稲月好子　高見登子　高橋とし子　富田李子　緒方水島　入江野子　陽子　貞子　誠子　子　等子　御牧紀子　吉岡常代　古山島子　井津子　佐野季子　富春美　細子

仕舞

屋島　福間克彦
竜田　浮貝鋼一　地謡　今村嘉勇　久田徹二　殿島修二　竹翠　水野元三　杉村藤　殿島元
女郎花　原伊三男

熊野　林喜久子　萩原てる子　津田幸子
ロンギ、クリサシ、クセを省く
広瀬嘉子

地謡　水谷よしゑ　森清子　阿部タマ　加藤静代　志方つね子　石黒操子　吉田文子　氷室豊子　磯村みつ枝子　山崎長谷上鍵子　武田藤初子　長谷川典子　富田藤子

独調　近藤一清　林千種

駒之段
連吟

花筐　岡田クルイ　高橋香代子　伊藤ふじ　加藤志ゆん　千代

弱法師　古井佐季　長谷川鍵子

成島春子　康御牧紀代

俊寛　山田富美　吉岡常子
クドキ省く

地謡　加藤千代　中村喜久子　岡田ふじ　高橋香代子　伊藤志ゆん　長谷川鍵子　古井佐季　林千種　問山美恵子

独吟　井筒一　関谷三男

百万　調　日比大吉郎　助川竜夫

能「清経」

鬼頭貴代子　守部啓子
替之型　高安滋郎　吉田定男　三嶋香代子　森本重一

後見　近藤幸江　殿島修二

地謡　御牧紀代　吉岡常子　佐季　林千種　山田富美　吉田　今村嘉夫　泉　大槻文蔵　久田徹二　斉藤信隆

舞囃子

頼政　富士道周明　河村総一郎　後藤孝一郎　鬼頭季信

野守　渡辺節子　吉田定男　後藤孝一郎　助川竜夫　筧三男

能「二人静」

殿島博子　殿島満里子　西村欽也

後見　泉嘉夫　大槻秀夫

地謡　河村総一郎　福井啓次郎　鬼頭貴代子　渡辺節子　佐藤近　水野ア　雍子　藤田昭彦　川勝梃寿　殿島修二　河村紘一　笠原ヤ　藤田元　水三稔

狂言

柿山伏　佐藤友彦　井上礼之助

砧　前　福間昌作　筧鉱一　半田智子　藤田六郎兵衛

砧　アト　水野雍子　筧鉱一　後藤孝一郎　鬼頭喜太郎　藤田昭彦

紅葉狩　佐藤アヤ子　河村総一郎　福井啓次郎　藤田六郎兵衛
急ノ舞

子方　吉田和幸
後シテ　高田みね子
前シテ　奥田薫

能「船弁慶」

高安勝久　高安滋郎　飯富雅介　筧鉱一　山口亮　鬼頭喜太郎　筧三男

前後替　大野弘之

間　後見　殿島修二　大槻文蔵　地謡　福間克彦　浮貝鋼一　伊藤三男　杉村竹翠　里井順次郎　福原昌作　近藤道　富士周明　田村清一　岡田光茲　泉嘉夫　藤元三

番外仕舞

賀茂　大槻文蔵

菊慈童　大槻秀夫　地謡　水藤元三　泉嘉夫　田村竹翠　杉村勇

祝言猩々　殿島修二　吉田定男　山口亮　鬼頭好信　鬼頭季信

終演五時半頃の予定

御来場歓迎

主催　風韻会
殿島修二
後援　毎日新聞社

本番組及びご招待券は後日会員又は能楽殿から差上げます

舞囃子

敦盛　梶田かすみ　後藤紳介　長谷川美智子

〃　松虫　安藤良子　河村総一郎　柳原富司忠　後藤孝一郎　藤田昭彦

〃　遊行柳　村田たつ子　吉田定男　後藤孝一郎　池田茂　藤田昭彦

後見　豊嶋弥左衛門　今井清隆　広田泰三

地謡　小林忠三　井上義明　日比野圭昭　菊川惠治　百々東三　水谷金剛　松野恭忠　今井豊嶋三千春　幾三郎　永謹　泰典

主催　中部金剛会
後援　中日新聞社

修諷会大会

十一月八日（土）午前九時始
熱田神宮能楽殿

番組

狂言
野村又三郎　井上汎之助

酢薑
素謡
井筒　犬飼善子　熊沢恵美子
天鼓　須賀実　池内光之助
弱法師　杉田和子　梅若薄高
花筐　伊藤恵美　佐藤敏子　清水松絵　寺岡佑子
恋重荷　梅若万佐晴　藤原彦一　梅若修一

仕舞
難波　金野克子
三輪　山本博子
葵上　鈴木喜久子

謡
梅若修一　高橋道子　梅若盛義

仕舞
雲林院　須賀実
花筐　社本みき江

舞囃子
十二時三十分頃
邯鄲　佐藤敏子　後藤孝一郎　鬼頭喜太郎　筧鉱一　筧三男
弱法師　伊藤恵美　後藤孝一郎　河村総一郎　筧三男
山姥　替之型　天河加代子　鵜沢速雄　安福建雄　鬼頭喜太郎　藤田昭彦
松風　須賀泰子　福井啓次郎　河村総一郎　筧三男
熊坂　替之型　中山宗子　福井啓次郎　河村総一郎　鬼頭喜太郎　藤田昭彦

遊行柳
神田佳代子
松風　杉田合子
藤戸　奥田敏子

謡
葵上　梅若万紀夫　吉田さよ子　梅若修一　井戸和男

連吟
実盛　社本みき江　梅若盛義　梅若修一

二時三十分頃
楊貴妃　能楽　沢田春子
間　高安滋郎　後藤孝一郎　筧鉱一　藤田六郎兵衛　野村又三郎
後見　梅若万佐晴　梅若盛義　善高　地謡　岡田晃一　菊池重郷　森勝子　熊沢恵美子　梅若修一　井戸良造　池内光之助　前川芳周　井戸和男　井上生香

舞囃子
芦刈　替之型　中村富子　河村総一郎　福井啓次郎　筧三男
玄象　恒吉幸子　安福建雄　鵜沢速雄　助川竜夫　筧三男
海士　清水松絵　安福建雄　鵜沢速雄　助川竜夫　藤田昭彦
五段替之型　番外　舞囃子
桜川　梅若盛義　河村総一郎　福井啓次郎　藤田昭彦
養老　梅若修一　安福建雄　鵜沢速雄　助川竜夫　藤田昭彦

附祝言

〔御来場歓迎〕　主催　名古屋修諷会　後援　梅若　中日新聞

五十年度第五回 観世会定式能

十一月九日（日）午後零時三十分始
熱田神宮能楽殿

能
紅葉狩　河村鉦二　犬飼末吉　長谷川章　地謡　佐藤元三　坂本太俊　青木秀雄　武弘

狂言
野宮　観世寿夫　宝生閑　河村総一郎　久田舜一郎　藤田昭彦
間　井上松次郎

仕舞
菊慈童　武田邦弘　加藤保彦　後藤契雲　岡田光紘　加藤総兵衛
三輪　大西信彦　地謡　久田秀雄　山本真義　観世静夫　梅田邦久
阿漕　観世静夫　地謡　殿島修二　久田秀雄　梅田邦久　小島一英

（休憩十分）

狂言
鈍太郎　佐藤卯三郎　佐藤友彦　大野弘之

能
玉葛　大西礼久
紅葉狩　梅田邦久
天女　佐藤太俊　大西信久

国栖　能楽　西村欽也
間　野村又三郎　佐藤秀雄　筧鉱一　福井啓次郎　筧鬼頭喜太郎　筧三男
後見　小島一英　観世静夫　地謡　青木武弘　犬飼末吉　杉村真義　竹内米次　大西由本　塚本武田　秀雄　信彦　邦弘

附祝言

主催　名古屋観世会

平等院・随心院・三井寺
喜多流 謡曲名所めぐり
11月24日（休）会員募集中

前号でお知らせ致しましたが、十一月二十四日（休）に、喜多流の謡曲名所めぐりバス旅行を行ないます。

今回は、「頼政」の宇治平等院「通小町」ゆかりの山科・随心院「蟬丸」の蟬丸神社、さらに名鐘で知られる志賀の里・三井寺など謡曲にちなむ旧蹟、名所を訪ねます。同好の方おさそい合わせのうえご参加下さい。なお喜多流以外の方々のご参加も歓迎します。

◆日時　十一月二十四日（休）
◆集合　〔名古屋地区〕名古屋テレビ塔北側、午前8時、瀬戸観光バス
◆出発　午前8時10分、帰着午後7時30分ごろの予定（雨天でも実施します）
〔三重県地区〕近鉄四日市駅・近鉄百貨店前午前9時00分（名古屋からの一行に合流）
◆コース　名古屋テレビ塔—近鉄四日市駅前—名阪国道—宇治・平等院（頼政・浮舟）—山科・随心院（通小町）—坂上田村麿の墓（田村）—蟬丸神社（蟬丸）—三井寺（三井寺）（巴）—国道一号線—四日市—名古屋
◆定員　四十五名
◆会費　一名六千円（バス代、拝観料、昼食一切ふくみます）
◆現金書留又は振替にて、11月24日の名所めぐりと明記のうえ左記へお申込み下さい。
名古屋市千種区吹上本町2の20（〒464）　能楽の友社
振替口座　名古屋36393
◆喜多流二井栄逸先生が同行され、車中で謡曲を謡っていきます。コース案内のカッコ内の謡本をご持参下さい。
※三重県地区の集合は近鉄四日市駅・近鉄百貨店前（亀山駅前を変更）午前9・00時。二井栄逸先生のグループに集合して下さい。出発9時10分。

11月23日「洛北」の謡曲名所めぐり締切り

本紙九月号で発表しました仁和寺・観世井戸、上賀茂神社など洛北の謡曲名所めぐり（十一月二十三日挙行）は、申込みが定員を越え補助席も満席になりましたので締切らせて頂きました。お問い合わせを頂き、一部の方におことわり申しあげたことを紙上をもってお詫び致します。

ご参加の方には、ちかく会員券にてご案内致します。

熱田神宮 能楽殿創立20周年
盛大に記念開催

第十九期・第三回
名古屋宝生会定式能
九月二十一日（日）午後一時始
熱田神宮能楽殿

故 山本博之三回忌追善能
九月二十四日（祭）午前十一時始
熱田神宮能楽殿

御料理 あつた 蓬莱軒
本店　熱田区神戸町三四　電話（671）8686～8
神宮東門店　熱田区新宮坂町一　電話（682）5598（代表）

観世流謡曲本
ちくさ正文館
ちくさ駅前
電話（741）1137

観世流・金剛流
宗家本発行元
檜書店
〒101　東京都千代田区神田小川町2—1　電話（291）2488—9　振替東京3-3552
〒604　京都市中京区二条通鉄屋町東入　電話（231）1990　振替京都113

割烹・小料理 城
●熱田神宮能楽殿喫茶部
●住吉小路（中区栄3—10）電話241—0248
●喫茶・グリル（愛労評地下ビル）電話731—1128

かさとさすなら かすが山 扇かふなら 十松屋 人ごうたと例を 買ふなら 十松やでかいうよ
永寿丸三本 十松屋裏井 電(221)三三〇

名古屋鉄道株式会社

能樂の友

題字は熱田神宮　藤田宮司筆

発行　能楽の友社
名古屋市千種区吹上本町2—20
（郵便番号　464）
電話　（731）7984
振替口座　名古屋　36393
購読料　1年　500円
郵送の場合　1年　600円
一部　50円

歳末助け合い　義捐金募集　能

能「咸陽宮」「班女」「船弁慶」

12月7日　熱田神宮能楽殿

能楽協会名古屋支部（藤田六郎兵衛支部長）では、昭和四十四年から歳末助け合い運動に協賛して義捐金募集能を公演、能楽愛好者の温かい理解と協力によって盛大に開催され、愛知県、名古屋市にそれぞれ義捐金が寄附されているが、ことし第七回の義捐金募集能は、きたる十二月七日（日）午前十一時から熱田神宮能楽殿で催される。

番組は③面所報のとおり、能三番。

観世流能「咸陽宮」（シテ河村鉦二、ツレ加藤保彦、長谷川章、武田邦弘・ワキ西村欽也）観世流能「班女」（シテ佐藤太俊、ワキ高安滋郎）宝生流能「船弁慶」（後シテ玉井博祐、前シテ戸田和、子方片桐真、ワキ高安滋郎）

狂言「青菜焼」（佐藤友彦、大野弘之）喜多流囃子「烏頭」（長田驍）金剛流囃子「加茂」（水谷泰典）観世流仕舞「竜田」（服部紗枝）「玉葛」（吉田妙）「松虫」（高木美智子）「野宮」（久田秀雄）「昭君」（梅田邦久）金春流仕舞「実盛」（林鉄郎）

入場料千円（全自由席）前売りは市内各プレイガイド、各出演楽師宅。

能「船弁慶」など上演

12月21日　青少年のための芸術劇場

名古屋市教育委員会と能楽協会名古屋支部の主催によって、中学生、高校生の能鑑賞の機会として催される「青少年のための芸術劇場」は、十二月二十一日（日）熱田神宮能楽殿で行なわれるが番組は次のとおりである。

◎第一部中学生の部　午前十時始

解説・能について…内藤泰二氏、狂言について…佐藤友彦氏。

狂言「梟山伏」（野村又三郎、佐藤秀雄、井上礼之助）能「舟弁慶」（後シテ久田徹二、前シテ小島一英、子方河合雄一郎・ワキ高安滋郎、ワキツレ飯富雅介、笛・藤田昭彦、小鼓・後藤孝一郎、大鼓・吉田定男、太鼓・助川竜夫、間・井上松次郎、後見・殿島修二、杉村竹翠、地謡・梅田邦久、武田邦弘、佐藤太俊、加賀敏彦、加藤保彦、田中武）

◎第二部高校生の部　午後二時始

解説・能について…内藤泰二氏、狂言について…野村又三郎氏。

狂言「佐渡狐」（井上松次郎、井上礼之助、佐藤卯三郎）

能「船弁慶」（後シテ武田邦弘、前シテ梅田邦久、子方河合雄一郎、ワキ高安勝久、ワキツレ飯富雅介、笛・筧三男、小鼓・柳原富司忠、大鼓・筧鉦一、太鼓・鬼頭好信、間・大野弘之、後見・河村鉦二、小島一英、地謡・久田秀雄、塚本秀雄、久田徹二、高橋暖一、犬飼末吉、中村和夫）

流祖三百五十年、先代五十回忌追善能

明春4月4日　笛方藤田流

笛方・藤田流宗家藤田六郎兵衛師は、明春四月四日、流祖清兵衛重政三百五十年、先代清兵衛重孝五十回忌追善会を熱田神宮能楽殿で開催する。

観世流「鵜」（シテ大槻秀夫、ツレ大槻文蔵、ワキ西村欽也、間佐藤卯三郎）能「石橋」小書師資十二段之式（白・観世武雄、赤・梅若盛義、前シテ山本勝一、ツレ梅田邦久、梅若修一、ワキ高安滋郎、間野村又三郎）狂言「武悪」（井上松次郎、井上礼之助、佐藤秀雄）舞囃子「百萬」（内藤泰二）「松虫」（長田驍）一管独吟「江口」（観世喜之、藤田六郎兵衛）

名古屋清韻会大会

1月15日　熱田能楽殿で

名古屋清韻会は、毎年一月十五日（祭日）に大会を催しているが、昭和五十一年度は、能「羽衣」小書和合之舞（シテ天野登茂子氏）能「猩々」（シテ今村嘉男氏）の二番はじめ舞囃子、独謡、仕舞、独吟など二十数番で開催される。

◆演能カレンダー◆

（熱田神宮　能楽殿）

〔11月〕

15日（土）梅若盛義後援会能　（有料）（番組①面）
16日（日）邦謡会秋の会　（来場歓迎）（番組①面）
22日（土）麦の会　（有料）
23日（祭）和泉狂言会　（有料）（番組②面）
24日（休）壺泉会三十周年記念大会（来場歓迎）（番組②面）
29日（土）鬼頭五朗師追善能　（有料）（番組③面）

〔12月〕

7日（日）歳末助け合い義捐能　（有料）（番組③面）
15日（月）高校生鑑賞能（高校生のみ）
21日（日）青少年芸術劇場（一般非公開）

〔51年1月〕

3日（土）能楽協会名古屋支部新年謡初式　（協会関係者のみ）
5日（月）藤田流笛吹初式
7日（水）学生能
11日（日）中部紳士能
15日（祭）名古屋清韻会大会
18日（日）松謡会春の大会
25日（日）合同能　（有料）

（演能変更の節はご了解下さい）

第一回　梅若盛義後援会能

十一月十五日（土）午後二時始
熱田神宮能楽殿

能組

梅若修一
梅若盛義

小町　西村欽也　筧鉦一　後藤孝一郎　藤田六郎兵衛
雨夜之伝
後見　岡田晃一　井戸和男　井戸良道　地謡　菊池重郎　大槻文蔵　池内光之助　梅若修一　井上生香　梅若盛義　前田行夫
—休憩十分—
狂言
呂蓮　野村又三郎　佐藤卯三郎　井上礼之助
—休憩十分—
仕舞
鞍馬天狗　梅若盛彦　地謡　岡田晃一　井戸和男　梅若修一　池内光之助
子方　梅若盛弘　梅若盛義
船弁慶　高安勝久　高安滋郎　飯富雅介　河村総一郎　福井啓次郎　助川竜夫　藤田昭彦
重キ前後之替
間　野村又三郎
早装束
後見　梅若善高　前田行夫　地謡　菊池重郎　熊沢恵美子　岡田芳周　井上生香　池内光之助　前川朗詠　井戸和男　梅若修一

附祝言

主催　梅若盛義後援会
連絡先　名古屋市名東区猪高町猪子石高根一平—大日東マンション平和丘802　熊沢恵美子　電話（0）—六九七三番

会員券
正面指定席　三、000円
指定席　二、000円
自由席　一、000円
学生席　七00円

邦謡会秋の会（二）

十一月十六日（日）九時半始
熱田神宮能楽殿

番外
舞囃子　吉野天人　梅田邦久　須部甫　清沢一政　今沢美和　藤田昭彦
素謡　三輪　西村進　根木重男
安達原　今井本明　別所道雄　岩田禎之
番外仕舞　実盛　キリ　矢代寿弥
舞囃子　杜若　椎葉富美子　筧鉦一　後藤孝一郎　助川竜夫　藤田昭彦
雲林院　戸谷克巳　筧鉦一　後藤孝一郎　助川竜夫　藤田昭彦
素謡　藤戸　曽我沢子　坂野嘉子　椎葉富美子
仕舞　班女　クセ　佐藤千代　平女　キリ　横井敬子
融　丹羽久子　鉄輪　木村ひで
小袖曽我　三村律子　筧鉦一　後藤孝一郎　藤田昭彦　熊沢百代
舞囃子　百萬　榊谷敏子　筧鉦一　後藤孝一郎　藤田昭彦
素謡　隅田川　河合雄一郎　奥村龍子　橋本淑子　中島芳子
仕舞　鐘之段　羽田雅子　山姥　クセ　小林富美子
鵜　桜木幸子　丸井寿子
能　菊慈童　高安滋郎　河村総一郎　福井啓次郎　鬼頭喜太郎　筧三男
後見　松野良輝　河村鉦二　本田須部甫　熊久田秀雄　小野朗　梅田邦久　橋本磯道
地謡　清沢一政
仕舞　三輪　岩田禎之　鶴之段　別所道雄
野守　稲垣守　羽田雅子　小林富美子　水野美代子
素謡　砧　稲垣守　二村摂三
仕舞　江口　溝口乙子　花筐　クセ　坂野嘉子
笠之段　曽我澄子
半蔀　妹尾久　河村総一郎　福井啓次郎　筧三男
舞囃子　遊行柳　原正義　河村総一郎　福井啓次郎　鬼頭喜太郎　筧三男
子方　坂川公一　戸谷克巳
〃　〃　妹尾久
〃　〃　鈴木茂樹
〃　〃　須部甫
〃　〃　清沢一政
〃　〃　一木茂
ツレ　本田勲
素謡　安宅　稲垣守　二村摂三
勧進帳
仕舞　梅　キリ　橋本淑子　葵上　奥村龍子
山姥　キリ　加藤井知子
番外仕舞　阿漕　松野良輝
舞囃子　東方朔　須部甫　河村総一郎　清沢一政　福井啓次郎　鬼頭喜太郎　筧三男
附祝言
終了予定六時

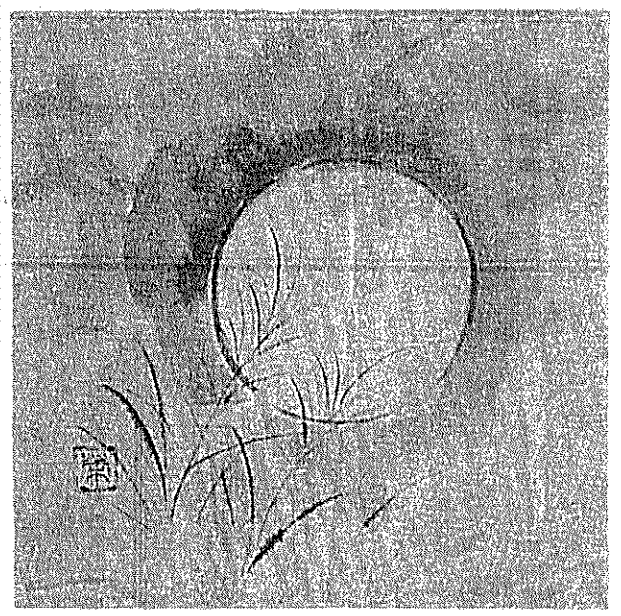
御来場歓迎・粗品進呈

主催　邦謡会
後援　梅田邦久会
中日新聞社

能紀行 ⑤⑤

月と影

二井栄逸 文と絵



〝わび〟を漢字で書けば〝侘び〟、〝さび〟を漢字で書けば、〝寂び〟、又は〝錆〟になります。わびも、さびも、幽玄の美と同じように、かりそめの俗界の生活から隔絶された境地から生れるものであって、われわれには程遠いものと人々は思い勝ちです。しかしすべての虚飾をかなぐりすてた、清潔感、冷静さ、といった感覚は日本人なれば誰もが心の底に待ち受けている憧れがれではないでしょうか。名利の生活からはなれ、孤独に徹しきって、謙虚に真実の美を待ちわびる心境、これほど豊かな境涯はないと思います。

清貧に甘んじる、と言う言葉がありますが、〝わび〟はそれとは一寸違うと思います。わづらわしい俗事がいやさに世をのがれんとする気持ち、そのような逃避は、日本美の〝わび〟や〝さび〟ではないと思います。もっと俗界につっこんで、つきぬけて、あらゆる苦難をのりこえるその道すがらに真実の美である〝わび〟の境地を体得するのだと私は思います。

〝わび〟は、又、非常に透徹した理性を持った静かな感情ですがそれと反対に行動的なするどさを持った〝冴え〟があります。

妙な言い方かも知れませんが、或る事の研究に没頭して、夜のしらじらと明けるのも知らない事があります。そんな時、静かにそれを見守っているもう一人の自分がいるという事。苦しみを全部背負ってたゝかっている時、もう一人の自分が、静かに自分をはげましていると言う事。こんな事を皆さんは体験されることゝ思います。

目的を完遂するには、止むにやまない勇気が出て来ます。それを私は〝冴え〟とよびます。そして静かに見守っているもう一人の自分は、透徹した理性、すなわち〝わび〟なのであります。目的に向ってつっこんでゆく自分には、もう一人の思惟する自分がなければいけません。

世をのがれてしまっては世捨人になってしまいます。〝わび〟はとかく、退嬰的な、独善的な精神の所産だと言われ勝ちなのは、前向きの姿勢でないからです。冴えがあって、ほんとうの〝わび〟が存在するのであって、内面的にはげしくするどいものを持っていればこそ、日本美という独特の美をつくるのだと思うのです。言いかえれば、いくら技術がすぐれていても、精神力と言うか、生命の力がなければほんとうのものは出来ないということです。

能に体用の事を知るべし
体は花、用はにをいの如し
又は、月と影の如し
体をよくよく心得たならば用もおのづからあるべし。

世阿弥は至花道書に、真髄をづばり言いあてゝいます。魂至らざれば技至らず、体無き時は用も無く月皎々と照る時は影自ら鮮かなりということです。千古のおしえを運れた古の聖哲達や、不滅の芸術を創った古人の努力を見るにつけてもわれわれは其の魂の尊さをひしひしと身内に感じるのです。

× × ×

夕風が肌寒く感じられるこの頃はぜもみじもめっきりと紅くなりました。今から二十四日の謡曲名所めぐりを楽しみにしています。宇治平等院、山科の随心院、昔日をしのぶ琵琶湖畔の三井寺等、京の秋はさっと私達を心ゆくまで楽しませてくれることでしょう。

第13回北陸中日能

11月23日 金沢市観光会館で

北陸中日新聞、石川テレビ放送主催「第十三回北陸中日能」が十一月二十三日（日）金沢市観光会館で催される。

能組は、観世流能「通小町」小書雨夜之伝、（シテ木原康次、ツレ藤波重満、ワキ高安滋郎、笛片岡吉雄、小鼓住駒陽介、大鼓飯島佐之六、地謡藤井久雄ほか）

宝生流能「砧」（シテ高橋進、ツレ高橋章、ワキ森茂好、笛森田光春、小鼓住駒朗弘、大鼓瀬尾乃武、太鼓三島元太郎、地謡金井章ほか）

宝生流能「山姥」小書枝之型（シテ野口禄久）ツレ犀川小太郎、ワキ森茂好、笛森田光春、小鼓住駒朗弘、大鼓瀬尾乃武、太鼓三島元太郎、地謡三川泉ほか）

狂言「隠狸」（野村万之丞、能村英丘）ほか宝生流仕舞・舟弁慶（金井章）笠之段（三川泉）観世流仕舞・天鼓（木原康夫）笹之段（藤井久雄）宝生流仕舞・箆太鼓（佐野正治）ほか五番。正午開演、

後援文化庁。特別席四千円（指定席）A席三千五百円（同）B席三千円（同）C席千円（自由席）

能「石橋」を上演

鬼頭五郎師追善能

名古屋淡交会の重鎮として、また名古屋観世会の隆盛に尽力された鬼頭五郎師の追善能が既報のとおり十一月二十九日、熱田神宮能楽殿で、観世宗家、宝生宗家が来演して催される。

能組は本紙③面掲載のとおり観世宗家の舞囃子「砧」宝生宗家の一調「姨捨」、能「石橋」（シテ内藤泰二師）。観世流太鼓鬼頭喜太郎氏長男好信氏が「石橋」を、次男英二氏が大鼓「鞍馬天狗」の披きなど少壮囃子方の今後の活躍が期待される能組である。

中日文化センター 秋の文化祭発表会

中日文化センターの七五年秋の文化祭、芸能発表会（第一日）がさる十月一日熱田神宮能楽殿で開催された。

当日は、中日文化センター、豊橋中日文化センター、名古屋東海中日文化センター、名日文化センター、一宮中日文化センター、岡崎中日文化センターの観世流、宝生流、金剛流の素謡、舞囃子、仕舞、連吟、宝生流、幸清流連調、観世流、幸清流連調など六十番で盛況であった。

松風について ⑪

「四方の嵐も音添へて」と面を下げ「夜来何とすごさん」と考える心で、「もう一杯になったのか」という気持でとめるのですが、左近さんもこの心持でやっておられたとのことでした。

汲み方は、月の影を見ながら汲むのですが、謡に「月の影」という文句がありますからそれにこだわって、目をあげて月を見て端を引っぱればすぐ解けるように結んでおきます。これは後見の心得でもありますが、シテも出る前に自分で一応調べておく位の注意は必要です。

ツレはその紐をシテの左に来て持たせますが、シテは面で見えませんから細かく気

麦の会公演

十一月二十二日（土）午後一時始
熱田神宮能楽殿

能 小督　衣斐正宜
高安勝久　筧鉱一　福井啓次郎　藤田昭彦
長田曉

能 六浦　高安滋郎　河村総一郎　後藤孝一郎　助川竜夫　筧三男

主催 麦の会
喜多流職分 長田曉
宝生流職分 衣斐正宜

（有料）

第十五回 和泉狂言会

十一月二十三日（木）午后一時始
熱田神宮能楽殿

番組

船渡聟　聟 井上松次郎　女 佐藤秀雄　井上祐一

八句連歌　何某 三宅藤九郎　何某 和泉保之

素囃子 安宅　滝流シ　藤田六郎兵衛　後藤孝一郎　吉田定男

大般若　僧 大野弘之　梵天 井上礼之助　佐藤友彦

井杭　井杭 今枝郁雄　算屋 井上松次郎　佐藤卯三郎

止動方角　太郎冠者 佐藤秀雄　伯父 井上礼之助　主人 野村又三郎　馬 大野弘之

主催 名古屋和泉会

会費　指定席 一、五〇〇円　普通席 一、〇〇〇円
階上席 八〇〇円
取扱所　各出演楽師宅　各百貨店プレイガイド
事務所　中区橘一丁目七―五　井上方　電(0)一四三〇

〔壺泉会大会番組つづき〕

祝言 舞囃子 菊慈童　泉嘉夫　河村総一郎　福井啓次郎　鬼頭喜太郎　鬼頭季信

（地謡　壺泉会女性会員全員）

〔来聴歓迎〕　主催 壺泉会

壺泉会三十周年記念大会（名古屋第一日）

十一月二十四日（月曜振替休日）午前九時始
熱田神宮能楽殿

番組

仕舞 龍田　鶴克彦　岩船　山木正人

舞囃子 高砂　高木春枝　吉田定男　山口亮　池田茂　山口亮　筧三男　花月　石黒愛子

仕舞 花筐　山本佳代子（南山大学観世会）

天鼓　森崎寿郎　黒部まり　河合より子　浅井邦容

素謡 小督　大堀力男　南方幹子

仕舞 清経　森洋造　藤井すえ

仕舞 船弁慶　黒部まり　胡蝶　河合より子

舞囃子 蟬丸　末吉たま子　吉田定男　山口亮　筧三男

松風　森八重子　吉田定男　山口亮　筧三男

素謡 山姥　宮部悟　志村喬　矢野常彦

仕舞 雲雀山　藤井すえ　玉葛　南方幹子

桜川　小森辰雄

番囃子 弱法師　森有一　八田ふき　筧鉱一　山口亮　筧三男

仕舞 采女　西田寿恵　鐘之段　塩瀬和子

松虫　矢野常彦

能 羽衣　鳥居千枝子　高安勝久　筧鉱一　後藤孝一郎　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛

子方 塩瀬和子　大堀力男

山伏 村松賢一郎　宮部悟　森洋造　中沢修　矢野常彦　浅井邦容

素謡 安宅　勧進帳　武藤久仁男　石附一二

富士太鼓　小山富美代

舞囃子 花筐　伊藤滋敏　後藤孝一郎　筧鉱一　後藤孝一郎　藤田六郎兵衛

善知鳥　柴田うた子　筧鉱一　後藤孝一郎　鬼頭季信

仕舞 三輪　川渕泰子　後藤孝一郎　鬼頭季信

素謡 野宮　米田田鶴　放下僧　金井久枝

舞囃子 井筒　中沢修　太田平之助　福井啓次郎　河村総一郎　藤田昭彦

経政　倉地幸子　福井啓次郎　河村総一郎　鬼頭季信

安宅　谷野博　福井啓次郎　河村総一郎　藤田昭彦

独吟 近江八景　前川修

能 海士　輪鳴　元英　杉浦芳枝　懐中之舞　高安滋郎　飯富雅介　福井啓次郎　河村総一郎　鬼頭喜太郎　藤田昭彦

狂言 竹生島参り　間　佐藤秀雄　野村又三郎　井上松次郎

仕舞 国栖　橋本実柏　崎近藤幸江

七騎落　三島恵合　浦泉泰孝

歳末助け合い 義捐金募集能

十二月七日（日）午前十一時始
熱田神宮能楽殿

能楽先人の訓え

「観世華雪芸談」より

松風について ⑪

「四方の嵐も音添へて」と面を下げ「夜寒何とすごさん」と考える心で面を伏せますがこれは次の「更けゆく月こそさやかなれ」で月を見上げる型がありますので、その時ひき立つように考えたものです。

「更けゆく月」のところは、真夜中に皎々とした月を仰ぐ心で、

「汲むは影なれや」は車の側にある月影を見、

「焼く塩煙心せよ」と正面の塩焼きのかまの煙を見上げることになります。

このあたりはすべて月に照らされた浜辺の風情を美しく描くように舞います。

「松風」中で一番美しい型だといわれていますのは、あの目附柱のそばに置かれた汐くみ車の上の桶に汐を汲み入れるところですが、これには色々のいい伝えがあります。

囃で二度に汲み入れますが、最初は一つに充分汲み入れて、二度目は半分入れた頃にはもう一杯になってパアーッと溢れるので、「もう一杯になったのか」という気持でとめるのですが、左近さんもこの心持でやっておられたとのことでした。

汲み方は、月の影を見ながら汲むのですが、謡に「月の影」という文句がありますからそれにこだわって、目をあげて月を見てはいけません。だといってそのままでは引きたちませんから、桶の中にうつっている月に目を離さず、体をのりあげるようにして中をのぞきますといかにも月をみているようになります。つづまりは心持次第で型が活きるものです。

この桶も車の手前におく人と向うにおく人があります。（向うというのは車の後部のこと）ツレはあとからそのあいている方にのせることになります。私は手前にのせる方をとっていますが、向うにするとシテはやりにくいように思います。

ここでロンギになりますが、もうその時は紐をとって車をひきます。宝生流では、ツレが一つ桶で汲んでから車へのせ、それから紐を持ちますが、これは理屈です。観世流のやり方では空の桶をのせたように思われる人があるかもしれません。

「ルネッサンスの会」で私が舞いました時は、新しい御見物のために、ツレの寿夫に「さしくる汐をくみわけて」のところで先ず桶を車の上においてから、持っている囃で汐を汲ませましたが、観世流としてはじめてやった型でした。反響は別に聞いておりませんが私は差支えないと思っています。しかし新しい型や試みを、時や人を考えずに無制限にやってもよいと申しているわけではありません。

ツレの紐の端がすぐわかるように、そして端を引っぱればすぐ解けるように結んでおきます。これは後見の心得でもありますが、シテも出る前に自分で一応調べておく位の注意は必要です。

ツレはその紐をシテの左に来て持たせますが、シテは面で見えませんから細かく気を配ってあげないといけません。紐もたるんだまま渡されると困りますのでピンと張って持たせます。

また垂れたのを変なところへおいて、シテが踏みつけたりしないよう気をつけてシテの後に立ちます。こういうところがこのツレの能のツレというだけでなく、妹が姉を助けるというような役柄で、ツレとしての大役だと言われるわけであります。

「月は一つ」「影は二つ」というところは、両方の桶を見て又改めて見直しますがその時に車が動かないよう注意します。

手をゆるめ、紐をゆるめて、引っぱっているように見せて歩きます。一度ふりかえって見てから改めて又少し引いて「汐路かんなや」と拍子を踏みますが、この踏み方は、か・ん・なと文字の間で踏み、文字にあたってはいけないのです。謡が切れますとシテは両方の紐を離しますが、離し方を余程注意しないと一緒に持っている囃にひっかかったりして失策する事があります。

これを合図に後見が紐をたぐり、ツレの横を通ってひきますから、それを見てシテは正面に向いて（これまでシテは斜めに向いています）大鼓の前、つまり舞台の中心からシテ柱の方へ板二、三枚の位置で床几にかかります。これは塩屋に戻ったことを意味し、一つの句切りになります。

（つづく）

51年度観世会 定式能日程

名古屋観世会の昭和五十一年度定式能の日程は次のとおり。

会費は自由席一〇、〇〇〇円、指定席一五、〇〇〇円。

◎二月八日（日）十二時半始
舞囃子　難波　上田照也
能　屋島　藤井徳三　観世元昭
能　胡蝶　観世元正

◎四月十一日（日）十二時半始
素謡　忠度　塚本秀雄　犬飼末吉
能　蟬丸　セミ山本勝一　サカ大槻秀夫
替之型
能　雲林院　梅若万三郎

◎六月十三日（日）十二時半始
素謡　天鼓　佐藤太俊　後藤契雲
能　小督　ツレ梅田邦久　トモ久田徹二　観世喜之
恐之舞
能　葵上　武田邦弘　梅若六郎

◎九月十二日（日）十二時半始
素謡　頼政　久田秀雄　河村鉦二
能　通小町　武田志房　武田太加志
雨夜之伝
能　山姥　梅田邦久　片山博太郎
白頭

◎十一月十四日（日）十二時半始
舞囃子　恋重荷　観世寿夫
能　清経　小島一英　橋岡久共
替之型
能　融　観世静夫
クツロギ

「藤九郎新作狂言集」

東京で出版記念会

和泉流の長老、三宅藤九郎師の近著「藤九郎新作狂言集」の出版記念会が九月二十日、東京銀座・東急ホテルで開催された。

この「藤九郎新作狂言集」は、著者が長年にわたる舞台生活の経験と知識を縦横に駆使して磨きあげた新作狂言二十五番、新作小舞謡三十曲、新作能間二番、筆者自筆のさし絵、上演記録を収載、台本としても読みものとしても、資料としても貴重な書である。

発行元、東京都千代田区神田神保町三ノ六、A5判、三六四ページ、美麗クロス装箱入、定価四千五百円。

〔来聴歓迎〕

祝言
舞囃子　菊慈童　泉嘉夫　河村総一郎　福井啓次郎　鬼頭喜太郎　季信
（地謡　壺泉会女性会員全員）

（壺泉会大会番組つづき）

鬼頭五朗追善能

十一月二十九日(土)午后一時半始
熱田神宮能楽殿
主催　壺泉会

能組

舞囃子
養老　大槻秀夫　河村総一郎　柳原冨司忠　助川龍夫　藤田昭彦
水波之伝
巻絹　橋岡久共　吉田定男　福井良久　池田茂　森本重一
砧　観世元正　河村総一郎　福井啓次郎　観世元信　鬼頭季信
誓願寺　武田太加志　笠鉦一　山口亮　山口義郎　藤田昭彦
鞍馬天狗　観世喜之　鬼頭英二　福井啓次郎　観世元則　藤田六郎兵衛

狂言小舞
祐善　野村又三郎　井上礼之助　井上松次郎　佐藤秀雄

仕舞
清経　本間英孝
江口　辰巳孝
藤戸　大坪十喜雄
敦盛　谷本正鉦
邯鄲　舞アト　奥善助

地謡
内藤泰二　宝生英雄　衣斐正宣　塚本秀雄　河村鉦二　殿島修二　久田秀雄

一調
捨　宝生英雄　鬼頭八郎

舞囃子
観世静夫　寿夫　笠鉦一　幸義　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛

双之舞
能　内藤泰二　西村欽也　吉田定男　後藤孝一郎　小沢平子　稲美喜一　加藤勝利　大坪十喜雄　本間英孝　鬼頭好信　笠三男

石橋
後見　宝生英雄　辰巳正宣　吉田俊彦　竹腰勝一　地謡　加藤寿一　稲川利美　鬼頭嘉男

主催　鬼頭八郎　鬼頭季信　観世元信
後援　観世友会

☒会費　三、〇〇〇円
会員券は主催・各出演楽師までお申し出願います。

歳末助け合い　義捐金募集能

十二月七日(日)午前十一時始
熱田神宮能楽殿

囃子(剛)　加茂　水谷泰典　笠鉦一　後藤孝一郎　森本重一郎　鬼頭喜太郎
地謡　百々日比野圭昭　康治　菊川重本　片野東四郎　憲三　昌三

仕舞(観)　玉田　服部紗枝
松竜　葛田妙　地謡
虫　吉田　高木美智子　生駒恵美子　熊沢恵美子　加藤良子　有賀滋子　前野都子

能(観)　咸陽宮　西村欽也　高安勝久　飯富雅介　笠鉦一　立石澄雄　山口亮　山口義郎　井上礼之助　藤田六郎兵衛
間　後見　殿島修二　久田秀雄　地謡　高橋敏彦　田中賀　青木大銅　武弘武　真柄佐太俊　梅田加藤　高田瀬徹二　伊藤俊明　後藤正洋　前田本茂　都築進　水藤元三　武田邦弘　加塚本秀雄　藤総兵衛

仕舞(春)　実盛　林鉄郎　地謡
(観)　野宮久田秀雄
昭君　梅田邦久　地謡

狂言　膏薬煉　佐藤友彦　大野弘之

能(観)　班女　高安滋郎　高安勝久　吉田定男　柳原冨司忠　笠三男
間　佐藤卯三郎　井上松次郎

後見　河村鉦二　梅田邦久　地謡　中村和男　長谷川章　加藤保彦　後藤契雲　塚本秀雄　岡田光紘　久田秀雄　杉村翠

囃子(喜)　烏頭　長田驍　河村総一郎　福井啓次郎　鬼頭季信
カケリ
地謡　川井直才　金子宏　二井冨栄　田逸　陽匡二　山本一

前後　前　子方　片桐真　戸田和　後　玉井博祐

能(宝)　船弁慶　高安滋郎　立石澄雄　野村又三郎　福井河村総一郎　良久　藤田鬼頭昭彦
間

後見　衣斐正宣　吉田俊彦　地謡　堀江勝利　加藤昌　稲川寿一　鈴木義久　竹腰勝一　辰巳鬼頭嘉男　内藤泰二孝

附祝言

主催　能楽協会名古屋支部
後援　愛知県・名古屋市・中部能楽師会

入場料　千円　（全館自由席）

〔第107号

会費　指定席　一、五〇〇円　普通席　一、〇〇〇円
階上席　八〇〇円
取扱所　各出演楽師宅　各百貨店プレイガイド
事務所　中区橘一丁目七―五　井上方　電(〇〇)一四三〇

七月・天鼓（本居康夫）笹之雪（藤井久雄）宝生流仕舞・篭太鼓（佐野正治）ほか五番。正午開演。
後援文化庁。特別席四千円（指定席）A席三千五百円（同）B席三千円（同）C席千円（自由席）

一調一噺「楔」、能一石橋」（シテ内藤泰二師）。観世流太鼓鬼頭喜太郎氏長男好信氏が「石橋」を、次男英二氏が大鼓「鞍馬天狗」の披きなど少壮囃子方の今後の活躍が期待される能組である。

中日文化センター、名古屋文化センター、一宮中日文化センター、岡崎中日文化センターの観世流、宝生流、金剛流の素謡、舞囃子、仕舞、連吟、宝生流、幸清流連調、観世流、幸清流連調など六十番で盛会であった。

能　海士　懐中之舞　間　高安滋郎　飯富雅介　福井河村総一郎　啓次郎　鬼頭喜太郎　藤田昭彦

狂言　竹生島参り　田栖　橋本実柏崎　近藤幸江
仕舞　七騎落　三島憲合浦　泉泰孝

観世新九郎文庫家

法政大学能楽研究所　ちかく一般公開

室町末期以来の能楽小鼓の家元観世新九郎家は明治維新後業を廃したが、流祖以来の家伝の文書は後えいに当たる北海道千歳市の服部康治氏によって保存されており法政大学表章教授は昭和四十二年にその概要を学界に紹介、そのなかには、著名な「四座役者目録」の著者自筆本など、能楽研究上極めて価値の高い文書が多数含まれている。

所蔵者服部氏は、そうした価値ある資料が研究者や能楽関係者に十分には利用されないことを惜しみ、観世新九郎家の文書一切を法政大学能楽研究所に寄託された。

能楽研究所では、同文書を「観世新九郎家文庫」と名づけて所内に一括別置し、整理と目録の作成をすすめ、ちかく一般公開することになっている。

同文庫の一部目録は次のとおりである。

1 明人友梅筆「能花額」永正以前一軸
2 宮増弥左衛門親賢画像、窪田統泰筆天文頃英甫永雄讃一軸
3 近衛前久筆、観世彦右衛門豊次夢想和歌一軸
4 宮増弥左衛門親賢書状、正月三日付天文頃橋本宛一通
5 宮増弥左衛門親賢書状、六月三日付、弘治頃一通
6 里村紹巴書状、観世彦右衛門宛、天正十年頃一通
7 織田信長朱印状永禄十一年十月二十日付観世彦右衛門宛一通
8 織田信長朱印状永禄十一年十月二十四日付観世小次郎宛一通
9 織田信長朱印状十一月二十八日付元亀頃観世彦右衛門宛一通
10 観世小次郎元頼書状案文五月十三日付元亀元年か一通
11 木下藤吉郎秀吉書状七月十三日付元亀二年か観世小次郎宛一通
12 織田信長朱印状元亀三年正月二十八日付観世小次郎宛一通
13 荒木信濃守村重書状元亀四年六月二十八日付観世彦右衛門宛一通
14 荒木摂津守村重書状極月二十三日付天正元年か石伊宛一通
15 羽柴筑前守秀吉折紙天正拾年三月九日付観世彦右衛門入道宛一通
16 織田信雄折紙天正十一年九月十日付観世彦右衛門入道宗拶宛一通
17 杉原七郎左衛門家次書状極月七日付天正十年か観世彦右衛門入道宛一通
18 増田仁右衛門長盛折紙七月二十一日付天正十年か観世宗拶宛一通
19 中川藤兵衛秀政書状天正十三年七月二日付観世又次郎宛一通
20 豊臣秀次折紙天正拾四年九月三日付観世又次郎宛一通
21 豊臣秀吉朱印状天正十九年九月十三日付観世又次郎宛一通
22 藤堂和泉守高虎書状五月十五日付慶長十五年か観世又次郎宛一通
23 文明十八年五月三日筆弓道故実聞書一通
24 永正八年奥書観世信光伝書「西ツカウ事」一通
25 天文十一年奥書宮増親賢伝書一通
26 「腋応答長俊授息書」永正・天文奥書脇伝書寛永十八年元信筆一冊
27 新九郎家伝来小鼓伝書正保五年筆一冊
28 享禄三年二月奥書能伝書一冊
29 室町末期筆謡本「熊梅」一冊
30 観世小次郎元頼筆「弱法師」クセ一通
31 機外宗拶禅人下火語一通
32 天正十三年城州愛宕郡西賀茂村検地帳一冊
33 「四座役者目録」観世勝右衛門元信筆正保三年承応二年奥書上下二冊
34 「古今四座役者並白人芸者記録」江戸中期筆一冊
35 正保四年観世元信筆「観世家系図」一冊
36 慶安二年観世元信筆「観世家系図註」一冊
37 観世大夫・金春大夫之次第万治二年宗与（観世元信）筆一通
38 慶安二年観世豊俊筆「小次郎系図」一冊
39 延宝元年筆「小鼓紫調記」弘文院林学士筆一巻
40 江戸中期筆古記録集成一冊
41 観世新九郎家系図天保十三年観世豊成筆一冊
42 「御能組並狂言組」江戸初期書上慶応三年筆一冊
43 享保六年書上集成江戸後期筆一冊
44 天明三年御役者分限帳元治元年筆一冊
45 「元章改正伝授目録」文久二年観世豊成筆一冊
46 永禄四年将軍三好邸御成猿楽能番組一通
47 慶長四年観世大夫聚楽勧進能番組一通
48 江戸後期筆「将軍宣下御能目録」一冊
49 観世大夫重清起請文万治元年十月三日付観世宗与・新九郎宛一通
50 観世元信筆新猿楽図面三枚
51 享保十二年拝領地関係文書武蔵国葛飾郡幸手領大塚村一袋
52 貞享三年拝領町屋敷間図面一枚
53 鼓故実書寛永十八年観世勝右衛門筆一冊
54 「名物之筒之事・大鼓筒之名物之事」一通
55 文久二年観世新九郎豊成書名「楽器抄」一冊
56 万延二年観世新九郎豊成筆「鼓筒名鈔」一冊
57 元文元年刊「高砂増々抄」上下二冊
58 明和九年観世元章刊「習道書」一冊
59 「式楽見聞抄」嘉永五年頃刊富山藩主蔵版一冊
60 江戸中期筆「風鼓秘曲集」天地人三冊
61 江戸中期筆「習事秘書」一冊
62 観世新九郎豊綿筆書謡曲調書一冊
63 江戸後期筆習事伝書上中下三冊
64 楽調小鼓一個

邦謡会秋の会

栄能楽舞台と熱田能楽殿で

邦謡会（梅田邦久師）では、秋の会第一部として十一月一日（土）栄能楽舞台で開催した。

素謡・清経（梅田邦久、今沢美和一木茂）弱法師（木村びで、水野光子）松風（丹羽久子、水野美代子、橋本淑子）大原御幸（加藤井知子、小林百美子、坂野葛子、水野光子、有輪田鶴子、佐藤千代）三井寺（溝口乙子、河合雄一郎、野々山幾子、山際静子）定家（丸井寿子、羽田雅子）朝長（遠山巌杉藤芳男、二村摂三）花筐（小野田正子、佐藤千代、都築鍵二、三木英一）小督（都築正三郎、浅野桂、都築喜久也、小田昭夫）

独調・鉢木（宮川仁左ェ門、半田智子）経正（坂田猛、横井敬子）

仕舞・西王母（河合雄一郎）天鼓（坂川公一）

也留舞会　信謡会　秋季大会

11月16日栄能楽舞台で

狂言也留舞会、信謡会（野村又三郎師）は、十一月十六日午後一時から名古屋市中区・栄能楽舞台で秋季大会を開催する。

番組「清水」（加藤昭、光岡修）「舟ふな」（生駒静子、赤塚加代子）「酢はじかみ」（駒田等、井上礼之助）「しびり」（高安慎一郎、野村又三郎）「太刀奪」（滝沢修二、徳田文三、駒田等）語「朝比奈」（徳田文三）ほか仕舞、小舞など。

各地だより

山本敬一郎師　喜寿祝賀大会

大阪

大鼓方・大倉流山本敬一郎師は斯道六十有年、日本能楽会会員として、とくに関西能楽界の発展に尽瘁されているが、さる十月十一日、大阪東区の大槻能楽堂で同師の喜寿祝賀大会が山本謡調会・孝会主催により盛大に催された。

山本師は十四才で大倉流大鼓今井長八郎氏に師事、爾来六十余年関西能楽界の重鎮として活躍、重要無形文化財総合指定。

祝賀大会は、観世流梅若万三郎、観世静夫、大槻秀夫、大西信久、上田照也、山本勝一、浦田保利、大倉流大鼓宗家大倉長十郎、笛方森田光治の諸師が出演。能「田村」小書替装束」（前シテ中村幸子、後シテ柴田徳子）「三井寺・小書無俳之伝」（シテ観世静夫）「小鍛冶」（シテ大槻文蔵）はじめ番囃子「小督」素謡、舞囃子、一調独鼓など三十数番、とくに「無謡一調」を山本敬一郎師が演じた。

沼輝雨氏は、この山本師喜寿祝賀大会にあたり「昭和初年の大阪能楽界を支えていたのは、大蔵流小鼓の家元大倉喜太郎師（今の長十郎師の父君長右衛門）と今井長八郎師であり、この組み合わせは当時の名匠達人の能にはなくてはならぬものであった。そして山本敬一郎師は花形として人気がありそれから五十年、大阪の能の発展とともに芸の大成がなされ、斯界最高の秘曲、それは誰も打ったことなく、従って誰も聞いたことのない、幻の「無謡一調」を許された。芸の完極にあって、令息、令孫、一門あげての祝賀会を心からおめでとうと申し上げたい」と祝いのことばをよせている。

故飯島六之輔師　一周忌追善能

金沢

葛野流大鼓方・故飯島六之輔師の一周忌追善会が十月十日から三日間金沢市の能楽文化会館で催された。

11月・12月放送予定

◆ NHKラジオ第一放送　（毎週土曜日午後6時5分）

〔11月〕
15日（土）　宝生流「芦刈」武田喜永ほか
22日（土）　観世流「和布刈」大槻秀夫ほか
29日（土）　観世流「望月」観世元昭ほか

〔12月〕
6日（土）　下懸宝生流「松山鏡」松本謙三ほか
13日（土）　観世流「巻絹」木原康次ほか
20日（土）　金春流「鉢木」金春信高ほか
27日（土）　観世流「東北」井上嘉久ほか

◆ NHK・FM 毎週日曜日　（午前7時15分）

〔11月〕　執心ものシリーズ
16日（日）　喜多流「求塚」後藤得三ほか
23日（日）　観世流「善知鳥」片山博太郎ほか
30日（日）　宝生流「砧」野口禄久ほか

〔12月〕
7日（日）　観世流「巻絹」木原康次ほか
14日（日）　金春流「鉢木」金春信高ほか
21日（日）　下懸宝生流「松山鏡」松本謙三ほか
28日（日）　観世流「和布刈」大槻秀夫ほか

・番組変更の節はご了解下さい・

国宝源氏物語絵巻展

徳川美術館40周年特別展

徳川美術館（名古屋市東区徳川町二一二七）は、開館四十周年記念秋季特別展として、十一月一日から十六日まで「国宝・源氏物語絵巻展」を開催。五島本と新発見の詞書断簡をふくむ全巻が同時公開される。一般三百五十円、高大生三百円。

（転居）

・茂山忠三郎氏（狂言大蔵流）新住所＝京都市左京区北白川大堂町四七ノ一（郵便番号606）電話〇七五（七〇一）二〇一一番

・泉泰孝氏（観世流シテ方）新住所＝東京都杉並区宮前四ノ一九ノ四（郵便番号168）電話〇三（三三二）八二八〇番

江島伊兵衛氏逝去

わんや書店会長

謡曲本、能楽関係書発売わんや書店（本店東京都千代田区神田神保町三一九）江島伊兵衛会長は、十月十日、東京・港区済生会病院で逝去された。享年八十歳。

氏は「車屋本の研究」「鴻山文庫の研究」「光悦うたひ本」などの著者、また能楽師の養成、学界への貢献で昭和四十六年勲四等旭日章に叙せられている。

欧風料理
とんかつ
きん亭
名古屋市千種区大久手町4-11　TEL731－3680

蔵出し直送にごり酒
小料理 みやで
名古屋市中区栄四丁目8－7
電話 262－0062

校訂　宝生流地拍子
宝生宗家関　佐藤芳彦著
A5判・横綴クロース装　本文452頁　定価5,000円（〒200円）
絶賛の好評をうけました本書は発売と同時に売切れ、長い間皆様へ大変ご迷惑をおかけ致しました。この度全般的に内容を検討して校訂版を出版致しました。本書は地拍子の論理を追究して原則を解明したもので、宝生流地拍子辞典といってもよく一本は常に座右にお備え願いたいと思います。
東京都千代田区神田神保町3－9　電話（263）6771　わんや書店　東京都中央区銀座8－7－5　電話（571）0514

盛味月（もりみづき）御懐石料理
盛味月とは、御通しから果物に至るまで、四季折り折りの山海の珍味を御賞味していただけますよう御献立致し、京風の素有に器（うつわ）…などが一体となって、自然の持ち味をいかした御懐石料理です。
◎御懐石料理の外に、一品料理、季節の旬の物等色々御用意しております。
◎営業時間　平日　午後4.30～10.30　祭日　午後4.30～10.00
季節料理　あお木
名古屋市中区栄4－12－6　電話 251－2897

能楽の友社
（本町2－20
64）
7984
36393
500円
600円
50円

能殿

第十九期
第二回　青陽会定式能
十月十九日（日）午前十一時始
熱田神宮能楽殿
能組

鵜飼　黒柳啓子　古川知江　川瀬絹子
紅葉狩　木村和加　奥村敏子　中川なみ子　村木寿恵子
仕舞　井筒　宮崎とみ子　網之段　加藤定子
巻絹　小林久子　班女　毛利婦志子

山田屋靴鞄店
山田宝石
名古屋・本山駅
電762—2434

能樂の友

題字は熱田神宮　森田宮司筆

発行　能楽の友社
名古屋市千種区吹上本町2—20
（郵便番号　464）
電話　（731）7984
振替口座　名古屋　36393
購読料　1年　500円
郵送の場合　1年　600円
一部　50円

歳末助け合い　義捐能盛会

12月7日　能3番を上演

能楽協会名古屋支部では、さる十二月七日、熱田神宮能楽殿で「第七回歳末助け合い義捐金募集能」を開催した。

主催は能楽協会名古屋支部、後援愛知県、名古屋市、中部能楽師会

午前十一時開演、金剛流舞囃子「加茂」（水谷泰典）、観世流仕舞「竜田」（服部紗枝）「玉葛」（吉田妙）「松虫」（高木美智子）につづき観世流能「咸陽宮」（シテ河村紘二、ツレ加藤保彦、長谷川章、武田邦弘、ワキ西村欽也）金春流仕舞「実盛」（林鉄郎）観世流仕舞「野宮」（久田秀雄）「昭君」（梅田邦久）狂言「膏薬煉」（佐藤友彦、大野弘之）観世流能「班女」（シテ佐藤太俊、ワキ高安滋郎、間佐藤卯三郎、井上松次郎）喜多流舞囃子「烏頭」（長田驍）、切能は、宝生流「船弁慶」（前シテ戸田和、後シテ玉井博祐子方片桐真、ワキ高安滋郎、間・野村又三郎）

過ぎゆく昭和五十年の熱田神宮能楽殿の掉尾をかざるにふさわしい義捐能は見所もほゞ満員で熱演がくりひろげられ午後四時すぎ終了した。

東京、大阪での歳末助け合い能

なお能楽関係では歳末助け合い運動として、東京、大阪でそれぞれ毎年行なわれている。

東京では、能楽協会東京支部主催により、十二月十日（水）十一日（木）の二日間、喜多六平太記念能楽堂で催される。

また大阪では、十二月十九日（金）二十日（土）二十一日（日）の三日間、大阪能楽会館で行なわれる。

「猩々乱」「蝸牛」を上演

歳末助け合い　CBCクラブ芸能祭

CBCクラブでは、歳末たすけ合い行事に協賛して、「CBCクラブ美術工芸展」を毎年開催しているが、これに呼応して、新たに「CBCクラブ芸能祭」がきたる十二月二十一日（日）昼夜二回、CBCホール（五百五十席）で開催する。

CBCクラブの芸能部門の会員による巷仕出演で行なわれるこの芸能祭のプログラム（能・狂言関係）は次のとおりで、入場料は昼夜の部とも各千五百円。その純益は、名古屋市、東海三県の恵まれぬ人たちに贈られる。

番組次のとおり。

第一回CBCクラブ芸能祭

12月21日（日）
CBC3階・ホール

◎夜の部（五時開演）
＝太字はクラブ会員

一、長唄「都風流」　吉住小多可　吉住小美和　吉住小昇

一、狂言「蝸牛」　野村又三郎　井上松次郎　佐藤卯三郎　佐藤秀雄　井上礼之助

一、能「猩々乱」　シテ　殿島修二　ワキ　高安滋郎　笛　藤田六郎兵衛　太鼓　鬼頭八郎　大鼓　河村総一郎　小鼓　福井啓次郎　地謡　梅田邦久　久田秀雄　佐藤太俊　西川鯉三郎

一、舞踊「島の千歳」

なお昼の部は「箏曲」田村味智子、一独唱」加藤恵美子「モダンダンス」奥田敏子「マンドリン独奏」中野二郎、「舞踊」山路曜生の諸氏が出演。

入場券はCBC事業所、市内各プレイガイドで発売。

能楽界から喜多実氏

日本芸術院の新会員

日本芸術院（高橋誠一郎院長）は、十一月二十五日、芸術院会員として八氏を内定、能楽界から喜多実氏が選ばれた。十二月十五日付で文部大臣から発令される。

新会員は、喜多実氏のほか、日本画の森田沙伊、洋画・野口弥太郎、詩歌・草野心平氏ら。

喜多実氏は、明治三十八年喜多流宗家喜多六平太の養子となり初舞台、昭和三十二年重文「総合指定」四十六年喜多流宗家を継承。四十九年日本能楽会会長、五十年芸術院賞、大津市生れ、七十五歳。

◆演能カレンダー◆

（熱田神宮　能楽殿）

〔12月〕
15日（月）高校生鑑賞能　（高校生のみ）
21日（日）青少年芸術劇場　（一般非公開）

〔51年1月〕
3日（土）能楽協会名古屋支部新年謡初式　（協会関係者のみ）
5日（月）藤田流笛吹初式
7日（水）学生能
11日（日）熱田神士能　（来場歓迎）
15日（祭）名古屋清韻会大会　（来場歓迎）（番組①面）
18日（日）松謡会春の大会　（来場歓迎）（番組②面）

〔2月〕
1日（日）宝生会定式能　（有料）
8日（日）観世会定式能　（有料）
11日（祝）邦謡会春の会　（来場歓迎）
12日（木）西陵高校生鑑賞能　（高校生のみ）
15日（日）梅猫会能　（有料）
22日（日）青陽会定期能　（有料）
29日（日）梅若会　（来場歓迎）

〔3月〕
7日（日）九阜会春の大会　（来場歓迎）
14日（日）観昭会春の大会　（来場歓迎）
20日（祭）邦謡会春の大会　（来場歓迎）
21日（日）武田謡楽会春の大会　（来場歓迎）
28日（日）大蔵狂言会　（来場歓迎）

（演能変更の節はご了解下さい）

演能案内

名古屋清韻会大会

昭和五十一年一月十五日（祭日）十時始

熱田神宮能楽殿

能組

神歌　土川宗勝　千歳　下郷総雄　地謡　水藤元三　殿島修二　今村嘉勇　池田忠三

舞囃子

高砂　五段之舞　福間昌作　吉田定男　安間昌子　鬼頭好信　森本重一

船弁慶　池田美知子　吉田定男　小野木浩二　森本重一

独吟　大西鐘八郎

玉鬘

仕舞

半蔀　原伊三男

松風　浮貝鋼一　地謡　斉藤信隆　杉村竹翠　殿島修二　水田博

班女　福垣道雄

独木調　関谷三男　林千種

鉢実盛　桑原信夫　河村総一郎　柳原冨司忠　藤田昭彦

邯鄲　奥村久枝　河村総一郎　福井啓次郎　鬼頭喜太郎　藤田昭彦

羽衣　天野登茂子　和合之舞　高安滋郎　河村総一郎　後藤孝一郎　鬼頭喜太郎　藤田昭彦　後見　近藤幸江　大槻秀夫　地謡　下郷総雄　桑原信夫　奥田忠三　池田伝　土川宗勝　三島憲　大杉竹翠　文蔵　泉岡田光紘

狂言

竹生島　佐藤秀雄　井上松次郎

松虫　長谷川実　河村総一郎　柳原冨司忠　藤田六郎兵衛

藤戸　小島トミル　筧山口亮一　森本重一

遊行柳　渡辺節子　筧福井啓次郎　鬼頭喜太郎　筧三男

山姥　池田忠三　筧山口亮一　助川森本重一

天鼓　佐藤アヤ子　バンシキ　筧後藤孝一郎　鬼頭喜太郎　藤田昭彦

番外仕舞

嵐山　水藤元三

敦盛　杉村竹翠　殿島修二　地謡　斉藤信隆　泉奈孝　三島嘉夫　憲

東北

花筐　大槻文蔵

老松　大槻秀夫

能

々　今村嘉勇　高安勝久　吉田定男　福井啓次郎　筧助川竜夫　三男

猩

融　笹之段　蝉丸　通小町　奥田伝　古田重行　吉田定男　筧助川竜夫　三男　鬼頭貴代子　金丸洋子　守部啓子　地謡　近藤幸江　水田博　殿島修二　三島憲

巻絹　大塚鈴枝　筧柳原冨司忠　鉱一　助川藤田六郎兵衛　竜夫

熊坂　冨士道周明　吉田加藤芳康　定男　鬼頭筧三男　好信

能

狂言

〔入場歓迎〕

主催　名古屋清韻会

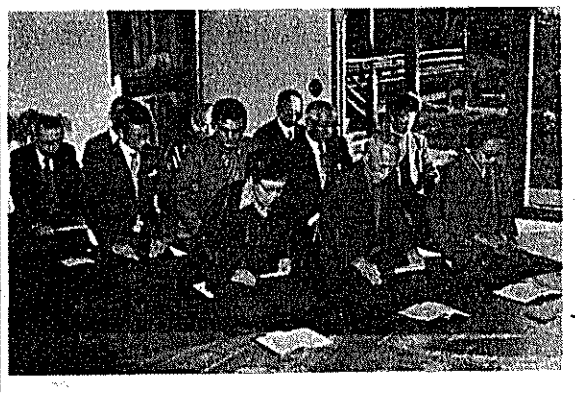
能紀行 ⑲

羽のはしがき

絵と文　二井栄逸

京の山科はしっとりと秋色につつまれていた。山科は東山と醍醐山地に囲まれた小断層盆地で、昔は、交通や軍事上の要地であった。

天智天皇の御陵や、蓮如が建てた山科御坊、安祥寺等もあって、そこはかとなく史都の香りがただようところである。その山科の小暮に、いくつかの重文仏像や、古代建築、狩野山楽の蘭亭曲水屏風等の宝物をかゝえて静かに明け暮れしている真言宗の大本山、随心院がある。



私達は去る十一月二十四日、能楽の友社主催のバス旅行謡曲名所めぐりに一門こぞって参加したのであるが、その内の一つの目標はこの随心院であった。

庫裡から桜の間、表書院、能の間、本堂へと連らなる渡り廊下の左右は勿論、黒松が主となった自然の庭一面に大杉苔が密生しているのにみんな目をみはった。苔寺もいいが、なるほど落葉の苔寺とも云われる位、杉苔が美しい。

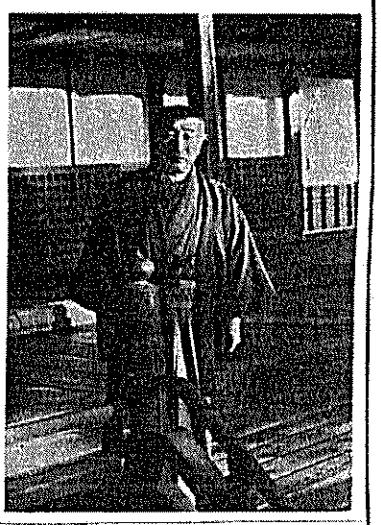
通小町ゆかりの随心院だけに、境内の裏には小町にあてた深草少将や当時の貴公子等の恋文を埋めたという文塚や、榧の大木、又、小町の屋敷跡にのこる化粧の井戸等もある。「能の間」は、宝歴年間に九条家からの寄進されたものとかで、床下には音響効果を良くするかめまでうめてあるとのことである。この能の間で通小町の後半を謡った。バスの中で前半で謡ってきた為か、この閑雅な能の間で通小町を謡うのは一入感慨深い気がした。とりわけ、シテの松村治郎兵衛さんは、通小町がお好きで、各地の能舞台で舞ってこられただけに、興本望であったろうと思われた。

× × × ×

花の色は、うつりにけりな、いたづらに、わが身世にふる、ながめせし間に

小野の小町は平安初期の女流歌人で六歌仙の一人である。凡河内躬恒（おうしこうのみつね）や、在原業平等と歌の贈答をしているので、文徳天皇頃の宮廷に仕えた才官であったことは事実であろう。家系、出生は明らかではないが、郡書類従正編によれば、小町は小野篁（たかむら）の孫にあたり、篁の子である出羽の国司を勤めた良実の娘であるとされている。又日本人名辞典によると、出羽の郡領小野良実の女にして仁明の朝、五節の舞姫として、宮中の后宮にあり、容貌秀絶にして一度笑めば百媚生じ、又和歌に巧にして婀娜女流第一の名手たり、と、書かれてある。

仁明天皇崩御後、年改まった仁寿二年、三十才を過ぎた頃、宮仕えを止めて小野の里に引きこもり晩年の余生を送った、という。この文献から考えると、深草の少将が百夜通いをしたのは、この頃であったように思われる。



熱烈で執拗な男性の愛欲と、これに対する女性の冷酷な翻弄、このような例は世の中にいくつもあるが、観阿弥はこれを比較的短篇にまとめ、大胆にしかも巧妙に演出し、小町ものとしては稀に見る徹頭徹尾執拗な熱情に終始した能を作った。

小町は、深草の少将が自分を思う愛情がこれほどまでに深いものとは知らず、榻（しち）を置いて百夜通ってこの榻に臥したらお心に従いましようと約束してしまうのである。少将はこれをまことと思い雨の夜も雪の夜も小野に通いつゞけ、そのたびに榻に印をつけていった。そして九十九夜に至り後一夜というところでどうしてもゆけない事情が起こり、ついに恋を遂げえなかったという悲恋物語りである。

この説話から、男の恋の熱烈さとか、恋の成りがたいことを、榻のはしがき、という。榻というのは牛車の牛をとりはずしたとき、ながえの軛（くびき）を支え、又乗り降りの踏み台にする道具のことである。少将の百夜通いの間、小町は小町で榧（かや、一位科の常緑高木）の実を一夜々々糸につなぎ、数をしるしたという。案内人の説明によると、其の後、榧の実は小野の里に播かれたもので、昔は九十九本あったと伝えられ、今もその実には昔の名残りを止めて上都の左右に小さな跡があり、糸についた跡だという。

銀色のかすかな線を引いて落ちる雨脚は音もなくこの昔にすいこまれてゆくのであろう。そんな雨夜の事をらんかんにもたれてふっと思ったりした。静かな静かな心がよみがえってくる随心院の奥庭である。

そして、今度こそは百夜通いの深草の少将を絵にして見たいな、と、思ったりした。

（スケッチは「通小町」写真は随心院にての筆者と奉納謡）

演能案内

松謡会春の大会

昭和五十一年一月十八日(日)午前九時始
熱田神宮能楽殿

素謡
菅瀬迪子
竹生島　神原利男　重松敦子
連吟
田村　永田てり子
近藤志ば
河村松代
独吟
吉野天人　河本信雄
仕舞
桜川　深川寿美子
羽衣　クセ　辻和江
笠之段　キリ　保坂和子
素謡
村田とく子
屋島　住田和男　今井行博
東北　岡部美子　内藤みち子
師長　加藤風
矢野きみ
玄象　加藤政良　鈴木守一
仕舞
高砂　水口森雄
屋島　大下真蔵
玉之段　花本芳久
玉鬘　内木しお
放下僧　林邦之
善知鳥　坪井信三
素謡
子方　加藤愛郎
ツレ　宝達仁
〃　近藤孝造
貝之　松井善孝
草子洗小町　伊藤萬喜子　森内昭夫
成経　大須賀義夫
康頼　西田義一
俊寛　水口森雄　菊川礼太
半蔀　永田秀次郎　木村守正
舞囃子
三輪　村田とく子
雲林院　八賀サト子
胡蝶　住俊
船弁慶　真野遵
融　八賀和彦
素謡
定家　野崎満佐子　川崎すう
岩田信代
岡本多加　佐藤太俊
砧
舞囃子
羽衣　小川次枝　太鼓　本間千律子
班女　大野照子
現在七面　岡本多加
雲雀山　水谷富子
菊慈童　内藤みち子
バンシキ
番外舞囃子
猩々乱　佐藤太俊

御来場歓迎

主催　松謡会
後援　中日新聞

12月・1月放送予定

◆NHKラジオ第一放送（毎週土曜日午後6時5分）

〔12月〕
20日（土）　金春流「鉢木」金春信高ほか
27日（土）　観世流「東北」井上嘉久ほか

〔1月〕
10日（土）　喜多流「弱法師」粟谷菊生ほか
17日（土）　観世流「梅」山階信弘ほか
24日（土）　観世流「海士」藤井久雄ほか
31日（土）　宝生流「籠」渡辺三郎ほか

◆NHK・FM 毎週日曜日（午前7時15分）

〔12月〕
21日（日）下懸宝生流「松山鏡」松本謙三ほか
28日（日）　観世流「和布刈」大槻秀夫ほか

〔1月〕　梅にちなむ曲
4日（日）　観世流「梅」山階信弘ほか
11日（日）　宝生流「籠」渡辺三郎ほか
18日（日）　喜多流「弱法師」粟谷菊生ほか
25日（日）　観世流「東北」井上嘉久ほか

◆NHK教育テレビ
12月21日午後9時「求塚」後藤得三ほか
12月31日午前8時～9時
「半蔀」　梅若万三郎
同　日午後7時～8時
狂言2題「磁石」　大蔵弥太郎
「無布施経」　三宅藤九郎

・番組変更の節はご了解下さい・

松風について ⑫

ここで唯子方が床几から下ります普通、中入のある

名のりでシテが「松風」と謡い、ツレが「村雨」と謡うだけのことですが、今考えるに軽く触れる気持で、指を揃え、手の角度は涙をうける心とされています。

家元の方ではこのシヲリを左右とも手の位置を変えませんので、私どもの方が写実的なわけですが、手の角度には何れも変り

「清経」　守部啓子さん
（50・11・2　風韻会能）

能楽先人の訓え

「観世華雪芸談」より

⑫

松風について

ここで囃子方が床几から下ります普通、中入のある能では囃子方は下りますが、作物の中に中入するものでは下りないことになっています。ただ「松風」一番に限り、シテが舞台にいて能が続いているのに、囃子方が床几から下りますのは長いからではないかと思います。

ワキ僧が宿を求め、最初はそれを断りますが後で再び「出家の事にて候えば」というのをきく前にシテはワキ僧を見ておかなければなりません。そうしないと、ツレが「いや適い候まじ」というのにかけて「暫く」と止められないからです。

この後のクドキ「松風・村雨二人の女の幽霊これまで来りたり」をシテとツレが分けて謡ったことがあります。昭和十年代のことですが、大阪で左近さんがシテをつとめられて、特に私にツレをとたのまれました。そのときは「戯ノ舞」(たわむれの舞)の小書がついていまして、何でもこれは古い型附に「家元と分家がやる時に限る」とあるそうですが、私は全然知りませんでした。

名のりでシテが「松風」と謡い、ツレが「村雨」と謡うだけのことですが、今考えてみますと、私の家にそうした型附がないことからみて、多分左近さんがお父さんの元義さんとでも舞われた時、特別にそうなさったことがあるのではないかと思いますとにかく私にはただ一度の経験でした。

クセになって後見が長絹をもって出ます「これを見るたびに」からあと、何度もこの長絹を見る型がありますが、それぞれ心持が違うのは当然のことです。

「これを見るたびに」の最初の型は長絹を持上げてみますが、この時、本当に目でみると面がうつむいて不恰好になるので、体全体で見る型になるようにしなければなりません。

「葉末に結ぶ露」で長絹の露(組)を見、「忘ればこそ」で長絹を下へおろし、「これなくば」のあたりから再び上げますが、これは、はっきり高めに上げて、おろす時もぐっとおろし「詠みしもことわりや」で膝をうちます。

しかしこういう順序だと、段がついてはおかしいので、ごく自然にしなければなりません。拍子にのっているように見えるのは、短かい文句の中に型を皆使おうとするからです。

このあとのシヨリ(泣く型)はゆっくりした方がよくききます。

シヨリは右手の時は左の目を先に、次に右へ持ってゆきますが、親指の関節が眉毛に軽く触れる気持で、指を揃え、手の角度は涙をうける心とされています。

家元の方ではこのシヨリを左右とも手の位置を変えませんので、私どもの方が写実的なわけですが、手の角度には何れも変りはありません。

この長絹は後見の責任で、長絹の衿と烏帽子を縫いつけておき、袖の先のつけが輪になっているのをからめて、シテの小指にかけますが、そうしないと型がつかないからです。

「かけてぞたのむ」で立上って脇正面にゆき正面を向いた頃「忘れ形見」になりますから、又長絹を見て「よしなし」で下げますが、この時指を離すとパラリと長く下がります。「捨ててもおかれず」と向うへそれを押すような気持で、すらすらと出て来ながらかかえこむのですが、ここは舞を舞う気持ではいけない難しいところです。

「あとより恋の」で幕の方を見て呆然として正面へなおして安座、長絹をかかえながら泣きます。

この形見の抱き方は魂が形見に入るという気持で、観世流では形見を抱いているうちに何かこう、むこうから迫ってくるような気持で抱くということになっています。

左近さんは「ひし」と抱くようにしておられましたが、これは左近さんほどの人だから、ましてあれだけ色気のあった人ですからよかったのですが、下手をすると、何とも不恰好になりますから、私はあまりきつく抱かないで軽くつけて泣くことにしております。

(つづく)

第2回神戸五流能

1月24日　神戸文化ホールで

神戸文化ホールでは、ことし一月「神戸五流能」を神戸市、兵庫県の主催、文化庁・朝日新聞社の後援で開催、入場者千百人を越えきわめて盛会であったが、「第二回神戸五流能」が各流宗家の来演により新春一月二十四日(土)神戸文化ホールで催される。

この催しはとくに75年兵庫県芸能祭特別公演として開催。神戸を中心とする能楽ファンの関心は高い。

能組は、金春流能「田村」小書白式(シテ金春信高)観世流能「草子洗小町」(シテ観世元正)宝生流能「鞍馬天狗」小書白頭(シテ宝生英雄)狂言「筑紫奥」(善竹忠一郎ほか)はじめ五流仕舞、ワキ森茂好、江崎金治郎、囃子方笛・森田光春、小鼓・幸円次郎大鼓・安福春雄、太鼓・三島太郎の諸師が勤める。

入場料はS席四千円、A席三千五百円、B席二千円、C席千円、学生席八百円、午後一時始。

神戸文化ホールは(〇七八)三五一―三五三五番

寺井政数氏叙勲

森田流笛方・寺井政数氏は、秋の叙勲で勲四等瑞宝章を受章された。

昭和51年新春　ラジオ　テレビ　番組

◉NHK教育テレビ・午前8時(午後7時再放送)

▽一月一日(祝)　能「国栖」喜多実　松本謙三

▽一月二日(金)　狂言「宝の槌」野村万蔵　「蝸牛」茂山千作

▽一月三日(土)　能「天鼓」梅若六郎

◉NHKラジオ(第2放送)午前7時(午後1時再放送)

▽一月一日(祝)　金剛流「翁」金剛巌ほか五流宗家出演

▽一月二日(金)　新春五流謡曲、独吟・一調　梅若六郎、観世銕之丞、桜間道雄ほか

▽一月三日(土)　東西狂言「船渡聟」三宅藤九郎ほか、「佐渡狐」善竹忠一郎ほか

演能の記録

「葵上」　海田トシ子さん　(50・10・25　河村一謡会)

「船弁慶」後　高田みね子さん　(50・11・2　風韻会能)

「清経」　守部啓子さん　(50・11・2　風韻会能)

「二人静」　殿島博子さん　殿島満里子さん　(50・11・2　風韻会能)

昭和50年度の能・狂言をふり返って

投稿

まず上半期第一の収穫、これは何と言っても、五流能での喜多の人間国宝・後藤得三の「竹生島」に指が屈せらるべきだろう。高齢の氏の体力条件から考えても「竹生島」の選曲はヒットであった。

あの前ジテにおいて、唯作物の舟の中に立っている、それだけのことである「動かぬ強さ」、能だけのもつ魅力としての「動かぬ強さ」ということが、あれほど最大限に発揮されたのは、全国的に考えてもちょっと近来稀な例なのではなかろうか。名古屋の我々にとっては、数年前の観世会における鎖之巫の「半蔀」以来、久方振りの「ホンモノの能」の醍醐味であった。

さて下半期に移ると、こゝでは各流の追善能が相継ぎ、狂言で野村又三郎舞台五十年記念会の開催等が大きなニュースであろう。

能では、先づ九月、山本勝一の「当麻」が能一曲として前・後ジテ通じノリもあり、予想以上の出来だった。但し、この成功は、梅若六郎の地謡、その他、ツレや囃子方の好演に負う面も大きかったようで、アンサンブルの妙と言えよう。因みに六郎のこの地謡、能のシテとしては体の不調がまゝ見受けられる昨今の氏として、久し振りに真価を現し、同氏本年の当地出演作中では最高傑作と言え、正に「聴き物」であった。又、囃子についても、この時は当地として最高に近い水準を示し、成長が窺われたのである。

次に一つのトピックスとしては観世寿夫実に三年ぶりの当地出演（十一月）があり、曲も昨年度芸術祭優秀賞受賞の「野宮」とて期待も大きかったようだ。

最近の能として記憶にも新しいが前ジテにはやや意識過剰の弊があり、後ジテに就ては、この日必要以上に緊張していた若手囃子陣の不調、又、地謡の不発も与って序ノ舞アトのノリ地など、どうにも今一つ盛上らず、その為、どうしても、あの爆発的たるべき破ノ舞へスムーズに入って行けなかったことは否めない。

かくて、シテ御息所の一瞬の悟道を見せた、あの破ノ舞のトメを頂点とする演者の新演出も、何かその部分だけがカクとして遊離してしまった感なきにしもあらずで遺憾である。

とはいうものの、流石に、車争いの件から序ノ舞にかけて、抽象運動としての、あゝした密度の濃さは何といってもそれなりに近来の見ものであり、息をツメさせるものがあって忘れ難いし、又このシテの如き真摯な勉強家との手合せは囃子方にもよい勉強となったことと思われる。こうした機会の増加されんことを希望したい。

そうしたことと関連し、一つここで提案したい。それは囃子方の勉強会としての謡友会、その定期会を是非復活頂きたいということである。その後一度追善別会があったようには思うけれど、最後の定期会の出演は故猶義だったか、寿夫だったか、我々ファンにとり毎夏七月の楽しみだった同会公演が消えて既に久しい。

「演者と曲」を選んだスッキリした一番立てで、あれほど充実した会も当地では珍しかったのだが…。これについては、これ又同会とほぼ時を同じうして惜しまれつつ消えた長老故田鍋氏主催の名匠鑑賞能の立場をも受継ぐものとして、新生「名古屋能楽鑑賞会」と云った形でもよいだろう。「よい能を見たい」それだけがファンの唯一の願いなのだ。そうした会の復活は、囃子方の勉強と同時に我々ファンの渇もいやされ、一石二鳥と思うが如何であろう。

話が少しズレたので、ワキ方の近況に眼を転ずれば、こゝでは西村欽也の存在が注目される。本三番目物、或いは「融」「阿漕」等における着流僧ワキとしての風姿のよさは正に氏ならではであり、この上は謡のツヨサという面で一層の精進を期待したい。一方若手にも奮起を促したく思う。

こゝで狂言に話題を移すと、前述又三郎の記念会は豪華版だったが、当日の中心「花子」、これは矢張よほどの難曲なのだろう。氏としてはむしろ、昨秋の「祐善」にその実力の程が現れていたと思う。他では九月の松次郎の「武悪」を面白く見たが、当地の狂言界には特に大名・鬼・山伏物への更に積極的なアプローチを期待する。能のアイガタリでは友彦等若手に研究の跡がみられるが、一度又三郎のアイも聞かせてほしい。

最後に、創立二十周年を迎えた能楽殿への希望を書きそえ結びとしたい。手短かに言えば、昼夜、或いは晴雨を問わず、そうした外的条件に一切左右されず、照明効果等つねに一定の条件下で能をみられる、そんな舞台が理想と思うけれど、特に昼間の現実の同舞台の薄暗さ、こうした問題が解消される日の早からんことを切に希望したいのである。

（T子）

（文中敬称略）

現代をみつめる眼
東海テレビ

仁和寺、観世稲荷、賀茂神社
謡曲名所めぐり

能楽の友社では、さる十一月二十三日第七回謡曲名所めぐりとして「洛北を訪ねる」バス旅行を催しました。

当日は晴天に恵まれ名古屋市内はじめ県下各地から同好の方々六十人が参加、殿島修二師が同行、午前八時名古屋テレビ塔を出発、名神ハイウエイを経て、正午前、御室・仁和寺に到着、「経正」ゆかりの門跡寺院の宸殿、清雅な庭園を拝観、双ケ丘、衣笠山などの景勝を左右に、昼食は紫野大徳寺・泉仙の精進鉄鉢料理。少憩ののち、雲林院観音堂に参拝、北野天満宮、東向観音の「土蜘蛛」ゆかりの頼光くも塚、晩秋の右近の馬場を散策。今出川通り、東海銀行西陣支店裏に位置する観世屋敷の跡、観世水、観世稲荷に参拝、さらに紫式部の墓所に詣り、堀川通りを一路上賀茂神社へ、記念撮影ののち糺の森・下鴨神社（賀茂御祖神社）に参拝しました。

車中では素謡「経正」「雲林院」「土蜘蛛」「賀茂」「源氏供養」「班女」また「右近」の独吟などがそれぞれ役々によりくりひろげられる謡曲教室で午後八時帰名しました。

今回は補助席もいっぱい、コースも時間的に追われたスケジュールでご迷惑をおかけ致しましたが、参加者皆様のご協力を賜りましたことを感謝いたします。

※編集部より＝皮バンドのお預りをしております。心当りの方はお申出下さい。（加野記）

（写真）観世稲荷社前にて記念撮影

平等院、随心院、三井寺
喜多流謡曲名所めぐり

喜多流に親しむ謡曲愛好者の要望にこたえて本紙では、十一月二十四日、宇治・平等院、山科・随心院、三井寺の謡曲名所めぐり旅行を催しました。

名古屋テレビ塔を午前八時出発。四日市・近鉄百貨店前で三重県関係の参加者と合流、一行は家族ぐるみの子供さんづれをまじえ四十七名。能楽の友社同人として二井栄逸師が同行。東名阪高速道路四日市ICから亀山、上野を経て、天理ICへ、車中では、鈴鹿山脈の初雪を望見しつつ「頼政」「通小町」などを謡い、奈良市内を抜け宇治へ、静山荘ホテルで昼食のち平等院を参観、扇の芝、頼政廟などに参拝。山科の小野小町ゆかりの随心院では、能の間で「通小町」を謡い、文塚、化粧の井戸など拝観。車は一路国道一号線に入り、逢坂の関を越え、蝉丸神社を左にみて三井寺へ。暮色迫る境内にゆく秋のひとときを楽しみ、近江大橋、矢橋を過ぎ、鈴鹿峠を越え午後八時四日市到着、名四を経て午後九時帰名しました。

「コースの中では、初めてでもあり随心院に心ひかれました。境内はすみずみまで掃き清められ簡素のうちに気品にみちた聖域にたたづみ、ありし日の小町のことども隠ばれて一入感慨を深くしました」（瑞穂区・寺西よし子さん）など旅行の感想が寄せられましたことを感謝します。

当日は、奈良コースのため交通渋滞がはげしく、予定の坂上田村麿の墓（花木塚）を見学できませんでしたが、ご理解、ご協力を賜りましたことをお礼申し上げます。

（加野記）

（写真）㊤平等院にて㊦随心院にて

歳末助け合い
義捐金募集
能

第一回
梅若盛義後援会能
十一月十五日（土）午後二時始
熱田神宮能楽殿

邦謡会秋の会（二）
十一月十六日（日）九時半始
熱田神宮能楽殿
番外　舞囃子　吉野天人　梅田邦久　須部清一　今沢美和　藤田昭政
泰謡　三輪　西村進　根木重男

中華料理
御宴会・御集会・御商談等には是非御座敷を御利用下さい
桃源亭
中区栄三丁目29（松坂屋南）電話 241－2938・6081
支店　名鉄百貨店9階　のれん茶屋

観世流・金剛流
宗家本発行元
檜書店
〒101　東京都千代田区神田小川町2—1　電話（291）2488—9
〒604　京都市中京区二条通鉄屋町東入　振替東京 3-3552　電話（231）1990　振替京都 113

おでん
一品料理
久松
名古屋市中区栄3丁目10—15
住吉小路内
電話（241）5076番

謡曲本専門販売
株式会社
東文堂書店
名古屋市中区栄3—28—26（松坂屋1丁南）
電話（052）241—1059